
Beginning of Legend ~ 伝説の始まり ~

今尾実花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Beginning of Legend〈伝説の始まり〉

【Nコード】

N8818E

【作者名】

今尾実花

【あらすじ】

《第一部》アルフォンスは生まれ育った人界を巡り、世界の闇と光を知る。そして、己の真実を。

プロローグ：悲しみの始まり

一組の男女が、どこからともなく駆けてきた。男は体中に傷を負い、手には赤子を抱えている。その必死の形相からは、生まればかりの我が子への深い愛情が読み取れる。

女が悲痛な声で叫ぶ。

「お願い、この子と一緒に逃げて！」

「何を言っている、君も……！」

「いいえ、私は残ります。それが私の役目なのです。残らなければならぬのです！」

女は涙を溢れんばかりにためながらも、流さないよう必死に耐えている。言い切った言葉とは裏腹に、男に縋りつきたくて堪らないのだ。

「この子はどうするつもりだ。『力』に目覚めたら誰にも止められないぞ……！」

「——わかっています。これを……。いつもこの子に付けていて下さい。外でも『力』を抑えてくれます。お願い、どうか……」

「そうするしか……、そうしないと駄目なのか。もう、君と別れるしかないのか？」

二人は出会い、過ごした。至上の幸せを得たはずだった。——何故、こんなことになってしまったのだろう。

「いいえ、私の存在は永遠です。きっとまた巡り会えます」

「——そうだな」

一陣の風が吹き、心の波を鎮めていく。

未来への希望は、この腕の中に。だから明るい夢を見て、今は笑顔で別れよう。

「さあ、外へ行つて下さい。もう王の間は閉ざします。どうかお元気で……」

「君も……。必ずまた会おう」

「ええ！」

「この子は絶対に守るから。安心してくれ」

男はそう言うと巨大な扉をくぐり、女の言う『外』へと向かった。

そして、数日後。

辿り着いた小さな村で、男は息を引き取った。

運命の中へへき

「アル兄貴ゝい！」

とある村の昼下がり。

木陰で気持ちよさそうに爆睡していた青年を、駆け寄ってきた少年が叩き起こした。

「な、何だよ一体？」

「アル兄貴、やゝっぱり忘れてらあ。今日は御剣祭じゃん。兄貴、もう行かないとヤバイんじゃないの？」

「ああ、そー言やそうだった。ルディック、ありがとう」

そう言うつと青年は大きく伸びをして、祭りの準備が行われている広場へと向かった。

アルフォンス・ロットカルド、十六歳。どこにでもいる心優しい青年だが、このルゴルス村では少し違った。肩まで伸ばして一括りにしている金髪も青い瞳も、村でただ一人の色だ。

アルフォンスは赤ん坊の時、父親と一緒にアスケイル王国の北部にある、この小さな山村に来了。アスケイルで一般的なのは黒い髪と瞳であり、アルフォンスのような容姿は西の国に多い。そのためアルフォンスは、きっと母親が自分と同じ色をしているのだと思っている。

そう、アルフォンスは両親を知らない。父親は村に着いてすぐに亡くなり、ほとんど情報がない。最期を看取った人から父親の容姿や人柄を知ることができたが、母親については誰も何も知らない。しかしたった一つだけ、自分と母親を繋ぐ物がある。それは父親の形見でもある首飾りだ。

何かの金属できていて、輪のような形で表面には細かな彫刻が施されている。これが母親と自分を繋ぐ証だと、父が言い残したという。

——寝る時も風呂に入る時も、知った時から十数年間、一度もはずしていない。一度でもはずしたら、二度と母親に会えない気がして。

（一度でいい、遠くから見ただけでもいい。声をかけられなくたっていい。母さんに、会いたい）

育ててくれた孤児院も、院長も、村のみんなも大好きだ。

だけど、自分の心に嘘はつけない。アルフォンスは日々、まだ見ぬ母を求めている。

孤児院の庭からしばらく歩いて、アルフォンスは村の広場にやってきた。

三年に一度、周囲の三つの村と合同で行なわれる御剣祭は男子の成人の儀でもあり、村で最も重要な儀式の一つだ。

十五歳から十七歳の若者が集まり、山の神殿に祀られている剣に触れて来る——のではなく本来は抜くのだが、祭りが始まって以来数百年、抜いた者は誰もいない。

たったそれだけの行事だが、四つの村が一同に集まるということもあって、なかなか盛大な祭りとなっている。一応は神聖なこの祭りだが、祭りは騒いだ者勝ちとでも言わんばかりの賑わいだ。

「おい、アルの奴やつと来たぞ」

「毎回遅刻すんなっての」

「へへっ。ごめん、ごめん」

仲のいい友人たちと喋っていると、祭りを司るルゴルスの神官がやってきて、ゆっくりと説明を始めた。

「さあさあ、みな静かに。……うむ、それでは説明を始めようかの。年が若い者の順に村ごとで並び、三人おきに灯を持つ。儂の先導で神殿に入ったら、その後——」

淡々とした説明に、祭りの主役だが実際は暇な若者たちが、早くも退屈しだした。もれなくアルフォンスもその一人だ。しばらくして神官の説明が終わり一時解散になったとき、退屈からの解放に安堵の息をこぼした者もいたほどだった。

やがて辺りが漆黒の闇に包まれた頃、再び若者たちが集まりだした。アルフォンスは順番を決めるクジの結果、列の最後尾についた。これから祭りの本番、御参りの時なのだ。

村の中心部からしばらくは道を歩き、途中からは険しい山道を登る。村の北にそびえる山の中腹に、剣の眠る神殿はある。その神殿は歳月を感じさせる石造りの荘厳な建物だ。

若者たちは神殿に入ると、剣がある一つ手前の広間で御参りの順番を待った。

順番が最後のアルフォンスはだいぶ長い間を広間で過ごしたが、神殿を目にしたその時から、不思議な高揚感と、それに対する不安が溢れていた。

——この気持ちは、何なんだろう。

やがて順番が巡り、最奥の間と呼ばれる部屋にアルフォンスは入った。

中には昼間の神官が一人、ポツンと部屋の中央に置かれた、剣が刀身の半ばまで突き刺さった石の台座の脇に控えていた。

その剣は数百年の時を経ているはずなのに、とても美しく光り輝き、アルフォンスは目が離せなくなってしまった。

ずっと昔から、自分が生まれる前から。いや、この世が誕生したその時から知っている。

何故か、そんな気持ちが溢れ出た。心臓が強く脈打つ音が耳に届

く。

——同じ組の人が、儀式を終えていく。

『ドクン』

ああ、自分の番だ。

（あれ？ 周りの音が聞こえない）

そのことに気づいても不思議に思わないまま、自らの鼓動だけが頭に響かせ、歩を進める。

『ドクン』

柄に手をかける。

みんなは剣を抜けなかった。いつからやっているのか、何人やったのかは知らないけれど。

『ドクン』

自分には剣が抜ける。だってこれは僕の剣だ。そう思ってしまっ

（何でこんな風に思うんだろう。心臓の音が強く、大きく、響く…）

『ドクンッ！』

心臓の音がより一層強く響いた時、剣は光を放ちながら、台座から抜けた。まるで羽を掴んだように、力を入れた感覚は全く無かった。

「——おお、ぬ、抜いた。アルフォンスが、アルフォンスが剣を抜いた！ 旅立ちの時が訪れた！」

（え？ 何？ 『タビダチノトキ』？）

運命の齒車が今、轟音を響かせて回り始めた。

運命の中へ《武》

タビダチノトキ。旅立ちの時。

意味のわからないアルフォンスが剣を手に立ち尽くしていると、満面の笑みで神官が話しかけてきた。

「アルフォンス、お主は剣を抜いた。ついに旅立つ時が来たのじゃ！」

「は、はあ……。あの、エルネスト様。ええと、何がどうなっているのですか？ 説明して頂けませんか」

「うむ。だが、その説明は、村に戻ってからにしよう」

広場に戻るといつの間に連絡したのか、大勢の人が集まっていた。夜も更けたために、子供の姿はほとんどない。だが大人たちもアルフォンスと同じく、なぜ集められたのか分からないのだろう。みんな不思議そうな顔をしていた。

「さあアルフォンスよ。中央に儼と一緒に来るのじゃ」

人々の輪の中に入ると、一斉に視線がアルフォンスに集まった。

あまりの居心地の悪さに怖じ気づくも、神官はアルフォンスを半ば無理やりに、輪の中央に押し出した。

そうして神官は説明を始めた。アルフォンスの運命を。

「さて、今宵は特別な夜となった！ 皆も知つての通り、御剣祭は成人の儀じゃが、同時に若者たち、ひいては皆の健康を祈る祭りじゃ。それはあの剣に触れて力を分けて貰うため。そう、あの剣はただの剣ではない。数百年の昔、我らの祖先がこの地に住み着いた時から、剣はあの姿で祠にあったと言つ」

（何百年も前からあった剣？　そうか、そうだよ。でも、あの輝きは……）

輝きを失わぬ剣は神の力が宿るとされ、いつからか崇められるようになった。小さな祠は立派な神殿に造り変えられ、剣に触れられるのは奉る祭りの時のみとして。

「剣を抜こうとした者は数知れぬが、誰も抜くことはなかった。しかし、この青年が剣を抜いた。剣と共に発見された書にはこうある。『剣こそこの世の要。要を手にした者よ、運命に従い旅立て。混沌の闇は世の光を覆わんとしている。再びこの世に光を灯せ』と。青年の父親はかつて『人王の間』に進んだ、尊き者であった。青年が父と同じく人王様の御加護を得られるよう、皆で送るのじゃ！！」

（父さんが人王の間に……！？）

初めて知った、父の事実。それはとてつもなく偉大な所業だった。この世は五つの世界に分かれている。

『天界』 『獣界』 『魔界』 『精霊界』、そして自分のいる『人界』。

それぞれの世界には、己が統べる世界を名とする『界王』がいて、彼らの住まう場所は『界王の間』と呼ばれる。そこは界王に認められた者だけが、入ることを許される特別な空間だ。

認められる者は百年に一人、いるかいないかの確率だという。神官の言葉が終わると、広場にはどよめきと歓声が広がった。今一つ状況が飲みこめていなかったアルフォンスでも、自分はどうでもないことに巻き込まれたのだということだけは理解した。終わりにかけていた祭りは一転、アルフォンスを送る祝祭となってしまうた。だが、当の本人は喜びなど微塵も感じていなかった。

なぜ自分がこんな目に……。その不安、混乱、恐怖、当惑がアルフォンスの頭を占めていた。

やがて人波が引いた頃、アルフォンスは神官のもとへ走った。さっきの説明だけでは納得がいかない。もっと知りたい。父の事も、剣のことも。

「エルネスト様っ!!」

勢いよく扉をぶち開けて、村の教会に駆け込む。だが中にいた神官は驚くでもなく、まるで待っていたかのように落ち着き払っていた。

「よく来たの、アルフォンス。さあ、ここに座りなさい」

「エルネスト様、僕は訳がわかりません。もつときちゃんと説明して下さい！　お願いです！」

「落ち着くのじゃ。とにかく座りなさい。さあ、お茶を淹れよう」

そう言われたアルフォンスは渋々ではあったが、進められるままに椅子に座り、暖かいお茶を飲んだ。すると心の荒波が収まるかのように、すぐに平静が戻ってきた。

「……すまぬ、本人が一番理解しなければならぬことじゃと言うのに。許してくれ。あの場であれ以上の説明は、皆に不安を与えることになってしまうのじゃ」

「不安？」

「うむ。実は皆に言った書の内容じゃが、あれは真実ではない。真実は『この世、界王と共に生まれし時より剣は眠る。幾星霜の時を越え、界王の力が弱りし時、解放の力を宿す剣は目覚める。剣を手にした者よ、わずかな時をもってこの世は混沌の闇に覆われる。いざ魂を共にする仲間と旅立て』と」

そこまで言って、神官は深く息を吐いた。

「剣を抜くこと自体、界王様の御力の弱まりを示すのじゃ。その様なこと、儂には言えぬ……」

「魂を共にする仲間に、界王の剣？」

聞いたことのない言葉ばかりだ。何となく意味は分かるが、そんなものが実在したとは驚きだ。

——しかも、自分がその剣を抜いた。

「今の世を見よ、アルフォンス。他世界への扉は、今の人族の心を示すかのように簡単には開かぬ。愚かなことに他世界の民が差別の対象にもなる。——何よりも人王様の御力が感じられなくなり、同じ民同士で醜い争いを始めてしまった。このままでは人界は、滅びを待つだけじゃろう」

地の果てに在るといふ、巨大な神秘の扉で結ばれる五つの世界。各々に界王が存在し、世界を統べる。それがこの世の掟で理だ。

しかし、今の人界は違う。扉の場所も長い歴史の間に国家の力で秘密とされ、自由な行来が出来なくなっている。

「旅立ってくれ、アルフォンス。もはや希望は無い。頼む、この世の理を正してくれ！」

（そんな大変なことを僕が！？）

「待つて下さい、エルネスト様！ そんなこと、できる筈が無いです！！ この世を救うとか、いきなりそんなの……！」

「例えそう思おうとも、アルフォンス。お主の進むべき道は決まっ

ておる。全世界の界王様に選ばれたのじゃから」

「でも……」

「行くのじゃ、アルフォンス。様々な場所を見て、世界を知るがよい。良き仲間と巡り会えよう」

そう言われても、アルフォンスは絶望の淵に立たされたも同然だった。

自分が受け入れねば、旅立たねばどうなる。こんな一方的なの、断れるわけがない！

だけど僕なんかが旅立って、何がどうなるって言うんだ？ 村から出たこともなく、剣も持ったことがないのに！

（そんな僕が一体何を救えるって言うんだ！！）

せめてもの救いは、旅では様々な場所に行け、ここで暮らしていは知らずに終わることもたくさん学べる、ということだけ。

だけど怖い。怖い！

本心はよく考えろと叫んでいる。確かに外の世界は魅力的だ。だけど、外は命の危険がある。

だけど、だけど。……。

「——わかり、ました。エルネスト様、やれるだけ、やれるだけやってみます」

「……ありがとう、そして済まぬ、アルフォンスよ。世界を巡り、集めるべき仲間を集めた時、自ずと道は開かれよう。何かあればいつでも儂を頼ってくれ。出来ることなど殆ど無いが……」

老神官は聡明で柔和な好人物であつたが、この時だけは、夢も力も何もかもを失った、ただの弱い老人のような表情をしていた。

神官との話を済ませた後、アルフォンスは真っ直ぐ家路には着か

ず、村の東端を流れる川岸へと向かった。

ここは何か悩んだ時、アルフォンスが必ず来る場所だ。だが、それを知っている者はいない。

いつも明るく振舞っているし、それが性根でもある。だからなのか、悩みを誰かに打ち明けたことは無い。

ごろりと寝転がり、満天の星空を見上げる。

――夢だった。村を出て、世界を巡ること。田舎の若者が一度は見る、儚い夢。だが、それはこんな形で叶ってしまった。

自分は一体、どうすればいいんだろう。もう引き返せないことだけは確かだ。

怖かったのに。怒りすら覚えたのに。それなのに自分は引き受けた。外の世界の魅力――だけでは説明がつかない。自分で自分の心がわからない！

（ああ、これから自分はどうしたいんだろう……）

それから一時間ほど星空を眺めていたが、自分の心への答えは出ずじまいだった。

もう日付も変わってしまった頃だろう。アルフォンスは悩むことを止め、小さな溜息を一つついた。そしてゆっくり起き上がると、家である孤児院へと歩き出した。

だが院に着く直前、道を塞ぐようにしてルディックが立っていた。二歳下の弟分で、自分に一番懐いている少年だ。

「アル兄貴！ 本当に村を出てくのか！？」

「ルディック……」

「さつき院長先生が、みんなを起こして話したんだ。兄貴のこと笑顔で送り出してあげましょう、って……。けどオレ、嫌だよ。ずっと一緒に居たいよ。ずっと一緒に居てくれるって、そう思ってたのに……っ。酷いよお……っ！」

そこまで言うと、ルディックは堰を切ったように泣き出してしまった。

アルフォンスは泣きじゃくるルディックに駆け寄ると、視線を合わせるように屈み込み、肩に手を乗せた。

「ルディック、聞いて。確かに僕は村を出て行く。だからずっと一緒に居られない。けど、いつかはそうなるものなんだ」

「何でさ？ オレ、ずっと一緒に……」

「ルディック。いつまでも僕と一緒にじゃ駄目だよ。君はもう十三歳じゃないか。大人になる時だ」

「嫌だよ……。一人にしないでえ……」

「何を言ってるの、ルディックは一人なんかじゃないだろ。院にはみんながいるし、村には友達がいる。それに旅に出るのはもう決めたことなんだ。エルネスト様とも約束した。変えることはできないよ」

「アル兄貴、でも、でもお……」

「頑張れルディック。僕の代わりに院のみんなを支えて欲しい。……頼んだよ？」

そうだ。僕はもう戻らないだろうから。だから、支え合って。

まるで自分の代わりにルディックが泣いてくれたようにアルフォンスは思えた。

ここにきて、ようやくアルフォンスは自分の気持ちの一つ、わかった。そうだ、あまりの急展開で混乱していたけど、自分だって怖くて寂しくて——泣きたかったのだ。

そうしてアルフォンスは笑みを浮かべた。たった一人でも、自分へこんな好意を持ってくれた少年が居てくれたことに。

その笑みを見て何を思ったのかはわからないが、やがてルディックは涙を拭いた。

「……わかった。オレ、頑張るよ。アル兄貴、気をつけて行ってきて！」

「ありがとう、ルディック！ これで僕も安心して旅立てるよ！」

その夜、アルフォンスは久し振りに二人で狭い布団に包まった。

——相手の最後のお願いで。

二人の仲間へき

「うう……。次の町はまだか……」

旅に出て十日目、アルフォンスは一人寂しく街道を歩いていた。

（ちえつ。日没前にはなんとか、つてどこか）

お腹空いたな……。なんて思いながら地図を見ていたその時、突如辺りに山鳴りのような轟音が響いた。

「えつ、えつ、何!？」

驚いて音がした方向に向かうと、なんと一人の青年が魔物に囲まれていた。

見事な武術で次々と魔物を蹴散らしていたが、多勢に無勢のようだ。次第に魔物の輪が狭まり始めている。

（危ない、助けないと!）

アルフォンスは青年のもとへ走り出すと、特別に逃えてもらった鞘から、あの剣を抜き放った。

「加勢するよ!」

「——! わりい、助かる!」

剣は台座から抜いたときと同じく、不思議と重みを感じさせない。どこか導いてくれている気さえする。

そのため腕に覚えのないアルフォンスでも、何とか魔物を切り伏

せることが出来た。抜き放った剣を正眼に構え、手首を返して横に薙ぎ払う。

「へえ、やるな。俺もすっかりしねえとな！」

アルフォンスの動きを見て、黒髪の青年は改めて何かの構えをとった。

「——破っ！」

ドゴンッ！！

轟音とともに魔物が一匹、遠くに吹き飛び、ぶつかった岩が砕け散る。先ほどの轟音は青年の闘いの音だったのだ。

やがて全ての魔物を倒し終わると、青年がアルフォンスに話しかけてきた。

「危ねえとこだった。ありがとう、助かったぜ」

「どういたしまして。怪我がないみたいでよかった」

「お前のお陰だよ。あ、俺の名前はセルグ・レナード、武闘家をやってる。まだ一人前じゃねえけどな。年は十八だ」

そう言った青年はいかにも気さくそうで、明るい笑顔をしていた。武闘家の証が描かれた服を着てはいるが、左耳に耳飾りをするなど年相応に洒落たところもある。

「僕はアルフォンス・ロットエカルド。職は就いて無くて、十六歳。ところで、君は旅の途中？」

「セルグでいいぜ。んで、俺は旅の途中じゃねえ。お師匠の使いの途中だ。そう言うことは、お前は旅の途中か？」

「うん。あ、僕はアルフォンスだから、アルって呼んでくれない？」

「あいよ。なあ、何でアルは旅してるんだ？」

「あ、えーと、それは……、うん……」

（本当のこと言っても、信じて貰えないだろうしなあ……。ってか、僕も信じきってないし）

「？」

「えーとね、何て言うか……。その、世界を自分の目で見たくて、つてトコかな」

嘘じゃない。発端は違うが、これはこれで嘘じゃない。

「ふう……ん。いいなあ、そういうの。俺も行ってみてえな」

「えっ、本当？　なら一緒に行かない！？」

セルグの思わぬ感想に、アルフォンスは色めき立った。仲間を集める、そう告げられたのだ。

「悪い。行きたいとこだけど、お師匠の許しがないと無理なんだ。弟子の身だからな」

「……そっか、急すぎるし、無理だよな」

「いや、そうでもないぜ。お師匠はこの先のレドッグの町に居るかな。話のわかる御方だ。戻る途中だし、一緒に行こうぜ」

「うん！」

「んじゃ決まりだな、アル」

「だね！　よろしく、セルグ」

こうして初めての仲間になってくれそうなセルグと共に、アルフォンスは町へ向かうことになったのであった。

この時二人は、互いに何とも言えない感覚を味わっていた。水が

流れるように進む展開、けれどそこに戸惑いはない。人は、それを『運命』と呼ぶのだろう。

日没の少し前に到着したレドッグは大きな町で、活気に満ち溢れていた。中央の広場へ繋がる大通りには大小様々な店が立ち並び、アルフォンスは初めて目にした物も多かった。

セルグが案内してくれた場所は、町外れにある静かな宿だった。師匠が居ると言う部屋の前に立ち、まずセルグが扉を開ける。

「失礼致します。只今戻りました。お師匠、急で申し訳ありませんが、お話があるのですが……」

室内に居たのは一人の老人だった。椅子に座り、お茶を飲んでくつろいでいた。灰色がかった髪や顔に刻まれた皺から、還暦をすでに迎えているようだ。だが、隙などは微塵も感じさせない。

「よろしい、入りなさい。——セルグ、そちらの方は？」

「あ、僕はアルフォンス・ロツテカルドと言います」

ふと、老人と目が合った。鷹のように鋭く済んだその目は、まるで心の中まで見通すかのよう。

その目に見つめられたアルフォンスは、恐怖にも似た心地を味わい、視線だけで体の自由を奪われてしまった。

「そうですか。私はゴルディアス・シャーナと申します。引退したものの、以前は武闘家でした。今はセルグの師をしています」

だが瞳の強さとは真逆に、ゴルディアスの言葉はとても柔らかい。

「あ……。はい、よろしくお願いします。あの、一つお願いしたいことがあるんです！」

「……何でしょうか？」

ゴルディアスの柔らかな物腰に力が抜け、アルフォンスはやっと体に自由が戻った。

そこで、ここぞとばかりに勇気を振り絞り、ゴルディアスに旅の許可を嘆願する。

「突然過ぎることですけど、セルグに旅に出る許可を下さい！——緒に行きたいんです！」

セルグも追って言葉を続ける。

「お師匠、お願いです。まだ一人前の認は頂いていませんが、どうかお許しを。俺をこいつと一緒に行かせて下さい！」

「——ふむ。セルグよ、何故そう思った？」

「自分にもよく分かりません。けれど、アル……アルフォンスに誘われた瞬間、絶対に行かなければならないと、何故かそう思ったんです。だからお願いです、どうか！」

（本当に……、本当にそう思ったんだ。俺はアルの仲間で、アルは俺の仲間だと。共に居るべきヤツなんだって！ こんな感覚、説明できねえ！）

あの時の感覚を言葉に出来たら、どんなに楽だろう。今ほど自分の頭の悪さを呪うことはあるまい。

直感？ 運命の出会い？

どんな言葉であろうと、示すモノは一つ。

セルグの瞳には何者にも屈しない、強靱な意志が宿っていた。それを見てか否か、ゴルディアスは淡々と言った。

「……迷いは、ないようだな。それでは一つ、課題を出そう。それが出来れば旅を認めよう」

「ありがとうございます、お師匠！」

「——それでは課題の説明をしましょう。アルフォンス君もよく聞いて下さい」

部屋の窓を開け、ゴルディアスは外を指差した。そこには広く鬱蒼とした森が広がっている。

「この森に多くの魔物が住み着いて、夜な夜な町に被害を与えているそうです。それを一晩で食い止めてみせて下さい。方法は任せます」

二人の仲間へ武

「おい、何かいい考え浮かんだか？」

「さつつぱり」

日没を迎えた町の中、すぐ意気投合した二人は課題解決のため、町の人々に魔物の話を聞いて回っていた。

しかし聞けば聞くほど面倒な事態だと判明するばかりで、退治など無理だと思えてきてしまった。

「参ったな。せいぜい二、三匹だと思ってたんだが……。まさか群れで来るとは……」

「一匹一匹はそう強くないみたいだね。数十匹単位で来られちゃあ、全部退治するなんて絶対に無理だよなあ……」

「ああ、だな」

魔物について人々が話したことは、第一に群れで来ることだった。十数頭の群れで一箇所に押し寄せ、巧みな連携で集中的に家屋を破壊し、家畜や食糧を奪っていく。こちらから手出しさえしなければ人を襲うことは滅多にないが、運悪く大怪我を負った人もいる。

大きさは大型犬ほどで、形も似ているが、森に潜むため毛は暗緑色で、瞳は不気味に輝く黄色。非常に獰猛で、鋭い爪と牙を有し、いとも簡単に肉や骨を切り裂くのだと言う。

「だよな……ってセルグ、まさか諦めるの？」

「馬鹿野郎。んな訳ねえだろ」

さてと、と大きく背伸びをしながら、セルグは森に向かって歩き出した。

「何時までもグダグダしてらんねえ。凶暴だろうが何だろうが、取りあえず森に行ってみようぜ。何かいい考えが浮かぶかもしれねえだろ」

「う、うん」

どこか不安を覚えながらも、セルグの意見に賛成したアルフォンスは、すっかり日が落ちて闇に溶け込んだ森へ向かった。

夜空に雲はなく、月明かりが大地を照らしている。しかし鬱蒼と木が生い茂る森の中にその光が届くことはなく、アルフォンスたちは灯りを用意して森に入った。

セルグを先頭に進んでいたのだが、アルフォンスが気づいた時には、道はいつの間にか獣道となり、人の痕跡はどこにも見受けられない。

そのことをアルフォンスが訊ねようとしたら、セルグが辺りを見るように言ってきた。

灯りを掲げて周囲を見渡せば、そこかしこに魔物の巣らしきものが見受けられた。その数は十や二十ではない。

「ね、ねえ。僕たち、ここに居て大丈夫なのかなあ……？」

「さあな。ま、絶対に死なせねえから安心しろよ」

「それはどうも。だけど問題が違うでしょ！？」

「んな騒ぐなよ。……おっと、お出ましまいだぜ」

セルグの耳はすでに、二人を囲んだ魔物の息遣いを捕らえていた。

「参った。五十はいつてないと思うんだが……。ま、やるしかねえか！」

「……ねえセルグ、目的覚えてる？ 何か、とっっても楽しそうだから……」

「冗談言っとなつて。俺はそこまで馬鹿じゃねえよ。……で、アルは逃げるか？」

「そっちこそ冗談言わないでよ。僕だってそこまで弱虫じゃないよ！」

アルフォンスも剣を抜き、二人は背中合わせになった。

こうして二人の死闘が始まった頃、森の入り口に何者かが訪れた。涼やかな月光が影を作りだす。

「……この森の奥、か」

その影は、闇に染まった木々の間に飲み込まれていった。

「くっそ、ちょこまかとしやがつて……！！」

アルフォンスとセルグは健闘していたが、非常に苦戦を強いられていた。何せ二人は駆け出しの剣士に武闘家、接近戦で一对一の形でしか戦いようがない。

しかし魔物はその鋭利な爪と牙で、巢に近づいた二人を容赦なく四方八方から複数で攻撃してくる。二人はどうしても防戦一方になってしまう。

「セルグ、ここは退こうよ！」

「退くにも退けねえだろ、この状況じゃあ！……ってアル、前見ろ！ 危ねえ！！」

隙をみせてしまったアルフォンス目掛け、一匹の魔物が牙を剥いて飛び掛かってきた。

アルフォンスはとっさに目をつぶり、襲いくるであろう衝撃に身を強張らせる。

だが痛み代わりに、何故か眼前で炎が燃え上がった。

「……えっ？」

「おい、どうした！？」

突然のことに驚いていた二人に、誰かが木の陰から話しかけてきた。

「——大丈夫か？」

アルフォンスが声をした方を振り向けば、外套とフードを目深に被った人がいた。見知らぬ人物だが、さっきの炎と今の言葉を踏まえれば、この人は恐らく魔法使いなのだろう。炎の術で自分を助けてくれたのだ。

炎に驚いたのか、魔物たちは三人から一定の距離をとった。それを確認した魔法使いは、ほとんど足音をたてずに二人に近づいてきた。アルフォンスは慌ててお礼の言葉を述べる。

「あ、はい！ どうもありがとうございます……」

フードをとったその顔を見て、二人は言葉を失った。

魔法使いは女性だった。自分たちとそう年齢は変わらないだろう。だが、美しすぎる。あまりにも。

月夜に映える漆黒の髪は腰まで真っ直ぐに伸び、頭の上で一つに結ばれている。黄色人のようだが、肌はそれと判らないほど透き通るように白い。こんな黒と白の対比は初めて見た。

そして何より、冷たくも美しい、そう、まるで黒曜石のような瞳の輝き……。

「ここは私が引き受ける。退いてくれ」

次の瞬間、炎の華——アルフォンスはそう思った——が宙に無数に生み出された。魔物たちはその炎を見ると、敵わないと悟ったのだろう、一目散に逃げていった。

「何故ここにいるかは知らないが、私は魔物が町に来ないようにしてきた。……構わないな？」

魔法使いの問いに、アルフォンス達はまるで首振り人形のように、コクコクと首を縦に振ることしかできなかった。

「では、今すぐ森を出て行ってくれ。魔法陣を張るので、居られると障りがある」

こうして言われるがまま、二人は森の外に来てしまったのであった。

「あの人、すごい魔法使いなんだね。魔法陣を張るだけで、あんな数の魔物を簡単に退治できちゃうなんて！ それにさ……って、セルグ？」

隣のセルグは、ぬぼおーっ、とまるで魂が抜けたかのように空を見つめていた。おまけに顔が少し、いや、かなり赤い。

（——はっ！！ まさかコレは……）

そう、これはまさかの一目惚れ。お決まりではあるが、目の前で手を振っても気付かなかった。

（……コレはやば過ぎだろ。いよしー！）

悪いとは思ったが、アルフォンスはすねに一発入れることにした。勢いをつけ、思い切りすねを蹴飛ばす。

「痛っ！ アルツ、何すんだよ」

「あのねえ……。何て言うかな、限度と言うモノが……」

「うっ。べ、別にいいじゃねえか。……けどよ、マジで綺麗だったよな」

「まあ、それは認めるけどさ……」

その時、渦中の魔法使いが森から出てきた。

「あ！ さっきは助けてくれてありがとう」

「……礼はいらない。では」

「そんな……って、あああ！ やばい、どうしよう！」

突然アルフォンスが大声を上げ、魔法使いも驚いたのだろう、わずかに目を瞠って立ち尽くしている。

「何だよ。どうした？」

「どうしたじゃないでしょ、魔物を食い止めるのが課題なのに！ 僕たち何もしてないよ。これじゃ駄目だよ！」

アルフォンスの言葉を聞いてようやく思い出したのだろう。美しい魔法使いに見惚れて赤みがさしていたセルグの顔は、真っ青になった。

「……課題？」

「しまった！ ああ、そうなんだよ。俺たちで森にいた魔物を食い止められたら、お師匠から旅に出る許可を貰えるんだ。やべえ、す

「すっかり忘れてた！」

半分悲鳴のような声を出すセルグに、魔法使いは対照的な、あまり抑揚のない声で聞いてきた。

「……。それは、絶対に二人でやらなければいけないと言われているのか？」

「へ？ いや、方法は任せるって言われたから……。別にそうじゃないと思うが」

「ならば、私に手伝いを頼んだことにすればいい」

「え、いいの！？」

魔法使いの思わぬ申し出に、アルフォンスは耳を疑った。確かに、誰かに手伝ってもらってはいけない、とは言われていない。この申し出は渡りに船だ。

「構わない、好きに報告していい。私の名はリネア・ル・ノース。魔法使いだ」

「やった、ありがとう！」

——女神様かこの人は！

アルフォンスは、思わずそう叫びそうになったくらいだ。

こうして二人はリネアを引きつれ、急いで宿へ事態の報告に走ったのだった。

二人の仲間へ参

「よろしい。セルグ、お前に旅に出る許可を与えよう」

「お師匠……！」

宿に戻ったアルフォンスたちを、ゴルディアスは驚きと喜びを一緒にしたような顔で迎えてくれた。

「それにしても、驚きの解決方法を見つけたものだね、セルグ。お前の機転を試そうと思ったのだけど、これも運命かな」

リネアを見、アルフォンスを見、そしてセルグに視線を向ける。我が子を見るような優しい眼差しで見つめていたが、それはすぐに弟子に対する厳しいものに変化した。

「……行きなさい。広い世界へ、新しい仲間と共に。一人前の位に相応しくなっただと思えたら、その時は私の元に再び来るがいい」

この言葉に、セルグは、ぽかんとしたままゴルディアスの顔を見つめた。アルフォンスには言葉の重要性がわからなかったが、セルグには物凄い衝撃だったらしい。

「魂を共にする仲間がお前を待っている。いいか、どんなに辛くとも耐え抜きなさい。決めた以上、逃げることは許されない。いいね……これが私からの最後の教えだ」

ゴルディアスの眼差しはいつの間にか、また優しく温かなものに戻っていた。

話を終えてゴルディアスの部屋から出るなり、アルフォンスはま

だ夢見心地なのだろう、どこか覚束ない足取りのセルグに後ろから突撃した。

「セルグ、これからよろしくね！」

「っあ、ああ、もちろんだぜ！ リネアもありがとうな。許可を貰えたのはお前のお陰だ」

「……礼は必要ない。では、これで」

「え、行っちゃうの？」

「ああ、もうこの町に用は無い。……まだ私に何か用があるのか？」

ゴルディアスとはまた違う『何か』を感じさせるリネアの瞳に見つめられ、アルフォンスは言葉に詰まった。そもそも、こんな美人に見つめられるだけで思考が停止しそうだ。

（何か用かって……。無くはないけど……。っええい、言っちゃえ！）

「ねえ、僕達と一緒に旅をしない？」

「断る。他を当た……」

他を当たれ。そう言おうとしたらしいリネアは、とある物を見て言葉を失っていた。

視線の先には、アルフォンスの剣。

「この、剣。お前が……？」

「え？ これを知ってるの？」

アルフォンスは素直に、かつ非常に驚いた。ずっと昔から剣を祀っていた自分達すら剣の真実を知らなかったというのに、この魔法使いは何をどれ位知っているのだろう。

（何か話を……聞けるかな）

剣のこと、剣に選ばれた理由、界王様のこと。聞いてみたいことは尽きないのだ。

「おい、何なんだよ？」

アルフォンスたちの話についていけないセルグが、横から怪訝な顔をして言った。

「お前、剣のことを聞いていないのか」

「はあ？ この剣がどうかしたのか？」

「アルフォンスと言ったな。何故説明していない？」

「えっ」

「アル、何だよ。何か隠してたのかよ！」

出逢ったときから表情の変化を一切見せずにいたリネアが、ここで語気を荒げたことに驚いた。だが一度に二人から責められ、アルフォンスは密かに二つの感覚を味わっていた。

一つはもちろん、セルグに嘘をつき秘密のままにしようとした――悪いことをしてしまった、という反省の気持ち。

もう一つは、自分を真正面から責めてくれる人がいるという喜び。

「……。セルグ、ごめん。あのさ、僕が何を言っても信じてくれるよね？」

「つたりめえだ、馬鹿野郎っ」

「ありがと、ゴメン」

居なかった。良くも悪くも、村に自分を責める人など、一人も居

なかった。いつもみんな『気にしないで』と言って。
だけど、二人は違う。

「んじゃ、話せ」

「……今までわざわざ隠していたことを、こんな場所で話せるわけ無いだろう。廊下では人に聞かれる恐れがある。少しは考えろ」
「っ！」

さらりと言い放ったリネアの言葉に、セルグはもろにダメージを喰らった。グサリと突き刺さった言葉に、思わずよろめく。

（ああ、これが綺麗な華には刺があるってヤツか！）

アルフォンスは一風変わった感動をしたが、セルグはそれどころではない。仮にも一目惚れした相手に手酷く扱われて、深刻な状態にあるようだ。

「——とにかくっ！とにかく話せ、どこでもいいから！！」

わずかに涙声になったセルグが、何か吹っ切るように、半ば叫んで言った。

美人が怒ると、それだけで恐い。そのことをしっかりと胸に刻み付けた男二人だった。

結局三人は人気のない場所として、セルグの部屋に集まった。

「じゃ、僕が知ってる事を全部話すね」

そう切り出すとアルフォンスは、村で起きた出来事を全て話した。祭りや剣のこと。神官から受けた説明も、全て。

「……と言っわけ」

「うーん……。まあ、普通は信じろってほうが無理だよな、そんな話。けど、俺はお前を疑ったりはしねえ。だから信じるぜ、アル！」

「……もとより私は信じている」

「ありがとう、二人とも！」

アルフォンスは目頭が熱くなるのを感じた。

こんな突拍子もない話、渦中の自分でも信じきれていなかった。いや――怖くて、信じたくなかった。

それでも、目を逸らせない数々の事実が、この御伽噺のような出来事は真実なのだと訴えてくる。一緒に立ち向かってくれる仲間の存在は、何よりも嬉しかった。

「よしっ、話の整理だ。お前は剣に選ばれて、世界を救う役目を負った。で、何人か仲間を探す。その魂を共にする仲間ってのを」

「セルグとリネアが、その魂を共にする仲間だよね！」

「……さあな」

「大丈夫、きつと『魂』って気持ちのことだもん。でしょ？ リネア」

「……おい、俺を忘れてねえか？」

再び蚊帳の外になったセルグは、少しムスツとしている。たった一言二言だが、話の輪に加われないことがよっぽど気に入らないらしい。

「そんなことない……よ？」

「お前、今の一瞬、完璧に忘れてやがったろ。……ま、いい。俺もお師匠に言われたんだ。これからはアルについてくぜ」

「うん！」

こうしてアルフォンスは、新たに二人の仲間を得て、三人で旅をすることになった。

そして翌日、一行はレドックの町に別れを告げた。向かうは南。アスケイル王国の都、王都アスクガーデンへ。

新たな地へ壹

アスケイルに縦横無尽に広がる、アスク街道。

そこを王都に向け進んでいた途中、三人は運良く荷馬車に乗せてもらっていた。

「あー、よかった」

「ん、楽だな」

男二人は幸運を享受するかの如く、荷台でくつろぎ、中央で伸び伸びとしている。反対にリネアは隅に座り込み、微動だにしない。青空の下、セルグの服が目にとまったアルフォンスは、なにとなしに尋ねた。

「ねえセルグ。そういうえばさ、武闘家の一番上の階級ってなんていうの？ 職ごとに色々違うんでしょ？」

「ああ。俺ら武闘家の階級は七段階あって、一位が武闘神ってんだ。他の階級に人数規定はねえけど、武闘神だけは四人になってる」

「へえ。何で？」

「武闘家には流派つてもんがあるからな。東西南北の四つで、そこから一人ずつが武闘神の名を冠するんだ。そのため三年に一度、選定の儀をするんだぜ」

「七段階か。なるのは本当に大変そうだね」

「ったりめーだろ。候補者になるだけでも凄えことなんだぜ」

二人の会話は弾む中、リネアは無然としたまま会話に混ざろうともしない。

それに気づいたアルフォンスは、何とかリネアと会話しようと思してみた。

「……え〜と、リネア、魔法使いはどうなってるの？ もっと複雑？」

「……知ってどうする。魔法使いを目指すわけでもあるまい」

「……。そ、そうだけど……」

（やばい、会話が續かない……）

「いいじゃねえか、話して減るもんじゃあるめえし。な？」

「……。魔法使いは五段階だ。階級は五大職で最も少なく、それだけ昇級しにくい。武闘家と同じく、最上級以外に人数規定はない。称号は一番下が行者、次に魔法使いで上級・下級に分かれる。その上が魔術師、一番上が魔導師だ。人数は五行に従い、五人」
「……」

リネアの話の聞いている間、アルフォンスはただ驚いていた。

リネアが口を開いたことに対してではない。セルグのリネアへの接し方に、だ。

セルグは率直な、ある意味考えのない言葉でリネアに尋ねた。そのためにリネアも口を開いたのだらう。どう接すればいいかなど、回りくどい事を考えていた自分と違って。

「……リネアはどの階級？ 当然、行者じゃないでしょ？」

「私は魔術師だ」

「へえ……。って、ウソ！ 上から二番目ってことは、もう修めるの！？」

「嘘など言っでどうする。本当だ」

「すごい……。リネア、僕たちと年、変わらないよね？」

「私は十八だが。まあ私の実力というより、師匠の七光りもあるだらう」

「七光り？ 師匠ってそんなすげえヤツなのかよ」

「ああ。我が師の名は、シャルラン・ガイラ。聞いたこと位はあるだろう？」

啞然。

リネアの言葉に、二人は言葉を失った。

「シャ、シャルラン・ガイラって……。まさか……！」

「そう、賢者だ。さすがに知っていたか」

「そりゃあ……。な」

賢者とは五大職の剣士、武闘家、魔法使い、僧侶、吟遊詩人、全てを修めた人物だけに贈られる称号だ。

一位に人数制限をおく職が多いため、どの職も二位になった時点で『準修士』となり、その職を修めたことになる。ただ、どんな職であれ、一生かけても修められないことは多い。まして職の頂点たる五大職はその極み。一人前の位を得るだけで一苦労なのだ。

そのため百年ぶりに賢者の位を得た人物の名は、全世界に知れ渡っていた。

「凄い、凄いよりネア！！ ねえ、もつとリネアの話聞かせてよ！」

「……それはまた次の機会に、な。あれを見る、アスクガーデンだ」

リネアが示した先には、赤茶色の線が空と大地を割っていた。あれこそ、王と国の力の証。どこまでも続き天高くそびえ立つ、都を囲む城壁。それは神話にも登場するほど、遙か昔から都を守っている。

「あゝあ。出国手続きって、すぐにできると思ってたのになあ」

入都して、しばらくの後。三人はアスクガーデンのとある宿で、早めの夕食をとっていた。

「仕方ねえよ、役所仕事は遅いもんだ。明日の朝一で済むなら早いもんだって。今日はここでゆつくり休んでいこうぜ」

「うん、そうだね」

アルフォンスがそう言ったとき、ちょうど頼んでいた食事が運ばれてきた。が、それに手をつけようとした瞬間、隣の席の青年に声をかけられた。

「なあ、あんたらも大会に出場すんのか？」

「へっ？ 大会？」

予期せぬ出来事に、アルフォンスは素っ頓狂な声を上げてしまった。青年はそんなアルフォンスに苦笑しつつ、話を進める。

「なんだ、知らねえの？ 去年から王都が始まってんだよ。武闘大会がな！」

「武闘大会？！ それ、誰でも出れんのか？」

武闘大会と聞いたとたん、セルグの目の色が変わった。

「おう、明日やる予選に通ればな。男女ごとに武器あり・武器なしの、合計四部門だ。上位入賞者には賞金も出るんだぜ」

「うおっしゃあ！！ 出るぞ、アル！」

「え、僕も！？」

「……暇つぶしにちょうどいいな。私も出るか……」

「「え！？」」

アルフォンスとセルグの声が見事に被った。
青年も当然驚いたのだろう、顔が微妙に引きつっている。

「おいおい、アンタ魔法使いだろ？ 有名な大会じゃないとは言え、少し武術をかじったくらいじゃムリだ」

「……外見だけで人を判断するとは愚かだな。しかもお前は武闘家だろう？ そんな奴に心配される必要は無い」

「っな……！ てめえ、何様のつもりだ！？ 人がせつかく氣遣ってやってんのに！」

「……前半は、きっちり返そう。お前は私の心配ができるほどの実力を、持ち合わせていない」

リネアは美しく、かつ氷のような冷たさで言い放った。

「つのやろう……！！」

この言葉に怒った青年はいきり立ち、リネアに殴り掛かろうとした。が。

「……っ！」

「これでわかったか？ 人の忠告は素直に聞くものだ」

男の動きは椅子から立ち上がったところまで止まっていた。ピタリ、とリネアが持つ槍状の杖の先が、青年の首筋に貼りついていたのである。

どちらかが僅かでも動けば、その鋭利な刃が青年の首を簡単に切り裂くだろう。場に計り知れない緊張が走った。

「ね、リネア……。もうそこまで……」

「当然だ。後始末が面倒だからな。……私は部屋に戻る」

そう言い残すとリネアは、青年の首から刃を離すと、何事もなかったかのように早々に部屋へ引き上げていった。

（後始末とか……。そういう問題じゃないと思うんだけど……）

残された男三人は突然の事態に何の対応もできず、しばし呆然とするしかなかった。

「……あの、怪我はありませんか？」

しばらく経って、呪縛からいち早く解放されたアルフォンスは、おずおずと青年に声をかけた。

「あ、ああ、大丈夫だ。それよりあいつは何者だ？ てっきり魔法使いだと思ったんだが」

「おう、生粋の魔法使いらしいぜ」

「おいおい、冗談はやめてくれよ。俺は四位、闘士の位を授かっているんだ。ただの魔法使いに引けを取るわけが無い」

「……今の言葉、撤回しろ」

青年のその言葉を聞き、何故か急にセルグの態度が豹変した。低い唸るような声でそう言うと、青年を思いきり睨みつける。

「何だよ、お前も武闘家だろ？ 魔法使い如きに本職の俺がやられるわけねえじゃんか」

青年もそれに気づいたのか、言葉が少し陰悪なものになってきた。周囲にもびりぴりとした緊張感が伝わってくる。

「……あんだ、さつきリネアに言われた言葉の意味、わかってねえんだな」

「どついう意味だよ。さつきは油断しただけだ、本気じゃない」

セルグは青年を見据え、苦笑して言った。

「馬鹿言うなよ。俺ら武闘家に油断なんかあっちゃいけねえ。それすら忘れてるあんだはリネアに勝てねえよ。見抜かれたんだ。それと、負け惜しみは情けねえぞ」

この言葉を皮切りに、二人は一触即発状態となった。すぐに殴り合いにならなかったのが不思議なくらいの気迫だった。

間近で二人を見ていたアルフォンスはすぐに危険を察知し、急いで二人の間に割って入る。

「セルグ、もうやめようよ。ね？」

この時アルフォンスは無意識だったが、セルグを背にする形で二人の間に入った。

その姿を見て、セルグは張り詰めていた気を緩ませた。いや、緩まされたのだ。毒気を抜かれたとでも言うべきか。

セルグは思った。

闘いが職の自分達の間で言うくせに、何とも頼りない言葉だ。闘いを好まないと丸わりのこいつが、まるで俺を守ろうとするような姿勢だ、と。

苦笑して、セルグは頼りない守護者にこう告げた。

「アル、大丈夫だ。騒ぎを大きくするつもりは無い。なあ、ここまです言っただ、お互い大会で勝ち残ろうぜ。あんだも騒ぎは嫌だろ

「？」

セルグと青年が睨み合う。無言を了承ととったのだろう、セルグがその場を動いた。

「——じゃあな」

そうして部屋に戻った二人だったが、部屋での会話は全く無かった。

アルフォンスはセルグの豹変振りに驚いていたし、セルグはムスツとしたまま、口を開こうとしなかったからだ。

（でも、このまま朝まで無言、つてのもなあ……。けど何て言えばいいんだろ。あゝ、困った……）

とにかく何かしなければ駄目だ。そう思ったアルフォンスは、勇気を出してセルグに声をかけた。

「ねえ、明日の予選ってどんな風にやるんだろう。総当たり戦とかなあ？」

「……」

「それとも抽選だったりして」

「……」

「……あ、あのさ。僕、部屋から出て行ったほうがいい……？」

もう沈黙に耐えられない。

アルフォンスがそう思っ言葉をこぼした時、ふーっ、と大きなため息をついて、やっとセルグが口を開いた。

「——いや。悪かったな、氣い遣わせちまって」

振り向いたセルグからは、すでに険悪な空気は消えていた。それがわかってアルフォンスにも満面の笑みが戻る。

「うつん、そんなことないよ。ただ賑やかなトコで育ったせいか、こういうのはどうしても……」

「へえ、ってことは大家族なのか？」

「うつん、村の孤児院。けど、大家族といえば大家族だね」

「孤児院？」

「そ、孤児院。僕は赤ん坊のときに父さんと村に来たんだけど、母さんはいなかったし、父さんもすぐに死んじゃったから……」

一瞬だけ、アルフォンスの瞳は旅に出て初めての曇りを見せた。が、セルグはその一瞬を見逃すような男ではなかった。

「あー……。辛いこと言わせて悪かった。何っーかな、その……。我慢するなよ？」

「我慢？ 僕、別に我慢なんか……」

ホロリ。アルフォンス目から、何かが零れ落ちた。

「え……？」

それは涙。

幼いころに封印したはずのそれは今、とめどなく両の目から流れ出していた。

「な、なんで、涙が……。別に何でも無いのに……っ！」

「普通は親が居なきゃ辛いだろ。男だって泣きたい時は泣いていいんだぜ。どうせ今は俺しかいねえんだし、思いっきり泣いちまえよ、

アル」

「セル……グ……っ」

頼っていいのだろうか、この青年に。出会ってから一ヶ月も経たない人物に。

自分の弱さを曝け出して、いいのだろうか？

「な？ 旅に出る許可を貰えた礼だ、何でも聞いてやるよ」

セルグの笑みは、言葉は、優しくて。何よりも、力強くて。

頼りたい。アルフォンスは自分の胸の中で、奔流のように激しく渦巻く思いが生まれるのを感じていた。

（この人に、全てを曝け出したい……っ！！）

「——ぼ、僕、本当はずっと泣きたかったんだ！ 村でも悩みはあったし、いきなり旅立つのだって嫌だった！ けど……。けど、院長先生やみんなの前じゃ泣けなかった！！ 一番年上の僕が泣くと、みんなが不安になるからっ……！」

叫ぶように、思いを言葉にした。鬱積していたモノを、今、吐き出す。

「だから僕はずっと寂しくて……。友達はいたよ？ でも、やつぱり埋められない寂しさが、ずっとずっとあったんだ！ それが苦しくて、だから僕は旅に出たんだ……。っ！」

自分で言っただけで気がついた。嫌だった旅立ちを、なぜあんなにもすんなりと受け入れたのか。

自分は逃げ出したのだ。あの変化が訪れない空間——優しい人々

が暮らす、時の止まった樂園から。

旅立ちの理由は『界王の剣』を抜いたから。そう無理やり納得して、心の澱に蓋をただけだった。大好きで大恩ある村を欠片も嫌わないために。

物心ついた時から秘めていた思いを、アルフォンスは初めて吐き出した。空色の瞳から涙は止めど無く溢れ、嗚咽もこぼれる。

しかし堰を切ったように溢れる涙と嗚咽は、淀んでいた澱と一緒に洗い流してくれた。

「そつか……、お前、辛かったんだな。けど、もう大丈夫だよな？」

たった二つしか離れていない年齢と普段の行動が嘘のように、セルグは大人っぽい、優しい笑みを見せた。

「え……？」

「だってよ、言ったじゃねえか。泣きたかった、寂しかった、って。過去形ってことは、もう過去なんだろ？ 現に今、お前は泣いてるんだ。俺もリネアもいつでも相談に乗る。どうだ？ それでもまだ寂しいか？」

「……うつん！」

（僕もリネアは相談に乗ってくれると思うけど、勝手に断言するのは……。けど、ここがセルグらしいよな！）

「ん？ 何考えてんだよ、アル」

「へへっ、ひみつ！」

「あ、てめえ、このヤロ！」

「駄目だよ、って、放して痛いっ！！」

「教えたら放してやるよ！」

打って変わって年相応の笑顔で、セルグは関節技を仕掛けてきた。遊び半分ではあるが、本職にやられるとかなり痛い。というか首が締まって今にも落ちそうだ。

「ムリ、痛い！ わかった、言うからっ！！」

こうして過ぎた騒がしい夜は、アルフォンスが今まで生きてきた中で、一番楽しい夜となった。

心に絡みついた鎖を解き、心から信じあえる仲間と共に在るのだから。

新たな地へ忒

翌日。三人は、王都の少し外れにある闘技場に来ていた。昨日青年に教えられた大会に出場するためだ。

「うわ、たくさん人がいるね。去年始まったばかりって言うから、そんなに集まらないと思ってたのに」

見渡せば会場には、男女入り乱れて数百人が集まっている。全員が参加者という訳ではないだろうが、これだけの人数が集まればかなり大規模な大会になりそうだ。

「上等じゃねえか。やり甲斐があるってもんだぜ！」

「試合数が多いのは嫌だけど……。凄い盛り上がりそうだね！」

「……部門ごとに受付が違うようだな。終わり次第、宿に戻る」

興奮気味の男二人を尻目に、リネアはそう言うや否や、さっさと受付に行ってしまった。

……温度差が少し悲しい。

「ま、まあとにかく予選頑張ろう！　ここで落ちたら賞金の可能性も無くなっちゃうし！」

「ま、俺は闘えればいいんだけどな。確かに金は欲しいけど、リネアの分は確定だろ」

（うん、確かに。なんかリネアは絶対に負けないと思う……）

高い実力、それ以上に信じられる何かがリネアにはある。そこに、受付開始の合図が鳴った。

「おつ。じゃあな、また後で」
「うん」

二人は参加登録をするため、一旦分かれて各自の受付へと向かった。

「武器所持での参加の方はこちらへ！ 事前審査登録を行いますので、大会で使用する武器を提示して下さい！」

審査員に言われるがまま剣を手渡したアルフォンスは、難無く審査を終え、三十番の札を受け取った。

界王の剣などという特殊なものだから少し不安だったが、拍子抜けするくらい簡単に審査を通過できた。何故かは分からないが、とにかく良かった。

そこで、はたと不思議に思う。

（あれ？ リネアの杖って大丈夫なのかな。魔法使いの杖なんだから、先端の石に特殊力があるんだよね……？）

リネアの杖は、かなり変わった形状をしている。一見すると短槍のようで、実際にその役割も果たすようだ。昨夜の一件がいい証拠である。

しかし先端には鋼ではなく、薄紫の石が輝いている。魔石の知識はサッパリだが、ただの飾りということはあるまい。

アルフォンスは色々と不思議に思ったものの、結局はこう決着をつけた。

リネアだから大丈夫、と。

審査を終えてしばらく待っていると、受付を終了した係員から説明があった。

「えー、長らくお待たせ致しました。本戦出場人数の十六名を越えたため、予選を行います。お手元の番号札の数を呼ばれた方が、予選出場となります。それでは……」

係員が箱から番号の書かれた紙を引き始めた。

「まずは、八番と二十九番の方。次に、十七番と十一番の方。次に……」

どんどん予選出場者の番号が読み上げられていく。あの人ばかりを見て予選の覚悟はしていたが、やはり出来るだけ闘いたくない。アルフォンスは自分の番号札をぎゅうつと握り締めながら、祈りに祈った。

（ひえーっ、どうか予選無しで！ お願いしますうー！）

「最後は二番と三十番の方！ 以上の二十名はこちらにお集まりください。呼ばれなかった方々は、明日、同じ時刻にここにいらして下さい。本選の組み合わせの抽選を行います」

係員からの案内が終わると、場は一気にざわめきだした。明日のためにさっさと帰る者、予選を見るために陣取る者、予選の用意に奔走する者……。

三者三様の中で、予選出場となったアルフォンスは、闘ってもいないのに真っ白になっていたのだった。

一方、セルグも予選出場を余儀なくされていたが、こちらは闘う機会が増えたと、大いに喜んでいた。

その浮かれた気分のままアルフォンスの様子見をしようとした時、セルグは後ろ誰かに声をかけられた。

「おい、その服、お前って東派だろ？しかもまだ見習い！」

振り返るとセルグと年の変わらない青年たちが数人、ニヤニヤと笑いながらこちらを見ていた。身なりや言動からして、どうやらセルグの属する東派と相對する、西派の武闘家だ。

本当は無視して立ち去りたかったが、そうすれば確実にセルグ本人だけでなく、東派全体に『負け犬』の烙印が押されてしまう。西派の勝手な評価とはいえ、セルグはそれを許すことが出来なかった。

「……何か用か？」

「別に。ただ、東派は本当に人手不足なんだと思ってさ。お前みたいな見習いを、小さいとはいえ公式の大会に出すなんて。なあ？」

「おう。おい、さつさと出場辞退したほうがいい。『東派の伝統』に恥の上塗りしちまうぜ！」

その言葉にゲラゲラと笑う青年たちを見据え、セルグは静かに言った。

「……言葉の使い方、間違ってるぜ？」

「なん……っ！」

青年はその言葉を、言い切ることが出来なかった。

セルグが先ほどまでの飄々とした雰囲気ガラリと変え、心の臓を射抜くような鋭い視線で青年たちを睨んだからだ。

睨まれた青年たちは思わずたじろぎ、身を竦ませる。

「恥の上塗りってのは、何かあった後に言うことだ。生憎だが東派の伝統は一切問題ないぜ？ 始まって以来、一度も不祥事を起こしたことがねえからな。どっかと違って」

「ふ、ふん！ 過去は過去だろ。今やお前らは最小最弱、俺達是最強最大の流派。どっちがマシなものか、ガキでもわかることじゃないか！」

「……現在の人数が少ないのは事実。最小は事実だから、それは認める。……けどな」

次の瞬間、セルグは一足で青年たちとの間合いを詰めた。一瞬のことで青年たちは反応が出来ず、セルグは頭格と思われる人物の隣に立った。

「最弱は何があるうと認めない。何があってもお前らより下とは認めない！——それに建前とはいえ、流派の力は全て同じと公言しなきゃいけないって決まりがあるだろうが。もしお偉いさん方に聞かれたら、お前ら何もないわけにやいかねえぞ？……わかったか？」

セルグはそう言い捨てると、何が起きたのか理解しきれてないのだろう、未だに凍り付いてる青年たちを一瞥し、その場を去っていた。

「……な……何なんだ、アイツは……？」

セルグが去っていった後、青年がやつとのことで口にした言葉は、この一言だった。

（ちっ、やっぱり西派の野郎は気に喰わねえ）

青年たちのそばを立ち去ったセルグは、むしろくしゃとした気分でした。しかし発散できるだろう予選までは、まだ時間がある。そのため気分転換もかねて様子見をするため、アルフォンスを探しに

駆け出した。

そのアルフォンスと言えば、控え室で見事に硬直していた。何故なら稽古であれ実践であれ、人と刃を交えたことが一度も無いからだ。道中、何度か魔物と戦うことはあったが、それは退治を目的とするもの。今回とはワケが違う。

（ど、どうしよう……。リネアにコツとか聞いておくんだった……！）

——ここでリネアの名前が出る分、多少の冷静さは残っているよのだが。

「では二番と三十番の方、試合場へ！」

呼ばれて試合場に上がれば、相手は自分と同じような体格の、三十代と思われる槍使いだった。

「——始め！」

開始と同時に、見事な突きが間髪を入れずに繰り出される。アルフォンスは剣で受け流せたものの、後退するのが精一杯だ。反撃の仕様がなない。

（くそっ、これじゃ試合場から落ちて反則負けになっちゃう！ 前に出ないと！ けど、どうしたらいいんだよぉ？！）

怖い。そう思ったときだった。

「アルーツ！ 負けんじゃねえぞ！！ しっかり見てっからな！」

自分の名を呼んだ声の方を振り向くと、いつの間にか、セルグとリネアが来ていた。

二人が自分を応援してくれている。ただそれだけで、力が湧いてくる。

「……うんっ！わかってるよ！任せて！」

策も何もなかったが、声援に押されるかのように、まずは一歩、思いつき前に踏み込んだ。

下がってばかりだったアルフォンスが突然前に出て驚いたのか、相手はわずかに動きを鈍らせ、隙を見せた。

この隙を逃さずに、アルフォンスは反撃にうつて出る。

まともな方法なんて思いつなかったのだが、とにかく槍を弾こうとして、見事に成功した。剣を下から掬い上げるように刃先同士をぶつけることで、槍はまるで振り子のように宙に弧を描く。これで相手の前身がから空きになった。

（ここだっ！）

「……ふざけるなあっ！！」

「！！」

だが、最後の一発を決めようとした時、相手が叫び、逆に剣を弾かれた。経験の浅いアルフォンスでは、決定打を与えるに至らなかったのだ。

しまった。やられてしまう、そう思った直後、アルフォンスは何故か時が止まったように感じた。実際は槍が物凄い速さと正確さで、突き出されただけである。

だが、その後。

「勝者、三十番！」

アルフォンスの勝利を告げる判定が下った。

「……あいつ、すげえじゃんか」

終わった瞬間に驚嘆の声を上げたのは、セルグだった。

試合の終盤、アルフォンスは相手が突き出した槍を剣で絡めとり、跳ね上げ、柄で鳩尾を突いた。鮮やかな、正に流れるような動作で。

「なありネア、今のどう思う？」

「……どうとも言えない。アルの実力ではないが、運でもない。それだけだ」

「はあ？ どういう意味だ、それ？」

「……今にわかる」

夜、無事に予選を終えた三人は、今日の事を話し合いながら夕食を取っていた。

「よかったね、全員本戦出場が決まって！」

アルフォンスは試合終了時から、終始満面の笑みを浮かべていた。まずリネアは人数の関係で、両方とも運良く予選を経ずに本選出場が決まり、セルグは予選を行なったが、難なく通過したからだ。だがそれ以上に『終わり次第、宿に戻る』と言っていたリネアが、二つとも予選の応援に来てくれたことが嬉しかった。

あれは自分たちへのメッセージだったのだ。『終わり次第、先に宿へ戻っていい』という。

決って思いやりのない冷たい人じゃない。分かりにくいけど、優しく思慮深い。それがリネアだと分かって、なおさら嬉しかった。

「だな。つたく、今日は色々あつて疲れたぜ。西派のヤツらが因縁つけてきたりしてよあ。まあ手出しは一切してねえから、その分本戦が楽しみになったぜ！」

「……。揉め事は起こさないでよ？」

「だーいじょうぶだって！ 大会出場停止になるようなことは絶対しねえから！」

アルフォンスの笑顔が硬直する。

にこにこ笑うセルグに、その笑顔が不安を煽るんです……。とアルフォンスには言えなかった。

新たな地へ参

食事を終え、部屋に戻ろうとしたところでセルグが二人を呼び止めた。三人で手合わせをしたいと言い出したのだ。その申し出を快諾した二人は、セルグと一緒に宿の近くにある森に向かった。

「まずはアル、俺とやろうぜ。いいだろ？」

「え？ だけど……」

「ああ、剣使っていいぜ。そういう訓練も必要だし」

「そう？ じゃあ……」

二人は向かい合うと、息を整え、構えた。リネアは少し離れた場所ので二人をしっかりと見つめている。

だがアルフォンスは剣を構えた途端、一寸たりとも動けなくなっていた。

原因はセルグの気迫だ。普段のセルグとも、魔物との戦いの時とも違う。決して荒々しくない、澄んだ気迫。いつかどこかで感じたような気もするが、そんなことを考える余裕などない。

（あ……。ムリだ、動けない……！）

その時、セルグが動いた。

アルフォンスは何とか咄嗟に避けることができたものの、全身にびっしょりと冷や汗をかいていた。

「どうした、アル。来いよ」

「う……」

（こわい）

ああ、分かった。セルグは飢えているのだ。

（何でもここまで）

アルフォンスでも簡単に察し、怯えてしまうほどに。

（今はただの練習じゃないか……！）

「予選のとき見せた力、出してみる。俺はあのお前と戦いたい……
！！」

セルグは強き者との闘いを、渴望していた。

——数分は経っただろうか。

だが二人の闘いは、一向に再開しない。アルフォンスが座り込んだまま、全く動かないからだ。

「なあ、何でだ。何で本気を出さない？ 手加減なんかすんなよ！」

「違う……っ。セルグ、僕は手加減なんかしてないよ」

「嘘言うんじゃないよ。あの時は……。予選の時、お前はこんなじゃなかった！」

「けど、違うんだ！ 手加減なんかしてない！ 嘘なんかじゃない

……！」

「だけど……！」

「……待て、セルグ」

激昂していく二人を止める声。その声の主はリネアだ。

「何だ？」

闘いの邪魔をされたからか、セルグが少し苛ついたように答える。

「アルは嘘など言っていない。余力があるようには見えない」

「……っ」

リネアの指摘に、セルグが軽く息を呑んだ。

恐らくセルグ自身、既に分かっていたことなのだろう。それでも認められずに——認めたくなくて、アルフォンスに強く詰め寄ってしまったのだ。

「まだその時では無い。眠れる力、目覚めは程遠いのだろう。この剣を使いこなすには、相当の時間が必要なはず」

「……」

「わかるな？ 本来これは仲間と闘うための剣ではない。予選では剣が自ら力を発揮し、アルを導いたのだろう。剣の力を我が物としたアルと戦えるのは、まだ先だろうな」

「……。そう、か。そうだよな。わかった」

そうセルグは溜め息交じりに答えた。その姿には、もうアルフォンスの動きを止めるような気迫は感じなかった。

（——あ、そっか）

思い出した。あの気迫を以前に感じたと思ったわけを。あの気迫は、セルグの師匠ゴルディアスと会ったときに感じたものと、とてもよく似ていたのだ。一瞬で戦闘態勢に入り、一瞬でそれを解く。その落差、その鋭さ。もちろんセルグに聞けば師匠には到底敵わないと言っただろうが——。

「アル、無理させて悪かったな。どっか痛めたりしたか？」

未だにへたり込んだままのアルフォンスに、セルグが手を差し伸べた。その手を取り、アルフォンスはようやく地面から立ち上がった。

「うっん、大丈夫。こっちこそごめんね。予選の時ののは、僕の力なんかじゃないからさ……」

「何を言っている、アル。お前に力が無ければ剣は使えない。まだ完全に目覚めていないだけだ。技量は訓練しだいでどうとでもなる」

落ち込むアルフォンスを横目に見つつ、リネアは心底不思議そうに言った。

「どうやら彼女は自分を信じない、ということが信じられない性質らしい。」

「そう……かな。なら、もっと頑張らなきゃね」

「当たり前だ。この先お前に何かあつては困る。唯一の剣の使い手なのだから」

「うん、努力するよ」

「そうしてくれ。私で良ければいつでも稽古の相手になろう。……さて、どうする？ セルグ。私はお前の相手をするのか？」

「おう、頼む。リネアも武器を使っていーぜ。使い慣れてんだろ？ その杖」

「いや、構わん。私は素手でやる」

そう言うなりリネアはマントを脱ぎ、セルグに向かって構えた。

「……いいんだな？」

「無論。本気でこい」

まるでリネアのほうが稽古をつける側のような口ぶりに、アルフオンスはかなり驚いた。

（いくらなんでも……。セルグは本職で男なんだし、本当に大丈夫かな）

しかしそんな驚きと心配は、不要だったとすぐに知ることとなる。

「——はあっ!!」

まずはセルグが動いた。右の上段蹴りだが、どうみても様子見などではなく、本気の一発だ。だが、軽々とリネアに避けられ、その次もその次も、一発もリネアに入ることなく攻撃は続く。

「くっ……!!」

しばらくして、わずかだがセルグが苦悶の声を漏らした。

「……気が上手く巡っていない。そんなことでは私すら倒せんぞ」

「ち、ばれたか。お前、人の心読めたりすんのか？」

「憶測に過ぎん」

「それって俺が分かりやすいってことか？」

「……さあな」

二人は会話をしているが、この間も動きが止む気配は無い。そして延々と攻撃をするセルグに対し、リネアが反撃する気配もなかった。

その後もリネアは反撃をせず、やがてセルグの攻撃が止んだ。

「……何で攻撃してこない？」

苦しそうに大きく呼吸をしながら、セルグがリネアを見つめて言った。そのリネアは息を乱しているとはいえ、セルグほどではない。

「先ほども言ったが、お前は上手く気が巡っていない。昨夜の男が気になるのだろうが、そんなことでは攻める価値は無い。基本すら守れないのか」

「そんな……！」

「アル、いいんだ。本当のことだから。リネア、ありがとうな。何かスッキリしたぜ」

「大会はきちんとやれ。このままではすぐに負ける」

「ああ、任せとけ。それより休んだらもう一回やってくれねえか？
今度はちゃんとやるから」

「構わない」

「おし、じゃあ一時間後にまたここで」

そうして三人は休憩のため、一度自分たちの部屋へと戻った。

「なあアル、予選のこと覚えてるか？」

しばらく部屋で明日の用意をしつつ体を休めていると、思い出したようにセルグが尋ねてきた。

「そうだなあ……。こう、無我夢中、って言うのかな。実は良く覚えてないんだよ。勝手に体が動いた、って感じで」

「ふーん……。凄かったんだぜ、お前。あれには驚いた」

「そう？」

「ああ。あれが……。あれがお前の中に眠る力の片鱗なんだ。楽しみにしてるぜ。全力のお前とやれる時を、な」

「ご、ご期待に沿えるよう、頑張りマス」

(……界王の剣、か。本当に僕で扱えきれんのだろうか。リネアは
さも当然のように言うし、セルグもそれを受け止めてるけど……)

「ん？ どうした？」

「……あつ、いや、何でもないよ。明日勝てるかなって」

「ま、試合つてのはやってみねえとな。……と、そろそろ時間だな。
じゃ、行ってくるわ」

「うん、頑張つて」

「おう、じゃあな」

セルグが部屋を出て一人になったアルフォンスは、剣を鞘から抜き放った。月の光を浴びて輝く刃を眺めつつ、これを自分に託した
界王について考え始めた。

(会ったことも見たことも無い、人……いや、存在の力を僕が授か
った。理由なんかわからないし……。世界を救えなんて言われたけ
ど、未だに信じられない。どうも実感が湧かないんだ……)

アルフォンスは部屋の窓を開け、夜風を受けた。鏡のように磨か
れた剣に、不安に駆られた自分の顔を映しだす。

(けど、あの二人は信じてる。僕が、僕たちが世界を救うことを)

素直で単純で、優しく強いセルグ。魔法使いを修めた上、中級
の武闘家にも勝るリネア。

(……これから先、何が待ってるんだろう。他にも仲間はあるのか
な。それに……、この旅で母さんに会えるんだろうか……?)

月に雲がかかる。剣を鞘にしまつと、窓を閉め、どさりとベッドに横になった。

（何でかわからないけど、この旅でいつか母さんに会える、そんな気が……する……）

そしていつの間にか、アルフォンスはぐっすりと眠りに落ちていった。

——夢を見た。

とてつもなく巨大な門の前に、若い男女が向かい合つて立っている。

男性は一目でわかるくらい深い傷を負っているが、手に赤子を力強く抱いている。女性はその傷を見てか涙を流してはいるが、瞳にしっかりと強さが宿っていた。

そして女性はこう叫ぶ。

「お願い！ この子連れて、逃げて！」

「——待つて！！」

ガバッ！

叫ぶと同時に、自分の声でアルフォンスは飛び起きた。

「おいアル、大丈夫か？」

「あ、セルグ……」

「寝ちまつてると思ったら……。変な夢でも見たのか？」

「……うん」

心臓がバクバクと激しく鳴っている。あの夢は何だ。あんな光景は、あんな人たちは、僕は知らない。

「へえ。どんな夢見たんだ？」

「——巨大な門の前に、二十才くらいの男の人と、女の人が居たんだ。男の人は傷だらけで、赤ん坊を抱いてた。女の方はそれを見て泣いてて……。逃げて、って叫んだんだ。そこで僕も何でか叫んじやって、起きたんだ」

「へー、変な夢だな。その人たちに心当たりねえのか」

「うん、全然。女の方の髪は僕と同じような金だったけど……。逆に男の人はリネアみたいに綺麗な黒髪だったな」

「ふうん？　けど黒髪も金髪も珍しくないしなあ。他に何か覚えてないのか？」

「うーん……。あ、そう言えばあれは……！！」

おぼろげな記憶を辿り、ある一点をなぞるように思い返す。

「ん？　何だつて？」

「まさか、でも……」

「おいおい、どうしたんだよ」

セルグの言葉も耳に入らないまま、アルフォンスは自分の襟元に震える手を差し込んだ。

「——やっぱり、似てる」

この首飾り。

「おーい。……お前、本当に大丈夫か？」

「——えっ。あ、ごめん。ええと、何？」

「いや。それよりその首飾りがどうかしたのか？」

「……あのね、夢に出てきた女の方がしてたヤツにそっくりなんだ」

「何だつて？」

「夢ではこの真ん中に、何かの石がはまってたけど……。でもそれ以外は本当にそっくりなんだ」

服の中にしまっていた首飾りを、久し振りにじっくりと眺める。
見れば見るほど夢に出てきたものそっくりだ。

「じゃあその首飾りは、前に夢の女の人が持ってたとか？」

まさかな、とセルグは笑う。だが、アルフォンスはその言葉に驚愕した。見知らぬ光景に、見知らぬ男女。しかし、女性と自分を結ぶ二つの点。金の髪と金の首飾り。

「だとしたら、あれは……。……母さんと、父さん……。？」

「なっ……。まさかそれ、お袋さんのなのか！？」

言った本人は冗談のつもりだったため、アルフォンスの反応にセルグも非常に驚いていた。

「うん。この首飾りは母さんの物だ、って父さんの遺言で……。？」

「……。そうか。なあアル、お袋さんに夢じゃなくて、現実で会えるといいな」

「うん、いつかきつと会ってみせる！——ところで、リネアとの勝負はどうだった？」

「大収穫アリ、ってとこだな。マジでリネアには感謝しねえと」

「……。ふん？」

「なんだよ、その返事は」

「いや、別にいい？」

（ええと、セルグはリネア惚れてるんだよね？ ……や、ただ単に

相手が好きな人でも強者には敬意を払う……、みたいなもんか？)

分らない。セルグは色恋に関して単純一直線だと思っていたのだが、案外複雑なようだ。

「よし、そろそろ明日に備えて寝ないとな。アルはどうする？」

「そうだね。僕ももう寝るよ。お休み」

二人が深い眠りに着き、月も中天を過ぎたころ、リネアは一人夜空を眺めていた。——とても寂しそうな眼差しで。

(師匠……。これでよろしいのですか？ 私はまだ不安なのです。予選の時の力も、ただの偶然かも知れない。……間に合わないかもしれない)

魂を共にする仲間。全てを曝け出せ、託せる仲間。

ずっとずっと欲しかった。ずっとずっと望んでいた。

どうか許してくれ。失うのに怯え、全てを曝け出すことなど出来ない私を。だから、せめて信じよう。仲間の全てを。

(今は信じるしかない。信じて託すしか……。私に出来ることは無い……)

様々な思いを乗せて、風は行く。

そして夜は終わり、朝が始まる。ひとつの節目とともに。

武闘大会へ参る

王都アスケイルに蒼天が広がる中、ついに武闘大会が始まった。毎度のことながらリネアは二人を放って、さっさと行ってしまうが。

「アルの試合は何試合目だ？」

「僕は明日だよ。セルグは八戦目だっけ？ 早く行ったほうがいいよ。応援してるからさ」

「おう」

アルフォンスは会場の応援席へ向かったが、そこで目にしたのは、何と空中に浮く試合場であった。見た目からして、材質は普通の石だろう。それを魔法か何かで浮かせているらしい。

（え……ちょっと待って。僕もコレなの？！）

開催日が違うとは言え、場所は変わらないのだ。わざわざ浮かべているものを戻すとは思えない。自分が落ちた時のことを想像してしまい、アルフォンスは青ざめた。

やがて試合が始まり、白熱の試合が続く中、セルグの出番が回ってきた。

「では八戦目に移ります。……試合開始！」

審判の合図と同時に、相手が飛び出した。

アルフォンスには目で追うのがやっとの、次々と繰り出される素早い攻撃。しかし、それをセルグは易々と避ける。昨夜の手合わせの効果は確かにあったようだ。

（うわ、やるなあ、セルグ。一戦目は楽勝かな）

その予想通り、勝負はすぐに決まった。

試合開始から三分ほど経った頃、セルグは動いた。相手が突き出した右拳をひねり上げ、すぐさま後ろ向きになって襟首をもう一方の手で掴み、そのまま前へぶん投げたのである。

（……一本背負いってヤツだよな、アレ。かなり無茶苦茶だけど）

場外に相手が落ちたと同時に、セルグの勝利が告げられた。

高いところから落ちたため相手の身が——というより明日の我が身が心配になったアルフォンスだったが、落ちた相手は何事もなかったかのように、すぐに起き上がってきた。

後でリネアから聞いて分かったことだが、この試合場には人の落下速度を遅くする、特別な魔法がかけられているらしい。アルフォンスは安堵の溜め息を漏らした。

しばらくして、試合を終えたセルグが席にやって来た。

「よ、ちゃんと見てたか？」

「当然！ 楽勝だったね」

「ん、まあな。けどお楽しみはこれからなんだ。もう一回勝てば……」

「もしかして、リネアにやられた……？」

なにせあの青年は階級が三つも上の相手なのだ。アルフォンスは心配して言ったのだが、セルグは軽く笑い飛ばした。

「そっちじゃない。予選前に因縁つけてきた西派の奴だよ。昨日言っただろ？ ふん、完膚なきまでにぶっ潰してやる！」

そう言ったセルグはギラギラと肉食獣のような飢えた瞳の輝きと、キラキラと少年のような純粋な瞳の輝きを併せ持っていた。

（ああ、その自信を少しでいいから分けて欲しいよ。何でそんなに笑顔なのかなあ……）

「じゃ、すぐ試合だから。またな」

時間がかかった試合もあれば、セルグのように速攻の試合もある。どちらにしろ試合が進むにつれ、どんどん弱者は姿を消していく。そうして最初の十六人から、すでに残るは四人となっていた。

「両者、前へ！」

審判の声がかかった。

準決勝ともなれば予選から考え、残っている出場者はかなり絞られたことになる。その中で今、試合場に立っている二人は一際年齢が低い。セルグは色々と言っていたが、お互いかなりの実力がある証拠だろう。

「よ、ちゃんと残ったな。それにしても、五人もいて残ったのはお前だけだよ」

「五月蠅い！ 元々あいつらはお情けで一人前の位を手に入れたよ。うなもんなんだ！ 俺がしっかり西派の強さを教えてやる！」

「……おう、きっちり教えてくれよ。楽しみだ」

セルグが笑う。その笑みからは、少年のような輝きは消え失せていた。

「試合開始！」

「はあっ！！」

開始と同時に、初戦と同じように相手が先制をとり、連打を仕掛けてきた。まるで勝ち進んだ實力を示すかのように、目にも止まらぬ速さで攻撃を放つ。

しかしセルグも初戦と同じく、これを楽々と避けていた。きっとこれがリネアの言う『上手く気が巡っている』状態なのだろう。いっなくな身体の動きが軽やかな気がする。

「どうした、一発も当たんねえぞ？」

セルグは相手が疲弊して動きを鈍くしたのを見て、挑発的に声をかけた。相手は当然それに反発してくる。

「くそっ……。お前、なぜ攻撃をしない？！ 攻撃なしに勝てるとも思ってるのか！！」

「アホか。んなワケねえだろ」

（——セルグらしくないな。何で相手を挑発するようなことを……）

違和感。セルグは自分の流派に非常に誇りを持っている。短い付き合いだが、これはすぐにわかった。

そのため東派の名を汚すことを、セルグは決して承知しない。しかし、だからと言って、他の流派を貶めるようなことを好む人物でもない。

「なら何でだ！」

「簡単だ。今のお前とは打ち合いたくない。まだ……」

「何だと？ まともな武闘家の存在もない、弱小流派の下っ端の癖

に!!」

——セルグの雰囲気が一変した。

アルフォンスは昔、旅の吟遊詩人に聞いたことがある。

誇りの無い人間に、武闘家は向かない。誇りだけが武闘家の支えであり、屈辱に耐え抜くことが役目。

特殊力を用いず、己の身一つで戦い抜くために受ける五大職『最弱』の称号。東派はその教えと、勝利に固執しない考えのため、受ける屈辱は他三派の比ではないという。

だから今の言葉は、流派を重んじるセルグへの禁句だったのだろ
う。

そうでなければ、そうでなければ……。

「勝者、セルグ・レナード！」

高らかに、審判の勝利宣言が響き渡った。

しかしその声とは裏腹に、場内は騒然とした雰囲気包まれてい
た。

「セルグ！」

「アル……ッ！俺は、俺はっ……!!」

アルフォンスは試合の終了と同時に、控え室へ全速力で走った。

立ち尽くしたセルグは顔が青ざめ、今にも倒れてしまいそうだった。

（まさか、セルグのこんな力才を見る日が来るなんて……）

「大丈夫、ちゃんと救護班の人がいるんだし。すぐに治るから大丈夫
だよ。ね？」

「無理だ……。アレはそう簡単に治る傷じゃない、やった俺が一番

よくわかる！ あいつは基礎を疎かにしてた。それに俺はあいつを、あいつをつ……！」

——ああ、その先を言わないで。

何を言わんとしているか分かったアルフォンスはそう願ったが、セルグは震える声でその言葉を紡いだ。

「殺して、やりたいって……っ！！」

今にも消えてしまいそうな、それでいて泣いているような声。それでも、アルフォンスにはハッキリと聞き取れた。

先ほどの試合、セルグは勝った。しかし相手の青年の命は、セルグの強烈な気術の一撃により、風前の灯火と化している。

（セルグ……）

セルグの挑発に相手の選手がのった、観客の誰もがそう思っただろう。だが、それは違う。セルグはただ、求めたのだ。強き者との闘い、本気の試合を。

あの時、セルグが言いかけた言葉はきつと、『まだお前は本当の実力が出せてない』。それを最後まで言い切れたなら、こんな結末は迎えなかったに違いない。

セルグの言葉も、行動も……。

直情とでも言えがいいのだろうか。素直なだけではない、この偽りが無さ過ぎる心は。

「アル、セルグ、何があった？」

「えっ、リネア！？ どうしてココに？」

二人が言葉を失い静まり返ったところに、思いがけない人物が登場した。

観客席ならまだしも、なぜ控え室に来たのだろう。そのアルフォンスの考えを読んだかのように、リネアは一息で理由を話した。

「次の試合まで時間があるので、様子を見に来た。そうしたらセルグの試合で止まっていたからな。……何があった？」

リネアの黒曜石のような瞳に見つめられ、アルフォンスは思わず息を呑んだ。

「それが、その……」

「俺が対戦相手を殺しかけた。いや、もう殺したも同然なんだ……」

一方のセルグは虚ろな眼差しで、リネアと視線を合わせることなく言った。そんなセルグの姿を見て、リネアは少しだけ声を低める。

「……救護班の手にも負えないのか？」

「ああ。特殊力の治療術は、強力じゃないと気術の傷には効かないだろ？ 居ないんだとよ、中級までしか。とどめに気術の治療術士は王都なのに居ねえんだと。はっ、たまんねえよ……」

「ええっ！？ そんな……！」

（じゃあ、あの人は助からない……！？）

「……。それは私に対する嫌味か？」

今の言葉のどこに気を悪くしたのか、リネアの無表情がほんのわずか、しかめられた。

「は？ んな訳ねえだ、ろ……？ ……そうか！ リネア、頼む！
！」

「いいだろう、引き受けよう」

セルグの顔に、一気に明るさが戻った。

その理由はアルフォンスも、すぐに分かった。リネアは上級の魔法使いだ。魔法使いは高位ならば僧侶にも匹敵する、強力な回復術を会得しているのだ。

そうして控え室を出てから三十分ほどで、リネアが戻ってきた。

「リネア――！」

セルグはリネアを目にした途端、一目散に走り寄る。リネアを信じているが、やはり不安を捨てきれない。そんな顔をしている。

「心配は無用だ。処置は終えた。後は自然治癒に任せるしかないが、命の心配は無い」

「――そうか、ありがとう。悪かった、まだ試合があるのに……」
「構わない。私は試合があるので行くが、何かあればいつでも呼べ」

セルグが落ち着きを取り戻したのを確認し、リネアは踵を返した。アルフォンスは次からリネアの試合を応援しようと思い、その後ろ姿に声をかけたが、素気なく断られてしまった。

「無用だ。アルはセルグについている」

リネアはそれだけ言っていると振り返ることもせず、控え室から出てしまった。

「……リネアも優しいんだかキツイんだか……。そう思わない？」

「は、え？ 何だつて？」

「だからさあ、セルグについてろ、つてのはセルグを心配してのとだろうけど。応援は無用だ、なんて言い方はちょっとキツイよね」
「あ、ああ。そう、だな……」

答えるセルグは半分うわの空。――アルフォンスは悟った。

（リネアに心配されて喜んでる……っ！！）

ああそうだ。セルグは良くも悪くも素直で直情で、とどめに単純バカなのだ。

（何であの落ち込みようから、ここまで復活できるの……？）

その後セルグは準決勝を快勝し、並み居る強豪を抑えて、見習いの階級でありながら決勝に進んだ。

（これぞまさしく愛の力、ってヤツ？ ははは……）

あまりにもな事態に、アルフォンスは頬が引きつる。もしリネアに『好き』なんて言われた日には、武闘神にも勝てるんじゃないだろうか。

やがて試合場に二人の選手が登場する。決勝の相手は、宿で出会った青年だ。

審判が開始の合図を告げる。こうして、闘いの火蓋が切って落とされた。

武闘大会へ忒

決勝戦、今度のセルグは、自分から攻撃に打ってでた。開始の合図とともに間合いを詰め、その勢いのまま右の拳を放つ。

しかし相手は三つも階級が上の猛者。そう簡単にはやられはしない。最小限の動きで、ひらりとかわされてしまった。

今度は青年がセルグに撃ち込もうと動くが、それをセルグが素早く押さえ込む。二人は試合場の真ん中でがっちりと組み合う形になった。

「……っ。やるな。闘士の位は伊達じゃねえってか」

「ふん、お前もな。本当にまだ見習いかよ？」

「おうよ。その通り、だっ！！」

組み合いから、先にセルグが動いた。相手を無理やり横投げに投げる。

しかし相手は綺麗に受身を取り、平然と立ち上がった。無理に動いたセルグのほうが、余計に体力を消耗してしまっている。

「くそっ！」

「俺が言つのもなんだが、お前は経験不足だ。出直して来い。ああ、それと……」

青年は言葉の途中でありながら中段の回し蹴りを放ち、セルグの脇腹に的中させた。セルグは勢いよく吹っ飛んでいく。

「が……っ！！」

ズザザザッ、とセルグは試合場の端まで滑っていった。気を失

ってしまったのか、仰向けの状態のまま、ピクリとも動かない。

「……昨夜のことは、お前の言うとおりだ。色々と反省したよ。だから、手は抜かねえ」

試合を終わらせようと、青年はセルグに歩み寄る。

「何やってんだよ、立てえーっ!!」

アルフォンスはセルグに必死に声をかけるが、反応は無い。このままでは勝敗が決してしまう。

その時、背後から秀麗な一喝が響いた。

「——こんなところで負けるつもりか！ さっさと立て!!」

驚いて声のした方を振り向けば、そこにはリネアが立って居た。リネアが声を荒げるなんて初めてのことだ。

「う……」

「!」

わずかな声だが、しっかりとアルフォンスの耳には届いた。

急いで試合場を振り返ると、少しふら付いていたものの、セルグが何とか立ち上がるうとしていた。

「……立ち上がるのか。このまま終わってたほうが、楽だと思うんだが」

「へっ。負けられねえんだ、俺あよ。応援してくれてるヤツが居るからな」

観客席ではリネアが階段を降りて、アルフォンスの隣にやって来た。

「……もう大丈夫のようだな。全く、何をやっているんだか……」

「リネア、もう試合終わったの？」

「ああ、全て終わった」

「だったらせつかくだし、最後まで見ようよ！」

「……そうだな……」

ほんの一瞬。だけど、確かにリネアが微笑んだような気がした。次の瞬間にはいつもの無表情だったので、見間違いだったかもしれないが。

（うわー、今すっごいモノを見ちゃった気がする……。これはセルグに言えないよ）

だって、とてつもなく下らない嫉妬をされる気がする。しかもかなりの確率で。

「セルグ、いけーえっ！」

悪い考えを振り払うかのようにアルフォンスは叫ぶ。その声に応え、セルグは再び相手に立ち向かった。

「お返しだ、喰らえ！」

セルグは立ち上がりざまに、右の上段蹴りを放つ。相手は腕で防ぐものの、その防御もむなしく、試合場の中央まで吹っ飛んでいった。

「くそっ、どこにこんなクソ力残してやがった！」
「お生憎様だが、こりゃ貰いモンだ。やっぱり応援って嬉しいもんだ
よなあ、うん」

セルグがチラとこっちに視線を向けた。

アルフォンスと目が合うと、セルグがニツと笑う。つられてアル
フォンスも笑みを返した。

——すぐにセルグは相手に向き直ったのだが、アルフォンスは見
逃さなかった。セルグが一瞬だけ視線を自分の横の人物に移し、頬
を赤らめたことを。

（はは……。やっぱり後でこの状況を問われるのかな、僕……）

隣りにいるのは黒髪 of 女神。女神は沈黙を守り通し、全く表情の
変化を見せない。

まるで美術品のような横顔に、アルフォンスは戸惑うばかりだ。
何せこんな人物と今まで触れ合う機会が無く、どう対処していいの
か分からない。

（まあ、女性一般の扱いすら分からないけどね）

確かにリネアは美しい。セルグはよくリネアの愛を得ようと思っ
たものだ。麗しき女神の寵愛など、高嶺の花もいい所ではないか。
やはりあの青年は偉大だ。——色んな意味で。

「どうした、アル」

ぼへえっ、とリネアの横顔を見つめていたアルフォンスは、リネ
ア本人の問いで我に返った。

（げっ、やつちゃった！）

「な、何でもないよ！ その、あの、え〜と……。いや、何でもなく無いか……。うん、とにかくごめん」

「？ ……まあいい。しっかり見ている」

「そろそろ決まる？」

「そうだ。じきに終わる……」

女神の視線の先には二人の戦士。告げられた宣告は、どちらの勝利を示すのだろう。

「リネア、セルグが勝つよね？」

「無論。ここで負けるようならば、これから先、足手纏いにしかならない」

とても、キツイ言い方。

だがようやく分かった。リネアはただキツイのではなく、信じているから何でも言うのだ。

だってリネアは今、間違いなく微笑んだから。

「あちゃー、そんなこと言われたらなあ。僕は本戦、勝てそうも無いのに」

ほんの少しだが、この数日でリネアのことを理解できたと思う。セルグのような恋愛感情はないが、仲間としてはきっと上手くやっていける。それにこの女神サマは、意外と面白いかもしれない。

「その時はその時だ。今は経験を積むことだけを考えればいい。余計なことは考えるな」

「うん、遠慮なくそうする」

アルフォンスは試合場に目を戻した。試合上の二人は牽制し合っているが、優勢劣勢が逆転している。勢いに乗ったセルグの攻撃を、相手は防ぎきれていない。

「ちくしょうっ、何だってんだ一体……！」

「答えは簡単、ど根性だ！　いくぜっ……！」

セルグは相手の懷に飛び込むと、あご目掛けて拳を放つ。

相手はあまりの速さに動揺したのか、咄嗟に上半身を反らして避けるだけで精一杯だった。

「な……？！」

「——はっ……！」

セルグは勢いをそのままに、全身を捻って回し蹴りをぶち込む。

これは体勢を立て直し切れていなかった相手の頭に直撃し、ぐらりと相手の体が大きく揺れる。だが、セルグは決して攻撃の手は休めない。

——昨夜、自分自身で言ったことがセルグの頭をよぎる。相手は自分より数段上の猛者。そう、油断は絶対にしてはならない。

とどめとばかりにもう一発、セルグは相手の頭を目掛けて蹴りを放った。

しかしそれは虚しく空を切る。相手が正確に蹴りを見切ったのだ。

「うわっ、マジかよ」

「そう簡単に格下に負けられるか！」

「……！」

咄嗟にセルグは後ろに跳ぶ。紙一重で避けた相手の拳は、セルグ

が立っていた場所を粉々に打ち砕いた。もし直撃していれば、きちんと鍛えているとはいえ、確実に骨の一本や二本は折れていたはずだ。

傍から見れば再びの形勢逆転だが、アルフォンスはさして不安を感じない。リネアの言葉もあるし、何よりセルグが笑っていたからだ。

（今度こそ決まる！）

「でやあっ！」

相手の拳がセルグの顔面を目掛け、再び放たれる。だが次の瞬間、その拳は目標を失っていた。

「……うわ。あんなのやるか？ 普通……」

セルグが仕掛けた最後の攻撃に、アルフォンスは啞然とした。なんとセルグは拳を避けると宙に飛び上がり、相手の両肩を支えに逆立ちになったのだ。そこでピン、と体を真っ直ぐに張る。

相手がそれに気づいた時にはすでに遅く、セルグの一撃に成す術無く崩れ落ちていった。

「が、は……っ」

セルグはあの体勢から足を振り子のように勢いよく振り下ろし、相手の顔面にぶち込んだのだ。

さすがの猛者とは言え、これを喰らった青年が立つことは出来なかった。

「勝者！ セルグ・レナード……！」

大会の一日目は、こうして終了したのだった。

全てが終了した後、宿屋に戻ってきたセルグとリネアの手には、しっかりと賞金が握られている。大会で優勝したセルグは、いまだ興奮冷めやらぬ、といった感じた。アルフォンスもしっかり観戦していたため、こちらも高揚した気分を味わっていた。

「本当にすごかったよ、あの決勝戦。だけどさ、さすがにヒヤヒヤしたよ」

「ああ、あれは俺もやばいと思った。昨日二人と稽古して、気持ちを入れ替えてたから勝てたんだ。リネアはどうだ？　少しは手応えのある奴いたか？」

「……特にいない」

しかし、というべきか、やはり、というべきか。リネアは早々に優勝を決めておきながら、感情の起伏は一切見せない。むしろ観戦中のほうが反応が豊かだった気がするくらいだ。

「リネアは明日も試合あるんだよね。頑張って」

「……ああ」

「アル、お前もだろ。勝てそうか？」

「はは、まっさかあ。一回戦勝てればいいなってとこだよ」

そうは自分で言ったものの、優勝した二人を前に、アルフォンスは何だか急に情けなくなってきたしまった。だが、自分はリネアにも言われた通り、経験不足なのだ。高望みをしてはいけない。

（とにかく頑張ろ！）

この大会で、少しでも強くなりたい。そのための何かを掴みたい。

まずは実戦あるのみ、だ。

アルフォンスは剣の柄を握りしめ、明日の試合へ想いを馳せた。

武闘大会へ参

翌日。

アルフォンスは努力空しく、見事に一回戦で敗退してしまった。

「せっかく応援に来てくれたのに、ごめんね」

「気にすんなよ。お前、剣を握ってから一月なんだろう？ あれだけできりや上等じゃねえか」

「そーかなあ。なんせ二人が凄いから、どうしても気になるんだよね」

「他人は他人だろ。それに俺らは何年も修行を積んでるんだぜ？ その差をすぐに埋めてもらっちゃ困る。さ、リネアの様子見に行こうぜ」

「うん！」

二人は今いる会場の裏手に位置する、女性の試合が開催されている会場へ向かった。

掲示された表を見る限り、試合数は男性と同数、十六人で開催している。だが、どうも様子がおかしい。

「僕は一回戦の終わりのほうだったけど、いくらなんでも進みすぎじゃない？」

「確かに。男のほうが始まりは早かったのに、何でもう準決勝やってるんだ？」

順当に進んでいれば、女性の試合は一回戦の終わりが、二回戦が開始した頃だろう。そして準決勝、決勝となる。

「誰かに聞いてみようか」

「さて、リネアの試合だ」

準決勝の二試合目、リネアとその相手が会場に姿を見せた。相手は女性に対して失礼かもしれないが、見るからに戦士と言った感じの人だ。つまり、かなり立派な体格。比べるとリネアはまるで人形のようなようだ。

（今更だけど、よく勝ち残れてるよな……）

リネアの実力は分かっているつもりだ。四位の武闘家にすら優る強者。けれど、あの青年が思ったことは、誰でも思う事だろう。そこに試合開始の合図がかかった。身構える間もなく、相手の大斧がいきなりリネア目掛けて振り下ろされる。

「……！！」

そうして開始直後、いきなり勝敗が決したのだった。

「しょ、勝者、リネア・ル・ノース！」

審判も目の前の出来事が信じられないのか、判定を告げる声が裏返っていた。

試合の開始直後、相手の大斧がリネア目掛けて振り下ろされた。あわや惨劇か、とも思われたが、そんなことは起こらなかった。リネアはほんの少しだけ上半身をそらすと、大斧の間を縫うように杖を繰り出し、相手の首筋にピタリと刃を張り付けたのだ。

所要時間は十秒も無い。力の差をまざまざと見せつけられた相手は戦意を失い、ヘナヘナと崩れ落ちていった。

まさに電光石火の早業だ。リネアは開始場所から一步も動いてい

ないというのに！

「成る程、だから準決勝までいつてるのか」

「え？」

「リネアが強過ぎるんだよ。試合はすぐに終わるし、あんだけ綺麗に決まれば棄権するヤツも沢山いるだろ」

「そっか……、そうだよな」

「これじゃ決勝もさして意味ねえな。この大会には中級までしかいねえみたいだし。どいつでも十秒、耐えられねえだろ」

セルグの言ったとおり、決勝戦も十秒からずに速攻で終わってしまった。

今度はリネアも動いたが、それは相手が武器を投げてきたためだ。半歩だけずれて武器をよけると、突進してきた相手を杖で抑え込んだのである。関節が極まったらしく、相手はすぐに降参したのであった。

アルフォンスたちは会場を出ると、リネアが出てくるのを待つことにした。大会は無事に終わったが、未だ興奮は冷めやらない。宿までの道すがら、いろいろと話したいことがある。

「凄い、リネアって凄過ぎるよね！」

「だよなあ。魔法も高位の上、武術も出来るなんてな。賢者の弟子とは言え、どんだけキツイ修行してきたんだろうな。いくら才能があっても、アレは努力なしには無理だろ」

「当然でしょ、片方だけならともかくさ。それより、リネアって頭もいいじゃん？ 僕、少しでいいから知能を分けて欲しい……っ！」

「それができれば苦労しねえって」

二人は笑い合っていて、この会話をリネアが影で聞いていたことには気づかなかった。そして、リネアが泣きそうな表情をしていた

ことも。

「……アル、セルグ。待たせたな」

「あ、お疲れさま！ 試合、凄かったね！」

「お前なんか一回戦負けだもんな」

「う……。確かにそうだけどさ、その言い方はちょっとひどくない？」

「ま、気にすんなよ。なあ、まだ明るいし金もあるんだ。今の内に買い出し行こうぜ」

セルグは王都の商店街を指差し、昨日の賞金を荷物から取り出した。

「そうだな。——アル、これを」

リネアから小袋を手渡される。思わず受け取るが、これは先ほどの試合の賞金だ。

「え、これリネアでしょ？」「一つで足りる。アルが持つ」

「……お言葉に甘えるね、ありがとう。実はお金無くて困ってたんだよね」

「ふ、管理に気をつけることだな。では、日没には宿に戻る」

そう言い残してリネアはこれまたさっさと行ってしまったが、アルとセルグは硬直していた。

何故なら、リネアが普通に微笑んだのだ。

（わ、笑った……！ って、待て待て。一々驚く必要もないだろ、仲間なんだし）

アルフォンスは三度目ということもあって軽い驚きで済んだが、セルグはやはり無理だった。

予想通り、見事に惚けて明後日を見つめている。

（ここまでくると素直も単純も何もかも通り越して、ただのバカだと思う……）

けれど、それがセルグの美点の一つなのだ。

……と、褒めてばかりもいられない。ここは町の大通りに面している。通りは夕食時を控えたこともあり、人々が絶え間なく通り過ぎていく。

このままでは確実に不審人物だ。悪いとは思ったが、アルフォンスはまた脛に一発入れてやった。

「うつ！ てめ、また……」

「あ、気がついた？ 見惚れるのは別にいいんだけど、時と場所を考えて欲しいなあ」

セルグは蹴られたことに反論しようとしたが、アルフォンスにそう言われて小さくなった。

そんなセルグを見て、アルフォンスも少し可哀相になる。

「ね、リネアを追いかけなくていいの？ せっかく一緒に買い物できる機会なのに」

「ああっ、そうだった！ じゃ、またな！」

言い終わるか否かで、セルグは全速力で走り去っていった。もうリネアの姿は見えなくないが、多分セルグなら見つけられるだろう。こういう時は運が味方してくれるものだ。

「さて、と」

アルフォンスは改めて辺りを見回した。自分も買い物を楽しもう。王都で買い物だなんて夢じゃないかと思いつつ、一軒一軒、店を覗き込んでいく。

（あ、そう言えば食料とかの買い出しはどうするんだろ。リネアたちが買ってきてくれるのかな）

よくよく考えれば、買い物の分担を決めていなかった。だが旅慣れた二人のことだ、旅の必需品は全て揃えてくれるに違いない。

そう考えたアルフォンスは、露店に売られていた香ばしい匂いのするパンを買うと、思い切りかぶりついた。もし二人が買ってこなかったら、それはその時。また明日買いに行けばいい。

しばらく大通りの店を見物しながらぶらついていると、一本の脇道に目が止まった。その脇道には占いなど、少し怪しげな店が軒を連ねている。どうしても好奇心に勝てず、アルフォンスはその脇道に入ってしまった。

（せっかくだし……。入ってみようかな）

アルフォンスは占いの店を適当に選ぶと、仕切りである布をめくって中へ入った。

「いらっしやいませ。どのようなご用件でしょうか？」

店内には甘い香が焚き染められていたが、強すぎず、とてもいい香りだ。

占い師は顔に薄布をつけており、こぼれ出る柔らかい銀色の髪以外、様子を伺い知ることとはできない。だが声や体格からして、若い

女性だろう。

「そうだなあ……。これからの人生と言うか、運命ってヤツを見て貰うことはできますか？」

「請け賜りました。この水晶が導き出してくれますわ」

占い師が水晶球に両手をかざすと、だんだんと球が光り出す。

（これも特殊力の一つなんだろうな。一体どの力を使ってるんだろう）

「見えます。あなたはこのアスケイルを離れ、遠い地へと向かうでしょう。傍には数名のお仲間、人族以外の方もいらっします」

占い師はさらに何か言おうとしたが、そこで急に水晶球の光が弱まり、消えてしまった。

「……あら？ おかしいわ、ここで見えなくなるなんて。——お客様、これは占いの結果ではありませんが、一つだけ言えることがあります」

一呼吸おいて、占い師はアルフォンスに定めを告げた。

「あなたは途轍もない運命を持つ方なのですわ。そう、この世を変えるほどの。私ごときの力とはいえ、一切見えないのはそのせいですわ」

「え……？」

「あなたの判断で千の命が消えることもあれば、救われることもあるでしょう。どうか何が在ろうとも、ご自分とお仲間を信じて下さいませ」

「……」

「——力が及ばず申し訳ありません。お代は結構ですわ。……ご武運をお祈りしております」

そう言った占い師の声は、偽りを微塵も感じさせなかった。

アルフォンスは結果を聞くや否や、飛び出すように店を出て、当てもなく大通りを彷徨う。

占い師の言葉が頭から離れない。占い師の言葉は所詮は占い、ただの夢物語、そう軽く流すこともできた。だがアルフォンスには、物凄い衝撃だった。

——だって、自分は世界を救えと言われたのだから。

（僕の判断一つで千の命が左右される？　僕が人の命を左右する？　！　怖い、嫌だ。何で、何で僕がそんな運命を背負わなくちゃいけないんだ！）

世界を救えと言われても、漠然とした感覚しかなかった。とにかく御伽噺のように諸悪の根源があつて、それを退治すれば世界は平和になつて。頭の片隅に、そんな思いが確かにあつた。

だけど分かっている。世界はそんな単純じゃない。人は、そんな単純じゃない。思いが複雑に絡み合い、いつしかそれが鎖となつて、動きがとれずに滅びを迎える。その鎖を壊すところこそが——。

（僕の……いや、剣の、役目……）

旅立てたのは、今となつては嬉しい。二人の素敵な仲間に出逢えた。だけど、剣が与えた旅立ちは強制的で、突然で、理不尽で。

占い師が告げた運命も同じ。拒むことは許されない。

（——けど、抗え、ないんだろ？……）

冷めた目で、今を見ているもう一人の自分がいる。お前は自分で選んだのだろう、と問いかけてくる。

そうだ。僕は自分で選んだ。どんなに怖くても、嫌でも、背負わなくちゃいけない。

剣を握ったあの瞬間から、この世の運命を託された。自分が握ると決まったのだ。だから、進まなくてはいけない。

千の命が自分の判断に左右されるのなら、その命を救えばいい。仲間を集めて、世界を渡って。

武闘大会へ肆

心を決め直したところで顔を上げると、少し離れたところにセルグとリネアがいた。どうやら宝飾品を取り扱っている店を見ているようだ。熱心に品物を見ている二人は、こちらに気づいていない。

アルフォンスは好奇心にかられ、二人に気づかれないよう会話を盗み聞きし始めた。

「なあなあ、これなんかどうよ？」

「……そうだな。それならあまり目立たないしな。店主、この黄色の守り石を頂けるか」

（へえ、リネアが装飾品の御守りを買うなんて。意外だなあ）

「へい、毎度あり！ だけどお兄さん、こういう時は自分の懐を痛めなきゃ駄目でしょお。こんな美人な彼女、そうそう見つけれませんよ」

「あー、痛いところくなあ……。残念だけど彼女じゃねえんだよ、まだ。それにこれは、こいつの知り合いへの贈り物！ 俺が金出すワケにやいかねえの」

（……いや、マジで答えるなよ……）

思わず手が突っ込みに動く。リネアが品物を贈る相手も気になるが、ここを突っ込まずにはいられない。

「そりゃ失礼！ お詫びに安くしときますよ」

「お、あんがとな。そうだ、この指輪くれよ、青いやツ。——よつし。リネア、次行こうぜ。食料とかの必需品。どうせアルは買って

ねえだろうし」

（あつたりー。……けど、ちょっと傷ついたかも）

「ああ。店主、この辺りでいい店を知っているか？」

「旅用の食料なら、ここをまっすぐ行つたとこの店が評判いいですよ。噴水の前ですから、すぐにわかると思います」

「そうか、すまない」

「色々どうもな！」

そうして二人は店主に言われたとおり、食料品を買うため、次の店を探しにその場を離れて行つた。二人を見送つたアルフォンスは小さくため息をつく。

（まったく、セルグも社交辞令にマジで答え……ん？ ちょっと待てよ？ 恋人同士に間違われた時、何気にセルグは『まだ』って言ったよな！？）

さつきは気がつかなかったが、以外とやるじゃないか。

セルグがさり気なく買った指輪の行方は言わずもがな、だ。後々リネアにあげるに決まっている。

これ以上の追跡はお邪魔虫だろうと思い、流石に控えることにした。

（リネアはアレを流したのか気づかなかったのかは不明だけど……。ま、僕は二人の帰りを待つとしますか！）

ものすごい楽しみだ。ニヤニヤとした笑みが止まらない。アルフォンスは最高の気分で一足先に宿へ戻っていった。

やがて日が沈みかけた頃、二人が宿に戻ってきた。

「もう戻っていたのか。食料などは一通り揃えてきた。……待たせて悪かった」

おや、とアルフォンスは内心思ったが、そんな素振りも出さない。リネアがこんな風に分かりやすい形で相手を気遣うなど、かなりの変化だ。買い物中に、なにか心境の変化を起こさせることでもあったのだろうか。

「ううん、全然待ってないよ。買い出しありがとうね。買わなくちゃとは思っただけけど、何が必要かわかんなくて」

「だろうと思っただけ。アルは何も買わなかったのか？」

「うん。けど聞いてよ！ 僕、占いをやっただ」

「占い？ んなモンやったのか」

「ただの暇つぶしのつもりだったんだ。けど、とっても気になることと言われちゃって……」

アルフォンスは昼間の占いで言われたことと、同時に頭をよぎった恐怖を、全て二人に話した。

「ってワケ。……だから僕は、いい方向に思うことにした。二人はどう思う？」

「お前の占いなんだし、お前の思う通りの解釈でいいんじゃない？」

「私もそう思う。そもそも占いに絶対は無い。信じるかはお前次第だ」

「だよーね！」

二人の言葉はアルフォンスが信じていた通りだ。不安を増すようなことは言わない。けれど、頭ごなしに占いの結果を否定もしない。そして、それが本心。

その後夕食を済ませ、三人は寝室へ向かった。下弦の月がちょうど窓から顔を覗かせている。雲一つ無い綺麗な月夜だ。

「さうと。さあセルグ！ 全部吐いて貰いましょうか！」

「な、何をだよ？ 別に何も無いじゃねえか」

「あるって。さっきの買い物だよ。お膳立てしてあげたでしょ。リネアと何を話したの？ いい雰囲気になった？」

「え、いや、それは、その……。特に変わったことは……」

セルグはそれまでベッドの上に寝転がっていたのだが、急に歯切れが悪くなったかと思うと布団の中に潜り込んでしまった。

このまま寝入ってしまうようではつまらない。早速アルフォンスは、セルグに誘導尋問を仕掛けることにした。伊達に大家族の長男役を務めていたわけではない。こうした場面は何度も遭遇している。

「……。へえ、リネアは嬉しそうだったのになあ。帰ってきた時、そう思っただけだ」

「え？！ それマジかよ！」

セルグは上半身を勢いよく起こし、アルフォンスの襟首につかみかかってきた。

「……見事に期待（と言うか予想）通りの反応だ。ありがとうセルグ。」

（だけど苦しい、本気で首締まってるって！）

「ほ、本当だよ。けど何となくだからね？ 保障はナシ。……で、手え離して」

「あ、わりっ。でも……。やべえ、嬉しい……」

セルグは手で顔を覆ったものの、耳まで真っ赤になってしまっている。

こんなセルグを見ると、何だか微笑ましい気持ちになってくる。……自分のほうが年下なのだが。

「じゃあこれからもつと頑張らないとね。あれだけ美人なんだから、早くしないと誰かに取られちゃうよ?」

「もちろ……、ってちよつと待て。その、頑張るって、別に俺は……」

「今更何言ってるのさ。好きだってことはもう知ってるよ? 隠す必要なんて無いじゃん。僕は喋ったりしないし」

「あ……。うん、じゃあ、よろしく……」

セルグは更に顔を真っ赤に染めて、まるでトマトみたいになった。今わかったことだが、人をからかうのは意外と楽しい。傷つけない程度なら、たまにはいいだろう。アルフォンスは胸の内で、にんまりとほくそ笑んだ。

「うん。けど、セルグが羨ましいよ。そこまで好きになれる人がいて」

「お前にもすぐにできるさ。つか俺、リネアにマジで惚れちゃった。

『命を賭けて』とか、リネアになら素面でも言えるわ」

「命を賭けて?」

今の今までアルフォンスにからかわれていたセルグだが、ここに来て急に真剣な顔つきになった。

「自分の全てを、とも言えるな。ちよつとクサくなるけど……。俺はあいつに惚れたから、あいつだけが欲しい。それが俺の恋だ。例え誰かのものになっても……ってこと。ま、そう簡単に渡すつもり

はねえけど」

ニコリと笑ったはずなのに、その口元は大会中に見せたものと同じだった。

獣のような、どこか狂気すら感じさせる笑み。

「ま、大変だったのは自分でもわかってるぜ。何かあったら協力してくれよ?」

しかし、すぐにいつも通りの明るい笑みに戻る。そのわずかだが絶対の差に、一度目なら目の錯覚かと思ってしまうただろう。ただ、違う。

(——ああ、そうか)

アルフォンスは理解した。

この青年は他の人より純粋で素直で単純だから。その分、狂気を秘めているのだ。

時に純粋さは狂気になってしまいうように、彼もまた。——ただ、それが良いのか悪いのかは、自分にはわからない。

「うん、もちろんだよ。いつでも協力する。それとさ、これから先は長いんだろうし、僕にもいい出会いがあるよね、きつと」

きつと、と言うところがセルグと違い、温和でのんびりなアルフォンスの性格を物語る。セルグはその言葉に思わず失笑してしまった。

「ははっ、でも何か出会いに気づかないで逃しそつだよな、お前」

だが柳のような、決して折れない芯の強さもアルフォンスにはあり、それをセルグはよく理解していた。

アルフォンスは良い意味で諦めがいい。自分の弱さをすぐに認め、教えを乞う。

だが、大事なものは決して諦めない。——この世を救え、なんて突然言われて戸惑ったくせに。きちんと、前を見続けている。

「それだけはセルグに言われたくないっ！」

「んだと？ ……まあ、なんとなくだけど、お前が好きになるヤツは絶対にいいヤツだろうなあ」

「そうかな。ま、これから先のお楽しみってヤツだね！」

「だな」

暫くの間、二人の部屋からは笑い声が絶えることはなかった。

この武闘大会で得た経験はアルフォンスにとって、生涯の宝となった。からかい合うことが楽しい、なんて思えるようになったのだから。人を理解し、自分を理解して貰うことができたのだから。

海を越えてへき

武闘大会から数日後、アルフォンスたちは船に揺られていた。アスケイル大陸の南に位置する、シェーマス大陸に渡るためだ。

シェーマス大陸にはアスケイル王国とともに、四大国と並び称されるシエルマス共和国がある。

船の目的地はそのシエルマスの玄関口となる港、ルツだ。

山育ちで船はもちろん海も初めてのアルフォンスは、航海が楽しくて仕方が無い。ここぞとばかり、元気にはしゃぎ回っていた。リネアも海が好きらしく、かなりの時間、海を一望できる甲板で過ごしている。

「船って思ったより揺れないんだ。それに海って広くて青くて綺麗だね〜！」

そんな元気いっぱいなアルフォンスとは対照的に、部屋の奥で寝込んでいる人物が一人。

「頼む、静かにしてくれ。マジでやばい。ううっ……」

「あ、ごめん。大丈夫？」

セルグだ。乗船してから四日、セルグはひどい船酔いに苛まれていた。リネアの処方した酔い止めが効いたのか、これまた愛の力か、初日から比べると少しマシになった気もするが、やはり顔は真っ青で生気が無い。

心配そうに顔を覗き込むアルフォンスに、セルグは力ない笑みを返した。

「ははっ、悪いな。昔っからこうだよ……。どうしても治らないん

だ、コレだけは」

「大変だね。……けどこの船ってさ、後三日は海の上だよ？」

「っだーあ！　んなコト言うなああっ！！」

武闘大会の覇者とは言え、自然の力と体質には抗えない。それから三日間、セルグは生死の境を彷徨い続けた。

「おういつ、着いたよ！　セルグ、さあ起きた起きた！」

出航から計七日、三人はついにシェーマスの地を踏んだ。
シェーマス大陸には広大な砂漠や草原が広がり、風習は民族独自
のものが根強く残っている。また黄色の肌の民が多いアスケイルと
異なり、褐色や黒い肌の民が多く暮らす土地だ。

「やあつと地面だよ……。まだ少し揺れてる気がする」

「……旅に船は付き物だ。この先も乗ることは多々あるぞ」

「……。頑張る……」

——セルグの声が少し涙声だったのは、あえて無視した。

その後三人は話し合いの結果、『仲間集めをするのだから人の多い町を廻ろう』と決めた。そのためシェルマスの主だった町巡りへ出発するも、収穫はないまま、ベガザの町へ到着した。

ベガザに入るとまず目をひくのは、逗留中の、何とも煌びやかで艶やかなルマの一族だった。

彼らは旅の先々で踊りや歌、占いなどの芸を披露しながら旅をする民だ。特にその踊りは、天下一品と称される。どうやら運良くその踊りを拝めそうだ。

「へえ、ルマかあ。確か占いとか踊りが得意なんだよね」

「ああ。この大陸に古来より住まう者たちは、総じて霊力が高い。

占いも霊力あつてのものだ」

「そうなんだ。けど、何でシェーマスに住んでる人って霊力が高いの？」

返ってくるとは思わなかった方向からの答えに驚きつつ、アルフオンスはさらに質問を重ねる。

「『クルツアータ』の名を知っているか？」

「聞いたことあるぜ。確か人間界で唯一、精霊王の加護を受けた町だろ？」

アルフオンスが口を開こうとしたところで、セルグが先んじてリネアに答えた。少し急な感じも否めないが、少しでもリネアと会話をしたい一心なのだろう。

「そうだ。理由はわからないが、その町は人間界であって人間界に非ず。人族の理が通じぬ場所なのだ」

「理由は不明？ 精霊王様の血族が住んだ場所だからって聞いているぜ。違うのか？」

「恐らく。それならクルツアータのような町がもつとあってもいいからな」

「なるほど。……で、霊力が高いワケは？」

「いいか、霊力を最も強く持つ精霊王の加護を受けた町で、命が育まれる。やがてこれらは他の場所で、様々な方法で新たな命の源になる。この意味がわかるか？」

「うん。遺伝とか食物連鎖みたいな感じ……だよな？」

「ああ、そうだ」

「そっか、霊力が高いのはだからなんだ。いいなあ、生まれつき才能あるって……」

と、リネアの話に感心しきっていたアルフォンスだが、ここで自分を恨めしそうに見つめる視線に気づいた。

セルグだ。

思い返せば、セルグはリネアと会話をここ数日、ほとんどしていない。船上では船酔いで、喋るどころではなかった。

（や、やばいかも……）

「それとあくまでもクルツァータが中心だ。この町から離れては、育む力が弱まってしまふ。だからこの大陸だけ靈力が高まる素養を保てるのだ」

「そ、そうなんだっ。さ、ルマの人の出し物が始まるみたいだよ、見に行こう！」

とにかく状況を打破しなければ。このままではやばい。てかメン
ドイ。

（こんな簡単に嫉妬するなよ頼むからああ！）

心の中で滂沱しつつ、アルフォンスは宴が開かれる広場を指差した。

「私は行かない」

「え、それは困るって！」

「困る？ 何故だ？」

「え、あ、いや、三人で行こうよ、そっちのが絶対に楽しいからさ！
ね？」

「アルの言う通りだぜ？ もし退屈だったら途中で帰りゃいいんだし。
な？」

（そうだセルグ！ 行け、押せ！）

このまま気まずい雰囲気になったら耐えられない。そんな必死の願いが――いや、強力な念が届いたのか、リネアが渋々といった感じで頷いた。

「……わかった、私も行く」
「そうこなくっちゃ！」

やがて日もすっかり暮れ、辺りは闇に包まれた。
しかし町はずれの一角、そこだけは昼さながらに明るい。ルマたちがいる場所だ。篝火が無数に焚かれ、美しい女性達がお客を集めようと呼び込みをしている。

「さあさあ、見逃したら後悔するよ！ 一夜限りの夢、魅惑の歌と踊りの始まりだ！」

その言葉は真実だった。華やかで美しい、魅惑の宴。
見物するために人々は幾重にも周りを取り囲む。三人は早めに来ていたので、何とか一番前で観覧できた。

「やっぱり来てよかったね。滅多に見れるものじゃないしさ」
「だな。リネアもそう思うだろう？」
「……ああ。こういう洗練されたものは好きだ。極限まで磨かれたものは美しいな」

リネアは微笑みこそしないが、声色がいつもより優しい気がする。
（お。もしかしてここで僕が消えれば、二人はいい雰囲気になれたりして）

などと考え、アルフォンスは機会を逃さないよう、周囲を見回した。

ふと誘われるように夜空を見上げると、月を何かの影が横切る。

「あれっ？」

思わず、アルフォンスは声を上げてしまった。

「ん？ アル、どうした？」
「あ」

（やべ、ばれちゃった。これじゃ消えらんないな。仕方ない、開き直る）

「いや、月を何かが横切った気がして。雲じゃなかったと思うんだけど……」

「月？ 何も無いぜ」

三人で月を見つめる。確かに何の影もない。見事な星月夜だ。

「おつかしーな。見間違いかなあ」

アルフォンスとセルグはそこで視線を宴へ戻したが、リネアだけは月に目を凝らし続けている。

「リネア、きつと僕の見間違いだよ。宴を楽しもうよ」
「……くそっ！」

リネアが呻いた。

「どうした？」

「ここからすぐに離れる！ 来るぞ！！」

リネアが叫んだ途端、そう遠くない場所で悲鳴が上がった。

「な、何！？」

「く……っ！ 仕方ない、二人とも来い！ 魔物だ！」

悲鳴が上がった場所を目掛け、三人は走り出した。

混乱状態に陥り、阿鼻叫喚のまま逃げ惑う人々をかき分けて進むと、そこにはとてつもなく巨大な、漆黒の魔物が舞い降りていた。

成人男性の十倍はある、巨大な漆黒の体躯。鋭く光り、血が染み込んだ牙。興奮しきって血走る、八つの不気味な月色の目。

この地域に住まう最大最強の生物、魔竜のカリオンだ。

「いやああああーっ！！」

「どけ、どけろーっ！！」

あちこちで悲鳴や怒声が飛び交う。ざっと見渡したところ、ひどい混乱に見まわられてはいるが、被害はまだ出ていないようだ。

だが、いっとうなるかわからない。カリオンは人肉を好んで喰らい、その量も半端ではないのだ。

「他に戦えそうな人はいないし、僕たちがやらなきゃ！」

「おう！ けど俺とお前は誘導係だ。あいつはリネアに任せるぞ。竜は特殊力じゃねえと、ほとんど効かねえんだ。頼むぜ、リネア！」

「ああ、引き受けた！ 早く人を逃がせ、もうあいつの我慢が持たない！」

——ふと、感じた違和感。

まるで魔物の気持ちをはかっているような、その口振り。

しかしそんなアルフォンスの違和感は、周囲を飛び交う悲鳴に吹っ飛ばされる。アルフォンスとセルグは人々を逃がすため、急いでその場を離れていった。

「お母さん、お母さあああんっ！ どこおーっ！！」

その時、カリオンは杖を向けようとしたリネアの耳に、子供の泣き声が届いた。見れば人影が無くなった場所にたった一人、ルマの子が取り残されて泣き叫んでいる。

カリオンは泣き叫ぶ幼子に狙いをつけると、容赦なく牙を剥いた。

「だから人の集まる場は嫌なんだ……っ」

リネアは悲痛な面持ちで、杖に力を集める。瞬時に巨大な氷塊をいくつも宙に生み出すと、子供に害をなさんとする直前、カリオンへ放った。

鋭い氷塊に四方八方から体を貫かれたカリオンは、ズズーン、と大きな音を立てて崩れ落ちる。

その巨体を見つめながら、リネアは呟いた。

——すまない、と。

「……もう大丈夫だ。母親とはぐれたんだな？」

「うん。お母さん、お母さん……！」

「今探してやる。少し待て」

「ありが……お姉ちゃん、後ろっ！」

子供が金切り声で叫ぶ。その表情は安心した笑みから、恐怖にひきつった表情へと一瞬で変化した。

振り向いたリネアの視界いっぱいには、カリオンの紅い口内が広が

る。絶命しておらず、いつの間にかすぐ後ろに迫っていたのだ。

「なにっ……!？」

杖を向けようとした瞬間、激しい風と共にリネアの視界から紅が消えた。ズズーン、という大きな音が再び耳に響く。

カリオンは何者かの攻撃を受けて、今度こそ本当に絶命したのだ。

「お姉ちゃんっ!!」

助けた子供が後ろからリネアに抱きついた。つられて振り向くと、見知らぬ人物が後方にいた。

「大丈夫だった!？　ありがとう、一族の子供を助けてくれて」

声をかけてきた女性は褐色の肌。煌びやかな服を纏うこの人は、ルマの一族だ。

「……今のはあなたが？」

「ええ、そうよ。あなたが先に弱らせてくれたから、私の力でも効いたわ。……さ、ククル、こっちにいらっしやい。いつまでもくっついてたら迷惑でしょ」

女性はそう言うものの、まだ怯えているのか、子供はリネアにしがみついて離れようとしない。

「んもっ、この子ったら……。ごめんなさいね。あ、あたしはローザンって言うの。よろしくね。あなたは？」

「私はリネア・ル・ノース。魔法使いだ」

そこへ一段落したことが分かったのか、アルフォンス達が戻ってきた。

「リネア、ご苦勞様！　つと、お話中ごめんなさい」

「いいのよ、気にしないで。あなた方はリネアのお友達？」

「うん、一緒に旅してるんだ」

「旅、か。いいわね、楽しそう。ね、今日のお礼もしたいし、どうぞ寄って行って、話を聞かせて！」

大輪のバラ。

そんな形容が似合うローザンの笑顔に、断りを述べる者はいなかった。

海を越えて〈貳〉

「ホントは男子禁制なのよ、ココ。ま、ばれなきゃ大丈夫だけど。それに今回は特別だし、心配しないで！」

「い、いいの？」

「ええ。ここはあたしの部屋みたいなものだから、他の人の出入りはないし、バレやしないわ」

そうローザンに言われるがまま、三人は天幕へと入っていった。

狭いわけではないが、四人も入るとそんなに余裕は感じられない。『あたしの部屋』と称したのは事実のようだ。とても質素な造りで、物もほとんど置かれていない。豪華絢爛なさっきの宴とは大違いだ。そのことを尋ねてみると、宴は特別であり、普段は移動生活だから基本的に物は少ないほうがいい、とのことだった。

「へえ……。あ、そうだ！ まだ自己紹介してなかったよね。僕はアルフオンスって言うんだ。よろしくね」

「あたしはローザンよ。見ての通り、踊り子をやってるわ」

ローザンは今日の宴のために何とも華やかで魅惑的な服を纏い、その美しい肢体を露わにしている。悪く言えば下卑た感じがあってもいいものだが、そんなものは一切無く、むしろ洗練された気品を感じる。

「俺はセルグ、武闘家だ。まだ弟子だけだな」

「ええ、三人ともよろしくね。ねえねえ、リネアってかなり高位でしょ？ あんなに凄い魔法を使えるんだもの」

「準修士だ」

「やっぱり！ あの氷の術には驚いたわ。一瞬で岩よりも巨大な氷

が、いくつも空中に出たんですもの」

「氷？　今回は炎じゃなかったんだ」

「竜に対して炎は効果的ではないからな。……そうだ、先ほどは礼を言い損ねていた。あの時は助かった」

「あら、お礼なんていいのよ。うちの一族の子を助けてくれたんだもの」

「え、ちよつと待てよ。リネアに何かあつたのか？」

聞き捨てならない会話に、セルグが身を乗り出して問う。

「ああ、止めを刺し損ねてな。ローザンに助けてもらって事なきを得たが……。つい油断した」

リネアはさらりと言つてのけたが、それは命の危険があつた、ということだ。

あの場を任せたセルグとしては気が気ではないだろう。

「悪かつた、お前一人に任せちまつて。大丈夫だと思つて、つい……」

「大丈夫だ、次は無い」

心配されたことが嬉しいのか、リネアは一瞬だけ微笑んで、すぐにいつもの無表情に戻つた。

「ねえ、助けたってことはさ、ローザンは魔法か何か使えるの？」

「ええ、あたしは風使いでもあるの」

そう言つとローザンは人差し指を、空中に円を描くように動かした。すると向かいに置かれていた布が、室内だというのに風にはためく。ローザンが術で風を起こしたのだ。

「風使いか。確か霊力が基礎だよな。ルマって兼業するヤツが多いのか？」

「そうよ。有事のためにね。女は占い師とか、あたしと同じく踊り子を本職にするのがほとんどよ」

「へえ、占いかあ。ローザンはやらないの？」

「ん、あれって小難しいのよ。精神を集中して、相手の気の流れとかから未来を予測するの。どうも苦手なのよ、あたし。曲を読むのは得意なだけだね」

「曲を『読む』？ 理解するってこと？」

「簡単に言えばそうね。あたしたち踊り子は、曲を解釈して身につけることを『読む』って言うのよ。特殊力と似たような感じじゃないかしら」

「そうだな。高度な術は、呪文を詠唱するだけでは発動しない。構造を理解し、流れを知らなければいけない」

……わからん。

男二人が同時にそうした顔をしたため、リネアが簡単な解説をしてくれることになった。特殊力について知識のないアルフォンスには、目から鱗、といった話ばかりだ。

「えーと。構造を理解って言うけど、どんな感じなの？」

「私たち魔法使いは五行の下に術を使うが、使用するには最低限、術がどの属性かを理解する必要がある。これが構造で、初期の術は判断し易いが、複合すると難しくなる」

リネアはそう言うのと右手に術を発動させ、空中に手のひらほどの大きさの、水の球を生み出した。

「これは純粋な水属性の術だ。だがこの水で木属性である雷の術の

威力を高めると……」

左手にはバチバチと音を立て、雷が生じる。

これら両手の術を合わせた瞬間、雷の威力が一気に増した。思わず身を仰け反らせるが、瞬く間に雷は凝縮され、指先ほどの火花となる。しかし、そこに籠められた魔力はわずかも減少していない。

「このように精度はそのままに威力を弱め、微弱な力で細胞を刺激するのが魔力による回復術の基本だ。これはもとの雷が木属性なので、水属性よりの木属性の術。理解できたか？」

「……す、少しは……？」

理解出来たか、と問われても素直に頷けないが、かなり噛み砕いた教えなのはわかる。しかも実施つき。

特殊力を用いる職を修めにくい最大の理由は、こういった数多くの難解な定義にある。つまり、その難解さを苦にせず、魔法に無知なアルフォンスにも教えられるリネアは凄い。

（それだけわかれば十分かなあ）

何となくだが、特殊力の構造とやらも理解出来た気がするし。

「特殊力って、どうもややこしいよな。俺あさっぱりだぜ」

「そう？ 一番難しいのは、実は武闘家だつて言うじゃない」

「んー、それは簡単なものほど奥が深い、つつーことだろうけど……俺は直感でやってるだけだし、わかんねえな。考えるのは苦手だ」

「あ、やっぱり？」

（……はっ、しまった！）

関心をすっかりリネアに奪われていたため、思わず口について出てしまった。

「やっぱり、ってどう言うことだよ。おいアル」

「いや、その、今までの行動からして……。ね？」

アルフォンスはしどろもどろで弁解をする。

（それが悪いこととは思わないけど……。良いことでもないよな、やっぱ）

「あはははっ、言われて怒るってことは、本当だってことでしょ？ 怒れないじゃないの」

ローザンがお腹を抱えて爆笑しながら言ったことで、アルフォンスには助け舟となった。

思い切り笑われたことで、セルグもこれ以上アルフォンスを責められなくなつたのだ。

「ちっ。しょうがねえな」

「へへっ。ま、素直だ、ってことでいいじゃん！」

（素直と馬鹿正直は少し違うけどネー）

セルグはどちらかと言えば後者なので。おまけに単純。

まあ、いいヒトなのは間違いないのだが。

「それにしても……。本当に今日は助かったわ。この頃、魔物が増えすぎだと思わない？ 私が小さい頃は遭遇するほうが難しかった

のに。今はいつも気を張ってなきゃいけないもの」

「え？ そうなの？」

「ああ、そうだな。アスケイルでも報告事例が増えてる。しかも増えてんのは魔物だけじゃない。色んな意味でいいのも悪いのもだ」

「そういえば武闘大会でも人族以外の民が居たよね。僕は初めて見たけど……」

それに、そんなことを神官様も言っていたような。

「……安定を欠いているからだ。在るべきものが無く、在らざるものが在る。故に、中心に在るこの世界への波及が一番大きい」

唐突に、リネアが言った。

——賢者の弟子だから、なのだろうか。いつも迷わず答えを返すのは。例えそれが世界の謎であっても。

「——それは、何？ 在るべきものと在らざるものって」

どうしても聞かなければいけない気がした。剣を託された自分が、知らなければ、と。

「在るべきものは均衡だ。魔物は本来、ほとんどが魔界に住むものだ。だが近年、全世界で生態系を狂わせている」

リネアが軽く息を継いだ。

「己の世界に住む生命の力の、ちょうど半分を己の力として界王は持つ。魔物がこれだけ他世界に移れば、魔王の力は相当弱まっている」

先ほどのまでの明るい雰囲気天幕から消えた。

冗談でも推測でもない。真実だけをリネアは告げたから。

「何で、そんなことになってるんだろう？」

ここで答えを得ても、何も変わらない。聞いたアルフォンス自身、それは良くわかっていた。

けれど聞かなければ不安に押し潰されそうで、確実な答えが欲しかった。

「……それは私も知らない」

当然だ。リネアとて万能ではない。

「だよね。変なこと聞いて、ごめん」

これから先、そう遠くない未来で目指すべき道は何処なのだろうか？
ただ旅に出た自分。世界を救えなんて言われたのに、何をすればいいのか分からないなんて。

「……だが、魔界の均衡が崩れた理由は知っている」

しかし光は消えない。闇の中に一点、永遠の力。

海を越えてへ参

その言葉に、三人ともリネアに注目する。

続きを告げるため、リネアはゆつくりと口を開いた。

「あの大事変……。知っているな？ 『禁忌の子』を」

十数年前、一つの報せが全世界を激震させた。

界王の血族は他世界の血族と結ばれてはならない、という絶対の掟がある。しかし、その掟を破った者が現れた。それは何と、当代魔王であった。

魔王は天王の末娘と出逢って恋に落ち、逢瀬を重ねたと言う。やがて想いは積もり、ついに末娘は赤子を宿した。それが『禁忌の子』。

何故それだけで禁忌か。心ある者なら誰でも一度は思うだろう。しかし、それには理由がある。

界王の血族は、界王には劣るが、民とは比べ物にならない強力な特殊力を持つ。他にも、制御が困難な『界王力』という特別な力を宿している。

だからこそ掟が存在する。制御の難しい力が混ざり合わないために。

だが掟は破られた。

禁忌の子には二つの界王の血と力が受け継がれた。だが魔王と天王の力は、相反するもの。水と油のように、混ざり合うことはない。そのため禁忌の子は、いつその力が暴走して、世界を破壊するか分からない。

恐怖の存在、忌むべき者。これが禁忌の子に与えられた烙印。

「うん、それは聞いたことあるよ」

「人王様がその子供を預かった上に、人界に降ろしたらしいって凄い騒ぎだったよな。俺はまだ三才くらいだったけど、よく覚えてるぜ」

「その禁忌の子こそ、均衡を欠いた最大の原因だ。あまりにも強大な力は、移動することで魔王の力を大幅に削いだ。しかもその力の制御が出来ない。そこを狙われる」

「狙われる？ 何よそれ！ 誰に狙われるって言うの？」

「変革を望む者、他世界の民だ。魔物を解き放っているのもな」

「変革って、何をだよ。他世界に国は無いから、戦争とかないだろう？」

利権を求めて醜い争いを始め、国を作ったのは人族だけ。

だからセルグの言った通り、他世界では戦がない。

「——だが他世界は知っての通り、人界とは違って、もとより複数の民が暮らしている。しかしその存在は平等ではなく、蔑まれている民が一つずつあるのだ」

「えっ！？ そんなの初耳よ。どういうこと？」

「戦の代わり——。いや、説明は難しいな。ただ、その民たいが結託し、行動を起こし始めたのだ。狙いはただ一つ。……その罪を見逃し続ける、界王の消滅だ」

眩しいから太陽を壊そう、とでもいうような。

あまりにも突飛な話に、三人とも驚愕する以外、何もできなかった。

界王は絶対で、至上の存在。その消滅を願う者がいることすら、誰も考えつかない。いや、有ってはならない。

「特に天界の幻影族、こいつらの動きが著しい。反逆民の中心的存在でもある。幻影族は妖力で相手の心の闇に入って傷を広げ、最後には体に乗っ取り、操り人形にする能力をもつ」

わずかばかり、リネアの声に怒気が含まれたような気がした。

「だから狙われる。この世で唯一界王に歯向かえる力を持った、不安定の塊の存在が」

闇の中、朧気だけど道は浮かんできた。

「じゃあ、助けなきゃね」

アルフォンスとしては、特に考えた言葉ではなかった。

自分たちは絶対に禁忌の子に会わなければいけない。もし幻影族の手に落ちれば、界王の消滅という終焉を迎えてしまうだろう。

闇が、光を覆い尽してしまう。そう思った。だから、この言葉が光だなんて、思いもしなかった。

「……誰、を？」

リネアが驚いたのか、声を詰まらせて聞いてきた。アルフォンスの答えはよほど理解に困ったらしい。

「え？ 誰って、禁忌の子だよ。狙われてるんでしょ？」

「お前、凄いこと考えるな」

三人ともアルフォンスの言葉に驚いているようだが、当の本人は、その理由がわからない。

「え、何で？……あ、そつか。誰も居場所を知らないんだよね。そもそも会えないか」

「ソコじゃないわよ。天然なのね」

——まさか初対面の人に、こうまで言われるとは。自分は何か、余程のことを言っただけらしい。

「アル、お前は禁忌の子が恐ろしくないのか？」

「え？ うん。だって会ったこと無いし」

アルフォンスはまた何も考えずに言ったのだが、リネアはこの答えに瞠目した後で——笑った。

あのリネアが。

「ちょ、ちょっと待ってよ。僕、何か変なこと言った？」

「違う、アル。お前があまりにも穢れの無い思想の持ち主だったから……。だから、驚いた」

リネアが言い、他の二人も苦笑しつつ頷く。だがアルフォンスとしては青天の霹靂である。そんな大層なものではなくて、考えが無いだけじゃなかつたか。

それと自分は一応褒められたようだが、一体何をだろう。

「お前だけだろ。会ったことが無いから禁忌の子が怖くない、なんて言うのは」

「え、えーと？」

「つ・ま・り。優しいってことよ。無闇に人を怖がらないって最高じゃない！」

「ああ。だからお前なんだろうな、アル。剣を持つ者は。お前は人の話だけで決めつけない。世界を滅ぼす力を持った存在すら、拒ま

ない」

リネアの表情が何とも優しくなったことで、アルフォンスはやつと理解した。

全世界の人々は禁忌の子を、見たことも無いのに恐れている。そしてそれが普通。

だけど自分は違った。普通が必ずしも最良ではない、と言うことだろう。

「なあなあ、そういえば三人とも知ってるか？ この話で持ちきりになった後、一年位してこんな噂も流れたんだぜ」

セルグがふと思い出したらしく、急に話し始めた。

「え、どんな？」

「実は人王様にも子供がいて、その子供も人界に来た、ってな。すぐに消えたけど、こっちの噂のが重大じゃねえのかな」

「……」

リネアが微かな反応を見せた。

「リネア、何か知ってるの？」

「いや。禁忌の子より重大だ、と言ったことに驚いただけだ。セルグ、何故そう思う？」

「だってよお、噂通りなら何でこっそり来させるんだ？ 血族は成人するまで『界王の間』に居るモンなんだろ？ だから本当なら、人王様に何かあったとしか考えられねえじゃんか」

「そう、だよね……。本当だったら、物凄いコトだね」

「だろ？ まあ、すぐに消えたから真実味はねえけど……。でも噂が出たんだ、少なからず何かあったんじゃないか？ 火の無い所に

煙は立たず、だしよ」

セルグがこんなに不安がるのも仕方無いことだ。
実際のところ、自分は神官様に言われたのだから。『我らが人王様の御力が感じられない』と。

何かが確実に起きているのだ。もしや既に、界王まで幻影族の手は伸びているのでは？

いや、きっと伸びている。絡めとられていなくとも。

「リネアはそのことについて、何も知らない？」

ローザンが不安気な顔で問う。今日も不穏な事態が起きたばかりなのだ。心配でたまらないのだろう。

「……知らない」

「やっぱり駄目、か。——けど、あなたたちに逢えてよかったわ。大事なことを聞いたもの。あ、そう言えばあなたたち、三人だけでしょ？ 他に仲間を探す気は無い？」

「え？ そりゃ仲間は欲しいけど……」

「剣士に武闘家、魔法使い。悪くない組み合わせだけど、他の職種が居てもいいんじゃない？」

「ははあ。ローザン、お前が来たいってか？」

「正解！ こんな話を聞いた後よ、じつとなんかしてられないわ！
お願い、一緒に行かせて」

この申し出を断る理由、必要なって一つもない。
三人は目を合わせると、全員一致で頷いた。

「うん、ぜひ！」

「私も歓迎する」

「ここで怯えてても、何も変わらねえしな。お前の根性、大したもんだよ」

「やった！　じゃ、これからよろしくね！　お客様用の天幕を用意するから、今日はゆっくり休んでって。皆にもよく言っとくから遠慮しないでね」

再び咲いた大輪のバラに、全員の顔がほころんだ。

天幕を用意してもらっている間に判明したのだが、ローザンは族長の娘で、いずれその座を継ぐらしい。

（ああ、だからだったんだ……）

彼女から感じた気品の理由。

もとより、ルマは誇り高い一族だ。その上ローザンはその地位に伴い、生まれた時から気品が培われた。だからあの眩いほどの気高さがあるのだ。

「あ、そうそう。シエルマス最大の名所、クルツアータだけだね、行って損はないと思うわ。精霊使いが集う町だもの、仲間集めには適しているはずよ？」

「精霊使いかあ。確かに仲間になってくれたら楽だよな」

精霊使いは各地に特殊方陣を持ち、それを利用して強力な転移術を行える。

つまり船に乗らなくて済み、旅の行程を大幅に短縮できるのだ。

「いいじゃんか！　次はクルツアータ行こうぜ！」

船嫌いのセルグは目を輝かせているが、大切な事を忘れているようだ。

確かに船に乗る回数は格段に減るが、移動先の方陣の場所も限られている、ということ。

つまり場所によっては、やはり船に乗るわけで。

（けど面倒だから黙ってよーっと）

「リネアはどう思う？ 行っただ方がいいよね？」

「ああ、損は無い。他にも他職にはできない、特別な術を持っているからな」

「じゃあ、次はクルツアータに決まりね！」

翌日、三人はローザンとともにベガザの町を後にした。

アスケイルとはどこ違う青色の空の下、四人となった一行は向かう。精霊王の加護を受け、精霊使いが集まる町、クルツアータへと。

精霊の町へき

一行はシエルマスを南下し、大陸の最南端へとやってきた。海を臨むこの町は、常に気持ちのいい風が吹き抜ける。

「ここがクルツアータかあ！　綺麗な町だねえ」

町は乳白色の閑静な石造りの建物が並び、青い海や空といった、自然との調和が保たれている。

「ただの観光地としても有名なもの。今は少し季節が早いから、そこまで人はいないけどね。すぐに人で溢れかえるわ」

「……ローザン、組合の庁舎は何処か知っているか？」

「あら、もう本題？　着いたばかりだし、今日は休みにしない？」

「いや、しかし……」

リネアとローザンは馬が合ったらしく、この数日ですっかり意気投合した。

リネアもまだ口数は少ないが、よく会話に混ざるようになり、冗談まで言うようになったくらいだ。

だが女二人の討論が進む中、男二人は綺麗さっぱり蚊帳の外。何か怖くて口を挟めない。

「……セルグ、どうする？」

「どうもこうも……。アレが終わるのを待つしかねえだろ」

二人はこのまま庁舎に行って手続きを済ませるか、観光に繰り出すかを言い争っている。

精霊使いはその希少さから、特別な措置を講じている。本部があ

るクルツアータを離れる場合、他の職のように本人だけでは決められない。組合の許可が必要なのだ。

よって勧誘には多大な時間を浪費することが、容易に想像できる。

「僕は観光したいなあ。だってさ、せっかく来たのにつまんないじやん？」

「まあな。だけど……、うん、だよなあ」

「？」

セルグは何か思うところがあるらしく、一人で頷いている。

そして一しきり考えた後、まだ言い争っている二人に割って入った。

「あのお、俺あ思うんだけど……」

「「？」」

「先に宿を探さねえ？ 観光地だし、ヤバイだろ」

結果は、見事にセルグの言った通りだった。

観光地なので宿自体は沢山ある。が、お手頃な宿はどこも満杯。

「どうしよう、ここまで来て野宿？」

「俺あ構わねえけど……やっぱ二人は嫌だろ？」

「当たり前じゃない！ 何が悲しくて町を見ながら野宿しなきゃいけないのよ」

「この際、安宿でもいい。もう少し探すべきだろう。ここには長く腰を据えそうだからな」

「じゃあ、四人で手分けしてもう一回探そう！」

そして日も沈みかけた頃、ようやくセルグが宿を見つけてきた。せっかくの観光地なのに、と、ぼやきたくなるような所だったが。

「ま、背に腹は変えられないか。野宿に比べたらね」

「そうね。さ、この後はどうするの？」

「僕は観光に一票。焦っても仕方がないんだしさ。それにこの時間じゃあ、もう組合に行っても期待できないと思うし」

「だよな。リネア、てワケで今日はゆっくりしようぜ」
「わかった」

こうして全員の了承が取れたので、アルフォンスたちは早速町に繰り出した。

外はもう暗いが、さすがは観光地。町のいたるところに明かりが設けられ、不夜城と化している。四人は夕食を済ませた後、食事処で聞いたカジノへと向かった。

「お遊びでしかやったこと無いからな。もし全部スったりしたら……」

「大丈夫だろ。人間が相手なんだから、駆け引き次第でどうにかなる」

なにやら自信満々に言うセルグに、ローザンがやれやれといった風に首を振った。

「あら、セルグに駆け引きができるの？ カモにされないでよ？」

「ああ？ ローザン、言うじゃねえか。自信アリか？」

「あつたり前よ！ あたしに勝てる奴はそうそう居ないわ。どう、勝負する？」

二人の間に火花が散る。

険悪なものではないが、これはこれで怖い。

「やったるーじゃん！ どうせだ、全員で勝負しようぜ。ビリは罰ゲームな」

「げ！ それは無しにしてよ。僕専用みたいなもんじゃん！」

「では何もやらなければいいだろう。全員スればアルが勝つ」

ポン、とりネアがアルフォンスの肩を叩いた。

「おお、その手があったか」

「アル、それはやめなさいよ？ リネアもいい性格してるわね。小さい勝ちでもあればビリにならない、その意地悪な引っかけ。何気に最下位になる気ゼロでしょ」

「当然だろう」

ふふん、とりネアが少し意地悪げに笑った。

もしかしくなくても、自分は騙されかけたらしい。

「リネア、僕は真剣なのにーっ！」

仲良くなれた証拠だが、そんな冗談は要らない！！ アルフォンスは半べそをかきつつ叫んだ。

やがて勝負を開始して、二時間と少しが過ぎた頃。制限時間は三時間と決めてある。アルフォンスは勝ったり負けたりを繰り返しながら、何とか元金より減らすことなく儲けていた。

（ほんの少しだけ増えたから、最下位にはならないはず！ ……うん多分）

もうそろそろ潮時だろうと判断したアルフォンスは、早めに換金しようと席を立った。最後の最後に大負けしたら、泣くに泣けない。

「よっ、収穫はどうだ？」

換金所近くで休んでいると、十五分ほどでセルグがやってきた。強気に出ただけの実力はあったらしい。手持ちの金額がかなり儲けている。おそらく三倍以上に増えているだろう、手には分厚い札束が見える。

（……それなのに『今夜は勝てなかった』とか言ってるよこの人こんちくしょう）

「ぼ、ボチボチだよ。リネアとローザンは？」

「最初ローザンはダイスにいたけど、他に行っちゃった。リネアは見てねえな」

その時、奥にあるフロアから、二つの歓声が上がった。

「何だろう？」

「カジノの歓声は大当たりが出たっつーことだよ。見に行ってみるか」

二人が声のしたほうに行くと、カードフロアに二つの人だけができていた。

その中心にいたのは。

「リネアとローザン……」

「ま、そんな気がしたけどな……」

二人のテーブルは特に高額な掛け金をベット出来るため、リスクは高いが勝ちまくって大儲けしているらしい。

二人にカードを配るディーラーたちの顔は、心なしか青ざめてい

る。

（青ざめたくもなるよね、あれじゃあ……）

二人の前には最高額のチップが、山のように積み上げられている。どちらが多いかはわからないが、換金したら幾らになることや。

二人はそれぞれ違うゲームをやっていたが、リネアは記憶術を駆使すれば必ず勝てると言う、あのカードゲームをやっていた。勝利には使用する札を全て覚える、桁外れた記憶力を必要とするが、あくまでそれは技であり、違反ではない。リネアだからできる離れ業だ。

対してローザンは引きが作用するゲームを行っているため、リネアより一回の配当は高いが、毎回勝つことはできない。そのため二人は、いい勝負になっているようだ。

だけどこれ以上の勝負は店が可哀相な気が。ディーラーの顔はすでに、心なしどころか、見るも無残に真っ青だ。

「あー、慣れないダイスで遊ぶんじゃないかな。負けちまうかもしんねえ」

セルグが弱音を零したその時、別の歓声が響いた。すぐそばの、違うカードのテーブルからだ。

「おい、行ってみようぜ」
「うん」

アルとセルグが見に行くと、いかにもな人相の男が、チップを積み上げているところだった。

「勝つ時はバカみたいに勝つんだよな。俺らも負けてないとは言え……」
「やっぱ悔しいよねえ」

男は二人が見つめる間に、急くように次のゲームを始めた。
アルフォンスが何気なく見つめた男の手。だが次の瞬間、その手が不可解な動作をした。

「はへっ？」

何だそのマヌケな声は、と言う突っ込みは無し。
あの男、まさか……。

「セルグ、今の見た?！」
「おう、当たり前えだろ。しかしあの程度の腕前じゃあ、すぐにバしろと思うぜ? ……ほら、警備員のご登場だ」

顔のいかつい警備員が数名、男を取り囲む。
男は何か文句を言っていたが、懷からイカサマのカードを見つけられてしまい、言い逃れが出来なくなった。

「あーあ、イカサマなんてしなきゃいいのに」
「はっ、どこの賭場でも絶対に一人はいるんだよな、あーゆーの。
馬鹿が変に自信つけて、辺り構わずやらかすんだ」

……ちょっと待て。何だそのいかにも玄人な台詞は。君は質素を
美徳とする武闘家だろ……?!

予想外のセルグの発言に、アルフォンスは頬が引きつる。

「……お聞きしますが、どれだけ入れ込んでるの?」

「えっ！ あっ、まー……。その、それなりに。い、言っとくけど、これは親父とお師匠のせいだからな！ 二人とも賭け事には目が無いし、滅法強いんだぜ。酒もそうだ、嫌でもこう育ちまうって」

（いや、本人が自粛すれば何とか……。ま、賭け事にのめり込む風ではないから、別にいいか）

「だけど意外だな、ゴルディアスさんが賭け事とか大好きだなんて、てっきり誘われてもやらない口かと」

「そりゃ誘いは断るさ。先代武闘神だ、立場がある。酒も付き合い程度だ。けどな、その代わりどれだけ俺が裏の賭場その他に引きずり回されたことか！」

……。そうだと思うけど、『その他』は『酒場』にしておこう。ってか、聞かなかった方向で行こう。

アルフォンスは、そう心に誓ったのであった。

こうしてセルグの過去が暴露された間も、あの男はどうか逃げようと、ずっともがいていた。

「まったく、往生際が悪いな。警備員もさっさと引つ張ってきやいのによ。何をもたついてんだ？」

とセルグが文句をつけた次の瞬間、なんと警備員が次々に倒れ始めたではないか。啞然としている周囲の客を押し分け、男は猛然と逃げていく。

「あっ、野郎！ 何やったか知らねえが、逃げやがった！ 追うぞアル！」

「え、りよ、了解！」

男は出口を目掛けて全速力で走っていく。セルグとアルフォンスも追うが、人が障害となつて追いつけない。

逃げられてしまう。そう思ったが、前方にある人ばかりを見つけて、アルフォンスは咄嗟に叫んだ。

「リネア、ローザン！」

二人は何事かと振り向いたが、男とアルフォンスたちの様子を見て、すぐに事を察したらしい。

「どわあっ！！」

無様な声をあげて男が派手に転ぶ。ローザンがその長く美しい足で引っかけたのだ。

「で、コイツは何やったの？」

転んだ男の前にローザンが立ちはだかる。

追いついたアルフォンスとセルグが横に立ち、退路はリネアが塞ぐ。

「向こうでイカサマやったんだよ。すぐにバレて捕まっただけど、警備員の人に何かやって逃げたんだ」

「よくわからんが特殊力だろ。攻撃は見えなかったからな」

軽く息を弾ませつつ、男二人は状況を伝える。

「まったく、無粋にもほどがあるわ。自分の手がバレたら大人しく捕まんのが筋でしょうが」

「全くだ。リネア、これ以上面倒起きないよう、コイツどうにかで

きるか？」

いかにも冒険者な風体の四人に囲まれ、男もついに諦めたらしい。打って変わって、すっかり大人しくなってしまった。しかもセルグの台詞が何気に怖い。

「いくらでも。だが、一発殴って気を失わせれば済む話だろう？」

——怖い台詞の答えも十分に怖かった。

「それもそーか。じゃあ……」

セルグが指をバキバキと鳴らす。

男を気絶させようと、一撃を喰らわせようとしたのだが、そこで男が思わぬ反撃に出た。何と隠し持っていた刃物を投げたのだ。

「おっと」

「きゃっ！」

セルグは危なげなくそれを避けたが、男はその隙に前方のローザンを跳ね飛ばし、再び逃げ出した。

「いよくもやってくれたわねっ……！」

ローザンが扇を構える。完全に頭に血が上っているようだ。ローザンの周りには目に見えない、けれども確かに在る霊力が、風を生み出そうと渦を巻き始める。

「わーっ！ 駄目、駄目だよローザン！ こんなトコで風は駄目っ……！」

アルフォンスは大慌てでローザンを止めにかかった。
こんな室内で以前披露してもらった風の術を使われては、たまったものではない。

「おい早くしろ！　アイツ外に出ちまうぞ！」

セルグとリネアはすでに走り出しており、それを見て、慌ててアルフォンス達も後を追った。

「くそつ、待ちやがれ！」

全速力で追うが、いかんせん、辺り構わず逃げていく男と違い、こちらには人という障害物がある。

一番身体能力の高いセルグでも、男と自然と距離ができていってしまう。

「ああつ、間に合わない！」

アルフォンスが叫んだ時、もう男は出入り口の目の前まで逃げていた。あと少しで外に逃げられてしまう。

人々は男の勢いに押され、道を開ける。男は逃げ切れると判断したのか、ニタリと下卑た笑いを漏らした。

が、その時、数歩先のドアが開かれた。幸か不幸か、客が入ってきたのだ。

精霊の町へ式

「どけるおっ!!」

男が叫ぶ。入ってきたのは背の高い、眼鏡をかけた優しそうな青年だ。その容姿から、男は他の客と同じく、怒声に後ずさると判断したようだ。

しかし青年はわずかに驚いたのみで、一步も引かず、一瞬のうちに術を発動させた。

——店内にいた人々は、その身に時の流れを感じただろう。常とは、人の理とは異なる『それ』を。
そして垣間見たのだ。この地に加護をもたらすモノに属する、輝く肢体の民、『精霊族』。

「精霊使い……」

一行の知恵袋、リネアが静かに呟いた。

精霊使いとは、精霊族に認められ、特殊な誓約を結んだ者たちのことだ。誓約を遵守することで、空間を曲げて精霊族を呼び出し、強大な力を分けてもらうことができる。人の身では到底得られない、その莫大な霊力を。

やがて術が終了すると精霊は僅かな煌きを残して姿を消し、全てが元に戻った。

術を喰らった男を見ると、深い眠りに落ちていた。青年の前で見事に崩れ落ちている。

「ふつつ……」

青年が術のために張り詰めていた気を緩めた。一度男を見下ろし

た後、目線をキョロキョロと周りに走らる。

よく考えてみれば、青年はワケがわからないのだろう。カジノに入ってきた瞬間、物凄い形相の男が全力で客を撥ね退けつつ、怒声を上げて走ってきたのだ。

しかも後ろを自分達が必死に追っていた。男がカジノで何かやったのだろう、ぐらいいしか判断できない。

（かと言って、いきなり術をかけるってのも……）

何か自分達と同じ人種な気が。

わずかの間で追いついたセルグが、息を落ち着けてから青年に声をかけた。

「すまねえ、助かった。この野郎、イカサマやった上に逃げやがったんだよ」

「あー、そうでしたか。あまりの迫力について術を使ってしまったのですが……。お役に立てたのなら何よりですよー」

やがて後方の三人も、遅れてその場に到着する。

「セルグ、は、早い……。……ふう、とにかく捕まえられて良かったね。……あ、どうもすみませんでした、驚かせて」

「いえー、構いませんよ。あー、さて、この方を警備の方々にお任せしましょうか」

アルフォンスが振り向くと、ふらつきながらもこちらにやって来る警備員の姿が見えた。

やがて一連の出来事を片付けた後、アルフォンス達は宿に戻る道を歩いていた。カジノに戻って遊ぶ気など、疲れも相まって、とつとつに失せている。まだまだ町は眠らないが、今夜は色んなことがあ

りすぎた。

「あの、さっきはありがとうございました。ええと……」

「ああ、私はリユーン・スィーバルと申します。ご縁があればまたお会いしましょう」

リユーンはにこりと笑ってその場を去ろうとしたが、ローザンが引き止めた。

「あ、ちよつと待って」

「はい、なんででしょうかー？」

訊ねられたローザンは言葉に詰まり、視線でアルフォンスに告げてきた。

あんたが言いなさい、と。

（やっぱり僕が言わなきゃいけないのか）

別に嫌だとかじゃないんだけど、ね。

ただ断られたら悲しいから、引き止めたローザンが言ってくれないかな……、と期待しただけで。

「あの、僕はアルフォンスって言いますが、旅の仲間を探してるんです。それで、精霊使いの人に来てもらえないかと思って、この町に来ました。……突然なんですけど、僕たちと一緒に旅に行きませんか？」

リユーンは一瞬瞠目した後、悲しげに微笑んだ。

「あー、お誘いは嬉しいのですが、私はこの町を離れるわけには参

りません。どうか組合で他の方を紹介してもらって下さい」

「そんなぁ……」

来てくれると思ったのに。

あの術を見て（正確にはいきなり術を発動させた危険性から）、きつと自分達と気が合うだろうと。

（まぁ、どんなに仲良くなっても無理なものは無理だよな……）

「えー、私からも組合に話を通しておきますので……」

ここまで言われてしまつては、流石にもう何も言えない。アルフオンス達は大通りで、反対側に帰っていくリユーンと別れた。が、素直に終わらない人物がここにいる。

「あれは上級だ。アル、明日もう一度交渉して、何とか引き入れろ」

そう、リネアだ。

リユーンの位が上級だと見抜いた所は凄いが、いきなりあれ呼ばわりは……。

しかも自分をご指名ですか。

「何とか、つてどうやってさ。何かワケありみたいだし、そう簡単に行くかなぁ……」

「そこはアルが考えなきゃ。でも、明日はリユーンを通して他の人を紹介してもらえるんでしょ？ 駄目だったときの最終手段、でいいんじゃないの？」

「だよな。けど、もうちょっと考えといたほうが……」

「いいじゃない、別に。ほら、さっさと帰りましょ」

……どうもローザンの言動がおかしい。
さつきから何故か、しきりに帰りたがっている。

「あ」

アルフォンスの呟きに、ローザンの体がびくりと震えた。

「あのさあ、さっきの……」

勝負はどうなったの？ と聞こうとして、今度はリネアに阻まれた。

「ローザンの言う通りだ。今日はもう終わりにしよう」

リネアまでこんなことを言うなんて。ってか、さつきと言ってる
ことが違う。

……あれ、ちょっと待てよ？

（んん？ そう言えば二人はあんなに大儲けしてたけど、時間内に
換金してなかったよな……？）

そーか、そーか。そーゆーことですか。

「二人とも。逃げるなんて、らしくないよ？ さあ、正々堂々負
けを認めようよ！」

「べ、別に逃げてなんか……」

そう言ったローザンの視線は、明後日を向いていた。

「おい、言いだしっぺはお前だろ？ ここは大人しく罰ゲームを受
けるよ。もちろんリネアもな！」

セルグがそこまで言ったとき、反論しようとしたローザンからチャリーン、と言う音がした。

ローザン本人も何の音かわからなかったが、そこには硬貨一枚転がっていた。

「はいよ」

セルグが拾い上げると、それはシエルマスの最も額の小さい硬貨だった。

——あれ。ってことは？

「いやったあ！　そういえば、もしもの保険にこれはチップに変えなかったのよ！　とにかく、これあたしは最下位じゃないわよね？　小銭だろうがお金ですもの！」

一方リネアは、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

もしあのままだったら一位はリネアで自分がビリだったなと思うと、リネアには悪いがやはり喜んでしまう。

「罰ゲームか……。そうだなあ、取りあえずセルグが一位だから……」

「ふふつ。いいこと考えたっ！　ねえ、罰ゲームは最下位に言うことを聞かせる、でどう？　一位は三つ、二位は一つ。あたしは遠慮してあげるわ」

確かにこれはとても罰ゲームらしい。が、止めたほうがいいような気がする。

(……だって、一位はリネアに惚れてるセルグじゃん)

「ちょ、俺は別に……」

見方によってはオイシすぎる、この権利。それを得られそうなセルグは、見事に慌てふためいた。

ローザンはこの反応を見越していたらしく、面白くて仕方が無い、といった顔だ。

「あら。リネアを扱き使えるなんて、この先絶対に無いわよ？ 貴重な体験をしておけばいいじゃない。ねえ、アル？」

「え、うん？」

まさかここで振られると思っていなかったアルフォンスは、つい勢いで頷いてしまった。

（しまったああああ……！！）

「ほら、アルも認めたわよ。リネアはいいでしょ？」

有無を言わさぬローザンの勢いに、リネアも渋々ながら頷く。

二人の了解を得たローザンはニンマリとした顔でセルグに歩み寄り、リネアに聞こえないよう（でも自分にも聞こえたから、多分聞こえた）そつと耳打ちした。

「あんたも難しく考えなきゃいいのよ。荷物を持ってもらうとかでいいんだし。……それとも、他にやって欲しいことがあるのかしら？」

瞬間湯沸かし器。

……じゃなかった。セルグの顔が最後の部分で一気に赤くなった

のだ。見てるこっちが恥ずかしい。

「あらーあ？ どうしたのかしら、赤くなっちゃってえ」
「て、てめえ！」

セルグが一発殴ろうとしたが、ローザンはその拳をひよいと避けた。

「ま、とにかく罰ゲームはコレね！ さあ、明日は組合に行くんだし、とつとと寝ましょ！」

こうして嵐を巻き起こした本人は、さつさとその場から逃げ出したのだった。

残された三人はと言うと、気まずくて仕方がない。

二人に挟まれているアルフォンスは、どうすればいいのか全く分からなくて困っていた。

（うう。ここで僕だけ逃げてもいいけど、それはリネアが可哀相だな。……ならば！）

「リネア、僕達も帰ろ？」
「あ、ああ。そうだな」

どうもリネアは展開についていけてなかったようだ。珍しく視線を泳がせていた。

だが、空気が微妙なのは流石にわかるらしい。この場を逃げられるとわかって、素直に頷いた。

「よし、さつさと行こう！」

善は急げ。急がば回れとも言うが、今回はナシで。
そうやって脱兎のごとく去った二人を見つめながら、セルグは悩んでいた。

（俺は明日からどうすりゃいいんだよ……！？）

自分も男だ。あのローザンの提案に胸が高鳴ったのは事実。だからこそ問題があるのだ。

まだ告白していないこともあって、リネアはあの空気の真意には気付いてないだろう。どうもリネアは『そちら』に疎い。それは確信できる。

……だけど『気まずさ』は、自分を気にしているかの指標でもあるわけで。そのためにきっちり気付いて欲しかったり……。

兎に角！

（明日からリネア『以外』とが気まずいだろうがああああ！）

セルグの心の叫びは誰にも届くことなく、むなしく空に溶けていった。

精霊の町へ参

翌日、四人は気まずい雰囲気のまま、市へバラバラに買い物へと出掛けた。今日は運悪く、精霊使いの組合の休日に当たってしまったからだ。

（昨日はやり過ぎたかしら……）

騒ぎの元凶であるローザンは、出掛け際の、あまりにも気落ちしたセルグの背中を見て、そう思った。

確かに昨夜は楽しかったが、セルグは予想以上に純情だったらしい。これはからかう方法を間違えた……かも。

だとすれば、何とか元氣付けてやれないものか。けれど、面倒くさい。

……が、さすがに良心はある。ここはややしそうなセルグは放っておいて、リネアと話したほうが良さそうだ。

（仕方がないわね。リネアの本心も聞いてみたかったし）

ならば善は急げ。早急に買い物を済ませ、リネアがいる薬草市へ行くため、近道となる広場へ足を向けた。

一方、セルグ。こちらはローザンの考えたとおり、昨日の出来事をとてつもなく気にしていた。

（朝から顔あわせても何か気まずかったし……。ああ、どうしよう）

リネアはあまり自分から人に関わることはしないが、こちらから声をかければ、必ず反応を返してくれていた。

なのに今朝はどうだ。おはよう、と言っても聞いてない振りをし

て逃げてしまったのだ。

何かこの反応は違うだろ。願った『気まずさ』じゃない。終わりで。恋の終わり、人生の終わり。

あのローザンが提案を取り下げるはずが無いし、こういう事でアルは頼りにならない。リネアもあんな形であれ了承したため、必ず約束は守るだろう。

考えるほどヘコんでいき、かなりの暗さを醸し出しながらも、セルグは一休みしようと広場へ向かった。

そして、リネアの場合。

昨日の一連の出来事、実は楽しかったと思っている。が、最後の最後で油断してしまった。仲間たちにいい意味で気を許したために、こんな羽目になったのだ。

……ただ何で気まづくなるのか、そして気まづいのか、理由がよくわからない。

（朝はセルグに悪いことをしたな。帰ってからは普通に振舞おう。その方がみんなも気にしなくて済むだろう。だが……）

溜息を一つつき、商品が陳列されている棚へ目を向ける。

自分に目を奪われている店主を綺麗に無視し、買い物を済ませると、もう少し考えようと広場へ行くことにした。

最後に、アルフォンスは。

（やっぱ昨日のは止めるべきだったかなあ。けど、これで二人の仲が発展！——ってなればいいのに。……や、無理か）

こつという面ではあまり聡くない頭を、必死に動かしていた。

（けど、あの二人は見てるとやっぱり面白いよ。セルグもさっさと告白しろよなー。以外と……いや、思った通りに奥手だよね）

などと失礼なことを考えつつ、こっそり余分に買ったパンを食べるため、座る場所を探して広場へ歩いていった。

しばらく行くと、広場の中央に噴水が見えた。その縁に座れば調度よさそうだ。

「あれ？」

ばったり。

広場に十字型に通じる四本の道それぞれから、全員が見事同時に出てきたらしい。

（やばっ）

アルフォンスはこっそり一人で食べようとしていたパンを光速で袋へ突っ込み、そ知らぬ態度をとった。

「わ、見事に揃ったね。みんな買い物は終わった？」

「お、おう」

「あたしもー」

「予定したものは全て」

……気まずっ。

誰も目を合わせようとしなない。

（うーん、どうしたもんかな）

アルフォンスがチラリと正面のローザンを見たとき、ちょうど後ろを歩いていた女性がアルフォンスのほうに倒れこんできた。

「おわっ!？」

他に気を向けていたため、女性とぶつかったアルフォンスは簡単によるめいてしまった。女性は上手く体を支えることができなかったのか、そのまま地面に倒れこんでしまう。

「おい、どこ見て歩いてんだよ!？」

倒れてしまった女性をアルフォンスが起こそうと手を差し伸べた時、何と女性にぶつかった男が文句をつけてきた。女性はその声を頼りに振り向き、必死に頭を下げる。

「すみません、目が見えないものでして……」

「それがどうした! お前が持つてる草の汁が服について、染みになっちまったじゃねえか。どうしてくれるんだよ」

「あの、」

「高かったんだぜえ? 金払えよな、金!」

何とも見事な典型的文句のつけっぷり。これを放って置くのは気が引ける。女性は目が見えないと言っていたし、何よりぶつかってきたのは男のほうだ。

アルフォンスが女性を庇う形で一步踏み出すと、三人も承知したように向き直った。

（気まづくなっても……、やっぱり仲間だな。良かった）

大事なところでは、ちゃんと繋がっているのだ。

「そこまですて下さい。この人も謝っているんですし」

「あ!？」

「ええと、これはウルカラ草ね。すぐに洗えば綺麗さっぱり落ちるわよ。さっさと帰って洗濯しなさい」

「……て、てめえらには関係ねえだろ！？ 引っ込んでろ！」

男は勢いで吠えた後、ローザンの出で立ちを見て、屈辱的な、耐え難い言葉を吐いた。

「大体お前みたい な女に言われる筋合いは無い！ 踊り子なんざ、どうせ男を引っ掛けて、巻き上げた金で遊んでるんだろ？ そうでなきゃ そんな見事な服、着られるもんか！」

ローザンが息を呑んだのがわかった。

あまりの侮辱に、すぐに怒ることさえ出来なかったのだ。

「職に就く者全てを侮辱する言葉と、わかって言っているんだろ？ な？」

いつの間にか、リネアが男の背後に回りこんでいた。

「……んなつ！？」

リネアのような美人に凄まじると余計に怖い。

「職は全て、『職』の名のもとに繋がる。一つを侮辱すれば全てを侮辱することと同じだ。考えが及ばなかったか？」

リネアが男の首筋に杖の刃を突きつけた。セルグからも無言の圧力が発せられる。

「先ほどの言葉……」

「何が何でも取り消してもらわうよ」

ローザンが怒りに震えながら、搾り出すように告げた。
それを見てリネアがスッ、と刃を収める。

「あたしのことはいくら侮辱しようと構わないわ。何とでも言えばいい。だけど、踊り子の職を悪く言うことだけは許さない！ 取り消しなさい！！」

あまりの剣幕に尻込みしたらしく、男は二の句を告げないでいる。
自覚はないだろうが、体が僅かに後ずさっている。

「このまま消えるなら、取り消したとみなしてあげるわ。さあ、どうするの？」

普段のローザンからは考えられない怒気と覇気がそこにあつた。

男は反論を試みたらしいが、鯉のように口をパクパクさせただけで、脱兎の如く逃げていった。

「……」

男の後姿を射るように見つめていたローザンも、その姿が雑踏に消えると、ようやく視線をこちらに戻した。

アルフォンスたちもローザンにかける言葉が見つからない。だが、そこに上手く女性が入ってくれた。

「あの、助けて頂いて有難うございました。それと、ごめんなさい。私のせいで嫌な思いをさせてしまって……」

「……気にしないで。あんなの、——慣れてるから」

時には自らの肢体を惜しげもなく晒し、人々を酔わす魅惑の人。それが踊り子だ。

しかし本来、そこに男が考えたような事實は一片も無い。もし『そういう踊り子』がいたとしても、組合では認められない。あくまで自称だ。

期すれば卑しさと紙一重になってしまふことも、全ては己が理想と飽くなき美の追求、真の芸術のため。

「さて、家まで送ったほうがいいかしら？ どうせ暇なんだし」

ローザンは一瞬だけ視線を下に落としたが、再び陽の光を受けた瞳は、いつも通りに強い光を宿していた。

「そうだね、またあんなことあったら嫌だしね。……えーと、お邪魔じゃなければそうしたいんですけど、いいですか？」

「そこまでご迷惑は……。……いえ、是非お願いします。どうぞお茶でも飲んでみてください。そのくらいしかお礼できませんので」

そうして一行は広場から出て、女性の家へ向かった。

カジノなどが建ち並ぶ賑やかな中心街から離れると、打って変わって閑静な住宅街が広がっていた。

白や淡いクリーム色をした石壁の家々が立ち並び、それらを大小様々な石を敷き詰めた道が繋ぐ。

「みなさん、こちらです」

女性は自宅の扉を開け、四人を中へ招き入れた。

その行動によどみは無く、目が見えないと言うのが嘘のようだ。

（なんか……。凄いな）

どれだけ耐え抜いてきたのだろう。

目が見えないことで浴びる侮蔑と嘲笑。それは外出すれば当然増すのに、彼女は陽の光のもとへと恐れずに進む。

家の中で動きに迷いが無いのは、今までの生活で培ってきた慣れもあるだろう。だが、どうもそれだけとは思えない。

「お茶をどうぞ。もうすぐ弟も帰ってくるはずですし、ゆっくりしていった下さいね」

「あ、どうも」

女性を送り届けたらさっさと帰るつもりだったのだが、つい機を逃してお茶をご馳走になることになってしまった。

（弟さんがいるなら、そこまで生活は大変じゃないのかな）

今まで盲目の人に出会ったことがないので想像に任せるしかないが、一人よりは絶対にマシだろう。出会ったばかりだけど、この優しい人は一人じゃない。そう考えると何か気が楽になった。この地方独特らしい、爽やかな匂いのするお茶を、アルフォンスはようやく堪能できた気がした。

そこで思い出したように、ローザンが女性に話しかける。

「そう言えば、名前聞いてなかったわよね。あたしはローザン。あなたは？」

「まあ、そうでしたね。失礼いたしました。私はティティス・スィーバルと言います、どうぞよろしく」

「ええ、よろしく……」

ここでローザンはどもったが、原因は一つ。アルフォンスも思っ

たことだ。

（あれ、スィーバルってどこかで聞いたような……？）

その時、玄関の扉が開いた。

「姉さん、只今帰りました」

「お帰りなさい。今、お客様がいらしてるのよ」

「そうですか、どうもこんにち……、おやー？」

「あっ！」

アルフォンス達が見たのは、昨夜のあの青年だった。

精霊の町へ肆

「あらリユーン、皆さんのことご存知なの？」

「ええ、昨日の一件の方々ですよー。またお会いできましたねえ」

そうだ、スィーバルと言えばリユーンの家名じゃないか。

「世間って広いようで狭いよなあ。ま、同じ町の中だけだよ」

「ですねえ。それにしても、皆さんはどうしてこちらへ？」

「先ほど広場で揉め事を起こしてしまったのだけど、皆さんに助けて頂いたの」

「そうでしたか。姉を助けて頂いて、ありがとうございます」

リユーンが深々と頭を下げる。大したことではないと思っていたアルフォンスは、そんなリユーンの態度に思わず緊張してしまった。

「あ、いえ。人として当然のことだと思いますから」

「おお、いいこと言うじゃん、アル」

「どうしちゃったの、突然カッコよくなっちゃって」

「ふ、全くだな」

「っつ。あのねえ……」

ここで反論しても（特に女性陣に）敵うわけ無いので、喉まで出なかった文句は、何とか飲み込んだ。

そんな四人の様子を見て、スィーバル姉弟が笑う。

「いつもそんな感じですか？ とても楽しそう。うらやましいわ」

「ええ、久しぶりに笑えた気がしますよー。やはり外は楽しいのでしょうねえ」

そんなこんなで、リユーンが荷物を片づけるため一度自室へと戻った時だった。

「……突然ですが、皆さんはどうしてこの町へ？」

「その、精霊使いの方に仲間になって貰えないかと思って」

「昨日リユーンに頼んだんだけど、断られちゃってな。只今絶賛募集中ってとこだ」

「……そう、やっぱりあの子は断ったんですね」

リユーンが出て行った扉を向き、ティティスはポツリと呟く。
リネアもその扉へ視線を向けた。

「やっぱり、ってどうして？」

「あの子は優しいから……。両親を亡くしてからずっと、私のことを一番に考えてくれています。特にこの頃は、町の治安が悪化してきましたから」

閉じられたままの瞳が、強い力で何かを見据えていた。

「でも、先ほどの言葉をお聞きになったでしょう？ 自覚しているかはわかりませんが、あの子は外に憧れているのです」

ティティスはとても切なげな声をこぼした。それほど彼女の纏う空気は、弟を思う気持ちに溢れていた。

「私があの子の重石になるわけにはいきません。もう二人とも、立派な大人なのです。お願いです、皆さん。どうかもう一度あの子を誘っていただけませんか？」

陽の下でのみ養われる、強い意思。強い願い。……無碍になど出来ない。

「わかりました。上級のリューンに来てもらえれば、僕達も願った
り叶ったりですから」

「ありがとうございます。私からも言っておきますので、どうかよろしく願います」

「はい！」

アルフォンスが元気良く返事をしたところで、一息分の間が出来た。そのとき、ふいにリネアが席を立った。

「……失礼、話の途中だが、私は行きたい所があるので、これで」

「おい、どこ行くんだ？」

「町の資料館に」

「まあ、あそこは閉館時間が早いです。お引止めしてすみません」

「構わない。今までいたのも私の勝手だ。気にすることは無い」

「じゃ、あたし達も帰りましょう。いつまでもお邪魔してるわけに
いかないもの」

リネアが席を立ったのに合わせて、ローザンも立ち上がった。頷いてアルフォンスとセルグも席を立つ。

「お茶、ご馳走様でした。リューンには明日また話します。ティ
イスさんのお話から、少し時間を置いたほうがいいと思うんです」
「ええ。では、また明日お会いしましょう」

ティティスの優しい笑みに送られて、アルフォンスたちは資料館
へと向かった。

到着した資料館は、本当に規模の大きいものだった。昨夜のカジ

ノより大きいかもしれない。

リネアはそこで閉館時間ギリギリまで、精霊王に関する資料を中心に、大量の本を物凄い速さで読み漁った。

それは本当にもの凄い知識欲と集中力で、読み終えた本が山のようにならまていく。

アルフォンスもそれなりに興味深いとは思ったが、セルグとともに、早々にリネアの読み終えた本を片付ける係に徹することにしたのだった。

閉館時間となり、一行が出口を出ると、外に切羽詰った表情をしたリユーンが立っていた。

「あんたも資料探し？　だけど、もう閉館時間よ」

「いえー……。そうではなくて……」

「……姉の口から聞く前に、旅の話を通りに来た。だろう？」

「！」

リネアの言葉に、リユーンの顔に驚きが走った。

「あの時、話を乗り越しに聞いていたのは知っている。だがあれは姉の本心だろう。なぜ受け入れない？」

「……私が外に行けないのは、姉だけが理由ではないからです。……

……誰もいない場所で、聞いて頂けませんか」

そう言ったリユーンの顔は、今にも泣きそうな笑顔だった。

やがて四人はリユーンに連れられ、精霊使いの組合の一室へと案内された。奥まったその場所は滅多に人が近づかないらしく、清潔ではあるが、他と違って華やかさが無い。

「……先ほど申しあげました通り、理由は姉だけではなく、精霊使いの人数が少ないことにあります。精霊使いは町に精霊族を招き、

幸をもたらす者。なおかつ私は上級の位を拝しています。治安の悪化が顕著な今、離れるわけには行きません」

「そんな……」

こんな話を聞かされた後で『それでも来て下さい』なんて言えない。

……世間知らずな、自分は。

「治安の悪化はこの町、ひいては国の失策のせいでしょう。精霊使いは象徴に等しいはずよ。それを逃げる理由にするの？」

パシン、と苛立ちつつも、あくまで優雅に扇を鳴らすローザン。ローザンはやがて一族を率いる者として、政治的な知識も豊富なのだろう。その言葉に揺らぎはない。

「いえ、私達はただの象徴などではありません。この町の基盤と密接な関係がありまして……」

「あら。もしそうだとしたら、何故ティティスはあんなに強く頼んだのかしらね。変でしょう？」

ローザンにここまで言われて、リユーンは反論出来なくなったらしい。

うつむき、押し黙ってしまった。

「あなたが旅を怖いと言うなら他を当たるわ。けど、まだ他に理由があるなら話を聞かし、解決できるかよう、一緒に考える。どう？」

再びこちらに向けたリユーンの顔、いや身体からは、血の気が引いていた。

「あなたには……ふふ、敵いませんねえ。——わかりました。本当の理由を……お話します」

震える声で紡ぎだされたリユーンの話は、アルフォンスの予想を遥かに超えていた。

「……昇級不正の片棒、ね。まあ、そんなことだと思ったけど、どう考えてもあんたに責任ないでしょ？　むしろ告発しちやえばいいのに」

「私が一人ならそうしましたともー。しかし、姉のことを持ち出されたのです。姉も精霊使いで、上層部で唯一関わらず、知らずにいた人物です。その姉に、全ての咎を負わせると脅されて……」

「そんなのひどいよ！」

「あー、ありがとうございます。ですが、その言葉だけで十分ですよ。皆さんを巻き込むわけにはいきませんから、これでお別れしましょう」

「……解決法があってもか？」

ポツリと呟いた声に、一気に全員の視線がリネアに集まった。

「どういう……こと、ですか？」

「そのままの意味だ。少し荒っぽいけど確実に解決できる。その代わり、今の上層部を一掃することになるぞ」

リユーンの顔に驚きと共に、喜びが満ちていくのがわかった。血色も一気に回復する。

「構いません！　もともと人数は少ないですが、人手不足と言う程ではありません。先ほどは出任せを言ってしまい、申し訳ありませんでした。一体、どのような方法が？」　さっきとは打って変わっ

て興奮しているのがわかる。

だが当然だろう。永久に自分たちを縛る、卑しい鎖が消えるのか
もしれないのだから。

「目には目を、歯には歯を。権力には権力が最も有効だ。権力を行
使して、強行に立ち入り検査をする」

そんなことができるのか、といったようにリユーンが興奮から息
を飲む。

「世界最高権力、賢者の名の下に」

「……え？」

リネアが淡々といった言葉に、リユーンは目をぱちくりとさせた。
驚きのあまり、何も考えられなくなったらしい。

「……私は賢者、シャルラン・ガイラの弟子だ。よってすぐに連
絡がつく」

「「ええ!？」」

ああ、ずっと前にこの反応を自分たちもしたんだよなあ……。

と、アルフォンスとセルグは何か懐かしく思った。

しかしリユーンはそんなほのぼのした雰囲気なぞ突き破り、喜び
のあまり驚きの行為に出た。

「ああ、本当にありがとうございます！　これで私達は自由になれ
る！」

リユーンはリネアの両手を握り締め、何度もありがとうございます、
と繰り返したのだ。

「い、いや、構わない。気にするな」

リネアもいきなり手を握られて驚いたらしい。珍しく言葉が詰まっていた。

それにしても、リューンはまだリネアの手を握ったままだ。だから隣の人物が完璧に固まっている。……どうしよう。

「あー、リューン。その、あの……」

「はい、何でしょうかー？」

満面の笑みで振り向いたリューンは、リネアの手を離れた。

（これで取りあえずはよし、と……）

リネアの手を握った人など初めて見た。

これだけ頑張っているセルグも、当然握ってない（と思う）。それをリューンは勢いでやってのけてしまったのだ。

（まあ悪気や下心は無いだろうけど……）

「え、えつと、こんな時に悪いんだけど……。もし解決したら、一緒に来てくれる？」

「ええ、もちろんですよー！ ぜひ一緒に緒させて下さい」

翌日、賢者の命を受けた調査団が来た。

彼らは職の定義に反していないかを調べるための、世界で最高の組織だ。どの職でも調査を申し渡されれば、拒むことは許されない。調査団はクルツァータに着くや否や、精霊使いの内部を徹底的に調べ上げた。

事前にアルフォンスたちがリューンと一緒にまとめた証拠も有利に働いたらしく、見事に精霊使いの上層部は一掃されていた。

「姉は驚いていましたが、今後を引き継いでくれることに決まりました。これで私も安心できます」

騒動に一区切りついたリューンは、改めて頭を下げた。

「この度のこと、本当にありがとうございました。精霊使いの一員として、改めて御礼を言わせて下さい」

「そんな、改まなくても……。ねえ？」

「おうよ、それに俺は何もやってねえし」

「私も気が向いたのでやっただけだ。礼はいらない」

「ね、そう言うことよ。これから仲良くやっていきましょうね」

「ええ！」

数日後、組合が落ち着くのを待つて、一行は町を出発することにした。

「アルフォンスさん」

建物の陰からこっそりと、誰かが声をかけてきた。

「あれ、ティティスさん。リューンの見送りですか？ それならあつちに……」

「いいえ。組合のことで、お話があるんです」

「え？ あれはリネアが……」

「そうではないんです。実は私、あの一件を全て知っていました。私も同じように脅されていたのです」

広場で男に突き飛ばされた時、助けてくれた人。

——ああ、この人達なら変えてくれる。全てを変える力を持っている——！

「そう思い、巻き込んでしまいました。とても強く優しい色が見えたので、全てを託せるのではないかと……。本当に申し訳ありませんでした」

「気にしないで下さい。全部上手くいったんですから。けど、その色って言うのは……？」

ティティスはにつこりと笑い、仕組みを教えてくれた。霊力を生かして存在が持つ気力、オーラの色を見る力を鍛えたという。

「例えば、ローザンさんは薄紅。深い情熱と思いやりを持つ方。セ Лугさんは紺碧です。いつもは凧いだ海のように、でも時には嵐のように激しい方。リネアさんはちよつと複雑で……。闇色のような紫紺色。誓いを遵守し、信念を貫く気高い方。リューンは深緑ね。穏やかで優しいけれど、少し抜けてるわ」

「あはっ、凄いですね。みんな当たってます。あの、僕はどうか？」

「……あなたは、きっと数奇な運命を辿るのでしょうかね」
「えっ？」

——お客様、これは占いの結果ではありませんが、言えることがあります。

「あなたのような色は見たことがないんです。そう、きっとあなたは世界を変えるのね。この町に、新しい息吹をもたらしてくれたように」

——あなたは途轍もない運命を持つ方なのですわ。世界を変える

ほどの。

「……僕の色、聞いてもいいですか」

ティティスによって再びもたらされた静かなる予言は、ただ敢然と受け入れるしかなかった。

「ええ。上手く表現できないけれど……。春の穏やかな日の、太陽のよう。見ていて同じ気持ちになれるの。とても優しくて、それでいて強い色だわ」

「そんな、買い被りですよ」

「いいえ、もつといい言葉がないのが残念くらい。先程のように言えば、輝く黄金色と言うところかしら。……アルフォンスさん、どうかあの子をお願いしますね」

「はい」

向こうで自分を呼ぶ声が聞こえる。

——行かなくては。

「僕に何が出来るか分からないけど、やれるだけやる、って誓いました。だから精一杯、頑張ります」

笑みを交わして、アルフォンスはティティスと別れた。

これから先、苦しいことも悲しいこともあるだろう。

だけど、大好きな仲間が側にいる。だから、明日は楽しい。だから、それでいい。

日向の休息へき

一行はクルツアータを離れ、新たな大陸へ渡るため、近くの港町へ向かっていた。

一度離れた潮の匂いが強まるに連れ、だんだんと不機嫌になっていく人物が一人。

「なんで、また船に……」

セルグだ。

そう、セルグはとても船酔いしやすい。自然と機嫌が悪くなるのは仕方ないとも言えるだろう。

昼過ぎには港町ボワールに着くだろう。一行は手前の村で、遅めの朝食を取っていた。

「なあ、リユーンって高位の精霊使いなんだろう？ 精霊陣だっけか、何でそれを使えねえんだよ。おかしいじゃねえか……」

「ちよつとあんた、まだ言ってるの？ あのゴタゴタでまだ組合がうまく機能してないんだから、仕方ないじゃない。潔く船に乗りなさいよ」

「俺だつてなあ、ハナっから希望が無かったら言わねえよ！ 『乗らなくて済む』って思っちまつたんだ、そう簡単に諦められねえっての！」

「あー、その、本当に済みませんねえ。せつかくの機会なのに、お役に立てなくて……」

一触即発になった二人の間に、リユーンの柔らかい声が入った。

「あ、わりい。リユーンのせいじゃねえのに。けどよ、どうしても

……」

その声色に怒りの矛先を失ったのか、セルグがリユーンに詫びた。

「お気持ちはわかりますよ。えー、ですが精霊陣の機能が復旧するには、二週間はかかるでしょう。船の方が早いのですよー」

「だよなあ……」

セルグは窓の外に目を移した。

窓の向こうに広がる空は、皮肉なくらい綺麗に晴れ渡っていた。ボワールに着くと、一行はまず買い出しや船の手配などに別れた。アルフォンスは、じゃんけんの結果、買い物当番に決まった。一番面倒な役だ。

はつきり言つて、自分はじゃんけんが弱い。昔、じゃんけんの勝敗の確立は同じだと聞いたことがある。が、アレは嘘ではないのか。だって自分は三十八戦二十九敗。

（さいころの話は正しいと思うんだけどね……）

両手に抱えた大きな荷物を、少し疲れてきたので再び抱えなおした。

「つよいしょ、つと」

……すごく今更な話だが、買い物はこまめに行くべきだと思う。こんなに一度に買うのは、いろんな意味で危険だ。

巨大な袋を二つも抱え、よたよたとふら付きながら集合場所に向けて歩く。

一番楽なのは乗船券を買うだけの役。……もちろん、ローザンが勝ち取った。

「おわっ」

「きゃっ!」

ドン!

考え事にふけていたら、つい誰かにぶつかってしまった。

「す、すいません! 大丈夫ですか?」

ひよい、と袋の陰から顔を出す。

「ええ、こちらこそ不注意でした。ごめんなさい」

相手を見ると、まだ少し幼さの残る少女だった。

僧侶の証である僧服を着ており、目線は自分よりも幾分か下にある。

「まあ。こんなにたくさん、大変ですね」

「ええ。旅の途中なんで、まとめ買いを……」

「そうなんですか。――あ、これ落ちてましたよ」

アルフォンスは少女が差し出した品を受け取るうとしたが、両手が塞がってどうにもならない。

「じゃあ、袋に入れますね。しゃがんでもらえますか?」

「あ、はい!」

少女に言われて、慌ててしゃがもうとしたら、なんとバランスが崩れてもつと色々な物が転がり落ちてしまった。

「うわ、やばい！」

幸い平坦な道なので遠くまでは転がらはかったが、随分と周囲に散乱してしまった。アルフォンスはわたわたと慌てふためく。

「くすっ」

笑い声に振り向くと、少女が口元に手を添えながら笑っていた。

「ごめんなさい、つい可笑しくて」

「いえ、いいんですよ。僕も笑いたいとこなんで」

少女の笑みを見て、何故かさっきまでの慌てぶりはナリを潜めた。アルフォンスは落ち着いて袋を地面に置き、テキパキと拾い集めていく。

「はい、どうぞ」

拾った品を袋に入れようとしたら、少女が入れやすいように袋の口を広げてくれた。

「すみません、こんなことに巻き込んで」

「気にしないで下さい」

ニコッ、と少女が笑みを零す。それを真っ正面で見たアルフォンスは、一気に頬に朱が走るのを感じた。

（うわ、やばっ！）

顔ごと背け、少女から視線を無理やり外す。心臓がバクバク音を

立っているのがわかる。

これは。この感じは。まさか、もしかして。

「これで最後ですね」

はつとして振り向くと、すでに少女は立ち上がっていた。

「では、これで。あなた方の旅路に幸多からん事を。チーリス様のご加護がありますように」

宗派独特の祝福の言葉を述べた少女の笑みは柔らかくて、アルフオンスの疑問は、もはや疑問ではなくなった。

やがて軽く頭を下げ、少女はこの場を去っていった。

その後姿を見つめながら、疑問の答えを脳内で反芻する。

これは、恋。少女の笑みに心をとらわれた一目惚れだ。

（ははっ、セルグのこと馬鹿に出来ないなあ。——あ！ 名前、聞いておくんだった！ あゝ、失敗した）

今日中にこの町を出るのだ。再び会える可能性などあるまい。この想いを自分の中でしっかりと形作るためにも、名前ぐらいは知っておきたかった。

アルフオンスが見つめる先で、少女はその姿をだんだんと小さくしていく。金と茶の混じった髪が、日の光を反射して輝いている。少女の姿が見えなくなるまで見つめていたが、やがてアルフオンスは一つの溜め息とともにゆっくりと歩き出した。

やがて空が茜色に染まりだした頃、アルフオンスたちは船に乗るため港にいた。

ここから次の目的地、北ドーニヤ大陸に渡るのだ。

「ああ……。この時がついに来ちまった……」

「あー、すみませんねえ。私がお役に立てないばかりに……」

「こら、そこ！ これ以上その問答を繰り返したら置いてくわよ！」

乗船も間近、とにかくセルグはどんよりとしていた。頭ではわかっ
ていても……。というヤツらしい（本人談）。

リューンもリューンで毎回しつかり謝るので、この陰鬱で堂々巡
りな会話が始まるたび、ローザンはピリピリした。

「全く……。船の上でもこうなら、海に叩き落すからね！ あたし、
いつまでもウジウジしてる男って大っつ嫌い！」

「克服できねえんだからよ、しゃあねえだろ？」

「酔うのは仕方ないわ。だけど、その口を閉じてなさい！ そした
ら出るもんも出なくなるわよ。丁度いいじゃない！」

「おいおい……」

いつもなら言い返すセルグも、今回ばかりは自分に非があり、な
おかつ氣力が削がれているので無理だった。

「ま、そこまでにしてさ。ね？ ほら、次は僕たちの手続きの番だ
から」

と、アルフォンスが指差した船で、ちよつとした騒動が引き起こ
されることとなる。が、それは今知る由もなく。

「っはー、やっぱり船じゃ相部屋は仕方ないわよねー……」

入船後、ローザンが船室の寝台にボスン、と勢い良く座り込んだ。
自分で言うのもなんだが、自分達は随分と金銭面で余裕がある。
もともと個人で最低限は持っていたし、武闘大会やカジノでかなり

の額が手に入った。

だから今まで宿は男女別々だったし、食料に事欠いた時もない。だが、今回はそうはいかない。いくら余裕があっても船の料金は陸に比べて高価だし、その上、一般客船は大部屋がほとんどだ。わざわざ高級な個室を取る気にはなれない。

つまり、必然と五人が一部屋で寝泊りする事態になってしまっただけで。

「嫌がってた俺が言うのもなんだけど、十日間だろ。我慢しろよ」
「……その言葉、あんたに返してもいい？　我慢出来るの？」
「は？　何が……」

ローザンの視線が意味するものを察したアルフォンスは、超高速でセルグの口を塞いだ。

これ以上は墓穴を掘るだけだ。

（おい、何しやる！）
（あのね、またヤバイことになるよ！？　ローザンが言ってる『我慢』は絶対に……）

リネアが同じ部屋にいる。セルグはリネアが好き。
そこから導き出される答え（とローザンのニヤニヤとした勝ち誇った笑みの意味）を、アルフォンスはセルグに耳打ちしてやった。

「な、な……」
「ね？　またクルツアータみたいになっちゃうとこだったんだよ」
「あーら、何のご相談かしら？」
「て、てめえ！　いくら俺でもそれ位はわきまえてるってえの！」
「えー？　何のことかしらー？　ま、十日間よろしくね」
「く、くおのおお……」

勝てない、絶対に勝てない。

セルグとアルフォンスはようやく悟ったのだった。

その後、出航してからのセルグはおよそ見るに耐えない姿だった。よく考えればローザンの言葉に秘められたことなど、船上というセルグにとつての生死の境では、到底実行できるわけがなかったのだ。

（つーかよく考えればセルグは告白したのか……？）

基本すぎて忘れていたことを思い出し、アルフォンスはセルグにこっそりと哀れみの視線を向けたのであった。

日向の休息へ武

真っ青な空が、目に染みるくらい眩しかった。

アルフォンスが甲板から眺めた先には、一面の海が広がっている。紺碧色に輝く海面は、どんな絵画よりも美しい。

船で海を渡ること四日、一行は中ノ海の真ん中あたりにいた。

今日は波も穏やかで、船旅日和といったところか。アルフォンスとリューンは多くの乗客がそうしているように、甲板に出て、肌で大海原を感じていた。

昼食の時間になり、部屋に帰ろうと向かった甲板の出入り口で、アルフォンスは急に向こう側からきた人物とぶつかってしまった。

「うわっ！」

「つつ、気をつけるこのチビ！」

「え、あ、すみません」

ずいぶんと横柄なその男は、自分からぶつかったのに謝ろうともしない。とても大柄で、顔の左側一面に不気味な刺青を施しており、それがまた蔵つさを醸し出していた。

「ふん。……ん？ お前、精霊使いか」

「え？」

その上リューンの額にある、精霊使いの証である刺青を見るや、男は鼻でせせら笑った。

「もう精霊使いは年寄りしかいないのかと思ってたぜ。若けりや位なんかいくらでも貰えるんだな、羨ましいぜ」

「なっ、そんなわけ……！」

「アル、結構ですよー」

「リユーン！」

「へえ、認めんのかよ。自覚があるとは恐れ入ったな」

こんな時でも微笑みを絶やさないリユーン。でも、少しだけ語調を強めて言った。

「そう仰るあなたは魔法使いのようですねえ」

「ほお。よくわかったな」

「顔の左側に入れ墨をするのは、そこに界王の証をもつ、魔王への敬意の証。我ら精霊使いが額に刻印するのと同じ理由ですねえ。尚且つあなたは純度の高い魔玉をお持ちですしー。左の懷から、あなたのものではない魔力が溢れていますよー。位は中級、ですかねえ」

「——！ ふうん、コレに気づけるってことは、他の特殊力に関しても無知ってわけじゃねえんだな」

「ええ、まあ」

「まあ感知能力だけ高くても役には立たねえ。所詮、精霊使いは精霊使いだ。シエルマスの片田舎に引っ込んでな」

「……」

「なんだ、言い返さねえのか？ 見た目通りの優男かよ。おい、そのチビ剣士。こんな意気地なしが連れで大変だな」

じゃあな、と言い残すと、男は笑いながらその場を去って行った。

「……アル、不快な思いをさせてすみませんでした。申し訳ありません」

「そんな！ 何でリユーンが謝るの？」

「いいんですよー。あの方が仰ったこともまんざら嘘ではありませんしねえ」

リユーンは悲しげな溜め息を漏らした。

「それに私の霊力は親から受け継いだものですし、最初に契約を結んだ精霊と、相性が良かっただけです。……何も努力などしてないのですよー」

「そんなことないよ！ どんな職だって、努力なしで高位まで上り詰められるわけじゃないじゃんか！」

「……ありがとうございます、アル」

リユーンの笑顔が、笑顔じゃないとアルフォンスは思った。

どこか遠くに思いをはせた、憂い顔。……泣いてしまっくんじゃ、ないだろうか。

「っあー、もう！ とにかくさっきの男が全部悪いんだよ！ 二回もチビとか言ってくれたし！！ ねえリユーン、僕ってそんなにチビ？」

「えっ。……ち、小さくはないと思いますが」

……聞くんじゃなかった。

自分より拳二つ分は高いリユーンに聞いたのが間違だったとアルフォンスは悟った。

「ふふ……。そうさどうせローザンにも身長抜かれてるんだもん、チビがお似合いだね……」

「あの、アル……」

「と、言いたいとこだけど！ 僕は多分まだ伸び盛りだし、そう簡単に諦めないよ！ すぐにセルグもリユーンも抜くからね！」

「——！ ……ええ、楽しみにしています。さすがに私はもう伸びませんからー」

「うん！ さ、時間食っちゃったし、急いで戻ろっ。ローザンに怒

られちゃう」

その後、部屋に戻った二人は遅れたことでやっぱりローザンに怒られ、もう少しで昼食抜きをくらうところだった。

しかも食後に先ほどの男の話をすると、これまたローザンの機嫌が悪化した。

「ちょっと何よその男！ あたしだったら問答無用で海に叩き込んでやったのっ！！」

「ちょ、ローザン。それはさすがに……。死んじやうよ、あの人だつてさ」

「そんな奴は死んでこそ、この世のためになるのよ！」
「ローザン？」

少し短気なところがあるとはいえ、曲がったことは自他共に大嫌いなローザンだ。こんなに相手を悪く言うのも珍しい。

「いい？ そいつはあんたとリユーンを馬鹿にただけでなく、同じ魔法使いのリネアの品格もぶっちぎりで下げてるのよ」

「あつ……。そうか、そういう考えもあるよね。気づかなかった」

あの時は気づかなかったが、このローザンの怒りは最もだ。

「……私のことはともかく、同じ魔法使いとして恥ずかしいのは確かだな」

「とにかく、私はアルが怒ってくださっただけで嬉しかったですよ。

……えー、その、自分のことより先に怒ってくださいましたしね」

「アルはそういう奴だもんね。いい意味で後先考えないっていうか」

「え？ それ本当にいい意味？」

「あー、微妙かも」

「ああホラやつぱり！」

やがてむかえる夜に、誰も不安など抱いていなかった。いつも通りの夜が来ると思っていた。

異変は、夕食の直後に。

「っあー、大分体が楽になってきた」

「セルグ順応早いよね。明日なんかもう酔わないんじゃない？」

一行は夕食を終え、船室でのんびりとくつろいでいた。

「そーだといいけど。アンタ、海が荒れたりしたら無理でしょ？」
「当然」

「胸張って言うんじゃないわよ！」

「……。ローザン」

「どうしたの、リネア」

「少しずつ、船の揺れ幅が大きくなってきてる」

「「「え」「」」

「うおえっ」

リネアの言葉で、揺れを実感していないだろうに、一気にセルグの顔が青ざめた。今にも吐きそうだ。

「ちよつとー！ ふざけんじゃないわよっー！」

「リネア、そういうことはセルグの前で言っちゃ駄目だよ……」
「そうか」

「けれど……。おかしいですねえ、風はないようですが。ほら、窓を開けても何も」

「ああ？ じゃあ何で船が揺れんだよ」

風がないのに船が揺れる。

この船は乗員が暴れたくらいで揺れるほど小さくない。

「もしかして魔物!？」

「くそつ、マジかよ！ 甲板に行こうぜみんな」

「わかったわ！」

「はい」

船という不安定な場所が、アルフォンスたちを慌てさせた。
しかし、リネアはあくまでも冷静だった。

「待て！ コレは魔物とは違う！」

「魔物じゃない？ じゃあ何なのさリネア！」

「落ち着け、アル。魔物ではないが……」

「ちよつと待つて。これ……もしかして、霊獣？ 確かに強い霊力を感じるわ。しかもこの船の真下よ！」

ローザンが目を瞑りながら、周囲の力を感じ取る。感知能力の高いローザンは、誰も気づいていない霊獣の存在、その位置まで正確に看破した。

「けど、このあたりの海は霊獣の生息地じゃないわよ？」

「クジラとかにも迷子はいるからな。多分そんなじゃねえの？」

「霊獣の迷子……。あの、それは安全……なの？」

一瞬、全員が押し黙った。

「……霊獣には、人肉を好んで食べる種はいない。そして比較的おとなしい」

「ええ。こちらから危害を加えなければ、大丈夫かと」

「そっか、よかったあ。……けどさ、さっきより確実に船の揺れ、大きくなってる……よね？」

「アルっ！ それを言うなー！！」

「あーハイハイ、アンタは黙ってなさい。ねえ、船長にこのことを伝えたら？ 他の乗客が下手に手出ししたら大変じゃない」

「そうだね。けどそんなことをする人なんて……」

いないよ。そう喉まで出掛かって、アルフォンスは昼の出来事が唐突に思い出された。

「あの魔法使いの人、大丈夫だよ……ね？」

「……リユーン、どう思うよそいつ」

「まず霊獣と気付けるかどうか……。ですが、あの方は感知が苦手でしょうしねえ。言動から推測出来ます」

あの男は自分の感知能力の高さを嫌った。だが、真実を言えば自分の感知能力は、それほど高くない。

あれぐらいは一人前の位を授かる力さえあれば、大抵が感知できる。あの男もそれは知っているだろうが、自身に備わっていないものを妬む心から、つい言ってしまったのだろう。

このリユーンの意見で、一行に緊張が走る。

「ならば事は急を要するぞ。水性の霊獣は特に霊力が高い。恐らくこの船など一撃だ」

「うおっ、マジかよ！ そういう奴に限って半端な魔力しか持ってねえのがオチなのに！」

「リネア、あたしたちは船長のところに行くわよ！ アルたちは甲板に行ってみて！！」

「うん！」

二手に別れ、五人は全力で走った。
アルフォンスたちは甲板に到着すると、その扉をぶち開ける。

「ん？ 何だ、お前らも来たのか」

「……っはあ、ぜえ……っ、ちよっ、待って……！！」

「残念、コイツは俺がもらった。力も強いみたいだし、いい魔法薬の材料になる」

「待ててめえ！ ここは海のと真ん中だって分かってんのか？！」

「一撃で済ませりゃいいだろうが。俺にはこれがある。問題ねえ」

男は懷から魔石を取り出した。手のひらに収まる大きさだが、男の魔力を受けて紫紺の光を放っている。

風の中だというのに、次第に揺れが大きくなる。海面下に巨大な影が浮かび出した。

「さあ……来い！」

男が魔石を強く握りしめ、天高く掲げた。光がどんどん強くなっていく。

「——お止めなさいっ！！」

アルフォンスたちも驚くほどのリユーンの一括に、男も動作を止めた。

「ちっ。何なんだよお前ら」

「あなたの勝手な行動で、この船の乗客全てを危険に晒しているのですよ！」

「だから一撃で済ませるって言うてんだろっが。それとも乗客が魔物に喰われたほうがいいとも言っのかよ？ 能無しは黙ってな」

「黙るのはそつちだ！ 驕るのもいい加減にしろよ！！」

アルフォンスの怒号に、隣にいたセルグは思わずたじろぐ。先ほどのリユーンに感じた驚きとは全く別種の、そして比べ物にならない何か、セルグだけでなく、その場にいた全員の動きを縛った。

「そもそも魔物だからって全部退治すべきじゃないだろ！？ まず互いに無傷で済ませることが一番のはずだ！ 絶対に魔物が危害を加えるってなんでわかるんだよ！？」

「……っガキめ。お前の理想論がズナよ」

「——理想論、そう言い切るアンタは最低ね」

「この場をお前に預けることはできん」

いつの間に来たのか、ローザンとリネアがアルフォンスたちの後ろにいた。

「船長には全部伝えたわ。他の乗客が慌てないように、部屋を回るぞよ」

「お前も魔法使いなら、場を見極めろ。……恥さらしめ」

「んだとお！？ てめえ、何様のつもりだ！！」

「リネア、今は構ってる暇ないでしょ。リユーン、あたしが補助するからアンタが交渉して」

「わかりました。では早速」

「おい！ 何でその野郎が交渉をする！？」

交渉とは、言の葉が通じぬ生命との意思の疎通をすることだ。最適な者は、力の属性率が高い者。

もう船の揺れが大き過ぎて、まともに立ってられない。霊獣が船のすぐ下まで来ているのだ。

「私の方が適している。——それだけですよ」

リューンは微笑むとともに、呪を唱えだした。

「そんな……まさか……」

「そうだよ、今回は霊獣。あんたの専門外だろ？」

「……………ふざ、けるなっ」

「あん？」

「例え霊獣だろうが、俺に調伏出来ないことなどない!! お前らはどいている!!」

場を安定させるために風を喚んでいたローザンを突き飛ばし、男はリューンに魔石を向けた。

「きゃ!?!」

「あっ、てめえ! 待てっ!!」

「この目障りな精霊使いめ!」

男の目にはリューンしか映っていない。またリューンも詠唱に意識を集中させているため、事に気づいていない。

「リューン!!」

アルフォンスが叫んで、男が魔玉から術を放とうとして。セルグがローザンに手をかけて立たせ、リューンがこちらを向いて、リネアが男に杖の先を向けたその時。

「——全員何かに掴まって下さい!!」

リューンが叫んだ。

同時に巨大な生き物が起こした波を受け、船はまるで水面に浮か

ぶ木の葉のように揺れる。甲板は激しい波に洗われ、もう少しで全員が海に飲み込まれるところだった。

「ぷはっ！！」

「アル！」

「ローザン！　よかった無事なんだね。みんなは！？」

「俺は無事だ。けど、気分は最悪だ」

「問題ない」

アルフォンスたち四人は、各自の無事を確かめあった。

リユーンのおかげで、とっさに手すりなどを掴むことができ、この光り輝く民の守護を受けたから、ずぶ濡れになりながらも、自分たちは無事でいられるのだ。

「——水の精霊、か」

リネアが空に消えた光を見ながら呟く。

「ちょっと、リユーンとあの男は！？」

「私たちも無事ですよー。それより、ほら」

頭でも打ったのか、気絶している男を抱えたままのリユーンが海を指差した。

「……綺麗」

ローザンの呟き以外、誰も声を発せなかった。
悠々と海に行くその姿は、まさに雄大の一言。霊獣は水龍だった。
この星月夜に煌めく鱗は、銀。

「……………。すつげえな」

「うん。あんなに綺麗な生き物、初めて見た……………」

船の横を並行して進む霊獣は、チラチラとこちらに視線をむけている。そうやって動くたびに鱗が月光を反射し、七色に輝く。

霊獣がこの船に興味津津なのは間違いない。

「害はないとは言え、転覆の危険がありますし……………」

「やはり交渉するしかないだろう。放っておくとまた余計な奴が出てきかねない」

これだけ巨大だと、霊獣に対する知識がない人には、恐怖しか与えまい。

「ですねえ。ではローザン、よろしくお願いします」

「わかったわ」

こうしてリユーンは、無事に霊獣との交渉を終えた。精霊族を介して、意思の疎通を成功させたのである。

「どうやら無事にお帰りいただけのようですよー」

リユーンがそう言うと同時に、龍は天高く吼えた。そうして一度だけこちらを振り返った後、深く深く海へと潜り、再び姿を見ることはなかった。

「やあつと終わったな。俺、酔ってるヒマもなかったぜ」

「凄い揺れだったのね。……………ん？」

ふと水浸しになった床をに目をやると、キラキラと光るものを見

つけた。拾い上げてみると、なんとそれは七色に輝く龍の鱗だった。

「ねえみんな！ 見て、凄いの見つけた！」

「あら、良かったじゃない！ それって霊力の塊よ」

その言葉に、アルフォンスは驚いて手の中の鱗を見る。リユーンとローザンに必要なかと聞いてみるも、二人ともアルフォンスが持つと言う。さらにリネアも。

「霊龍の鱗は、妖力を自ずと防いでくれる優れものだ。持っていて損はない」

「へえ、自動で防御もできるんだ。……じゃあ遠慮なく！」

やがて騒動が一段落して、しばらく後。

男が気絶したのはカジノと同じくリユーンが術で強制的にやったとか、魔石は波にさらわれて海の底だとか、色々なことが判明した。リユーンがいつもの笑顔で『あれはですねー』と説明をした時は、見事に全員ひいた。

（リユーンは怒らせたらいけない人物だ……）

四人の心が一致した瞬間であった。

日向の休息へ参る

「うっわあ、凄くいい匂い……！」

一行は薬草の匂いにむせ返る、世界最大の薬草市に訪れていた。ここは北ドニーヤ大陸の西に位置する周国、メリコの首都トールワだ。

年に二回開かれる市には、世界中から沢山の人々が押し寄せる。薬草や香草の取引を商いとする人、様々な理由で買い求める人、目的はさまざまだ。

そんな中で一行はこの地に訪れたのだが、それには訳があった。事の発端は、ローザンの一言だ。

「そういえば、そろそろメリコで市が立つ頃よね。今回はあたしの幼馴染もトールワで店を出らしいのよ。よかつたら行ってみない？」

「ローザンの幼馴染？ その人もルマなの？」

「そうよ。もともと小間物屋の娘だったんだけど、薬草の知識がずば抜けててね。遠縁のメリコの薬草商の養子になったの。今年から店を正式に継ぐんだって」

「じゃあ行こうぜ。トールワは精霊陣のあるニーチェから近くて、楽に移動できるし。一度は行って見たかったんだよねあ」

「おやー、意外ですねえ。セルグは薬草に興味が？」

「や、市そのものに興味が……。って、まあいいだろ、そんなことは。行くんだろ？」

「そうしてくれると嬉しいわ！ あたしも会うの五年ぶりなの！」

「じゃ決まりだね！」

こうして行き先はすぐ決定したのだが、リネアが言ってはいけな
いあの一言を言ってしまった。

実は本人以外気づいていて、話を円滑に進めるため黙っていた一言を。

「……いいのか？　まずは陣のあるサン・ツールまで、船を乗り継いでいくが」

そこでセルグが音を立てて固まったのは、言うまでもない。

今、自分たちは北ドーニヤ大陸の南西部にいる。市が開かれるトーワや、ドーニヤ帝国の首都ニーチェがあるのは北東部。

徒歩なら数週間かけて大陸を横断しなければならないが、船で二日かけて北に上れば、ドーニヤのサン・ツールと言う町に精霊陣がある。ここからニーチェに一瞬で移動出来るのだ。そのあとトーワまでは徒歩で一日ほどで到着する。

「むり、無理だあああつっ！！　あそこは波が高いことでも有名なんだ、行ってもいいけど俺を置いて行け！　そんな海で船に乗れるかっ！」

「あんたねえ、いつまでも腑抜けたこと言ってるじゃないわよ！

一度言ったら守りなさいよ！」

「るっせえ、これはもう脊髄反射なんだよ！」

……などという舌戦を繰り広げた後、当然のごとくセルグが打ち負かされ、全員でトーワに行くことが決定したのであった。

トーワに到着後、すぐにローザンの幼馴染の店は見つけられた。その店はメリコでも有数の規模を誇り、誰に尋ねても場所を教えてもらったのだ。

「ローザン！！　本当に来てくれたのね！」

「ヴィオーラ！　久しぶりね！」

十年の歳月をこの北の地で過ごしたせい、ヴィオーラという人物は、ローザンの蜂蜜色の肌より、だいぶ薄い色をしていた。

服装もこの地域の衣装を着ていて、一見して彼女がルマ出身だとわかるものは何もない。

しかしローザンとはしゃいでる様子を見ると、ああ、やはり二人は同族なのだと思われた。

それはどことなく似ている顔立ちであつたり、今も失わない独特の空気がそうさせるのかもしれない。

彼女は薄い董色の髪と瞳をしており、商人とは思えない儚さがあった。しかしその印象は、すぐ始まった元気なおしゃべりで、見事に吹き飛ばされたのだった。

「ヴィオーラ、紹介するわ。一緒に旅をしている仲間なの」

「まあ、あなたが旅を！？ あなたが一族を出るなんて思いもしなかったわ。よつぽどのがあつたのね。長と喧嘩でもしたの？」

「あのね。あたしそこまで単純じゃないわよ」

「やあねえ、冗談よ。さ、ローザンのお友達なら大歓迎よ。ご滞在は我が宿にどうぞ。薬草商と兼業してるのよ」

店の表口から一行は入店していたが、その広さに実は圧倒されていた。宿も兼業しているというなら、豪華さはもちろん驚きだが、この広さは納得がいく。

「え、そんな。大丈夫です、宿は自分たちで用意できますから」

「遠慮しないで。この店の主は私だもの、誰にも文句は言わせないわ」

「いや、文句つつーか、なあ？ ローザン」

「んー、ここは甘えちゃわない？」

「是非そうして。ローザンを連れてきてくれたお礼よ。私、会えて本当に嬉しいの」

商人としての優秀さの一つ、押しの強さを見せた一方で、無邪気に笑う彼女の笑顔に負け、アルフォンスたちはここでお世話になることにした。

こうして各自、部屋に案内されたわけなのだが。

（どうみても……最高級だよ。三ツ星だよこの部屋！！）

第一に、一人部屋だというのに部屋が三つもある。最初の部屋にあったソファアの大きさに、新しい形のベッドかと思ったくらいだ。その奥の扉は浴室へ……と思いきや、これまた特大なりビングルーム（らしき部屋）。おそらく最初の部屋は応接間で、ここはプライベートルームなのだろう。……多分。

スイートなんかと生まれてこの方、縁のない自分には、何がなんだかわからない。

そしてそこから更に続く左右の扉。

右の扉は、この部屋だけで十分だと思える寝室に繋がり、当然ながら窓からの景色も最高。左の扉は、下手したらここで一部屋とれるくらいに広い浴室へ。

（……………ああ、駄目だ耐えられない）

建物自体が豪華なので、ある程度、部屋も豪華だろうと予想していた。だが、これは予想の範疇を超えて……いや、超えすぎだ。

（こんなただっ広い部屋に一人で寝転がっても緊張するだけだし！
僕には無理だよ……）

こんな部屋が似合ってしまったいそうなローザンやリネアはいい。二人はいたって優雅に過ごしてそうだ。リューンも驚きはしそうだが、

普通に過ごせそうだ。

セルグは……。セルグは……………？

「リユーン、お邪魔しまっす！」

アルフォンスは優雅なんて言葉とはかけ離れた勢いで、リユーンの部屋の扉をぶち開けた。

「おやー、アルもですかー」

「『も』ってことは……………」

ちろっ、と視線をリユーンの方かいに座る人物に動かした。

「よっ」

アルフォンスの予想どおり、そこにはセルグがいた。

セルグも自分と同じく委縮し、リユーンの部屋に避難するだろうとアルフォンスは踏んだのだ。

しかしこの豪華絢爛な部屋に萎縮する様子はなく、むしろ寛いでいるように見えた。しかもお洒落なカップで紅茶なんか飲んでいる。

「あ、あれ…………？」

おかしい。予想では『俺こっぴどい派手で堅っ苦しいの駄目なんだよなー』とか言ってるもんだと…………。

「アル、どうした？ 入り口でボケーンと突っ立って。入れよ」

「あ、う、うん」

「アルも紅茶をどうぞ。備え付けのを淹れたんです」

「うん。いただきます」

そうか、この紅茶は備え付けか。自分の部屋は良く見なかったしな。

（ま、それならお洒落なカップでセルグが飲んでも仕方ないな）

そう思った瞬間だった。

「けれどセルグも器用ですねえ。紅茶を淹れる手際、見事でしたよー」
「ぶっつー！」

アルフォンスは思いつ切り紅茶を吹いた。

「アル?! どうした、気管に入ったのか？」
「げ、げほっ、違、……」

（ちょ、セルグが紅茶!? いや、淹れるだけなら僕でも出来るし、おかしくはないよ。けど褒められるってことは淹れ慣れてるの?! それも上手そうなりユーンが褒めるくらいに!?)

思考時間、ゼロコンマ一秒。

あまりにも自分の印象とかけ離れたセルグの実態に、アルフォンスの脳みそはものすごい速さで回転した。

「へ、へえ……。この紅茶、セルグが淹れたんだ？」
「おう。夕食まで時間つぶそうと思って来たら、リユーンがお茶っ葉見つけたからよ。じゃあ淹れるか、ってことになって」
「さいですか……」

何でそこでセルグが淹れることになったんだろう。紅茶を淹れるのが趣味とか？ ……せめて緑茶なら似合うのに。

「しかもこの銘柄だったから、懐かしくてよお。柄にもなく嬉々としてやっちゃったよ」

「へえ。何か思い出があるの？」

「ああ、お袋が好きなやつなんだよ。俺の家でお茶つつたらコレ、ってくらいに」

「では、その作法は母君仕込みですかー」

「おう。親父もよくやらされてたけど、どうしてもお袋に及第点もらえなくて……。いつも『ポットに茶葉とお湯を入れるだけだろ』とか愚痴こぼしてたっけな」

ふ、とセルグの目が優しくなる。

幼いころから修行に出ているために、つい両親を思い出して郷愁の念に駆られるのだろう。

「セルグって何歳から修行に出たんだっけ？ だいぶ小さい頃って言うってたよね」

「ええと……、八歳だな。十年前の『大災の日』がきっかけでお師匠と出会ったから」

「ああ、あの世界中で魔物とかの異常行動が見られた日か。……って、ちよつと待って。確か修行に出てから一度も家に帰ってないって言うってたよね!？」

「そうだぜ。それがどうかしたか？」

どうかしたじゃないでしょ。あまりにもセルグがあっけらかんと言うもので、アルフォンスは二の句が継げずにいた。

「十年も帰っていないのですかー。寂しくないのですか？」

「そりゃ最初は寂しかったけどな。慣れればどうってことねえよ。修行が厳しくて帰る暇はなかったし、楽しいことも沢山あったしな」
「セルグは旅の経験が豊富なんですねえ。羨ましい」
「いや、アスケイル国内を巡っただけだから、豊富ってほどでもねえよ。……山籠りなら……たっつくさんやったけどな」

今度セルグの目は、明後日の方向を見た。……きつと色々あったのだろう。色々。それを察したアルとリユーンは深く突っ込まないことにした。誰にでも触れられたくないことはある。

（クルツアータでも思っただけで、セルグのお師匠様ってかなり予想外……）

人は見かけによらない、って本当でした。

翌日、一行はヴィオーラに見送られて、市へ出かけた。

「今日は一日たっぷりと遊ぼうよ」

「そうね！」

「そんじゃあ、トーフ観光と行きますか！」

世界有数の規模を誇る薬草市は、まさに見事の一言だった。

世界中の薬草や香草が集まっているため、五人それぞれ、懐かしむものも多かった。

「あ、これってよく村で集めたよ。擦り傷とかに効くから、外で遊ぶときは必需品だったんだ」

「俺も俺も。これって寒くても生えるし食べれるから、冬は重宝するんだよな」

「そっなんですかー。私は初めてみました……。アスケイルでは馴染み深いものですねえ」

「……これはユミギだ。重荷アスケイル大陸やジーパに自生している」

「へえー。シエルマスでは聞かない名前ね」

様々な出し物や店が出ていて、市はとても楽しむことが出来た。
……が、ふと気づくとアルフォンスは一人になっていた。

（う、嘘お！？ この年で迷子！？）

ヴィオーラの店に戻ればいいだけだが、何とも情けない。
と言うか……探せるだろうけど道がわからない。

アルフォンスがちよっぴり泣きたくなった、その時。

「あ、あなたは確かボワールで……」

「え？ —— あっ！ 君はあの時の……！」

アルフォンスに声をかけてきたのは、ボワールの町で荷物を拾ってくれた少女だった。

「また会えるなんて……。あれ、けど君はどうやってここに？ 次の船は三日後だったし、同じ船には乗っていなかったような……」

「はい。私はお会いした日の夜、組合の専用船で来たんです。いつもは精霊陣を使わせてもらうんですけれど」

（え。てことは……）

少女の言葉を聞き、アルフォンスの動きが急にぎこちなくなる。

「でも帰る直前、急に使えなくなつて。何でも精霊使いの組合に、賢者様の命令で捜査が入ったとか」

「っあー……。あれは大変だった……。よね」

「ごめん僕ら当事者です。けどリューンたちを救うためだったし許してね！……と胸の内で謝るしかなかった。

「そういえば君はどうしてトーワに？ やっぱり薬草市に？」

「いえ、トーワには私たちチルト派の支部があるんです。私はそこで修行をしています。シエルマスには所用で行っていましたので」

「そっかあ。それじゃ陣が使えないのは帰れないって事だし、本当に大変だったね」

「ええ、びっくりしました。あ、そう言えば宿泊先はお決まりですか？」

「大丈夫、決まってるよ。ヴァイオレットっていう大きいところ」

「まあヴァイオレットに！？ 凄いですね、あそこはメリコで、二を争う高級宿なのに！」

「や、仲間の友達が経営してて、運良く泊めてもらえたただだよ」

男のプライドは、キラキラとした素直な賞賛の目には無力。

（間違っても『泊まってみたくて』とか『余裕あるからね』なんざ言えない……！！）

格好つけようとしても、この瞳の前には無理だ。アルフォンスは取り繕うことを早々に諦めた。

「あの、そのヴァイオレットのことで聞きたいことが……」

「はい、何でしょう？」

——やっぱり、躊躇してしまう。これは『十六歳』の意地。

（旅の恥は掻き捨て、って言うだろ！ 諦める自分！！）

「……………場所、わからなく、なつてさ……………」

少女はキョトンとして、目をパチクリさせた。

やがて意味を理解すると『じゃあ一緒に行きましょう』と、また太陽のような笑みを浮かべてくれたのだった。

日向の休息〈肆〉

「そう言えば自己紹介、まだだったよね。僕はアルフォンスって言うんだ」

「私はニーナと言います。チルト派第三支部所属の僧侶です。まだ見習いですけど」

照れつつ『早く一人前になりたいです』と言うニーナは、とても可愛いらしい。

（うわ、急に意識してしちゃった）

参ったな、とドキドキしていたら、前方から見知った姿が駆けてきた。

「おい、アル！ やつと見つけたぞ」

「セルグ、リネア！」

「帰ったらローザンの説教を覚悟しておくんだな」

「うつ……。あ、二人とも、こちらは道案内してくれた……」

「はじめまして。ニーナと言います。チルト派の僧侶です」

「……。そうか。仲間が迷惑をかけた。礼を言う」

ニーナとリネアの視線がぶつかった瞬間、バチバチツと音がしたような気がした。どこか雰囲気も剣呑になる。

「いいえ、迷惑だなんて。でもまさか魔法使いの方がいらっしゃるとは……」

「僧侶と違って魔法使いは、見聞を広めるため外に出ることを厭わないからな」

ニーナは笑顔だし、リネアはいつも通りの無表情だ。けど、いや、だからこそ恐い。

アルフォンスはどうにかしてくれとセルグに泣きつくものの、素気無く断られてしまった。しかし、それも無理はない。僧侶と魔法使いの確執は子供でも知っている世界の常識なのだ。

「あら、自分勝手な方が多いだけでは？ 自由奔放も度が過ぎると大変ですよね」

「魔法使いはどこかの支部に籍を置きさえすれば、後は自由だ。どこぞの職がやっている、権力集中を防ぐためにもな」

「なっ……！！」

「世界を知らずに何故真理が理解出来る？ 変わらぬ場所で祈り続けるても、変化は訪れない。そんな『教え』など、全く理解できない」

「……っ！！」

この勝負、もはや勝敗は決したようだ。

「せめてもう少し実力を伴ってから批判を述べろ。不愉快だ」

トドメの一撃。

あまりにも辛辣な勝者リネアの言葉に、敗者ニーナはぐっと喉を詰まらせた。その瞳は心なしか潤んでいる。

（やーばーいいっ！！）

アルフォンスは冷や汗ダラダラだ。

リネアは仲間だし、ニーナは親切に道案内してくれた（しかも一目惚れした）人だ。

だから一方だけを庇えないし、両方嫌みの応酬をしたので『どっ

ちもどつち』の状態だ。

（けど原因は、迷子になった自分なんだ！　しっかりしろ！！）

まさかニーナをこのまま泣かせるワケにもいくまい。

「あ、あのさ！　えーと、ニーナも宿に来ない？　他の仲間も紹介するよ！　その、ムリには言わないけどさ、もし良かったら……。ねえセルグ！？」

「お、おう！？」

急に振られてセルグも驚くが、何とか慌てながらも言葉を返す。

「そ、そうだな。このアホ保護してくれた礼もしたいし……」

「ちょ、アホって僕！？　しかも保護ってなんだよ保護って！」

「その年で迷子になるようなヤツあアホでいいんだよ！　リユーンが人捜しの術を使えたからいいようなものの、面倒かけやがって！」

ギャンギャンと今度は男二人の喧嘩が始まると、ニーナはまたキョトンとした顔をした。

「あの、……」

「——じゃないか！　って、え、あ……。ごめん、何かな？」

「……あの、宿にお邪魔させて頂いてもよろしいですか？」

「えっ？　うん、もちろんだよ！」

——暖かいな。ニーナは思った。

（とても愉快な人たちだし。せっかくだし、他の方にもお会いしてみよう）

出会いは大切にするべきだと教義にもある。確かに自分から行動すれば、いい友達を得られそうだと。

それは魔法使いが言ったことと同じ、というのは引つ掛かるけど――。

そんなニーナの心情を読んだのか、リネアは宿とは反対方向に足を向けた。

「おい、リネア？」

「……夜には戻る」

出逢ったばかりの頃には見た、彫刻のような冷たい顔。もう聞かないと思ってた、全てを拒むような堅い声色。

そんなリネアを追いかけることは、誰にも出来なかった。

宿に戻るや否や、アルフォンスはローザンの雷、もとい説教を喰らった。リネアによるぎこちない雰囲気も、すっかり忘れていた雷のお陰で吹っ飛んだ。

「次に迷子になった時は探さないわよ、肝に銘じておきなさい！」

「は、はい……」

「えー……。ローザン、私のほうで何とか出来ましたし、今回はそのへんで……」

「本当にリユーンのお陰よね。ま、だから今回はこのへんで勘弁してあげる。……アル、何か言うことは？」

逆らえない。反論なんか不可能だ。なんか院長先生より怖いんですけどローザンさん。

「ごめんなさい僕が迂闊でした以後気をつけますお願いですから許して下さい」

「よろしい。……あ、ごめんね。見苦しいとこ見せちゃって」

「あ、いえ……」

「いまお茶を淹れるから、ゆっくりしてって？」

オホホ、と取り繕う気満々の笑みを浮かべつつ、ローザンはお茶の用意を始めた。

「念のために聞くけど、リネアはいつもの単独行動よね？」

一瞬、場の空気が固まった。

けれど今までリネアのことを聞かず、尚且つ『念のため』と言うのは、全部わかってるのだ。リネアがニーナとの職絡みの確執により、一緒に戻らないのだと。

「つたりめーだろ。リネアが迷子になった日にや太陽が西から昇るつての」

「ふふっ、全くですねえ」

アハハとセルグたちは笑ったが、アルフォンスはこめかみを引きつらせた。

流石に自分がダシにされているのはわかる。

（くそっ、何で迷子になったんだよ自分……！！）

いつか見返してやりたいが、そんな時は永遠に来ない気がする。

「ニーナって言ったわよね。いまいくつ？」

お茶をカップに注ぐローザンが、後姿のままで言った。

「私は十五歳です」

「私より十も下ですかー。こう……何か、自分が年寄りになった気がしますねえ」

「あ、リユーンで二十五なんだ。けど二十代で年寄りってのは……」
「いやー、結構思うところがあるんですよー。アルも私の年になったらわかりますよー」

「ふーん……？」

——来年は二十歳になるローザンが、後ろで動揺してお茶をこぼしていたのは誰も知らない。

お茶を飲んで一服した後、四人は夜に帰ると言ったりリネアを待つ間、再び市に出向くことにした。今回は二ーナの案内付きだ。夕暮れの中、地元の人オススメの店を案内してもらっていた。そうしてしばらく歩いていると、今度は薬効が売りの店が建ち並ぶ場所に出た。

「ここは少し雰囲気違うのな」

「ええ、ここはこの市でしか買えないような、珍しい薬草が集まります。だから、縋るような思いでいらっしゃる方が多く……」

死から逃れるために、最後の望みを託し、この場所に集まる人々。道理で賑やかな中心部とは雰囲気が違うはずだ。

「あら？　ねえ、何かしら、あの人だから」

ローザンが指差した先に、確かに人だかりが出来ていた。そこをよく見てみると、知った姿が……その中心いた。

「おいおい、リネアじゃなか！？」

リネアの姿を確認するや否や、セルグはすぐに駆け出していった

しまった。それを追ってリユーンも行ってしまう、ローザンがため息をつく。

「もうっ！　ねえニーナ、あたしも様子を見てくるわ。あなたは？」

「え……」

「あの、ニーナ。もう遅いし、今日はこれで……」

「……………いえ」

「ニーナ？」

「行きます。主もお困りの方を放って逃げることなど赦しません！
「いい返事ね。じゃあ行きましょ！」

騒動の渦中にいたリネアは、店の前で一人の男性と相對している。

「おいリネア！　一体どうしたんだよコレ」

「大丈夫ですかー？」

「セルグ、リユーン。……………みんなも来たのか」

リネアが人の輪を押しつけて近づいてくる、仲間たちに目を向けた。

一瞬、それまでの鋭さがなくなったが、ニーナを見つけて、それは瞬く間に戻ってしまった。

「リネア、何があつたの？」

「……………もう終わった」

「おいアンタ、こっちはまだ……………」

「くどいぞ主人。先ほと言ったことが全てだ」

リネアと相對していたのは、どうやらこの店の主人らしい。商人というより、その体軀は職人のような儼つい風貌だ。

「だが……」

「いい加減にしろ。同じことを何度も言わせるな」

「……。わかった、もう行ってくれ」

そこでリネアが人の輪から出た。

雰囲気は先ほど別れた時のまま、いや、それ以上に峻険かもしれない。

ローザンとリユーンはリネアのこんな姿を初めて見るため、些か戸惑っているようだ。

「リネア、大変だったね。……何があったの？」

「……アル、終わったことだ」

リネアは誰とも顔を合わせようとしない。纏う空気が『放っておいてくれ』と言っている。

「リネアさん、そんな言い方、酷いです！ あなたを心配して言っているのに！」

「……。お前には関係ないだろう、僧侶」

「わ、私にはニーナという名前が……」

「お前は私の名前を呼んでも『魔法使い』としか見ない。ならば私もお前を個人として認識する必要はない」

「……！」

その指摘に、ニーナの表情が凍りついた。

「所用がある。帰りは遅くなるが気にするな」

「あつ、リネア！」

アルフォンスは手を伸ばすが、リネアの手を掴むことはできな

った。

「……。あの、私が……」

「……難しい問題ですからねえ。ゆっくりでいいんじゃないですか？ もう暗くなつて来ましたし、帰りませんか？」

「そうね。じゃあ、ニーナを送つてきましょう」

「え？ そんな、大丈夫です」

「遠慮すんなよ。女の子一人を、夜の町に放り出すワケに行かねえだろ」

「え、あ……。ありがとうございます」

（暗くて良かった！）

そう思ったニーナの顔は、セルグの何気ない気遣いの言葉に、真っ赤になつていた。

ここに四角関係の火蓋が切つて落とされたのだが、気付く者は一人としていなかった。

しばらく歩いたところで、ニーナが暮らす僧房に到着した。ここは女性の僧侶が共同で暮らす建物だ。

「ではここで……」

「ちよつと待った」

「え？」

帰ろうとしたニーナを止めたのはセルグだ。近くの植え込みを睨みつけている。

「さつきからチヨロチヨロと……。何の用だ？ 出てこい」

数秒の間、臆したのか、相手は動かなかった。

だが意を決したように思い切りよく飛び出してきたのは、まだ幼い少年だった。

（ルディック？）

月明かりの下、茂みから出てきた少年。その容姿は、村で弟のように可愛がっていたルディックそっくりだった。

「なんだ、ガキか。どうしたんだ？」

「……、あの……」

セルグの問いに、少年は言葉を詰まらせる。

別に何も気にしなくていいのに……とアルフォンスは思ったが、少年の出で立ちを改めて見て、ようやくその理由がわかった。

少年は浮浪児だ。

親もなく、アルフォンスのように育ててくれる孤児院もなく、一人で生きること余儀無くされた社会の被害者。

擦り切れた服、ボサボサに汚れた髪。こんな格好の少年に対しての風当たりなど、容易に想像がつく。

「……。ねえ、君の名前は何て言うの？」

「えっ？」

「僕はアルフォンスって言うんだ。よろしくね」

差し出した右手を見て、少年が動揺する。

——こんなの、酷い。

「え、えと……。オレはカイです」

少年はおずおずと右手を差し出し、アルフォンスの手を握った。

「カイか、よろしくね。僕たちを追ってきたんだよね。何かあるのかな？」

「あ、はい。その、……」

「ゆっくりでいいよ。待ってるから」

「……っ」

——酷すぎる。

少年が言葉を探すのは、相手の気に障ることを言わないため。保護者のいない彼らは、そうやって身を守るしかない。相手の顔色を伺いながら生きなければ、無用な暴力を振るわれてしまう。いや、存在するだけで被害を受けることだって。

（そんなの、この子達のせいじゃないのに）

もしかして自分も、カイと同じ運命を辿っていたかもしれない。そう思うとアルフォンスはやりきれない気持ちで一杯だった。

「……あ、の。お兄さん達は、あの人の、知り合い……なんですよね？」

「あの人？」

セルグが聞き返したら、少年は面白いくらい縮み上がった。

「セルグ、ここはアルに任せましょ」

「……おう」

怖がられたことがショックだったらしいセルグは、肩を落として数歩下がった。

「あはは、大丈夫だよ。みんな優しい人だから。ね、カイ」

「あ、俺の名前……」

「いきなり呼ばれるの、嫌だった？」

少年はフルフルと首を横に振る。――心なしか、笑っているようにも見える。

「じゃあカイ、あの人ってどんな人のことかな。教えてくれる？」

「うん。……あの、黒い髪、すごい綺麗なお姉さん」

リネアが。

少年の説明で思い当たる人物は、一人。

「うん、その人は僕たちの仲間だよ。リネアって言うんだ。リネアがどうかした？」

「……さっき、市で……」

「市で会ったの？」

「そ、そうなんだけど……。そうじゃなくて……」

「？」

「……ありがとうございます、って言っていないから」

「え？」

緊張がとけてきたのか、少年は口調がだいぶ柔らかくなった。アルフォンスの右手を強く握り締める。

「さっき、市で盗みをしたんだ。……けど、バレて捕まって、たくさん殴られて、もう死ぬんだって思った……っ」

「……！」

「けどお姉さんはそんなオレを助けてくれたんだ！　すごい回復術だっけかけてくれたし、周りの人に色々言ってくれたり……っ」

やがて少年は、大粒の涙を流し始めた。

先ほどリネアが市で騒動に巻き込まれていたのは、この少年を助けたからだったのだ。

「あんなこと俺なんかにくれたの、お姉さんだけなんだ……！」

アルフォンスの後ろで、誰かが息を呑んだ。

日向の休息〈伍〉

道々、アルフォンスたちはカイから市での仔細を聞いた。

あの場所が集まる品々は、市の中でも特に高値で取引される。うまくいけば、一カ月は食いつなげる金銭が手に入るといふ。そのためカイのような生活をしている子供らは、危険を承知で盗みに走るというのだ。

「なーんか……。やりきれないわねえ」

「いいんだ。ありがとう、お姉さん。この暮らしも、もう慣れたから……」

「カイ君は強いんですね。そう言えば、リネアはどうやって騒ぎを鎮めたんですかー？」

「あ、それ僕も興味ある。リネアだしさ、何か周囲が絶句するようなこと言ってる」

「ええと、全部は覚えてないんだけど……」

カイが記憶を手繰り寄せるように、目をキョロキョロさせた。

「オレは捕まって店主に殴られてただけど、急に止まったなと思ったら、お姉さんがいたんだ。女の人なのに、簡単に店主の手を掴んで止めてた」

（まあ、武闘大会の覇者だしな……）

先ほど見た店主を思い出す。体格はかなり良かったし、力もありそうだった。

普通ならリネアのような女性が、その拳を止めることなど出来ない。

「店主が怒ってたけど、お姉さんはオレに回復術をかけてくれた。その後、『こいつはコソ泥だぞ！』って怒鳴った店主に……」

カイの瞳はその時の嬉しさ——いや、そんな簡単な言葉では言い表せない感情も思い出し、再び潤んできていた。

「『そうだな。だがコソ泥を生み出す土台、国や地域を保っているのはお前たちだろう。責任はお前たちにもある』って……」

コソ泥をするのは、生きるため。捨てられた理由なんてわからない。

お姉さんは、そんな状況が『いけない』って言うてくれた。

「『そもそも子供を捨てる親が悪い。そんな状況を作り出す国が、民が悪い。——この子供のように、ただ生きるものに罪はない。必要以上に罰を与える理由もない』……そう、言うてくれたんだ」

全部覚えていない、と言ったものの、カイはリネアの言葉全てを覚えていた。

それだけリネアは鮮烈な印象を与えたのだろう。方々から溜め息混じりの驚嘆がこぼれる。

「あの、お姉さんが言ったの、それだけじゃないんだ」

「え？」

「……オレたちも、悪いって。『お前のような立場の子供を生み出した罪は、確かに大人にある。しかし、盗みなどの罪を重ねていいわけではない。店主はやり過ぎだが、盗んだら罰を受けるのは当然だ』」

「『……』」

「『生まれを呪いながらも這い上がれ。罪を犯せばそれだけ人に見捨てられる。それが世の道理だ』……だから、働けって。それもあの場で店主に頼んでくれたんだ」

「ええっ!？」

「お兄さん達がやってくる直前だよ。店主も『確かに浮浪児相手だと思っただけでやりすぎた』って言っただけで、オレが働くの認めてくれたんだ。話してみると、……優しくった」

「そっか……」

そう言えば自分たちが到着した時、リネアと店主は喧嘩腰ではなかった気がする。

(何か違和感があると思ってたんだよね……)

リネアは自分たちの姿を見て、店主との話をムリヤリ打ち切っただけなのだろう。

やがて宿が見えて来ると、それまで順調だったカイの歩みは、次第に鈍くなってきた。

(……そう簡単には行かない、か)

「ねえローザン、リネアを……」

「ええ、わかったわ。裏口にいてね」

「あいよ。任せたぜ」

「え？ あの……?」

会話についていけないらしく、カイが困惑した顔でアルフォンスの袖を引っ張った。ニーナも話がわからない、と言った風だ。

「えー、カイ君はこの宿に入るのは、緊張してしまうでしょう?」

ローザンがリネアを呼んだできてくれますから、待っていて下さいねー」

「……」

「そっちのが気兼ねしなくていいだろ？」

リユーンとセルグの言葉に、よほど萎縮していたのだろう、カイは勢いよく首を縦に振った。

「じゃあ待っててね」

「あの！ わ、私も行きます！」

「え？」

「先にお話したいんです。私、何も考えないで……っ」

「わかったわ。さ、行きましよ」

「——はい！」

二人は宿に戻ると、リネアの部屋の扉を叩いた。

「リネア、入るわよー」

ローザンが扉を開けると、リネアは奥の窓際にいた。椅子に腰掛け、月を眺めている。

リネアは部屋に入ってきた二人を一瞥したが、すぐ月に視線を戻す。そんなリネアの態度に、話し合おうと意気込んできた二ーナも、出鼻を挫かれてしまう。

（まったく、二人とも不器用ねえ……）

「リネア、まず言伝よ。市であんたが助けた男の子が、会いたいて裏口に来てるわ」

「……そうか」

「それともう一つ。——さ、ニーナ。言いたいことがあるんでしょ？」

「えっ?!」

突然の展開に、ニーナは戸惑ってしまった。

だが、リネアがあまりにもこちらに関心を示さないので、逆に意を決することが出来た。

「リネアさん。……ごめんなさい！」

迷わず、頭を下げる。

「私、市でのこと後悔してます。早まったことを言ってしまったって……」

みなさんのように事態を確かめもせず、子供を救った人を私は勝手に責めた。

そして自分が気づかない振りをしていたことを、この人は身を持って示してくれた。

「たまに施しをして、それで終わりにしていました。私は何もしてこなかった……!」

わずかばかりの金銭や物資を与えて、あの子たちの生活が向上するだろうか。役立たないことはあるまい。けれど、それは一時的でしかない。

あの少年の言葉が、ぐるぐると頭を駆け巡る。リネアの言動は、自分にとっても衝撃だったから。

ついには耐えきれずに、涙がこぼれてきた。

「——お前は何もしてこなかったのではない。ただ、もう一歩踏み

出さずにいただけだ」

ニーナはその言葉に、跳ね上がるように反応した。

窓から見える月を背後に従えるリネアは、まるで一枚の絵画のよう
に美しかった。

「何もしていないなら、反省する事などないだろう。だが『事』が
あったから反省できるんだ」

「その通りね。ニーナ、あんまり自分を責めなくていいのよ？ 誰
でも間違いや失敗はあるんだから。『悪いのは失敗を反省しないこ
と』って言うじゃない」

「ローザンさん……」

「どうだ、お前が誤ったところはどこだ？」

「私が、間違ったところ……」

私がしてきたことは。

支部ごとに定例で施しを行い、物資などを貧しい人々に与えてき
た。けど、それは一時凌ぎでしかなくて。

「もつと広い視野を持つべきだったんです……。施しだけで人は救
われない。この実態を国に訴えなければならなかったんです。たと
え……それが徒労に終ろうとも」

神の救いは、人の欲によって歪められる。

だから、少しでも努力をしなければならぬ。もしその徒労を厭
うならば、弱者救済を生業とする僧侶の資格など、私にはない。

「……それが茨の道でもか」

「え？」

「国に抗えば、位の低い僧侶など簡単に消される。ただの自己満足

で終わることもある。それでも、進むのか」

「はい。もう後悔はしたくありません。カイ君のように明日に希望を持ってない人なんか、もう見たくないんです！」

生を楽しめないまま生きるなんて、あんまりだ！

「……そうだな。ならば進め、ニーナ。私はお前の力になろう」

「リネアさ……、あ、私の名前……」

「お前は私を個人として認識した。なら、私もそれに倣う。それだけだ」

「——はいっ！」

リネアが笑った。

それはニーナが初めて見た、リネアの笑顔。夜空のような美しい黒い瞳が、月を後ろに従え、笑っていた。

三人が宿の裏口に行くと、すっかり打ち解けた様子で男四人がいた。セルグに怯えていたカイが、その膝に座って楽しそうに話している。

「あつ、リネア！ 待ってたよ」

「悪かった、アル。……私に会いに来てくれたのか、カイ」

「は、はい！」

待ちわびたリネアの登場に、緊張したらしくカイの声は上擦った。座っていたセルグの膝からも飛び降りる。

「店主とはうまくやれそうか？」

「うん、いや、はい！ あの、オレ頑張ります！ 頑張って働いて、いつかこの宿みたいな立派な店にしてみせる！」

「そうか。……頑張れ。いつかまた、必ず訪れるから」

「本当！？ 約束、絶対だからね！！」
「ああ。……約束だ」

果たすことは簡単な、だけど、だけど本当はとても難しい約束を——交わそう。

それが、わずかでも力になるのなら。

「ありがとう、お姉さん！」

私ごときで誰かに笑顔を与えられる。それは、私の力になり、みんなの力になる。

未来への——希望になる。
だから。

「あ、あの！——とにかく本当に、ありがとうございました！」

「いや、礼は必要ない。大変なのはこれからだからな」

「けど、俺……」

「勿論、カイの気持ちは嬉しい。だが私に気を使うより、自分を大切にしてくれ。それと私の名はリネアだ」

「はい、ええと……リネアさん」

カイはリネアに頭を撫でられると、顔を真っ赤にした。

こりゃあセルグにライバルかな、とアルフォンスは思いつつ、自然と穏やかな笑みが浮かんだ。

「ねえカイ、今日は僕たちの部屋に泊まっていく？」

「ううん、リネアさんにお礼言えたから帰る。店主のおじさんにも帰るって言ってるし……」

待っていてくれる人がいる。その嬉しさにカイは顔をほころばせ

た。

「あ、カイは僕が送るよ。もう真っ暗だしね」

「あら、大丈夫？ 迷わない？」

「じゃあ私が一緒にします。私ももう帰らないと行けませんので…」

…」

「そうか？ 悪いな」

——何だこの流れ。

どう聞いても僕が二ーナに案内されるって流れだよなコレ。

「ねえ、ちょっと？」

「はは。まあいいだろアル。カイと二ーナ頼んだぜ」

「う、ん」

仮にも一目惚れした相手だ。その人を頼むと言われて、文句を言う気はない。

（まあ、何かちょっと悔しいけど）

月が夜空から照らすその道を、三人はあの市に向けて歩いていった。

「ねえ、アルフォンスさん」

「ん？ どうしたの、カイ」

「その、リネアさんって、年いくつ？」

うわあ、確定。

カイの頬が赤くなっているのが、月明かりでも良く見えた。

（さっきもそんな予感したけど、ついにセルグにライバル出現か。

しかも意外と強敵かな？)

「リネアは十八だよ。そう言えば、カイは何才？」

「俺は十三才。そっかー、五つ上かぁ……」

「カイ君はリネアさんのこと、気になるの？ 凄い人だものね」

「えっ、あ、うん」

ニーナは天然なのか、少し的外れなことを言ったが、カイがリネアに惚れたのは事実。セルグの恋路を応援しているアルフォンスとしては、カイが恋敵になるのは少し心苦しいのだが。

やがて店に着くと、帰りが遅くなったからか、カイが少し尻込みしてしまった。そんなカイを見かね、アルフォンスが店主に声をかけた。

「あの、先ほどの魔法使いの仲間で、アルフォンスって言います。もう夜遅くなったので、カイを送って来ました」

「そうか、すまなかったな。……ん？ どうした、坊主。随分と大人しいじゃねえか」

「え、えと……」

「カイ君、緊張しちゃっているのね。大丈夫よ、思った通りに言っ
て」

今度は的を得たニーナの言葉に背を押され、カイは店主へ一歩近づいた。

「あ、の。……た……ただい、ま」

一瞬、状況が飲み込めないのか店主はキョトンとした顔になった。しかし、すぐに言うべき言葉を思い付く。

「おう、お帰り」

カイを送り届けた後、二人はニーナの僧房へと向かった。

「あの、送ってくださってありがとうございます。ここまで大丈夫です」

ニーナがそう言ったのは僧房の手間の曲がり角だ。記憶が正しければ、ここを曲がれば十歩ほどで入り口のはず。

「そう？ でも最後まで送るよ」

残り十歩だろうが、一目惚れの相手なのだ、出来るだけ長くいたい。

しかしアルフォンスの願望は、見事に打ち砕かれた。

「ありがとうございます。でも、僧房は基本的に男子禁制なので……」

つまり昼間に仲間と複数で来るならともかく、夜に男と並んで僧房に行くことは出来ない。そういうことだ。

（う、それもそうか……）

「そっか、じゃあ僕は帰るね。また今度会おう！」

「はい、必ずまたお伺いします」

そうしてニーナを見送った後、アルフォンスは宿への帰途についた。今度は迷わないよう、しっかり道を確かめながら。

（ええと、ここの角が薬草市だから……）

昼間とは違い、街に人通りはほとんどない。

その中を一人進んでいたのだが、宿が見えた瞬間、突如、体に悪寒が走った。

（！？）

寒さが原因ではない。これは、前にも一度だけ感じた。それは――

アルフォンスが記憶を手繰ろうとした時、宿の方から誰か歩いて来るのが見えた。

見知らぬ青年だったが、何故か彼は此方向き――笑った。静かに、それでいて美しく。

困惑するアルフォンスを尻目に、青年は闇へと姿を消したのだった。

（ああ、そうだ……）

あの悪寒の正体。

前に感じたのはあの時――ローザンと出会った、魔竜カリオンと対峙した時だ。向けられたのは、まごうことなき殺意。

あの青年から発せられたかはわからない。青年からだとして、何故殺意を向けられるかもわからない。

（あの人……何だろう、何かが……おかしかった）

何がおかしいのかもわからない。わからないことだらけだ。

しかし、仲間に相談するのは気が引ける。あまりにもあやふやだ。あと数日でメリコは発つのだ。心配はあるまい。そう考え、アル

フォンスは不安を振り払うかのように宿へ急ぎ足で向かった。
闇の中から自分を見つめる瞳の存在に、気付くことはなく。

交錯する思惑へき

メリコでの出来事から一週間。アルフォンスたちは隣国の、景観が美しいことで有名なファームル公国にいた。

ヴィオーラには強く引き留められたが、いつまでもお世話になるわけにいかない。

それと、ニーナはリネアと和解したが、一緒に旅をすることは叶わなかった。理由は職の制度など様々ある。だが、ニーナは本心から残念がって断ってくれた。

サラリと拒まれないで良かったと、アルフォンスは本気でそう思った。もし『嫌です』なんて言われたら、立ち直れなかっただろうなあ、などと思ったり。

そんなこんなで一行は隣国のファームルで、新たな仲間探しを決行することになったのである。

ファームル公国はとても小さい国だが、僧侶の権力が強い。チルト派の大きな支部があり、点在する聖地には巡礼者が数多く訪れる。つい隣国だから勢いに任せて来てしまったが、魔法使いのリネアにはメリコ以上に居づらい国だろう。そうアルフォンスは考えたのだが――。

「構わない」

と、いつもの一言。

気遣いでも何でもなく、リネアは本当に気にしていないようなので、一行は逗留を決めたのであった。

そうして公国に到着してから三日。これといった収穫が得られなかった一行は、次の国に行く準備を始めていた。

やがて国境に向かっていったとき、一行は向こうからトボトボとやってきた一行とすれ違った。

(……何か嫌な予感が……)

アルフォンスの予感は的中した。

国境の監視所にデカデカと掲げられていた文字は、何と『一週間の出国禁止令』。

先ほどすれ違った一行は、国境を渡れずに引き返してきたのだった。

「もうっ、何でよ!!」

「いきなり過ぎるよなあ。まあ一週間だからいいようなもの……」

セルグの意見は強制的に滞在を余儀なくされた人々の声でもあった。

ファームル公国のように絶対君主制の国では、このように理不尽な政令が案外簡単に下されたりするものだ。

だから『一週間ならいいか』と、大抵の人は半ば諦めの形で妥協するのである。

アルフォンスたちが仕方なく昨日泊まった宿に引き返そうとした時、向こうに僧侶の一団が見えた。

一昨日も似た一行を見た。あれも巡礼の一行だろう。そう思って視線を他に移したとき、聞き覚えのある声がそちらから聞こえた。

「——みなさん！ まだファームルにいらしたんですね!!」

「えっ、ニーナ!？」

声に振り向けば、なんとその一団から、ニーナが笑顔で飛び出してきた。

「わあ良かったあ！ ファームルに行かれると言ってたから、もし

かしたら会えるかなって！」

「偶然つてすごいわね。けど巡礼つて、だいぶ前から予定が決まってるでしょ？ 言ってくればよかったのに」

「それが、急に決まったんです。みなさんと別れた翌日だったと思います」

「——ニーナ」

「はい？ 何でしょうリネアさん」

ニーナの話を聞いていたリネアが、急に少し声を低くして言った。

「主宰者は誰だ」

「え？ それは僧正のグレゴリー様ですけど……」

それがどうかしましたか？

と聞こうとした時、ニーナは一団に呼ばれているのに気がついた。

「あつ、行かなくちゃ！ それじゃあみなさん、失礼します！ 私、教会の宿坊にいますから良かったら遊びに来て下さいね！！」

そのためニーナは、疑問に思ったことが頭から消えてしまった。

それは後ほど、一生の後悔となる。

ニーナが去ってから、アルフォンスは俯いたままのリネアの顔を覗き込んだ。

だが、それは何とも形容し難いものだった。

侮蔑のような、怒りのような、はたまた虚無のような。

「ええと。リネア、そのグレゴリーって人、知ってるの？」

「知り合い……と言うには憚るな。知り合いたくなかった類いの輩だ」

「ふうん、よっぽど悪いヤツなの？」

「……まあな。つまらない人間だ」

「一波乱、起きなきゃいいな。起きる気配、バリバリだけだよ」

「ですねえ。まあ今は公国に留まるしかありませんしー、当面の宿を決めましょうか」

こうしてファームルに再逗留を余儀無くされた五人は、昨日の宿へ引き返したのであった。

いつも通り男女別の部屋を取り、もう今日はくつろぐことにする。出国までは何をするでもなく、久々にゆっくりできる——ハズだった。

「お客様、お客様。いらっしゃいますか」

宿の主人の声だ。

部屋をノックされた男陣は、アルフォンスが対応に出た。

「はい、何ですか？」

「受付に男性のお客様がいらっしゃっていますが、お通ししますが？」

「はあ……」

初めて訪れたファームル公国で、ニーナ以外に自分たちを訪ねてくる人物の心当たりなどない。

アルフォンスがどうしようかと悩んでいると、ちょうど隣の部屋からリネアが出てきた。

「ああ、女性の方々は別の部屋でしたっけ」

主人が何気なく言った言葉に、リネアが反応した。

「……。私に僧侶の客だな？」

「えっ？」

「ああ、ご存知でしたか。お通しても？」

「構わない。但し用意があるので、しばらく間をあけるように伝えてくれ」

「承りました。それでは」

主人はそのまま帰って行った。

だがこの会話について、アルフォンスはリネアに質問しなければならぬことが山積みだ。

「あの、リネア……」

「今からみんなに説明する。ローザンを呼んでくるから部屋にいてくれ」

「え、うん、わかった」

有無を言わさぬリネアの語調に、つい頷いてしまった。

リネアは部屋に戻ったので、アルフォンスも慌てて部屋に入る。

「お、アル。何の用だったんだ？」

「よくわかんないけどリネアにお客さんが……。あ、リネアとローザンが来るよ。何かリネアから話があるみたい」

「はあ……」

そこにリネアたちが入ってきた。

「悪いが時間がないので手短に済ませるぞ。いいか、これから僧侶が来るが相手にするな。するだけ無駄だ。以上」

「……」

手短すぎだろ。

全員こっそり内心で突っ込んだ。

「まあ会えばわかるが……」

再びリネアが口を開いたとき、部屋の扉がノックされた。

「……」

と同時に、瞬時にリネアの顔が引き締められる。

凜と通った空気に、一気に部屋の中に緊張感が増す。

「……開けるよ」

リネアは無言で頷き、アルフォンスが扉を開けた。

そこに立っていたのは、一見して階級が高いとわかる壮年の僧侶だった。

「お初にお目にかかります。私は僧正のグレゴリー様に仕えております、カインと申します」

男は物腰も丁寧で、リネアがいなければ何も警戒しなかっただろう。あまりの穏やかな空気に、つい気が抜けてしまったくらいだ。だが、あのリネアがわざわざ注意を促したことが引くかかる。

そして男の目には、偽りの何かが潜んでいた。

「本日はそちらの魔法使いの方に御用がありまして……」

「私にはない。いいか、帰ってグレゴリーに伝える。貴様に用はない、と」

「なっ……」

「失せろ」

まだ何か言おうとした使者を制し、リネアは杖を向けた。

まごうことなき殺気に使者も怯む。

「次はない。――失せろ」

リネアの地を這うような恐ろしい声と凍てつく視線に、使者は竦みあがった。

そしてまだ何か言おうと頑張ったようだが、結局は脱兎の如く逃げ出していったのだった。

その翌朝、何と再び使者がきた。別の男ではあったが、こちらも階級が高いのは一目瞭然。

しかしリネアは全く意に介さず、同じような問答でさっさと追い払う。

使者が来る理由をローザンがそれとなくリネアに聞いたが、珍しく感情を露わにしたので――もちろん機嫌が悪化して――追求は諦めた。

やがて昼過ぎになると、今度はニーナが訪ねてきた。使者の対応に苦慮していたアルフォンスは、これ幸いと相談を持ちかけた。が。

「あおう、実は私も指示を受けてて……」

「ええっ!？」

ニーナによく話を聞いてみると、最初はただ遊びに来ようとしたらしい。

しかし出掛けにいきなり呼び出され、自分たちと知り合いだと確かめられたうえで、指示を受けたと言う。

「何故グレゴリー様は、私がみなさんと面識があるご存知だったのでしょうか」

「……」

リネアは黙り込んだまま、口を開こうとしない。
だがアルフォンスたちとて愚かではない。グレゴリーのリネアに
対する執念が、異常だということは理解している。

「……ねえリネア、いい加減話してくれないかしら。全部とは言わ
ないわ、ね？」

「ですねえ。不測の事態に備えるためにも教えて頂けませんかねー」
「……」

はあ、とりネアは大きく溜め息をついた。

「……そうだな」

数秒の間を置き、やがてリネアがグレゴリーについて語り出した。

「まず、何故グレゴリーが私を知っているかだが……」

初めて訪ねてきたのは六年前。

賢者であるシャルランに、自分の出世に口添えを願いでたのだ。
世界最高権力者である賢者の口添えさえあれば、組合の役職など
思いのまま。

「賄賂を山ほど持ってきていたが、師匠は物欲などないからな。に
べもなく断った。だが、その後もあいつは諦めなかったし、今回は
いい機会だと思ったんだろう」

最高権力者であり、世界最強の賢者。その賢者はおらず、たった
一人の弟子だけが手の届く場所にいる。

どうにかその弟子を言いくるめるなりして、ツテを作るつもりな

のは目に見えている。

「師匠が相手にしない者は、私も相手にしない。そういつことだ」
僧正だろつが、誰であろつがな。
リネアは乾いた声音でそう告げた。

交錯する思惑へ式

ある意味とても人間らしい、権力の亡者とも言えるグレゴリー。アルフォンスたちは一様に呆れを覚えた。

「そんな、グレゴリー様が……」

一方、部下のニーナは驚きを隠しきれない様子だ。

「ニーナのお気持ちはわかりますよー。ですが……、それなら尚更このままにしておくのはよくないのでは？」

「……。ああ、わかっている」

「「????」」

リネアとリューンはこれからの事について話始めたようだが、主語ナシの会話に周囲の面々はついていけずにいた。

「あ、あの。どういうことでしょうか？」

「そうだよ、僕たちを置いてきぼりにしないでよ」

「えっ？ ああ、これはすみませんでした」

「さっきグレゴリーを放置しておくのはよくない、みたいなこと言ったよな。どういう意味だ？」

「えー、ニーナを見て思ったのですが、相手は上手く周囲の信頼を得ているようです。……つまり、私たちの味方になる僧侶はいらっしゃらないだろう、と」

「のこのこと行くのは……ってことね」

「だよねえ……」

このまま行けば、絶対に何かの策略に巻き込まれる。

「ただどリネアを見捨てる、という選択肢はあるワケがない。だから対策が必要だ。」

「けど相手の出方もわかんないし、いつそ一度行ってみたら？」

「だよな」

「まあそうよね。悩むだけ無駄って感じ。リネアは？」

「……。行く」

「じゃあ決まりね。明日の朝一番に全員で押しかけるわよ！」

「なっ——、ローザン！」

「あ、やっぱり一人で行く気だったわね？　こんなキナ臭い話、一人で行かせられるワケないじゃない」

「……だが」

「放つといったら寝覚め悪くなる事態になりそうだし、気にすんなよ！」

「そうですよー」

「それにさ、僕ら、仲間じゃん？」

その言葉に、リネアが僅かに瞳目した。やっぱり一騒動起きたなあ、などと話していた一行は誰も気づかなかったけれど。

リネアは次に紡ぐ言葉を決めた後、心の中で懺悔した。

（ああ、どうか許してくれ）

巻き込むこと、危険な目に合わせることを、と。

「……そうだな。一緒に行くか」

わかっているのに、それでも一緒にいたいと願ってしまったから。傷つけない。失いたくない。だから、守る。

「そうだ、ニーナは何かあると悪いし、その……」

「いいえ、ご一緒します!」

「へっ!？」

今の今まで大人しく話を聞いていたニーナは、奮然と抗議し始めた。

「不穏な事態をチルト派の僧正様が引き起こすとのこと。見過ごすわけにいきません!」

「おいおい、上司だろ? いいのか?」

「僧正様にやましいところがないなら、問題ありません。でしょう?」

「ま、まあ……」

「それに、このお話をお伝えしたのは私です。ご一緒に向かってもおかしくはないはずです」

憤慨のあまり、まくし立てるように論ずるニーナに、アルフォンスたちは誰も反論出来なかった。

「そうですね。案内役として来ていただいたらどうです?」

「リユーン!？」

「確かにニーナが一緒でもおかしくはありませんし……。様子見も兼ねて、どうです?」

「はい、お任せ下さい!」

こうしてアルフォンスたちは、翌朝、ニーナとともに僧正のもとを訪ねることになったのである。

「お早うございます!」

「おはよ、ニーナ。様子はどうかしら？」

「リネアさんに言われた通り、昨日のうちに皆さんがいらっしゃることは伝えました。ですが特に変化は……」

「……流石に僧正だ、そこまで愚かではあるまい」

「え？」

「まあいい。行くぞ、案内してくれ」

「あつ、はい！」

館内に入ると、アルフォンスたちに一斉に視線が突き刺さった。そう、集まった、ではなく『突き刺さった』。特に、一人に向けて。

無論、突然の訪問者を訝しむものも含まれているだろう。だがこの視線には敵意がある。紛れもない、魔法使いへの敵意が。

ニーナが支部長に用件を伝えると、初日に宿に來たカインという男がやってきた。

「では皆さま、奥へどうぞ」

その指示に従い、全員で行こうとしたその時。

「ああニーナ、君は行くな。お客様だけお通しするよう言われている」

「えっ、でもカイン様……！」

「ニーナ、言われた通りにしろ」

ぼそりとリネアが耳打ちする。

「下手に拒むと面倒が起きかねん。……いいな？」

「……………はい」

（そんな。ここまできて仲間外れなんて……！）

悲しさと悔しさに、涙が滲む。

これではグレゴリー様は、やましいことがあると白状したも同然だ。

グレゴリー様は僧正という高位に四十才という若さ就き、次期大僧正の呼び声も高い、清廉潔白な人物。

まさかそのグレゴリー様に限って、やましいことなど、あるわけがない。そう思っていた。

いや、同時に相手が『リネアさんだから』信じきれなかった。

（私、何も変わっていないじゃない……！）

気付いた事実には愕然とする。

さつき、みんなの視線がリネアさんに突き刺さるのを感じた。その時『魔法使いだからって蔑視はいけない』なんて、高尚なことを思ったくせに。

相手がリネアさんだから、魔法使いだから。僧侶のグレゴリー様に敵意があり、有ること無いこと言っている。

心の奥で、そう思ってしまった。

（リネアさんは言葉がキツいだけで、嘘は言わないのに！）

「わか、りました……。私はこちらで皆さんをお待ちしています」

「ああ。……いいか、ニーナ」

「……？」

「巨大な神の像は、いかに神聖でも近付けば全体が見えなくなる。見たくないものも見える。だが在ることは変わらない」

巨大な神の像。

「皆さま、どうぞこちらへ」

何か感じとったのか、使者が急に案内を急いだ。その横でリネアの言葉がニーナの脳内に反芻される。

近付きすぎると全体は見えない。けれど、在る。

リネアが何を言いたいのがよく理解出来ないのに、何故かその言葉が胸に染みた。カインに連れられて扉の向こうに消えていくリネアを見つめながら、ニーナは一筋の涙を流した。

（組合でもなんでも信じる。それは自由だ。だが、全てを信じていわけではない。これでわかっただろうニーナ。神の像は、近付けば『汚れ』もあるのだと）

五人は建物の奥へと進む。

そこはクルツァータでリユーンに案内された組合の内部に雰囲気は似ていた。

ここも静かで人の気配がしない。

だけど決定的に違う。クルツァータは人の気配が『なかった』が、ここは『排除している』。

「お入り下さい」

通された部屋にいたのは一人の男。

歳は四十の半ばだろう、立派な風格を備えた人物だ。

「お久しぶりです、ノース殿。賢者様はご健勝でしょうか？ 他の皆様は初めまして。チルト派第三支部を預かります、僧正グレゴリー・イレオスと申します」

柔らかく、人当たりのいい笑み。何も知らなかったら、すぐに心を許しただろう。ニーナが信頼するのも当然だ。

「御託はいい。手早く用件を言え」

「おや、これは手厳しい。……まあ良いでしょう。用件は一つですよ」

賢者様に取り次ぎを。

「以前は私が至らないばかりに、ご不興を買ってしまいましたのでね」

ニコリとグレゴリーは微笑んだが、瞳は全く笑っていない。部屋に嫌な空気が満ちていく。

「あんた、それ本気で言ってるのか？」

リネアが反論する前に、セルグが口を開いた。

「ちょっと、セルグあんた……」

「ローザン、構わない」

「だよ。いいだろ？」

「もう、話は長引かせないですよ？」

「へいへい。さあ、答えてもらえるか僧正さま」

「……はて、どういう意味でしょうか」

「どうもこうもあるかよ。あんた僧正だろ？ その年でもう準修士なのに、まだ欲張るのか」

「欲張るとは人聞きの悪い。私は向上への努力を惜しまないだけですよ」

何が努力だ。

アルフォンスはつい、そう叫びそうになった。

「……回りくどいな。くだらない」

「まあリネアの回答は言わずもがな、ですねえ。さて、僧正様は何か策がお有りで？」

リユーンがいつものように、のんびりとした速度で話す。しかし、その言葉には誰でもわかる棘がたつぷりとあった。

先ほどの憤りはどこへやら、アルフォンスはリユーンの雰囲気飲まれ——いや、むしろ引いた。

「そういうことだ。どうする？ グレゴリー」

「おやおや……」

リネアはバツサリ断ったのに、他の仲間も責めているのに。

何故かグレゴリーは余裕綽々なまま。

「何で……笑ってるんですか。リネアの階級はあなたと同じで準修士だから、五大職で立場は同じ。だからリネアが断ったら、あなたはそれ以上強くいえないはずじゃないですか」

「ええ、立場上は。五大職の階級は、それだから面倒なんです。中途な位置ほど、もどかしいものはない……」

最後はまるで怨嗟を吐き出すかのように、グレゴリーは呟いた。

「ですから駆け引きが必要なのです」

「——！ 貴様っ、まさか……！！」

「おや、さすがは賢者様のお弟子様だ。勘が鋭い。ですが、最初に気づかれなかったあなたの失態ですよ」

「ふざけるな!!」

激昂したリネアは杖をグレゴリーに向けた。

突然のことにアルフォンスたちも驚きを隠せない。大慌てでローザンが止めに入った。

「ちょ、リネア!? まず落ち着きなさいよ、何だつていうの?」

「この男……っ! 己の部下を、我欲のために質に取ったんだ!!」

「——なに? それってニーナのことかよ?!」

「はは、もう少し差しさわりのない言い方をお願いしたいものですな」

まあ正解ですがね、と言ってグレゴリーは椅子から立ち上がった。

「愚かしいですねえ……。露見すれば今の地位は全て失われる行為ですよ?」

「露見するはありますがありません。キャズタは人質になっていることを、自分で理解していないのですから」

「そんなの、僕たちが話せばすぐにニーナはわかってくれる! そうしたらすぐに賢者様にも伝わる! すぐバレることじゃないか!」

「そこは次の手を打ってありますとも。抜かりはありません、ご心配は不要です。……さて、如何なさいますかな? ノース殿」

この男はやる。ニーナに確実に危害を加える。これは脅しじゃない。

嫌になるくらいわかってしまう。

グレゴリーは何とも下卑た笑みを浮かべて言った。

「ああ、もちろん私たちに危害を加えた場合、キャズタの命はありません。——そうですね、手荒な輩の好きにさせるのもいい案だと

「思いませんか？」

交錯する思惑へ参

「ふざけんな……っ!!」

目の前が真っ白になって、何が何だかわからなくなって。

アルフォンスは気づくと剣の柄を握っていて、体をリネアによって押し止められていた。

「落ち着け、アル」

「何で、リネア！」

「……いいから落ち着け」

リネアの殺気を帯びた声に、ヒッ、とアルフォンスは音を立てて息を呑んだ。リネアの気迫に飲まれ、頭に上っていた血が一瞬で引く。

その言葉自体に力があるのではないかと思わせるほど、強い意思、籠められた感情。

(……リネア)

気圧されたのはアルフォンスだけではない。先ほどまで余裕綽々だったグレゴリーも、リネアに恐れをなしたのか、動揺の色を隠せていない。

「さ、さあ。迷うこともありませんね？ ではノース殿と話を詰めると致しましょう、皆様は退出いただけますかな」

「はあ！？ てめえ、ふざけんな！ ニーナの上にリネアまで残していけるか！」

「セルグ、構わない。……私がこの程度の輩に負けると思うのか？」

「は？ いや、そうじゃねえけど……。っだー！ 違う！ とにかく、そんなの俺は認めねえぞ！」

先ほどのニーナへの脅しに含まれていた内容が頭から離れないのだろう、セルグはリネア一人が残ることに猛反発した。

自分と同じだ。恋した人を守りたい。

セルグの場合、リネアのほうが強いのは本人が一番理解しているだろう。だからせめて、傷つく可能性があるのなら、全て排除しないと気がすまないのだ。

「そうよりネア。ちょーっと考え直したほうがいいと思うわ」

女性を軽視した発言に、ローザンもグレゴリーの言葉に怒りを隠していない。ちよつと、と言っているが、認めないと同義なのが良くなる。リユーンも同意見なのだろう、ローザンの言葉に頷いた。

「僕もそう思うよ。ニーナは心配だけど、もう少し粘ったほうがいいって」

「……。いや、構わない。グレゴリー、貴様の望みを聞いてやる。その代わり、話は全てニーナやアル達を解放してからだ。リユーンの精霊召喚によって証明とする。いいな？」

「おい、リネア！」

今度もリネアはセルグを制した。だけど、先ほどとは違う。今のリネアは——笑顔だ。

「心配してくれて……。ありがとう。けれど大丈夫だ、ただ待っていてくれ」

誰も、何も、言い返せなくなってしまった。

（嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ！ お前一人残すなんて、俺はただけ情けねえ男だよ……っ！）

セルグの心の叫びは、声にならない。まるで魔法で封じられてしまったように。

ただの勝負ならリネアへの心配なんかしない。むしろ相手の心配をしたほうがいいんじゃないかと思う。

（何で俺は守れない……！！）

力が欲しくてこの道を選んだのに。守る力が欲しくて、旅立ったのに。

「交渉成立ですね。ではノース殿は、控えの間に来ていただきましょう。皆様は宿へお帰りください」

リネア以外は不要。言外にそう言って、グレゴリーはカインをアールフォンスたちの案内、もとい見張りにつけて広間へと追いやった。

「——リネアっ」

セルグがこのまま引き下がることに諦めきれず、リネアを振り向いた。

だけど、微笑んでいた。大丈夫、と。声に出さず言った。だからセルグは逡巡の後、迷いを振り払うように目を伏せ、笑った。俺もやれるだけやってみる。そう伝えたくて。

「みなさん！」

広間に着くと、ニーナが矢のように飛び出してきた。自分たちを心配してくれていたのだろう。

スッ、と目の端に広間から離れていく僧侶の姿が見えた。あれがニーナについていた見張りか。アルフォンスが周囲をさっと見渡せば、カインも目立たないように、アルフォンスたちから距離をとった。

「ああ良かった、みなさんご無事……、え？ リネアさんは？」

「……ニーナ、相談があるんだ。お願い、何も言わず僕たちと宿へ来て」

「え、え？ 何で、リネアさんは？ アルフォンスさん、そんな……」

「大丈夫。リネアは話し合いをしてるだけだから。……大丈夫だから、お願い、とにかく宿に来て欲しいんだ」

「……」

ニーナは言葉を失い、ただコクコクと頷いた。小さく体を震わせ、涙を堪えている。

しかし、宿の部屋に着いた途端、緊張が緩んだのかニーナは泣き出してしまった。

「私が考えもなしに行動したから……！ 私のせいです、リネアさんに何かあったらどうすれば……！！」

「そんなことないわよ、ニーナ。どうしてあんたのせいだなんて言うの」

「だって、何か変な話だって、よく考えれば気付けたはずなんです！ それなのにわ、私が何も考えずに、リネアさんにお話をお伝えしたから、だから……っ！」

「ニーナの前にも、話を持ってきた人は何人もいたよ。ニーナのせいじゃない。それだけは間違いないよ。嘘じゃない」

「けど、けど、私が止められたかもしれない！ それは私のせいだ

ってことと同じです……っ」

——この国で再会したとき、リネアさんは私にこう聞いた。『主宰者は誰だ』って。

あの時、もうリネアさんは気づいていたんだ。自分の立場と、私の『急に決まった』という言葉で。

急に決まった巡礼の主催者を、賢者の弟子である魔法使いが氣にした。

そのことに疑問を持たないなんて、何て私は馬鹿だったんだろう。何か不穏な空気を察知したからに決まってるじゃない！

「同じじゃないよ、ニーナ」

泣き崩れたニーナに、アルフォンスが手を差し伸べた。

「止められたかも、って言うなら僕たちもだよ。しかも現場に同行までしてたんだし。けど、それでも責任を問うって言うんなら、みんなの責任だ。だからニーナのせいじゃない」

「だな。連帯責任……でもないか。まあ似たようなことだよな。それよか、頼むぜリユーン」

「ええ、お任せください」

「え？」

「えー、私の術によって私たちが解放された、という証明をリネアにお伝えするんですよー」

リユーンが呪文を唱え、右手で空に紋様を描く。

「えー、では、今回は風の精霊にご助力をお願いしましょう」

やがて描いた紋様が光を放ち、室内に一陣の風が吹いた。

「もうリネアと会っているはずですよー。それにしても……霊力に対する防御がなくなっていませんねえ、抵抗が全くありませんでしたよー」

「そんなの入ってすぐにわかったじゃない。だからリネアも精霊召喚を頼んだんでしょ？」

「いえー、私は感知能力はあまり高くありませんし、ローザンのように簡単に判断は出来ませんよー」

リューンが右手に霊力を集めながら、のんびりと言う。

「へえ……って、感心してる場合じゃなかった。リューン、向こうの様子は分かる？」

「ふふ、今回は楽勝ですよー。あ、ですが……」
「はい」

キョロキョロと辺りを見回したリューンに、ローザンが大きめの腕のようなものを差し出した。それには並々と水が張ってある。

「用意しといたわよ。折りたたみの水盆なんて、精霊使いはいいものの支給されるのね」

「ああ、ありがとございます。それでは……」

そう言うところリューンは再び呪文を唱えた。空中に紋様も新たに描くが、どちらも先ほどとは異なる。

「——言の葉を運ぶのは風、存在を示すのは光。映し出せ、風に波立ち光を吸い込む水よ。我にその力を貸し与えたまえ！」

風が、光が、部屋で無数に生まれた。

室内に置かれていた本は頂がめくれ、布は舞い上がる。それなの

に水面には波紋すら生まれない。

「あつ、リネアさん……！」

ニーナの言葉に、みんなが一斉に水盆に注目した。
大人の顔ほどの広さの水盆に、五人の視線が集まる。

「成功です。……ああ、ですやはりクルツァータではないので、声までは届かないようですねえ」

「声まで届く術を自由に使われたら、占い師はみんな食いはぐれちゃうわよ！ だけどこんな鮮明な姿見、初めて見たわ……」

「僕は姿見の術自体、初めて見たよ。すごいね、本当にリネアが映ってる！」

リネアは一人、どこかの部屋でグレゴリーを待っているようだ。
恐らくここが控えの間だろう。

「にしても映像だけって、わかりにくいよな」

「文句言っんじゃないわよ。——あ、来たわ！」

扉が開く。

部屋に入ってきたのは二人、グレゴリーとカインだ。

早速何やら話し始めたようだが、リネアがすぐ一蹴したのがよくわかった。

「い、一応さ、賢者様との繋ぎをつける話し合いじゃなかったっけ……？」

「ふふつ。流石はリネアよねー。グレゴリーの奴、憤慨してるもの」

簡単に決着をつけさせないリネアは、まるで屈することを知らぬ

王者のよう。

その姿に一応の安堵を得たアルフォンスたちだったが、ニーナは一人顔を青ざめさせていた。

「駄目です、このままだとリネアさんが危険です!」

「は? 何だよいきなり」

「この部屋は一番防御力が備わっていて、特に魔力は通常の十分の一以下しか発揮出来ないんです……!」

だから実力行使に出られたら、リネアさんは。

「なっ……」

セルグが言葉を失う。

一目散にリネアのもとへ駆けていこうとしたセルグの服を、誰かが掴んだ。

「んだよっ!」

「駄目です、待って下さいセルグさん!」

「何でだ、危ないって言ったのはお前じゃねえか。リネアが心配じやねえのかよ!」

「違いますっ!」

リネアを心配してのことだが、セルグの言葉はあまりにも辛辣だ。さっきまでのニーナを見て、リネアを心配してないなんて誰が考えるだろう。

しかしニーナはそんなことを言われても怯むことなく、真っ直ぐセルグを見つめた。

「確かに僧侶の私を信じられないのはわかります。私はリネアさんと喧嘩もしました。だけど、お願いです。どうか私の話を聞いて下

「さい！」

「っ……。……悪い、つい……」

セルグもわかっているのだ、ニーナが本心からリネアを心配していることを。

ようやくセルグは落ち着いたらしく、場の雰囲気もだいぶ静まってきた。

……と思いきや。

「ちょ、みんな！ ヤバすぎるわよ、リネア手錠かけられたんだけど？！」

「ええっ！？ 何それ、おかしいでしょ！」

再び場が騒然となる。

いくら魔法使い相手でも、手錠をかけるなんて異常だ。

ニーナなどあまりの出来事に顔色が失せ、言葉も失ったのであった。

交錯する思惑〈肆〉

「このままリネアを保留、私たちが問い詰めても、しらばっくれるつもりですかねー」

「冗談じゃないわよ、あたしたちに支部を改める力がないと思って！」

「うわー、姿見の術がなかったら、リネアに何があったか全然わからなかったね」

それにただの手錠、ということはあるまい。きっと法術のかかった特製だ。リネアの魔力を抑えるために。

「これで無事に済んだら奇跡よね。……ねえニーナ、僧正サマぶん殴るの、手伝ってくれる？」

「え？ あ、あの……」

「おいおい、ニーナには唐突過ぎだろ。俺は乗るけどな。一発入れなきゃ気が済まねえ」

「僕も！」

「ええ、私もです」

五大職の僧侶、しかも準修士に喧嘩を売る。そんなことしたら、お先真っ暗だ。出世は有り得ないだろう。

だけど仲間のためなら、喧嘩ごとき、いくらでも売ろうじゃないか！

もうアルフォンスたちはやる気満々だ。仲間を危険に晒すことは許さない。

「あのっ、私にもお手伝いさせて下さい！」

ニーナが叫んだ。

「さっきああ言ったあたしが言うのもなんだけど、本当にいいの？後悔しない？」

「ここで逃げたほうが後悔します！見習いであろうと、私は僧侶です。――身内の恥は、私が濯ぎます」

――メリコでこの人たちに会ってから、日常が音を立てて崩れた。本当は、少しだけ恨んでいる。

関わらないで欲しかった。そうしたら僧正様を信じて、日々に苦悩を感じることもなく過ごせたのに。

（だけどそんなの、知った今から言えば逃げてるだけ）

だから、立ち向かう。

「館の部屋の配置などは覚えています。お役に立てますか？」

「もちろんだよ！さあ、作戦会議といこっか」

ニーナの知識を元に、一行は作戦を立てた。

やはりリネアにかけられたのは、特殊力封じの手枷らしい。

現在、リネアは控えの間より一段劣るが、やはり防御力が高いという、貴賓室に移されていた。

「控えの間は防御力が高いですが、人の出入りがありますから。貴賓室は無許可での入室は禁止されています」

「成る程な。じゃあここから動くことはなさそうだな」

「はい。貴賓室は三階の角、一番南側です。入り口から一番遠いんです」

ニーナが描いた僧房の間取り図を机に置き、一行はリネア奪還の作戦を練っていた。

「そっか、どうやって入ろう」

「三階ぐらいなら壁を登ればいいんじゃない？」

「……えー、普通は壁を登れないかと」

「そつよセルグ。けど、窓から侵入っていいんじゃない？」

ローザンがニヤリと、いかにもな笑顔になった。

「まずは夜遅くなつたから、いい加減リネアを返して、つて行くの。門前払いでしょうけどね」

「その間に壁登って侵入しろってか。いいぜ、やってやる」

「バレないかな？」

「基本的にただの僧房ですので、見張りはいません」

「後は『今』だからどうか、と言ったところですねえ。まあその点は心配無用ですよー」

また新たに、一陣の風。

「えー、水盆の姿見は出来なくなりますが、僧房の異常はどこでも知らせてくれます。緊急なら視界も少し借りられますのでー」

これで侵入するセルグが見つかる心配はない。

（随分と……霊妖を軽視してくれているからです）

リユーンは胸の中で一人ごちた。霊妖の力を強く持つて生まれる人族は少ない。妖力は特にそつだ。

また、五大職で霊力を主に使う吟遊詩人は、直接的な攻撃が不得手だ。そんな霊妖の力に対し、金と力は割けないらしい。防御が全

くなっていないのがいい証拠だ。

（悪事を働くなら、相応の備えくらいして欲しいですよー）

霊妖が操るのは生きるモノの力。少数だからと見くびられるのは腹立たしく、気に入くない。

「さ、もう少し作戦を詰めますかねー」

その頃、リネアは僧房の貴賓室でくつろいでいた。
何度も賢者に連絡を取るように言われたが、そのたびに拒んだ。
そのため手錠をかけられるなど、いくつか脅しも受けている。

（これ以上私に手出し出来るなら、してみるがいいさ）

賢者とリネアの両名を知る者なら、それがいかに愚かわかるだろう。

賢者は弟子のリネアを溺愛している。リネアに少しでも手を出せば、出せどころか命がない。

それがわかってから、グレゴリーもこんな半端なことしか出来ないのだ。

（さて……。リユーンは上手くやっているかな）

精霊使いは転移術の他にも、遠隔地の情報を探る術にも長けている。場と場をつなぐ術こそ、精霊使いの真骨頂。頭の回転が速いリユーンだ、きつといろいろな手を打っているだろう。心配は無用だろうが、やはり気になってしまう。

それに、ニーナ。

(……もう間違わない)

夜も更けた頃。

夕食に豪勢な食事が出されたので、リネアは何も気にせず食べた。
——大概の毒に耐性はつけてあるし、口にすればわかる。今回、体に支障の出る毒は入っていなかった。

(……どうやってここを出たものか)

ニーナがいなければ——そもそも交渉さえしなかったが——手錠ごと部屋を破壊しても良かった。

この程度の術、わずかな時間さえあれば簡単に破れる。
しかしそんなことをすれば、一緒にいたニーナの立場が悪くなってしまう。何せグレゴリーは中枢の人間だ。文句をつけるに決まっている。

(みんなには待たせて悪いが、明日までお預けだな)

明日になれば、師匠に——。

ガタン！

うつらうつらとしていたが、リネアは一気に目を覚ました。音は、扉の外。

「……こんな夜半に何の用だ」

大仰な音を立てた割には、部屋に忍び込もうとでもしたのだろう。リネアの呼びかけに、相手は逡巡してから扉を開けた。
そこにいたのは、グレゴリーだ。

「時間が……ないのでね。いい加減に頷いてもらいましょうか」
「寝言は寝て言え。返事は変わらん」

確実に追い詰められた顔のグレゴリー。時間がない、というのは、大方、巡礼の期日だろう。いくら僧正といえど、自分の支部か逗留している場所でもなければ、魔法使いを不当監禁などできないのだ。リネアは繰り返される問答に、飽き飽きしていた。もう寝てしまいたい。欠伸が出そうになるが、不発に終わる。するとグレゴリーが突然、勝ち誇ったように笑い、もとの傲慢な態度に戻った。

「ふ、ふ。口は達者なようですが、体がだるいでしょう？ 夕食に毒を仕込みましたからね。貴重な逸品だ、流石に気付かなかったよ
うで」

グレゴリーが毒の貴重性を語り出したが、リネアは右から左に聞き流す。毒には当然気づいていた。『害にならない』から気にせず食べただけだ。

（ああ、やっぱり眠いな……）

昨日の夜更かしがたたったらしい。それをグレゴリーは毒のせいと勘違いしているのだ。

「さあ、私の言うことを聞いてもらおうか！」

いい加減にうるさい。下卑た笑みを浮かべたその顔に、一発入れてやろうとリネアが身を起こした、その時。

「ふざけんのも大概にしゃがれ！！」

セルグが窓をぶち破って侵入するや否や、問答無用でグレゴリーの顔を全力でぶん殴ったのだった。

突然の出来事に、流石のリネアも呆然とする。

普段から周囲にいる仲間の気は、いつの間にか注意を払わなくなっていたらしい。そのために窓の外のセルグの気配に、全く気がつかなかった。

「リネア、無事か!？」

「あ、ああ。だが、セルグはどうしてここに……」

ニーナがいるのに、迂闊な行動は出来ないだろう。
そう言おうとしたところで、窓の外からもう一人の声がした。

「セルグっ！ 置いてかないでって言ったじゃんか！ ここ僕じゃ登れないんだよ、ちよっと手伝って!」

「あ、ワリ」

「アルまで……」

少し遅れてアルフォンスも、セルグの手を借りて何とか窓から入ってきた。

「ぎゃー！ やっぱり問題起こしてるよ！ だからセルグに隠密行動はムリって言ったのにいゝ!」

「うるせ。騒ぐなよ、人が来ちまうだろ」

「うっ……」

アルフォンスは床で伸びているグレゴリーの姿を見て、少しばかり泣きたくなった。

そう、最初はセルグだけが壁を登る作戦だったのだ。
だがアルフォンスが『隠密』への不安を漏らしたことで、急遽、お目付役がつくことになった。それがアルフォンスだ（身体能力的な消去法により決定）。

「木登りとは違うよ、やつぱり。ああ怖かった」

「けど最後のところ以外、ほとんど一人でいけたじゃんか」

「まあ何とか……。って、そうだよリネア！ 大丈夫？ 手錠って取れないの？」

「ああ」

最初は驚いていたリネアだが、もう平静を取り戻していた。アルフォンスまで壁を登ってきたのは少しびっくりしたが。

「二人はどうしてここに？」

「どうしてって、リネアを助けに来たに決まってるでしょ。手錠までかけるなんて、危険だしさ」

「ニーナが協力してくれたから、あっさり忍び込めたぜ」

「ニーナは無事か？」

「うん。グレゴリーのこと、許せないって。だから協力してくれるってさ」

「そうか……」

これで自分の立場が危うくなることが分からないほど、ニーナは愚かではない。

（やはり……巻き込んでしまった）

ならば、せめてもの贖罪を。

「ローザンたちは正面玄関で時間稼ぎしてくれてるんだ。今のうちに逃げよう」

「……そうだな」

「なあ、コイツどうする？」

気絶しているグレゴリーをセルグが無理矢理立たせた。
まだ完全にのびている。そう簡単には目覚めまい。

「リユーンに記憶をいじってもらえれば一番いいんだが……」

「精霊使いつてそんなことも出来るの？」

「いや、精霊使いの力というより、強い霊力が必要だ」

「へえ」

その時、窓から遠くの喧騒が聞こえた。だんだんこちらに近づいてくる。

「げっ。やべえ、バレたか？」

「と、とにかく逃げよう」

「おい待て、アル。窓はまずい！ リユーンの術だ」

窓から吹き込む、強い風。この窓だけを狙うこの風は、リユーンからの合図だ。

「どうやら侵入がバレたらしいな。……仕方ない、二人で逃げろ」

「おいおい、それなら最初から来ねえっての」

「そっだよ」

廊下からも、複数の僧侶の足音。直に扉は開かれる。

「これ一蓮托生ってやつかな？」

「違うだろ。けどまあ、似たようなもんか？」

「……そっだな」

優し過ぎる仲間の場合いとも取れる言葉に、リネアは苦笑するしかなかった。

やがて僧侶が続々と部屋に入ってきた。もちろんアルフォンスたちは不法侵入と暴行を問われ、法廷で審問を行うことになった。

「よくもこの様なことを……！ 流石は魔法使いの仲間だ」

「御託はいい。審問はいつだ？」

「――！ 明日、正午の開廷だ！ 仲間にも伝えておいてやる、逃げようなどと思ふなよ！」

恐らくグレゴリーの愚行を知らない僧侶は、そう言い残して部屋を去った。

部屋の周囲に見張りは着いているが、室内には三人だけが残された。

「これからどうする？」

「ま、ここで寝るしかねえよな」

「えゝつ、セルグが窓を割っちゃったから寒いよ」

「ふ、心配するな。このくらいは直せる」

リネアはそう言つと、窓に右手を向けた。

同時に、いつもは唱えない呪文を詠唱する。

「――再び集え、破碎の礫。……よし、これで大丈夫だ」

「うわ、本当だ！ ねえ、何でリネアはその状態で魔法が使えるの？」

「準修士だが、私は魔法使いを修めているんだ。いつも通りはムリだが、並の術なら問題ない」

ジャラリ、と手錠を鳴らしながら、リネアはそう答えた。

「へえゝ……。やっぱり凄いなあ、リネアって」

「呪文は唱えないと無理なのか？ いつも唱えないよな」

「ああ、呪文は……言わば道標だ。慣れれば必要ない。だが今回は魔力の放出自体に負荷がかかるから、唱えて確実性を高めている」
「そっかあ、だから高位の術士って呪文を唱えないんだ。……あれ？ けど、リユーンはいつも唱えてるような？」

「霊妖の力とは理が違うからな。法魔は己に標をつけるが、霊妖は他者からの標が必要だ。そのため省略することは滅多にない」

「んーと、他者との契約だから省略は許されない、ってことなんだな？」

「ああ。慣れの問題ではないからな」

何か、前にもこんなことあったな。

（あの時はローザンもいたけど……）

ほんの数ヶ月前だというのに、もう何年も前のことのように。とても懐かしい。

「けどよ、それなら俺たち、慌てる必要なかったな。魔法があれば、リネアが簡単にやられるわけねえし」

「だね。けど一番慌てたのどこの誰だっけ？」

「う、うるせっ！ 心配するのは当然だろ？！」

「ソーデスネー」

セルグの顔は真っ赤だ。

この様子では、まだ告白には至っているまい。

「いや、私もどうするか考えていたんだ。みんなの意志がわかって良かった」

「そうか？ 役に立てたなら、まあ……」

リネアに微笑みかけられたセルグは、アルフォンスに掴みかかっていた手を離れた。

嬉しいのか恥ずかしいのか、リネアを直視出来ないらしい。

（どこの乙女だよセルグ……！）

何かごめんなさい。自分がこの場において、二人っきりにしてあげられなくてごめんなさい。

「心配してくれてありがとう、セルグ」

とどめの一撃。もちろん微笑みつき。

アルフォンスの名前もちゃんと続いたのだが、そんなことは関係ない。

（ここにいてごめんなさい。もう本当にごめんなさい）

真っ赤な顔でしどろもどろに話すセルグに、アルフォンスは心の底から詫びた。

そしてちよつとだけ虚しくて泣けた。

世界最高権力者へ書

翌日の、正午の少し前。

三人は僧房からそう遠くない場所にある法廷へ身柄を移された。

「三人つていうのも久しぶりだったね」

「何か旅の最初みたいだったよな」

「全くだ」

緊張感などまるで感じていない三人。そんな被告人の様子に、護送係の僧侶は苛立ちを隠せない。

「早く歩け！ お仲間は先に来ているぞ」

いささか扱いは乱暴だが、五大職と一目見てわかる三人（実はアルフォンスは違うが）を、傷つけるつもりは毛頭ないらしい。後々のいざこざが嫌なのだ。

「あつ、リネアたちよ！」

法廷の入り口にローザンたちがいた。こちらを見つけると、すぐに駆け寄ってきた。

「怪我は……ないようですねえ、ああ良かった」

「昨日はごめんなさい、失敗しちゃって……」

「構わない。法廷のほうが目がある分、都合がいい」

「……リネアさん……」

そう消え入りそうな声でリネアを呼んだのは——ニーナ。

「ニーナ。無事なようだなによりだ」

「そんなっ……！ リネアさんは、私のせいで……」

「その責は、協力という形で晴らした。だから、もう気に病む必要はない」

「リネアさん……」

「時間だ。……行くか」

仲間以外、全てが己の敵である場所へ。

正午、リネアを裁く法廷が開かれた。

流れは誰が見ても、リネアが不利であった。

しかもグレゴリーはアルフォンスとセルグを不問に処し、リネアだけを執拗に責めたのである。

やはりと言うべきか、リネアは犯していない罪まで着せられかけている。

「——以上で被害の申し立てを終了と致します。被告人、前へ」

今回は僧正という高位の僧が関係しているため、裁きを下す法廷の面々も、ずらりと高僧が居並んでいる。

裁判長の言葉に従い、リネアが前に歩み出たが、傍聴席にいるアルフォンスはおかしなことに気がついた。

リネアが手錠をしていない。

（さっき迄はしてたのに）

仮にも犯罪者の拘束を解くとは解せないが、リネアの隣りで弁護のために控えているニーナに、驚きは見られない。僧侶の法廷とは、きつとそういうものなのだろう。

やがてニーナの弁護で、昨夜の監禁に至る経緯を述べたものの、

証拠不十分で認められなかった。

そして判決が下ろうとしたが、ニーナがそれを遮った。

「弁護人、まだ何か？」

「はい。先ほどグレゴリー僧正は、『知り合いの魔法使いと話し合いをしようと部屋に案内したら、仲間を手引きして自分を襲わせた』と仰いました」

「ええ、その通りです。ですがあなたは監禁を主張されましたね」

「はい。今度は証拠を提示致しますので、どうぞ再考を」

「証拠？」

「最低限、話し合いなどではなかった証拠です」

一気に法廷がざわめきたった。今になって、被告人に何の証拠があるのだろつ、と。

勝利を確信しているのか、グレゴリーは心配そうな顔はしていない。

(……グレゴリー様。ここまでお気づきにならなかった)

だから貴方の負けで、私たちの勝ちです。

「チルト派特製の手錠。これは力の強さ故に、法廷の許可なしには何人たりとも使用を許されていません」

「!？」

ここに来て、初めてグレゴリーがうろたえた。

「どういうこと？ リネア、もう手錠してないから立証出来ないんじゃない……」

「わからないわ。……ニーナを信じましょ」

傍聴席にいる四人は、一心にニーナを見つめた。
まだ幼さの残る少女。

その少女は今、自分自身で見つけた真実のために戦っている。

「弁護人、それは事実ですが、何の関係が？ 被告人は手錠をして
いません」

「——いいえ、していますよ」

長い間ずっと口を閉ざしていたリネアが、ようやく言葉を発した。
ニーナは場を譲るかのように、一步後ろへ下がった。

「被告人、虚言は……」

「虚言かどうかご確認を」

リネアが短い呪文を唱える。

一瞬、法廷内が色めき立ったが、すぐに害のない術だと判明して
動揺は収まった。

「——!!」

「それでも虚言と？ 裁判長」

いつの間にかリネアの両手には、あの手錠が再びジャラリと音を
立てていた。

「被告人、それは!？」

「今の術は皆様、呪文でお分かりのはず。簡単な目隠しの術の解除
です。……つまり、私は手錠を見えなくしていただけ」

「裁判長！ これでも『話し合い』だとお認めになりますか!？」

ニーナの反論に、判事は悩む必要はなかった。

「確かに、それは我がチルト派が誇る、特製の手枷。これは審議を再考しなくてはなりません」

「お、お待ちを！」

懇願するような声で、グレゴリーが叫んだ。

「その手錠、確かにチルト派のものだが、私が被告人につけた証拠はありません。私を陥れるために、自分で用意したのかもしれない」

（――魔法使いめ！）

グレゴリーは表情には出さなかったが、リネアに憤怒の思いを向けていた。

手錠がついたままでは不都合だから、腹心の部下にこっそり外すよう命じた。法廷にやってくるリネアの手を見て、その指令は遂行されたと思い込んでいたのだ。何たる不覚！

「ふむ……」

グレゴリーの言葉に、裁判長が反応を示してしまった。

このままでは、またリネアが不利になってしまう。

「裁判長！ こちらは『最後の審判』を請求します！」

すかさず叫んだニーナの言葉に、一気に周囲がどよめいた。

（『最後の審判』？）

周囲の反応からして、良いことではなさそうだ。
ニーナは一体、どうするつもりなんだろう？

「よろしい。弁護人の請求を認めましょう」

判事の言葉に、グレゴリーが笑った。

心配で耐えきれなくなったアルフォンスは近くにいた僧侶を問い詰めた。

「最後の審判って何なんですか?!」

「ふん、その名の通りさ。チルト派の独自の方式で、これを最後の審判とする代わり、請求側の要求を必ず飲ませる。証人喚問や、証拠の開示なんかをな」

そんな。

アルフォンスたちは驚き、目を見張った。

自分たちに有利な証言など、誰もしてくれないはず。それなのにニーナは、最後の審判で何を狙っているのだろう？

これで失敗すれば、もう挽回の機会を失ってしまうというのに！

「被告人、では最後の審判で何を要求しますか？」

裁判長がリネアに尋ねる。リネアとニーナが目配せをした。

リネアの答えは、誰もが予想し得ぬモノ。リネアだけに許された、最強の一手。

だからリネアは、笑みを浮かべた。勝利の笑みを。

「証人喚問を要求します。——我が師であり賢者、シャルラン・ガイラを、ここへ」「け、賢者様を……?」

「ええ。『最後の審判』です、何か問題が？」

リネアの目が、僅かに細められた。裁判長がその眼力に動揺する。

「い、いえ。ですが、私たちは賢者様とすぐに連絡をとる術はありません」

「簡単な術で十分です。使用の許可さえ頂ければ、私が呼びます」
「わかりました、では……」

裁判長が了承の木槌を鳴らそうとしたとき、またもやグレゴリーが遮った。

「お待ちを！」

「何でしょうか？」

「魔法使いに術を使わせるなど、危険極まりない！ 許可すべきではありません！」

確かに、と言った意見があちらこちらから漏れ出す。

その意見がうねりとなって押し寄せる前に、リネアは嘲笑して言った。

「ほう。ではどのようにして審判を続けますか？」

「うっ……」

「組合を通せば、正式に我が師を呼べます。ですが、それでは人目につく上、時間がかかりますが」

リネアの言葉は最もだ。大事にならないうちに済ませたいグレゴリーにとって、正式な手段は喜べるものではない。

「裁判長、ご決断を」

いつの間にか、この場を支配しているのはリネアになっていた。
裁判長すら、自分の指示に従わせている。

「で、では、被告人。あなたが賢者様を呼ぶことを認めます」
「それは良かった。では……」

まるで歌うかのように、リネアは呪文を唱え始めた。
アルフォンスは知る由もないが、これは法魔の力を応用した、最
上級の術であった。
そして。

「——お呼び立てしまして申し訳ありません、師匠」

リネアが頭を下げる。

「いや、会えて嬉しいよ。だけでももう少しマシな場所で再会したか
つたな、私の可愛いリネア」

一人の男が、リネアの前に立っていた。

その男、容姿端麗にて眉目秀麗。

どんなに言葉を尽くそうとも、彼の美貌は語れるまい。

年の頃は三十半ば、大人の魅力匂いたつ。瞳は金が混じる不思議
な虹彩、長く伸ばされた髪は輝く白銀。

それが、シャルラン・ガイラ。この世界で最高の権力を持ち、
最強の人物の姿。

賢者の突然の登場と、あまりにも若い人物が賢者であったことへ
の驚きで、場はしんと静まり返ったのだった。

世界最高権力者へ忒

静まり返った法廷で、師弟の会話に口をはさめる者はいない。しばし、師弟の会話が続く。

「全く、お前は飽きさせない子だね。何故こんなモノを付けているんだい？」

そう言つて賢者が手錠を一撫ですると、それだけで手錠は大きな音を立てて地に落ちた。

リネアは手首をさすりながら、こつ答える。

「これを私にかけた人物を、法廷で証明するためです」

「おや。珍しく回りくどいことをするね。この前のようにさつと暴いてしまえばいいものを」

この前、とは恐らく精霊使いの組合を指しているのだろう。

しかし、さつと暴けばいいだなんて、随分と不穏なことを言うものだ。

流石は世界最高権力者の賢者といったところか。

「まあ、お前の好きにすればいい。何でも叶えてあげるよ。それで？ 私に何を望むんだい、リネア」

「この手錠に、法力を込めた者の判定を。今の私の立場では無理ですから」

「いいよ。お前の望むままに」

賢者が手錠に術をかけた。

手錠は鈍い輝きを放ちながら、まずは賢者を照らす。

「さて、いいかな裁判長」

賢者が呆けたままであつた裁判長を呼んだ。裁判長は裁く側だといふのに、その呼びかけに居住まいを急に正した。

「は、はい！ 何でしょうか」

「今、私が使っている術はわかるね？」

「はい！ 法力による、逆導の術です。法力を込めた者を順に照らしていきます」

今、照らされているのは賢者だ。手錠を外した時、術で法力を用したのだろう。

次第に賢者を照らす光は薄れていくが、リネアを照らすことはない。手錠を見えなくなるとき、法力は一切使わなかったのだろう。賢者を照らす光が完全に消えた今、次に照らされるのは――。

「グレゴリー、お前だ」

賢者が絶対零度の声で言い放つ。

グレゴリーが顔面蒼白になりながら、手錠から発せられる鈍い輝きを浴びていた。

「……………！」

「この手錠は作った君たちが一番詳しいだろうけど、法力で錠をかけるものだ。――意味は分かるな？」

途端に、賢者の覇気があふれ出す。関係者であろうとなかろうと、誰もが心臓が握りつぶされるような感覚、恐怖を味わった。

「この手錠、使用許可は出したのかい？」

——きつと、笑顔で人を殺せるのだろう。

有無を言わせぬ圧力、そして殺気。

リネアの仲間である自分たちさえ、ひれ伏してしまいそうな気迫がそこにあつた。

「さあ、どうする裁判長」

賢者の視線を真っ直ぐに受ける裁判長の心臓は、良く保つたなとアルフォンスは素直に思った。

「そ、僧正グレゴリー。あなたに魔法使いの不当監禁容疑があります。ですから……」

「——違うだろう？裁判長」

ガタン！ と音を立てて、裁判長が椅子ごと崩れ落ちた。顔面蒼白になって、全身は小刻みに震えている。

賢者の覇気、殺気は収まることを知らない。

「もう一度言え。あの僧侶には『何』がある？」

「ま、魔法、使いの……。不当監禁……」

「うん？」

何とか椅子に座り直し、裁判長は震える声で告げた。

「不当、監禁……罪を、請求、します」

「——ああ。それでいい」

絶対の権力を持って、絶大の力を従えて。

賢者はこの場を完全に掌握した。

「だそうだ、僧正グレゴリー。反論はあるか？」

「……っ。……私、は」

「私の可愛いリネアに手を出したんだ、覚悟は出来ているだろう？」

恐怖極まってか、咄嗟にグレゴリーはこの場から逃亡しようとした。

逃げられる可能性など、欠片も残されていないのに。

「おや。逃亡罪も追加だ」

そう言っただけ賢者は、グレゴリーに右手を向け、何かを握り潰すような動作をした。

「——うわあああっ——！」

突然グレゴリーが床に伏し、悶え苦しみだした。
外傷は見当たらない。両手でかきむしるように、心臓をおさえている。

「その僧兵。さっさとこいつを連れていけ。目障りだ」

「は、はい！　ただいま！」

——権力者であるとか、そんな理由でこの人物に逆らってはならないのではない。

抗ってはならないのだ。人が持つ理性と感情、それが叫ぶ。

生き延びるために平伏せと。

グレゴリーは悶え苦しんだまま、僧兵に引きずられるようにして法廷を去った。

命の有無はともかく、二度と合間見えることはあるまい。アルフオンスはそう直感的に理解したのだった。

「さて、茶番はこれで終わりだ。後はリネア、任せるよ。やかんを火にかけてたまなんだよ。またベスさんに怒られてしまう」

「ふふ、ベスさんは怒ると怖いですからね。――後はお任せください。ご足労をおかけしました」

「いや。後でまた来るよ。じゃあね」

そして現れたときと同じように、賢者は唐突に姿を消した。しばらく、無音の時間が流れる。

「では、もうよろしいですね？」

静寂を破ったのは、やはりリネアだ。

「も、もうとは？」

裁判長が少し狼狽えながら言った。

「私を訴えたグレゴリーはいなくなりました。私は逆に被害者になりましたが、面倒なので、私は不在のまま起訴して下さって結構です」

「……。わかりました。特例……いえ、ご迷惑をおかけした、せめての償いです。相応の償いをさせることを誓います」

「ええ、よろしく願います」

裁判長は何か考えを振り払かのように、ぎゅっと強く目を瞑った後、深々とリネアに頭を下げた。

こうして賢者まで巻き込んだ法廷騒ぎは、一応の決着を見せたの

であつた。

「リネア――！」

傍聴席にいたアルフォンスたちは、別の出口から出てきたリネアに駆け寄つた。ニーナも一緒だ。

「ちょっと何よアレ何よアレ！ 凄すぎるじゃない賢者様！」

「何よアレ……と言われても。アレが我が師にて賢者だ」

ローザンがわけもわからず叫んだ言葉は、みんなが言いたいことだつた。

うん、何なんだよアレは。

「リネアさんっ！ わ、わわわわ私、け、けん、賢者様を呼ぶなんて聞いてませんっ――！」

「ああ、あれはもう面倒になつて……。いや、伝えないままで悪かつた」

あの裁判、ニーナはリネアに、『考えがあるから』と言われて最後の審判を請求したのだ。

てつきりリネアが直接訴えを述べるものだと思つていたニーナは、賢者の登場に一番驚いていた。

アルフォンスは、勿論賢者にも驚いたのだが、リネアの『素』のほうも気になっていた。

（リネアって面倒とかで物事を判断する人なんだな……）

第一印象は『冷静沈着』だったが、振り返つてみると、かなり感情的というか短絡的……なところが数多く思い出される。

（そういえば武闘大会の時とか、今回の僧侶への対応なんかそうだよなあ。全部『面倒』の一言で切り捨ててたし）

「それにしても驚きましたよー。賢者様はあんなにお若い方だったんですねえ」

「そそ、そうですよ！ 私、てつきりお年を召した方だろうと……！」

「ええと……、師匠が自身で覚えていらっしやらないから、はつきりしないんだが、恐らく今年で三十六だ」

「「三十六！？」」

「ああ。前後差が一、二年はあるかもしれないが」

せめてその差は上乗せされますように。

アルフォンスは祈った。もっと若いなんて事実だったら、きっと立ち直れない。

「三十六で五大職を全部修めるとか、有り得ないよ！——や、ちよつと待つて？ ……違うよね？」

そうだ、違う。賢者様は『三十六歳で』五大職を修めたのではない。

「ん、ああ……。言ったほうがいいか？」

リネアがとても言いにくそうな顔をした。恐らく、過去にも自分のように気づいて、そして驚愕した者がいたのだろう。

「……こ、怖いけど言って頂戴。なんか気になって……」

「俺も……。ここまできたらもう全部言ってくれよ」

「そうか。……我が師シャルラン・ガイラが賢者の位を得たのは……十七の時だ」

——本当に、本当に同じ人間なのだろうか。

妬みや嫉み、恨みからではなく、純粹に驚いた。本当に——。

「念のために言っておくが、師匠は紛れもなく人族だ」

先手を打って、リネアが言った。これも幾度となく繰り返してきた問答なのだろう。

「賢者は人族以外、どうあがいても特殊力の関係上、なれない。だがそれでも、十七という若い賢者を認めたくなかったのだろう。組合の古老どもは、様々な検査を施したんだ」

その結果、逆に賢者になる条件を認めざるを得なくなってしまったが、と付け加える。

「十七、十七、十七……」

「うわっ。ちょっと、壊れないでよセルグ！ 聞きたいって言ったのセルグじゃんか」

「セルグ、五大職にまじめに取り組んでるものね。十八で見習いつて遅くはないけど、ねえ……」

人間離れた賢者の偉業は、もう神業だと思うしかない。

アルフォンスはそうやって吹っ切ったのだが、セルグは簡単にはいかないようだった。

「ま、とにかく無事に済んで良かったね！」

「まったくですよー」

もうこれでグレゴリーと関わる必要はなくなった。
リネアの安全も確保され、本来の目的、仲間探しの旅に戻れるのだ。

「さーで、とりあえずコレ連れて宿に戻りましょ」

コレ、とローザンに指差されたのは、未だに壊れたままのセルグだ。

（賢者様は凄いと思うけど、そんなに落ち込むほどかなあ……）

自分たちの中（ニーナも含む）で、五大職に就いているのは三人弟子の、しかも魔法使いを修めているリネアを抜いても、この差は凄くないだろうか。

（ニーナはあくまで『賢者様』に驚いてるだけだし）

どうやら自分と同じく、賢者様は別世界の人という考えなのだろう。

（じゃあ、セルグは……）

セルグに、続いてリネアに目をやる。

セルグは理解しているのだ。愛しい人、その思いを現在、最も確かに受け取っているのは誰か、ということ。越えるべき存在は誰なのか、ということ。

そこまでアルフォンスが考えた時、ようやく立ち直ったセルグが立ち上がった。

同時に、まるで淡雪のように、アルフォンスの考え事は頭から消

えていった。

（……いつの間にか出来ているたんこぶには、突っ込まないでいこう）

あとローザンが自慢の鉄扇をパシパシ鳴らしているとか、ね。
こうしてアルフォンスたちは宿に戻ったのだが、一つ気にかかることがあった。

「リネアさん、リネアさん」

「なんだ？」

そう、リネアと楽しそうに話しているニーナだ。
ニーナはこの先、どうするつもりなのだろう。

「あ」

ふと、リネアが声を上げた。

「どうした？」

「師匠が来る」

「え」「え」

全員の声が被る。

それから一瞬のうちに、部屋に人影が一つ増えたのだった。

「やあどうも。君たちがリネアの仲間だね」

世界最高権力者へ参

「師匠、火は大丈夫でしたか？」

「沸騰前だったけど、やっぱり怒られてしまったよ。火から目を離すなっ」

「ベスさんは相変わらずのようですね。普段の世話をしてもらっている分、文句は言えないですが」

「そうだね。私はただリネアに早く会いたかっただけなのに」

……ええと、もちろん僕たちはこの二人の周りにいます。決して二人だけじゃないです。

（何これ何これ何これえええー！？）

どこぞの恋人同士の会話ですか。

っていうかベスさん（誰？）>賢者様で、やかん>法廷？

（さっきは気にならなかったけど……）

今は落ち着いて考えられる分、色々と突っ込みどころが増えてしまった。

先ほどと同じように突然現れた賢者は、リネアの隣に腰を下ろした。

窓際の椅子になる部分にセルグと自分が、中央の机にローザンとニーナ、リユーン。ベッドにリネアが腰掛けている。

さてさて。ここでよく思い出してみよう、賢者様の言動を。まず、登場して一発目。

「会いたかったよ。けどもう少しマシな場所で会いたかったな。私

の可愛いリネア』

……もう十分だ、思い出すの止めよう。アルフォンスは頭を振った。

（突っ込むべきか！？ 突っ込んでいいのかコレ！？）

アルフォンスの苦悩は顔に出てしまったらしい。ローザンが何とも言えない顔で頷いてくれた。

「ええと、賢者様。はじめまして、私はニーナ・キャズタと申します。お会いできて光栄です！」

「こちらこそ。リネアのお手伝いありがとうございます」

「いえ、私は自分のやるべきことをしただけで……」

とーってもありがたいことに、今回は空気を読めないニーナが活躍してくれた。やった、話しかけるっていう第一関門突破だ。

「リネアから話は聞いてるよ。この子と仲良くしてくれてありがとうね」

「い……え？」

賢者の言葉に、ニーナの返事が濁った。

（あれ、お話なんていつされたんだろう。リネアさんは賢者様に会ってたのかしら？）

「ふふ、不思議そうな顔をしているね。直接会ってたわけじゃない、術で意思を飛ばしたのさ。だから正確には『話を聞いた』ではないね」

「そ、そうなんですか。遠くにいても意思の疎通が出来るなんて、便利ですね」

「うん、この術は重宝しているよ」

賢者は終始笑顔なのだが、どうも落ち着かない。まるで、こちらが見定められているような気持ちになる。

ニーナもそれを感じ取ったのかもしれない。ハキハキとしていた笑顔が、少し明るさを失ってきた。

アルフォンスはとりあえず会話が途切れないよう、自ら話しかけた。

「えーっと、賢者様」

「ああ、名前で呼んでくれて構わないよ。君たちはリネアが認めたのだから」

「え、あ、はい」

それは逆に、リネアや自身が認めない人物に名前で呼ばれるのは不愉快だ、と言っている。

また、リネアが認めるなら無条件で自分も認める、そういうことだ。

（どんだけ過保護なんだよ賢者様……）

確かに、ただの信頼ではない。心酔、愛着、執着。何と表現するのかは分からないが、言葉の端々から、態度から。それは確信できる。

リネアがあまり賢者様のことを語らなかったのも、今なら分かる気がする。これは自慢しないとか、そういった次元の話ではない。

……色々と話しづらかったのだ。

「ではシャルラン様、一つお聞きしてよろしいですかー？」

「うん、いいよ。何だい？」

「わずか十七歳で賢者の位を得たと聞きましたが、えー、修行はどのようななさっていたんですか？」

「修行、ねえ……」

クス、と賢者が笑った。今までの微笑とは違う。

これは、法廷で見たモノと同じ笑みだ。

「私の父は武闘家、母は魔法使いでね。叔父は剣士、伯母は吟遊詩人で、祖父は僧侶だ。だから修行に出たりはしなかった。師は実家で事足りたからね」

五大職がすべて身近に揃った家庭環境。そんな夢物語が本当に存在したとは、夢にも思わなかった。

「お察しのとおり、彼らは全員修めていた。さて、そこに特殊力や気が高い赤ん坊が生まれた。どうなると思う？」

「家族総出で修行をつける……ですか？」

「正解だ、アルフォンス君。物心つく前から、遊びと修行は私にとって同義だった。別に嫌でもなんでもなかったよ。けど、それでも足りなかったんだ」

遊びと修行が同義で、それでも足りない？

何だそれは。どんな超人の言葉だ。しかも、五つ全てを行っての言葉なのに。

「十歳くらいで一人前の位は全部得たけど、家族はまだ早いと言って、それ以上の昇級試験を受けさせてくれなくてね。だから家を出たんだ。けど試験は毎日あるわけではないし、全て終わるのに七年

かかってしまった、ってワケ」

——この人が人族かどうかの検査をやった人の気持ちだが、今ならわかるとアルフォンスは思った。

最初は、検査なんて、失礼だと思った。きつとやった人はグレゴリーみたいに傲慢な奴なんだろうと。

だけど、違う。この人『が』異常だ。

「人ニシテ人ニ非ズ」

「！」

自分の考えが読まれたのかと、アルフォンスは驚いて顔を上げた。だが賢者はニコニコと笑みを浮かべているだけだ。

「それが賢者の就任式で、私に与えられた称号さ。どうだい？ あながち間違っていないだろう？」

「……」

「ふふ、いいんだよ、素直に言つて。これは気に入ってるんだ」

「え？」

「だって人なのに人ではないなんて、矛盾の極みだろう。うん、最高に愉快だよ」

実に楽しそうに、屈託なく賢者は笑った。その笑みと言葉に、みんな呆然とする。

「……師匠、あまりみんなをからかわないで下さい」

「ん？ そんなつもりはなかったんだけどな。ふふ、気に障ったなら済まないね」

何を謝るのか、そしてなぜ謝らないといけないのか。

きっと賢者はそんなこと、考えたことはないのだろう。

「さて、リネアの顔も見れたし、そろそろ帰ろっかな。みんなに挨拶も出来たしね」

「もうお帰りに？」

「ああ、また会いに来るよ。私の可愛いリネア」

じゃあね。

そう言い残すと、賢者はまた唐突に姿を消したのだった。

賢者が去った後、部屋に広がるのは何とも形容しがたい沈黙だった。

(……さあ、どうしよう)

桁外れ過ぎて、賢者様について何も言えない。

そう思ったアルフォンスは、しばらく無言だったが、賢者の言動に呆氣にとられたのは、リネア以外の全員だった。見事に押し黙ったままだ。

そして、視線は『リネア何か言ってる！』と訴えていた。

それがヒシヒシと伝わったのだろっ、リネアがゆっくり口を開いた。

「……。何か、聞きたいことはあるか？」

「——あ、はい！」

「何だ、アル」

「えっと、——ベスさんって誰？」

「おいアル、最初にそれか！？」

室内の緊張感が、アルフォンスの質問で一気に緩んだ。

「えっ、だって凄く気になるじゃんか！ 賢者様を怒る人だよ?!」
「う、それを言われると……」

実はアルフォンスの頭を占めていた疑問の大半は、法廷からずっと『ベスさんって誰?』だった。

ベスさん>賢者様の方程式が確立した後は、よって話半分にか聞いてなかったりする。

「ベスさんは師匠が住んでいる塔、通称『賢者の塔』の近くの村に住む、魚屋の女将さんだ」

「魚屋の女将さんが、何でまた賢者様を叱ってんのよ?」

「いつも塔に魚を持って来てくれていたんだが、幼かった私の生活を心配したらしい。師匠の子育てでは不十分だと判断したと言っていた」

「うーわ、すごいねベスさんって……」

「五人も子を育てた人だから、経験豊かなんだ。ベスさんが身の回りの世話をしてくれるようになって、確実に生活が向上した」

「……えっ?」

リネアの言葉に、また室内の空気が固まった。

生活が向上?

だって一緒に暮らしてたの賢者様でしょ。流石に子育ては苦手だったとしても、何か変わらないか、と。

「……師匠は、物事に執着しない。だから生活は最低限の物だけで行っていた」

けれどベスさんがやってきて、そんな賢者に反論したと言う。

「『賢者だろうが何だろうが、子育てするなら、まずは子供のこと

を第一に考える』と。その言葉を受けて以来、師匠はベスさんを認めた。今も日々の手伝いをしてもらっている」

何せ『料理』という概念はベスさんに教わったからな、などと爆弾発言もかましてくれた。

……確かに、そんな暮らしを送っていれば、子育てをしたことのある母親なら、賢者相手でも怒鳴ってしまうかもしれない。

「ね、ねえリネア……」

そこまでリネアが話したとき、ローザンが恐る恐るといった風に口を開いた。

「なんだ？」

「さつきから流してたけど……。リネア、……賢者様に育てられたの？」

「ああ、そうだ。私は師匠に育てられた。師匠は師であるとともに、育ての親だ」

——じゃあ、リネアの。

その先は誰も言えなかったのに、リネアは事も無げに言った。

「私は両親を知らない。しかし、師匠やベスさんのような方がいて下さるから構わない」「……」

嘘だ。

両親を知らず、母親を求め続けているアルフォンスには分かった。自分とて、孤児院の面々は家族同然である。大事な存在だ。それでも求めずにはいられないのだ。

（けど、言わないよ。リネアが大丈夫って言うなら、僕は言わない）
それでリネアの矜持を守れるなら。

「リネアさん！」

一瞬の沈黙が流れた後、ニーナが真つ直ぐに前を見据えて叫んだ。
——ニーナはリネアの本心には気がついていないだろう。
多分、自分以外は気がつけない。
同情して欲しいんじゃない。ただ、自分を見失わないための嘘を、
見逃して欲しいだけということとは。

「まだ質問か？」

「勿論ありますが、それは後々聞かせて欲しいです。だから、その
……」
「？」

ニーナが何か言いにくそうに、体をもじもじさせた。

「どうした、何も気にする必要はないぞ？」

「そ、そうなんですけど、そうじゃなくて……」

ニーナの言い渋りように、流石のリネアも困り顔だ。
見かねたローザンが、すかさず助けを入れる。

「もしリネアと二人で話し合いたいなら、あたしたちは出ていくわ
よ？」

「あっ、いえ！ むしろ皆さんにも居ていただかないと」

「そう？ じゃ、さっきリネアも言ったけど、何も気にしなくてい

いのよ。何でも言って」

そう言ったローザンの言葉に腹が決まったのか、ニーナは再び前を見据えた。

視線の先にいるのは、勿論リネアだ。

「ま、まずお礼と謝罪をさせてください。チルト派の僧侶として、本当に申し訳なく、また有り難く思っています。事態の解決に尽力していただいて、……他の僧たちに被害が出ないように取り計らっていただいて、ありがとうございます」

事実、今回の事件に巻き込まれた自分には、何の影響もない。

この支部には巡礼で立ち寄っただけだし、所属する支部に帰れば、何事も無かったかのように過ごせるだろう。

この支部の僧侶たちは多少騒ぎが続くだろうが、精霊使いの組合のような事態になれば、支部ごと崩壊する危険性だってあったのだ。

「買いかぶるな。私は他の僧侶のために動くほど、お人好しではない」

「け、けど。事実です。リネアさんのおかげで、被害は最小限だったと思ってます」

リネアの言葉の真意に気づいたのは、一行の潤滑剤役であるローザンだけだった。

（『他の僧侶』……ね。ニーナのためには動いたんだ。リネアも素直に言えればいいのに）

リネアの性格上、そんなことは口が裂けても言っまい。しかしこうして言葉の端々にある真実を拾い集めれば、リネアが思いやり深

い性格であることがわかる。

いつか、ニーナもそれを理解する日が来るだろう。

「まあ、どう考えるのもお前の自由だ。で？ 『まず』がその話なら、本題は何だ？」

リネアの問いかけに、うつ、とニーナは言葉を詰まらせる。
しかし今度はそれも一瞬で、もう迷いはしなかった。

「私、どんなに自分が至らないか、皆さんと一緒にいることでよく分かりました。だから——私も一緒に、旅に連れて行ってくれませんか！？」

わずかに瞠目して、しかしすぐにリネアは笑った。

「もちろん私は構わない。しかし、それはみんなに聞くことだろう」「は、はい。あの、みなさん……」

振り向いたニーナに向けられたのは、もちろんみんなの笑顔。

「大歓迎だよ！ これからもよろしくね」

「おう。だけど組合と折り合いつけんの、大丈夫か？」

「ま、あたしたち余裕アリアリだから、慌てないで大丈夫よ」

「いつそ私たちもメリコに戻りますかー？」

あ、それいいね！。なんて話が進む。

「……そういうことだ、ニーナ」

「——はい！ これからよろしく願いします！」

こんなに迷惑をかけたのに、歓迎してくれるなんて思いもしなかった。

もっと、大きな人間になりたい。もっと、色々なことを勉強したい。

この人たちと一緒に行けば、絶対にその夢は叶う。

（チーリス様、私は一度、あなたの御許を離れます）

それでも私は僧侶で在ります。私は僧侶である自分を恥じないために行くのです。

（主よ、どうか我らの旅路にご加護を）

六人となった一行が目指す地は、中の海に浮かぶ新大陸。

砂漠に行くへき

砂漠や乾燥した草原など、荒涼とした大地が広がる。ここは中の海に浮かぶ新大陸、アイル。一行は北ドーニヤ大陸から精霊陣で楽々と移動していた。

この大陸は一千年以上前に発見されながら、長らく人が住むことを避けてきた土地である。最初は犯罪者を送り込む土地として、次第に貧困にあえぐ人々が最後の望みを託して移住する土地として、二百年ほど前によく入植が始まったばかりだ。国となると、その歴史は百年に満たないものがほとんどだ。

アルフォンスらの出身地であるアスケイル大陸には、千年以上の歴史を持つ国がいくつもある。それを考えると、この地が新大陸と呼ばれるのはある意味で相応しいようにアルフォンスは思えた。

やがて、一行はとある町に到着した。

この先に進む方法は三つ。海沿いを大回りして進むか、海を船で行くか。または、小さめだが砂漠を越えるか。

海路を選択するのはセルグが可哀想に思え、なおかつ最短距離であることも手伝って、今回は砂漠越えで行くこととなった。

「よし、この町で砂漠越えの準備しなきゃね！」

「この距離なら、およそ五日だろう」

事前に入手していた地図を手に、一行は準備のため話し合った。砂漠の地図を必要とする酔狂な旅人はいるはずも無く、一行は隊商用のものを購入した。

よってこの地図には、隊商が通るいくつかの道が砂漠を横切るように示されている。この道を辿れば、まず野垂れ死ぬことはない。道は途中でオアシスや遺跡、町などをいくつも通る。しかし専門用語や特殊な記号が多く書き連ねられたそれは、素人が細々とした

情報を得るのには不向きだった……が。

「でかい隊商が通る道がコレだ。ちょっと長いけどな。こっちは短いけど古い道だし、やめたほうがいいだろ。俺たちは砂漠に慣れてないからな」

「セルグさん、凄いですね。なんで古い道ってわかるんですか？」

「え？ あ、あ……。ま、隠すことでもねえか。俺は親父が隊商の頭領だからな、こういう地図は見慣れてるんだ」

「へえ、ってことはアンタ、本来なら若旦那なわけだ。あはっ、セルグが若旦那だなんておっかしー！」

「うるせえ！ ……俺はこの道を選んだんだ、もう若旦那じゃねえよ。親父も了承済みだ。……ちっ、これだから黙ってたのによ」

湿っぽくなるとか、両親が懐かしくなるとかではなく、セルグはからかわれるのを予測して隠していたようだ。

見事にかかわれたので、その努力は無駄になってしまったのだが。

「それならアンタ、買い物は全部してよ。値段交渉もね」

「あのな、無茶言っな！」

「ふふ。メリコの市に興味を持たれたのも、家業が商いを営まれていたからなんですねえ」

リユーンの言葉に、セルグが照れくさそうに答えた。

「ん、当たり前だ。やっぱり生まれたときから馴染んでたんだ、どうしてもそういうの気になっちゃう」

「いいじゃん。旅じゃお金は節約しないとね！　じゃあ今日はセルグに頑張ってもらおうか！」

「へえへえ。わかった、やるよ」

どこか嬉しそうに言ったセルグだったが、誰にも気づかれないところで、ふと遠い目をした。

思いを馳せるのは、遙か彼方の故郷と、家族。

——俺は武闘家の道を選び、結果として実家を捨てた。

後悔はしていない。親も認めてくれた。自分の道は自分で決めろ、と。

それでも、それまで跡継ぎとして様々なことを教えてくれた親に、後ろめたさを感じているのは事実だ。

しかも自分は市や行商を訪ねるのがやっぱり大好きで、常に物品の価格変動を確かめたりしてしまう。もし家業を継いでいたら、根っからの商人だと褒められたかもしれない。

（なあ親父。親父が教えてくれたこと、こんなところで生かせそうだ。親父の言ってたことは正しかったな）

親父はいつも言っていた。『商売は機転が命だ。人生も同じ。だから判断材料である知識はいくらあっても足りん』と。

（武闘家になって商売の知識が生かせるなんて、誰も思わねえよ。けど、生かせるんだ）

「よし、じゃあ買い出しに行こうぜ！」

町に入ると、砂漠越えのために必要なものが市にズラリと並んでいた。

今は海路が輸送の中心になってきたが、この周辺の町だけを回るなら、砂漠越えのほうが早い。

そのため砂漠に行く隊商が今も数多く立ち寄るのだ。一行は必要な物資を買い揃えるため市へ向かったのだが、その一部始終は。

「ウソ言つなよ、この流通価格は半分以下だろ？」

「おっちゃん、これも買うから二割引で！」

「そんなに高いなら他の店に……。あ、割り引いてくれんのか？」

セルグ、大活躍。

まるで水を得た魚のように、セルグは嬉々として交渉に当たっていた。

もともと人当たりのいい性格をしていることも手伝ってか、売り手が『仕方ないなあ』と、絆されることも多かった。

（そういえば、セルグって買い物でお金足りなくなることにはなかったよな……）

自分は小心者なので、とにかく計画を立てた。

リネアは必要最低限のみ購入。……自分みたいにお菓子などをコツソリ買ったりはしない（この前バテローザンに怒られた）。

ローザンはたまに自分が気に入った物を追加で買い、『お金足りなくなっちゃった』となる。但しどれも有用な物で、無駄な物はない。

リユーンとニーナはまだよくわからないが、きっと予定額を大幅に剩らせることはないだろう。

（……やっぱ、凄いや）

これはセルグが特技として、誇っているものだ。アルフォンスは素直にそう思った。

そして、二日後。一行は旅慣れているローザンを先頭に、夕闇の砂漠を歩いていた。

砂の上は予想以上に歩きにくく、足を何度も取られながら進む。

そうして砂丘を一つ登れば、砂漠が四方に延々と広がっている。終わりが見えない旅路は、かなり精神的にも疲れるものだとアルフォンスは初めて知ったのだった。

「じゃあ今日はここまでにしときましょ」

ローザンの号令がかかる。

砂漠の日中は灼熱の太陽が射し、無理に動けば死に直結してしまう。そのため日が高い時は避け、早朝と夕方になるべく歩を進めるのだ。

「っあゝ、疲れたあー！」

「まだ初日よ？ ま、キツくなったら早めに言いなさいよ。途中で倒れられるほうが何倍も迷惑なんだから」

「はい。……あのさ、砂漠の夜って綺麗だよね」

ちょっと唐突な気もしたが、アルフォンスはそう言わずにはいられなかった。

しかしみんなも同じ思いだったらしく、口々に賛同してくれた。

「なーんも無いからなあ。本当に『一面の』星空だ」

「今宵は綺麗な三日月ですしねえ。どことなく青みがかって見えるのが不思議ですよー」

「ええ、本当に。私、こんな綺麗な星空、初めて見た気がします」

「砂漠は砂嵐さえ無ければ、星見には最高だな」

「そうよねー」

全員が絶賛する、砂漠の夜空。

アルフォンスの故郷とは全く星の位置が違い、知っている星座は一つもない。それでも、美しさが損なわれるわけがなく。

「こんな星空見れるなら、砂漠越えも耐えられるなあ」
「そうですね。私も頑張ります！」

なーんて、お気楽会話をしていたのだが。

太陽が沈むと、砂漠に熱源はない。気温の調整を自ずと果たしてくれる動植物もナシ。つまり、夜は極寒。昼間の灼熱がウソのような寒さなのだ。

「いやあ、かなり冷え込むんだねー」

「アル、何でアンタ平然としてるのよ。リネアも！」

「まあ、そりゃあ……」

「ああ、それは……」

「寒冷地出身だから」

二人の声が被さった。

アルフォンスの故郷は、冬になると氷点下が当然だ。夏にも『暖かい』はあっても『暑い』は滅多にない。リネアも場所は違えど、同じようなもの。時には河さえ凍り付く土地だ。

アルフォンスとリネアも寒くないわけではないが、骨までしみるような寒さに耐性のない四人は、想像以上に寒い砂漠の夜に震えていた。

その主な原因は、防寒具を用意し忘れたため。何せ知恵袋のリネアは感覚が違い、ご意見番のローザンは寒さを予想していなかったのだから。

「……リネア、お願い。手伝うから結界張って。この上着だけじゃ心許ないわ」
「わかった」

ローザンが手を摺り合わせながら言う。リネアはすぐに頷き、一行の周囲には球状の結界が張られたのだった。霊力と魔力を合わせて作った特殊な結界だ。結界は風の出入りを防ぎ、気温も一定に保つという優れたもの。もちろん砂嵐も防いでくれるので、結局は砂漠越えの間、毎日お世話になった。

ただ、リネアたちの力が発揮されたのは、何も防寒だけではない。

「――来るぞ」

砂漠に入って四日目のこと。ようやく日も沈みかけた頃、リネアが杖を構え、一見すれば何の異変もない広大な砂漠を見据えた。

「右二、左四だ！」

「あら嬉しい、ちょうど人数分ねっ！」

それに応じてセルグが気を読み、各自に告げる。ローザンは扇を構えると、すぐに術を発動させにかかった。

「全員伏せて！ 一気に行くわよ！！」

せめて何をするのか言ってくれ！

そう思いつつも、アルフォンスは慌ててしゃがみこんだ。

「きゃっ！」

「危ねえから伏せろ！」

唐突というか荒行というか、旅での突発的な出来事に慣れていないため、反応が遅れたニーナをセルグが引き寄せ、庇うようにして地面に伏せた。

「せー、のっ!!」

扇で起こした小さな風を、靈力で何倍、何十倍にも増幅させる。時に風は鎌鼬のような巨大な刃となり、また時には全てを吹き飛ばす嵐となる。

(ぎゃー!!)

巨大な砂嵐が巻き起こる。

やっぱり先に何をするのか言っただけだった。何とローザンは辺りの砂を吹き飛ばし、砂の下にいた魔物を、地上へ強制的に引きずり出したのだ。

「お前やりすぎだろ!」

「うっさいわね、一気に終わらせるわよ。日も暮れたってのに、こうもクソ暑いんだもの!」

どうやらローザンは砂漠の暑さにイラついて、こんなことを仕出かしたらしい。

……心臓に悪いから是非とも止めて欲しかった。

「来るわよ!」

突然体を覆う砂がなくなったことに驚いたのだろう、まだ少し距離はあるとはいえ、六匹の魔物が狂ったように突っ込んでくる。

魔物はまるで蠍のような姿で、強い日差しを反射させる、鎧のような分厚い外殻だ。高く掲げられた尾に刺されたら、人など一撃で死んでしまうだろう。

「さっさと終わらせることには賛成だ。……今回は私がやる」

あ、暑さが駄目な人がもう一人いた。

（リネアは寒冷地仕様かー……）

ローザンは機嫌の悪さをすぐ表に出すが、リネアはギリギリまで我慢する性格だ。

だからリネアの機嫌は分かりにくいのだが、今回はすぐわかった。……目が据わっている。

「リネアさん、私も……」

「いい、私一人で十分だ」

リネアはニーナの助力を断り、杖の先端の石に魔力を込めた。まばゆい紫色の光が輝き出す。

「――。在るべき姿を乱すこと、それは決して許されない」

だから、永久に眠れ。

（せめてもの贈り物。真にお前らを救えない、力無き私から……）

紫の光が四散したかと思った瞬間、魔物は全て動きを止めた。

その体には砂を固めて作られた刃が、幾本も的確に殻の継ぎ目に刺さっていた。いかに強固な外殻を持つとも、その継ぎ目を狙われてしまえば脆い。

リネアは一撃で魔物を葬ったのだ。

「終わったぞ」

「……」

一瞬の出来事。

ニーナに至っては驚きのあまり、言葉が出ないようだ。
思い返せばリネアの戦闘をしつかりと見たのは、ニーナはこれが
最初だ。あまりの実力に度肝を抜かれたのだろう。

（全員が通ってきた道だしなー）

こればかりは何とも言いようがない。自分は自分、と割り切るし
かないのだ。

「リネア、お疲れ様。結局全部任せちゃったね」
「構わない。今夜は休息も十分に取れるからな」

そうだねー、などと話していたアルフォンスは、明るさが戻らな
いニーナの様子に気付けなかった。

砂漠に行く《貳》

そうして、四日目の夜をむかえた。

この調子でいけば予定通り、明日の夕方には砂漠を抜けられるだろう。

今夜はオアシスで休息を取る。一行が立ち寄ったオアシスは、あまり大きくはないが、満々と水を湛えた池があった。

一行はこれまでリネアが魔法で精製した水を飲料水としていたが、それにも限界がある。水属性の術は乾燥した地域では使いづらいうえ、リネアの属性は火。水は苦手とする属性なので、水の精製は苦勞なのだそうだ。

そのためリネアに頼らずたつぷりと水を使えるオアシスに到着したという喜びは、何とも言えない安堵感と喜びを一行にもたらしていた。

「あー、やっぱり水も植物も大切！ 砂漠なんかにいると改めて思うよ」

「ですねえ。砂漠の人々がオアシスを大切になさるのも当然ですよー」

アイル以外の大陸にはローザンたちルマの一族のように、旅をしながら暮らす人々がいる。そうした中には、こういったオアシスを辿るように旅を続ける人々もいるのだ。

水は、命の源。

砂漠越えはそのことをアルフォンスたちに強く実感させた。

「じゃあお休み」

そうして夜も更けると、一行はローザンの指示に従い、早々に体

を休めることになった。

——やがてみんなが寝静まった頃、こっそりと動き出した影があった。みんなを起こさないよう気をつけつつ、影はオアシスの外へと向かう。

(……?)

そのことに気づいたのは、セルグだった。

もともと眠りが浅い上、気配が動くことには職業柄、人一倍敏感なのだ。

(んーと、アルはいるし、ローザン、リユーン、ニーナ……。あ、リネアか)

月明かりで照らし出される人影は、自分を入れて五つ。さっきの動いた人影はリネアで間違いない。

(……。よし、追うか！)

何となく言えず仕舞いだった実家のことを話せたためか、以前より心が軽い。

そうだ。一つ、吹っ切った。だから、もう一つ。

(そろそろ……ケジメつけてえしな)

一度だけ夜空を仰ぎ、セルグはリネアを追った。それから数分後。今度はアルフォンスがもぞもぞと動き出した。

(喉渴いた)

今夜は飲み水の心配はない。喉が渴いたら好きなだけ飲める。リネアの機嫌や体調も気にする必要はない。

そう思ってたのだが、ふとおかしなことに気がついた。

（ん？ 一、二、三……。……ってセルグとリネアあ！？）

——ええ、今は月が綺麗な真夜中です。

（まあ進展があるのかどうか、ってトコだろうけどさ……）

間違ってもフツの男女が夜中にするような『コト』は、起こり得ない。命を懸けてもいい。

だってセルグにそんな度胸があるわけない。

「……探してみるか」

野次馬好きの血が騒ぐ。

そう思ってた立ち上がったとき、アルフォンスは後ろから声をかけられた。

「アルフォンスさん」

「っ、ニーナ」

ぐっすり寝ているリューンとローザンを起こさないよう、ニーナは気をつけながらこちらにやってきた。

まだ眠いのだろう、目をこすっている。

「どうされたんですか？ 何か異変でも？」

「あっ、いや別に……」

まさか仲間の恋路を野次馬しに行く気でした、なんて言えるわけがない。

——ヤバい、ここは話題を変えなくては！

「ご、ごめんね。起こしちゃったかな？ その、僕、喉が渴いて…」

「そうだったんですか。私もなんです、だから気にしないで下さい」

「そっか、じゃ水飲みに行こう」

「はい」

自分とて、起きた理由は喉が渴いたからだ。これは嘘じゃない。しばらく行ったところで、ちょうどいい場所を見つけた二人は池の水を飲んだ。とにかくにも、まずは水分補給だ。

「ふうっ、スッキリしたあ」

「はい。お水がこんなに美味しいなんて、初めて知りました」

ニコリと笑うニーナ。その笑顔が空虚だと、唐突にアルフォンスは思った。

「……あのさ、ニーナ。あの魔物との戦いのこととか、気にしてる？」

そんなアルフォンスの言葉に、ニーナは目をわずかに見開いた。

——自分なりに、笑顔で言えたと思ったのに。

（何で気づいてくれるんだろう）

夜風が、頬を撫でる。自分の些細な——いや、くだらない変化に、アルフォンスは気づいてくれた。

そのことが悲しいくらいに嬉しくて、ニーナは膝を抱えて座り直す、この四日間で積もった思いを吐き出すのだった。

「……リネアさんって、本当に凄いですよね」

特に、あの魔物との戦いで見せた術は驚愕の一言だ。あんな術、自分は何年修業したって出来やしない。この砂漠越えでも、水という生命線を維持していたのはリネアだ。

それは諦めではなく、紛れもない事実。どんなに頑張っても、あの高みには登れない。

「ローザンさんだって……。私、何の役にも……」

「あのさ、ニーナ」

砂漠越えの間、確かにリネアとローザンは大活躍だ。それは揺るぎない事実。

だけ。

「ニーナはリネアでも、ローザンでもないんだよ。魔法使いや風使いじゃないし、賢者の弟子でもないんだ。だから、同じである必要はないと思うな」

「アルフォンスさん……」

思いがけない言葉に、ニーナは伏せていた顔を上げた。

「そうだな、目標にすればいいんじゃない？ 僕もそうしてるよ。リネア、剣術も凄いからさ」

優しい、優しい言葉。自分の脆さも醜さも、全て受け止めてくれた言葉。

「ニーナ？」

「……ありがとうございます」

そう言ってニーナは両手で顔を覆ってしまった。

……間違いなく、泣いている。

（えっ、えーっ！！ えーっ！？）

ちょっと待てちょっと待て、自分は何かやったか？

いや、大丈夫なはずだ。絶対に悲しませるようなことは言っていない。だけど、けどどうしよう。

（誰か助けてえーっ！）

まさかニーナは自分の言葉が嬉しくて泣いている、などとは思ってもせず、アルフォンスはおろおろと取り乱すしかなかった。

やがてニーナが涙を拭いて立ち上がったとき、アルフォンスは精神的に疲労困憊していた。

その疲労度合は、砂漠越えより度合いが大きかったかもしれない。

「あの、すみませんでした、私の愚痴に付き合ってもらっちゃってアルフォンスさんに慰めていただいて、とても嬉しかったです」

「え、あ、そ、そう？ えーと、うん、役に立てたなら嬉しいよ」

嬉しかったなら、何でニーナは泣いたんだろう——などと考えてる時点で、アルフォンスはやはりダメだった。

仮にも目の前の女性に恋をしているのだ。このことをローザンが知ったら、抱腹絶倒は間違い無しだ。

「じゃあ、そろそろ戻ろうか。これ以上夜更かししたらローザンに怒られちゃうよ」

「そうですね。……あら？」

「？ どうしたの、ニーナ」

「あの、今あちらを誰かが歩いていたような……」

「へえ。セルグかな？」

「え？ セルグさん、起きてらしたんですか？」

（わあ、またやつちゃった。墓穴だよ墓穴……。そもそもセルグを探す気だった、とは言えないよね）

思わず遠い目をしてしまったアルフォンスだが、何とかこの場を切り抜けようと頭を必死に動かす。

「う、うん。さっきさ、リネアとセルグが居なかったんだよ」

もう知ってる情報は先に出しておくべきだ。こうすれば自分の悪行（予定）はバレない。

ニーナが何かしらの判断をするだろうから、自分はそれに従えばいい。

「お二人が一緒に……ですか」

そう思ってたのだが、ニーナは予想外の反応を示した。どこかしょんぼりとした、寂しそうな声を漏らしたのだ。

（え？）

リネアとセルグが一緒にいなくなった。このことを寂しがる必要があるだろうか？

もしローザンやリユーンなら、自分と同じく『どれだけ進展するか』と喜ぶだろう。二人ともセルグの恋路を応援している。

（待てよ。まさか、まさかまさか……）

もしかして、自分にとって最悪の事態が待っているんじゃないだろうか。

ネジー本飛んでる上に恋愛鈍角三角形なアルフォンスの頭も、この非常事態には正常に働いた。

「二、二ーナ。ちょっと聞いていいかな」

「はい、何でしょう」

「ごくり、と唾を飲み込む。」

「……もし、かして。二ーナ……セルグのこと、好き？」

数秒の、間。

一秒が何時間にも感じられたアルフォンスだったが、祈ることはただ一つ。

（どうか勘違いでありますように……っ！）

しかし月明かりに照らされた二ーナの真っ赤な顔に、その祈りは届かないことが判明したのだった。

「え、あ、その。わ、私……」

アルフォンス、見事に撃沈。

その場に沈み込まなかった自分を誉めてやりたいくらいだ。

（えーっ、何で！？ ニーナがセルグに惚れるような場面あったっけ？）

出会った時からの出来事を思い出してみたが、どうしても思い当たる節はなかった。

もしかして恋に理由はいらない、とかそんなオチなのか。

「そ、そのお。も、もし良かったら、セルグのどこが好きなのか教えてくれないかな？」

「え、ええ。あの、セルグさんって……、優しいし、遅しくて格好いいから……」

真っ赤な顔で、うつむかれつつコレ。

アルフォンスは本気で泣きなくなった。聞くんじゃなかった。

（否定はしないけどさ、『遅しい』が入ったら僕に勝ち目ないじゃん！）

貧弱ではないが、自分はどう見ても『中肉中背』、『遅しい』には程遠い。一人の男として、この答えはかなりの痛手だった。

「……そ、そっか……」

「？」

「何でもないよ、うん、何でもない。……さ、引き止めちゃってごめんね。もう戻ろう」

「はい」

自分はニーナが好き、ニーナはセルグが、セルグはリネアが好き。……何だこのややこし過ぎる四角関係。

アルフォンスは大きな月を見上げた。

砂漠に行く〈参〉

ローザンたちのいる場所に戻った二人だったが、やはりと言うべきか、セルグとリネアはまだ戻っていなかった。

「僕、二人を探してくるよ。明日があるからね」

「あの、私も行っていいですか？」

「え？ うん、わかった。だけど見つからないように行こうね。大事な話してたら、邪魔するのは悪いし」

「……そうですね。はい、わかりました」

野次馬根性より、明日への（というかローザンの雷への）心配が勝って、アルフォンスは二人を探すことにした。

セルグが告白してる可能性は捨てきれないので、静かにするよう忠告して。

（……。うん、それだけ）

そうだ。セルグの恋を応援するためだけ。それ以外に、理由なんか……。

アルフォンスは小さな棘が胸に刺さったような、すっきりしない気持ちを感じた。

——ああ、何だろう。こんな思いは、知らない。知りたくないのに。

やがて二人はニーナが人影を見たという方向へ向かうと、すぐにセルグたちを見つけた。セルグとリネアはオアシスと砂漠の境に立ち、何か話し込んでいるようだ。

少し遠いのでほとんど声が聞き取れないが、これ以上近づけば気配に聡い二人のことだ、自分たちに気がついてしまうだろう。

「何を話していらっしゃるんでしょう。あの、その……。そういう話をしているようには……」

「そうだねえ。なーんかムズカシイ顔してるし……」

いわゆる『甘い雰囲気』から確実に離れている二人。かといって
険悪、というわけでもない。

「……」

気になる。ものつすごく気になる。

二人を心配して迎えに来たのだが、再び野次馬したい、という思いがアルフォンスの中で頭をもたげてきた。

「ニーナ、この際だ、もうちょっと近づいてみよう」

「えっ、い、いいんですか？ 私、気配を絶つようなことは……」

「大丈夫、二人とも敵意には一瞬で反応するけどね。仲間の気配はあんまり気にしないみたい」

ファームルのあの夜にわかったことだ。リネアは仲間の気に対して、無意識では反応しなくなったと言っていた。セルグも同様だろう。

「だから静かに行けば、きっともう少し大丈夫だよ。ね？」

「……。はい」

アルフォンスとニーナはセルグたちにバレないまま近づき、話を盗み聞きすることに成功した。

途中からで、話を理解するのに時間がかかったが、段々と理解し始めたとき、アルフォンスはニーナを誘ったことを後悔した。

（なんであの雰囲気です告白してんだよセルグの馬鹿ーっ！）

正確には告白、というより説得、だろうか。

どうやらリネアがセルグの告白を断ったようなのだが、その理由がセルグには納得できないらしかった。

「リネア、俺は諦めねえぞ。もう何べんも言っつけど……。俺を嫌い、っていうなら今は引くよ。恋愛対象として見れない、って言うならな」

「セルグ、だから……」

「惚れた女に拒まれる理由が『俺には相応しくない』だって？ 俺にリネアが相応しいかどうかなんて、誰が決めるんだよ」

「……。セルグ、私は……」

「……お前が何か背負ってることくらい、分かんねえとも思ってるのか」

「！」

俯いていた顔をリネアは跳ねるように上げた。驚きの表情を隠しきれていない。

（リネアが？）

セルグの言葉を聞いたアウフオンスは驚いた。そんなの、自分には全く分からなかった。確かに全部を晒してはいない、とは思っていたが、まさか『背負っている』なんて。

ああ、やっぱりセルグはリネアに惚れ込んでいるんだ。誰よりもリネアを見つめ続けているんだ。

「出来るなら、話してほしい。俺に……手伝えることなら、手伝い

たい。お前が苦しんでること、一つでもいいから分かち合いたい。
……なあ、俺はお前に惚れてんだよ、リネア」

セルグが間を一步、詰めた。同時に、後ずさろうとしたリネアの手をつかむ。

「逃げんな、リネア！」

ビクツ、とリネアが体を震わせた。あんな表情のリネアは見たことがない。あんな、何かに怯えて泣きそうな表情なんて。

「だめ、だめだ、セルグ。私には出来ない……っ！」

「何でだよ、俺じゃ頼りにならないとでも言うのかよ!？」

「違う!!」

たった一言にこめられた想いは、魂が引きちぎれてしまうかのような、壮絶なものだった。

「頼む、私も恐ろしいんだ。何をどう説明すればいいのかわからないくらい……。だから、待ってほしい。……頼む……」

「リネア……」

再び、リネアは顔を伏せた。セルグは何か言いたそうにしていたが、逡巡した後、つかんでいた手を離れた。

「その言葉、信じてるぜ。そこまで言われちゃあな……。仕方ねえ、返事は待つことにするよ」

「……すまない」

「謝るなよ、こっちも困るって。——さ、じゃあもう寝ようぜ。明日には砂漠を抜けられるんだ」

「そうだな。……いや、私は水を飲んでからにする。先に戻ってくれるか」

「ん、わかった。じゃあな」

（リネア、セルグ……）

二人が去っていった後も、アルフォンスは動けずにいた。

今回は野次馬なんかすべきじゃなかった。いくら二人が仲間とはいえ、特別な想いを託した言の葉たちを、聞いていいわけがなかったんだ。

ああ、聞いてはいけない想いを聞いてしまった。自分が聞いていい話じゃなかった！ 本当に何て馬鹿なことをやってしまったんだろう。

アルフォンスの胸中を、後悔とも言えない、何とも形容しがたい思いが溢れていった。

やがてセルグが戻り、リネアもその場から動いたが、アルフォンスは動けず仕舞いだった。

「あの、アルフォンスさん」

「ニーナ」

ニーナにも悪いことをしてしまった。自分の面白半分の行為につき合わせ、こんな場面を見せてしまったのだから。

「ごめんね、ニーナ」

「え？ どうしたんですか、アルフォンスさん。アルフォンスさんが謝ることなんて何もないですよ」

「だって、僕、ニーナの気持ちを聞いたばかりだったのに。なのに、こんなことにつき合わせて……」

「それは違いますよ、アルフォンスさん」

今度は、しつかり笑えた。
さつきは自分を慰めてくれた人を、今度は自分が慰められる。力になれる。

「結局は私がついて行く、って決めたんです。だからアルフォンスさんが気にする必要なんてないんですよ」

「……」
「ふふ、セルグさんがリネアさんに告白してたのはショックでしたよ？　だけど、逆にすつきり出来た気もするんです」

ああ、淡く切なく、そして――儚い初恋だった。

「何となく、セルグさんは誰かを見てる気がしていました。それがリネアさんなら、すっぱり諦められます。だって、本当に敵わないですもの」

「……そ、か。うん、リネア、本当に凄いもんね。それにさ」
「リネア（さん）のことが好きだから」

思いがけずに重なった声に、二人はクスクスと笑いあった。
そう、大好きな仲間が相手だから。もう応援する気にだってなれてしまうんだ。

「その、偉そうなこと言っちゃいましたけど……。多分、まだ少し引きずるかと……」

「それこそ当然だよ。そんな見事に諦められるなら、恋かどうかも怪しいでしょ」

「そうですね。……ありがとうございます」

やっぱり可愛いな、ニーナ。

この展開を、自分は喜んではいけないのだろう。だけど、喜ばずにはられない。

「だけど、リネアさん、一体何を悩んでらっしゃるんでしょう」

そう思ったアルフォンスをよそに、ニーナは顔を曇らせた。

「リネアはきつと、何か凄いものを背負ってるんだろうな」

「……私たちが力になれるでしょうか」

「大丈夫だよ。ただ、時間は必要かも。リネアが気持ちの整理をするためにもね」

「そうですね。私、少しでもリネアさんの力になれるよう、頑張ります」

「うん。あ、けど話を盗み聞きしたことはバレないようにしなきゃね。セルグにも、その、可哀想だし」

「はい」

——セルグ、僕は力になりたいから、忘れないで黙っているね。そして同じ思いでいよう。

「ねえ、ニーナ。……大事な話があるんだけど、聞いてくれる？」

「はい、何でしょう」

「いきなり過ぎる……けどね。……僕、ニーナのこと好きなんだ。いつも頑張ってるのとことか、そんな可愛い姿とかが」

「……………え？」

やはり急なことに驚いたのだろう、ニーナは眼をパチクリさせている。

やがてアルフォンスの言ったことが理解出来ると、ニーナの顔は再び真っ赤になった。

「あ、あの、アル、アルフォンスさ……」

「セルグじゃないけど、僕も待つから。ニーナ、気持ちの整理がついてからでいい。……返事が、ほしい」

色よい返事を恋焦がれる同士でいよう、セルグ。

「……はい。少し、時間をください」

「うん、待ってるよ。ありがとう、僕の気持ちを受け止めてくれて」

きつとセルグは、リネアに自分の気持ちを、真っ直ぐに見てもらえなかった。

断られたことより、それがずっと辛かったんだ。

（やっぱりリネアは強敵だったね、セルグ）

僕もセルグも、第一関門突破——かな？

砂漠に行く〈肆〉

翌日。睡眠時間の短かった上に体力がないアルフォンスとニーナは、一行の歩みをかなり遅くしてしまふ結果となった。

もちろんローザンの雷は落ちて、砂漠に正座という恐怖のお仕置きまでついてきた。

リネアとセルグも夜更かししたのだが二人とも体力があるので、その事実にはローザンにバレることはなかった。

「着いた、スードの町だ！」

砂漠を越えて目的の町へ着いた時には、すでに日が沈みかけていた。この町には当初、午前中に着く予定だったのだが、だいぶ遅れが出てしまっていた。

「だいぶ遅くなっちゃったわね。もう今日はとにかく宿を探して、さっさと休みましょう。これからのことは明日決めましょうよ」

「ですねえ。では、宿探しへと参りましょうかー」

このスードは砂漠を越えた隊商たちが集まる基点の町であるため、とても規模が大きい。

手分けして探してもよかつたのだが、今の時期は隊商の数は少ないから宿に空きがあるはずだ、というセルグの言葉に、みんなで気に入る宿を探しに行くことにした。

（……何か、気になるなあ）

もちろんセルグとリネア、ニーナも気になるが、そんな話ではない。

セルグの言葉通り、今は宿が満杯になるようなことはないらしく、手ごろな宿をすぐに見つけることが出来た。

しかし、どうも気にかかる。町の人々の様子が何かおかしい。大きな町だというのに、どうも活気が感じられないのだ。

宿での手続きを済ませ、部屋に向かいながらアルフォンスは思った。何か気にかかるのだが、『活気がない』だけではうまく表現できないソレは、何なのだろう。

「あのさ、リネア」
「……」

こういうときはリネアに相談だろう、と思つて振り向いたアルフォンスだったが、どうもリネアの様子がおかしい。

町の人々とは異なるが、いつものリネアではない。

「ねえ、リネア？」
「——っ。あ、ああ。何だ、アル」

何だろう。リネアがこんな反応を返すことなんて、今まで一度もなかった。

「どうしたの、何かあった？」
「いや、そういうわけでは……」

もしかして昨日のことを引きずっているのかな、とも考えたが、それは違う。

朝からずっと、そんな様子は見受けられなかった。

「リネアさん、具合が悪いようでしたらすぐにお部屋へ……」

そこまでニーナが言ったとき、セルグが数歩先にある、泊まる予定の部屋のドアを突然、勢いよく開いた。

「セルグ、どうなさったんですかー？」

「……。誰か、部屋の中に居た」

「え？ 宿の人じゃないの？」

「それなら今も居るはずだろ。見ろ、窓が開いてやがる」

セルグが指差したほうを見ると、確かに部屋の窓が空いていて、カーテンが風に揺れていた。

「あんたの勘違いじゃないの？ 窓も閉め忘れかもしれないじゃない」

「勘違いなんかしねえよ。……面倒くせえから黙ってたけどな、俺ら、つけられてるんだぜ。砂漠に入る時からな」

「「ええー！？」」

セルグの仰天発言に、リネア以外が驚きの声を上げた。

二人は人の気を読んで、敵意を察知できる。何者かの尾行にも、すでに気がついていたのだ。

（そうか。昨日気づけなかったのも、他に気になる奴がいたからか）

そうすれば納得がいく。

いくら話に熱中していたとはいえ、二人が揃いも揃って自分たちに気がつかない、というのは運が良すぎると思っていたのだ。

「あーもー！ 何でそういうことを早く言わないのよ！？ 町に入ったら暴れられないじゃない！」

「砂漠で手出ししてこなかったってことは、何か目的があるんだろこの町でな。迎え撃ちやあいいいじゃねえか」

爛々とセルグの瞳が輝きを増す。闘いを望む獣の瞳。

「……まったく、アンタも相当のバカね。で？　むここの目星はついてんの？」

「まさか。今まで会ったことがない奴の気だ。皆目見当もつかねえよ」

「リネア。リネアはどう？　予想つかない？」

何か様子がおかしかったのも、自分たちをつけている奴がいたからなのか。

それがみんなに知れ渡った今、リネアの様子も元に戻るだろう、そう思ったのだが……。

「……………。今回ばかりは、……………」
「？」

何か言いよんどで、結局言わず仕舞いになったリネア。どこか遠くを見るような表情をしてから、リネアは言葉を漏らした。

「……先に言っておいたほうがいいだろうな。すまない、今回私のせいだ。砂漠ではハッキリしなかったが、町に着いてわかった」

「あら、今回も賢者様関係？」

「……そんなところだ」

「でしたら、早々にこの町を離れては？」

「ですねえ。わざわざ面会に行く必要ありませんしねえ」

では明朝にスードを離れよう、ということになって、一行は眠り

に着いたのだった。

深夜。アルフォンスは不思議と目が覚めた。

昨夜みたいに喉が渴きを訴えているわけでもないし、空腹などでもない。なぜか目が冴えてしまったのだ。

(……?)

何か感じる。敵意とか、殺意だとか、そんなものは自分にはわからない。だけど、何か。

(何だろう、これ……)

今までの感覚で一番近いものは、リユーンが精霊を召喚したときの余波だ。つまり莫大な霊力の余波だが、これが霊力でないことはわかる。

アルフォンスが一頻り頭を悩ませていたとき、セルグが飛び起きた。

「へっ？」

「二人とも起きろ！！　すぐに宿を出ろ！！」

「ど、どうなさったんですかー？」

「いいから、早く出る！」

セルグに急ぎ立てられて部屋を出ると、女部屋も同様のことが起きたのだろう。リネアが二人を半ば引きずるように連れ出していた。各自もしもの時のために、寝間着は着ていない。すぐ逃げられるようにしていたのだ。そのもしもが役に立ってしまったらしい。

「リネアさん、どうなさったんですか？」

「ちよっと、何があったのよ？　説明しなさいってば！」

「悪いがその時間はない。ここを出るぞ、急げ！」

敵意に人一倍敏感な二人が口を揃えて『宿を出る』と言うのだ、従わないわけにいなかった。

大急ぎで宿を出ようとした一行だったが、出口まで残り数歩、というところで、目を疑う事態が起こった。

つい今しがたまであった出入り口が、その姿を消したのだ。

「え、え、ドアは？ 何で壁？ 今までここがドア……」

「——失礼。逃げられては厄介ですので、出口を塞がせていただきました」

「……！」

突然背後から聞こえた声に、全員が振り向いた。

声の主は一人の青年。頬に赤い逆十字を彫りこんだ、白髪に赤い瞳の、妙にきれいな顔立ちをした青年がそこにいた。

「主からの言伝を届けに参りました」

「よろしいもクソもあるか！ てめえ、何モンだ……！」

淡々と話を進める青年の声に抑揚はなく、それが一層セルグの感に触ったらしい。

すぐに攻撃に移れるよう、セルグは臨戦態勢に入った。

「……今のところ、危害を加えるつもりはありません。話を聞いて頂けますか」

「はっ、よく言っぜ。今の殺気はお前だろ？ どうせ『そう指示されてるだけで本当は全員殺ってさっさと終わりにしたい』、だろ？」

「……」
「凶星だな。——ナメンじゃねえぞ」

二人の空気が一気に緊張感を増した。

気術に関してド素人のアルフォンスでも、これはわかる。二人とも相手を殺しかねない勢いだ。武闘大会の比ではない。

「……あなた方と一戦を構えるのは構いませんが、その場合、この宿の客の命は保証しません」

「！」

「この宿はすでに私の術の支配下にあります。そちらの御二方ならお分かりでしょう」

青年の言葉にリユーンが頷いた。続いてローザンも渋い顔を見せる。

「……ですねえ。かなり用意周到になさってくださいったようで。気付きませんでしたよー」

「どうも妖力が強いと思ってたら……。まさかこんなオチだったとはね！」

「全てはあなた方が砂漠に足を踏み入れた時から始まっていたのです。……さあ、どうなさいますか？」

青年の声に、命を奪うことへの躊躇いはない。ならばアルフォンスたちが出せる答えは一つしかない。

無関係な人々を巻き込むわけにいかず、一行は青年に大人しく従い、町でも一際大きな屋敷に向かった。

「へー、大きなお屋敷だね」

「まったく、何でアンタはそう能天気なのよアル……」

案内されるまま部屋に入ると、薄暗い中に一人の男性が大きな窓

の外を向いて立っていた。

セルグがリネアのほうを振り向けば、その顔が青ざめていることに気付く。

（リネア？）

ファームルでのリネアは、傲岸不遜とまで言える態度だった。この違いは何故なんだろう。

（……ま、どうでもいい）

「大丈夫だ」

何であれ、守るだけだ。

セルグはそうリネアに声をかけ、何も聞かずに後ろにかばった。リネアのこんな怯えた瞳は、表情は、初めて見る。

「さて、こんな真夜中に何のご用かしら？」

部屋の中は薄暗く、相手をはつきりと確かめることが出来ない。リネアの様子がおかしいことに、他の面々も気付き始めたようだ。ローザンがリネアを心配そうな視線を配りながら、部屋の主を睨みつけた。

「……」

月明かりだけが男の正面にある大きな窓から差し込む。男はゆっくりと、こちらを振り向いた。

「あなたは、この前の……！」

男の顔を見て反応したのは、リユーン一人。

「リユーンさん、ご存知で？」

「……えー、二ーナ。残念ながら、僧侶の一人です。この前の裁判で、末席にいらっしやいましたよー」

抜群の記憶力を誇るリユーンは、誰も気にとめなかった、末席の裁判官の顔を覚えていた。

そのことに驚いたのか、男は少し目を見開いた。

「……これは予想外だった」

男が言葉を発したと同時に、部屋に明かりが灯される。

「どうも、お久しぶりです。……まあ精霊使い以外は覚えていないだろうがな」

明かりの下でようやくはっきりと確認出来たその顔に、一行は驚きを禁じ得なかった。

（何なんだよ、この人）

その顔に気はなく、まるで死人のように白く血の気がない。改めて顔を見ても男のことを思い出せなかったが、こんな顔をした裁判官がいたら、気づかないわけがない。

この人にファームルから今日までの間で、何かが起きたのだ。

「真夜中に呼んだのは、その方が都合がいいからだ。——誰もお前

らを目撃していない」

男の言葉の途中で、チャキ、と背後で青年が武器を構える音がした。

セルグが後ろ手でリネアを庇いつつ、青年と睨みあう。

「ラルフ、まだ早い。武器をしまえ」

「……かしこまりました」

ラルフと呼ばれた青年は、しぶしぶといった顔で武器をしまった。長く幅広い袖の中に手を引っ込めている。どうやら袖に武器、暗器を仕込んであるようだ。

「さて、本題だ」

そう言って男が一步、こちらに近づいてきた。

それに分かりやすいくらい、リネアがビクリと反応を示した。

「魔法使いを置いていけ。不服というのなら、全員の命はない」

こんな条件を、誰が飲めるだろうか。

「「ふざけるな（いで）！！」「」

リネアが怯える理由なんて知らない。狙われる理由だってどうでもいい。庇うために知る必要はない。

だって僕らは、仲間なんだから。

砂漠に行く〈伍〉

「ならば話は終わりだ。ラルフ」
「はい」

ラルフが再び袖に手を引っ込めて、暗器を構えた。太い長針のよ
うな形状をしているそれを、指の間に挟む。

「一瞬で終わらせろ」
「はい」

ラルフが暗器を投げようとしたその瞬間、何故か動きを止めた。

「貴様つ、精霊使い……！」
「今度は私の勝ち、ですねぇ」

ギリ、と音を立てるようにラルフは睨みつけてきたが、リユーン
はそれを軽く受け流した。

リユーンに重なるようにして、召喚された精霊は微笑む。

「私も密かに呪文を唱え、妖力を無効化させましたよー。さあ、ど
うなさいますか？」

「……っ！」
「妖力は物質を媒介することで力を強めます。逆に言えば、あなた
の武器は、もう妖力で強化出来ませんねぇ」

ラルフはリユーン言葉が凶星だったのだらう、攻撃を躊躇した。

「ラルフ」

しかし、男の声にビクリと体を震わせる。

「殺せ」

「……かしこまりました」

そしてもう一度暗器を構え直すと、ラルフはすぐに攻撃を開始した。妖力で強化されていないとはいえ、当たれば痛いでは済まない。しかし、こちらもそう簡単にはやられない。

「甘いわよ！」

ローザンが巻き起こした風に、ラルフが投げた暗器は全て阻まれた。

「！」

「妖力で強化してない武器なら、あたしの風で十分よ。さ、次はどうするの？」

「……。もう一度だけ聞くが、魔法使いを引き渡す気はないんだな？」

「当たり前です！」

男の言葉に、ニーナが断固として拒否を示す。

「……面倒なことだ」

そう言つて男は、机の上にあつた小さな鐘を鳴らした。鐘の音から数秒、アルフォンスたちは武器を持った大勢の敵に囲まれてしまった。

「魔法使い以外は好きにしろ」

いつもなら白兵戦で活躍するリネアの状態がおかしいため、ここは逃げるしか選択肢がない。

「ニーナは僕の後ろに！」

「は、はい！」

ガキン、と火花が散りそうなくらいの音を立て、アルフォンスは剣を受けた。

（こんな……！）

こんな時のために、腕を磨いたんじゃない。人の欲に抗うために、リネアに稽古をつけてもらったんじゃない——！

武闘大会からずっと、暇を見つけてはリネアに稽古をつけてもらっていた。みんなのように強くなりたかった。剣をお飾りにしたくなかった。

だけど、人を斬るために力を得たんじゃない。

カタカタと、恐怖に手が震える。人を、斬れない。

（だめだ、このままじゃ……！）

アルフォンスが息を呑んだとき、リユーンの新たな術が発動した。強力な目眩ましの術だ。それによって一行は、何とか館から逃げ出すことが出来た。

町はずれまでたどり着いた一行は、とりあえず廃屋の一つに身を潜める。

「あの人、何か様子がおかしかったよね」

「ですねえ。こう、生気がないと言いますか……」

「それより、リネア。お前大丈夫か？」

「……ああ」

消えてしまいそうなその声に、言葉が真実でないことは明らかだった。

「……あの僧侶」

「ん？」

リネアが少しだけ、声に力を込めた。

「中に巣くっている。……幻影族が、いる」

「幻影族」

以前、ローザンと出会ったとき、リネアが話してくれた民だ。

『特に天界の幻影族、こいつらの動きが著しい。反逆民の中心的存在でもある。幻影族は妖力で相手の心の闇に入って傷を広げ、最後には体に乗っ取り、操り人形にする能力をもつ』

この言葉通りのことが、起きているのか。

「……事は一刻を争う。早々に追い出さなければ、あの僧侶の命が危ない」

「えっ！？ 本当ですかリネアさん！」

「特殊力は『生』そのもの。それを好き勝手に使われれば、体に必ず支障をきたす」

会話をする度、少しずつ、リネアの瞳にいつもの落ち着きと強さ

が戻ってきた。

（そうだ、一人じゃない。一人じゃないんだ）

リネアは必死に自分に言い聞かせる。『あの時』とは違う、と。ただど一人じゃないから——失ってしまうかもしれない。

（——いや。今度こそ、どんな手を使っても守ってみせる）

無力だった『あの時』とは違う。今は力を得たんだ。ふと、リネアの脳裏を過去に起きたおぞましい光景がよぎった。

（二度と、二度と失ってなるものか！）

「リネア？」

「！」

急に押し黙ってしまったリネアを心配して、セルグが声をかけた。

「……すまない」

「いや、気にすんなよ。それより……」

言葉と同時にセルグが差し出した手を、リネアは一度だけ見つけた。

しかしそれを振り払い、突然リネアは部屋を出て行ってしまった。

「おい、リネア！」

驚いたセルグがすぐに後を追って部屋を出て行った。

「……一体どうなさったのですかねえ」

「リネアさんの様子、ファームルとはまるで違いますね。そんなに幻影族とは危険なのでしょうか」

「うーん、僕はリネアから聞いたのが初めてだし……」

普通は他の民のことなんて、いくつか名前や特徴を知っているくらいだ。

リネアのように、その能力まで知っている者は限られている。一行に何らかの情報をもたらすのは、いつもリネアの役目なのだ。

「あ、セルグ。リネアは？」

セルグが消沈した面持ちで戻ってきた。リネアは隣りの部屋に閉じこもってしまったという。

「仕方ないわ。リネアも様子がおかしかったし……。明日、改めて話を聞きましょう」

「……そうだね」

重苦しく、暗い空気があたりに立ち込める。それを振り払うようにして、一行は眠りにつこうとした……。のだが。

「ん？」

「どうした？ アル」

「いや、何かさっきと同じ感覚が……」

「？ 俺は分かんねえけど……。ローザン、お前はどうか？」

「そうねえ……。ってウソ！ ヤバい、さっきと同じ妖力を感じるわ！」

「ええっ！？ なら早く……」

恐らくニーナは逃げましよう、と続けたかったのだろう。
しかし言い終わる前に、突然ラルフたちが姿を現した。

「――！」

「御命、頂戴に参りました」

再び、刃に月光が反射した。

「なんでここが……！？」

ラルフの言葉通り、今度の襲撃に手加減はなかった。確実に自分たちを殺す気である。

リネアの安否を確認できないまま、アルフォンスたちは一対一で敵を迎え打つ体制となった。

「はあっ！」

「っ！」

この中で首領格と思しきラルフとは、セルグが相対した。

ラルフの体技も見事だが、数合打ち合った後、セルグに蹴り飛ばされる。そのまま追撃をかけようとセルグは動いたが、それはラルフの術に阻まれた。

「ちっ！ 大人しくやられてろよ！」

「……」

「セルグ、チマチマやってんじゃないわよっ！」

一喝したかと思うと、ローザンは相対していた敵に風をぶつける。

「細かいのは苦手だけど、力技なら負けるもんですか！」

武器を持った相手に苦戦していたローザンだったが、廃屋の一部を破壊するほどの威力で相手を吹き飛ばした。

（うわ、すごっ！）

「——来たれ、闇を司りし者」

そしてローザンの術によってできた隙を狙い、リユーンが呪文を唱える。

「我らに——」

「リユーン、駄目だ避ける！！」

「！」

だが術の発動まであと一息というところで、ラルフによって放たれた刃に中断を余儀なくされた。

「くそっ、リユーン怪我はねえな！？」

「え、ええ。ありがとうございます」

反応が遅れたリユーンを引っ張って、セルグは何とか刃を避けさせた。もう少しで喉笛を切り裂かれるところだった。

また、ニーナは結界を張ることには成功していたが、攻撃術を会得していない。そのニーナに、ローザンが助太刀に入った。そのためリユーンは、また一人敵にで立ち向かう。

「リユーン、やれるか？」

「もちろんですよー。ご心配なく」

「じゃあ任せた！」

そう言うセルグは、立ち上がったラルフに再び相対した。

「いい加減諦めろ、長引けば不利になるだけだぜ？」

「……」

「おい？」

ラルフはちら、と辺りを見渡した。

精霊使いは今、結界を張るのに成功した。後はあの中で呪文を唱えれば、決着が着く。もう時間の問題だ。僧侶たちも似たような状態。

剣士はまだせめぎ合っているが、すぐに仲間が助太刀に入るだろう。

ラルフはそう結論づけると、新たな武器を構えた。薄い鋼で造られた輪状の刃。

「まだ終わらせるわけに参りません」

「——来い！」

輪の中に人差し指を入れ、回転させて勢いをつける。そして狙いをつけると、セルグに向けてそれを投擲した。

一方のアルフォンスは、何とか自分だけでケリをつけようと、必死で攻防を繰り返していた。

（迷惑はかけたくない。自分すら守れないなんて嫌だ！）

無力な自分を今ほど悔やんだことは無い。界王の剣に選ばれたくせに、自分は誰も守れない。

いつも、いつもだ。

（僕も、僕だつて……！！）

誰かを守る力が欲しい。いつ目覚めるかわからない強大な力より、ほんの少しの力を、今。

——僕だつてみんなを守りたい！

「！？」

胸が熱い。何かが胸の辺りで熱を帯びている。

相手の隙をみつっ慌てて懐を探ってみれば、首飾りが何故か熱を帯びていた。

（……なんだ、この不思議な感覚）

剣戟を受けながら、それを再び服の中にしまう。

決して熱くはない、柔らかな温かさ。わずかだが、優しい光も帯びている。

次の瞬間、唐突に辺りは物凄い光と爆風に包まれた。首飾りの光でも、リューンたちの術でもない。窓の外からだ。

「え！？」

しかしチラリと目にした窓の外の光景は、何の変化もなかった。確かに巨大な霊力を感じたと思ったのだが、気のせいだったのだろうか。

「そんな、馬鹿な！」

そこで最初に驚きの声を上げたのは、何故かラルフだった。

「おい、今のは何なんだよ？」

「……。教える必要はありません」

ラルフの手に武器が再び用意された。

セルグには何度となく避けられたが、まだ奥の手が残っている。

（何故アレが失敗したかは不明だが……）

自分が全員殺せばいいだけだ。

「ちょっと、今の霊力は何なのよ!？」

「一体、何が……？ 妖力もありましたねえ」

やはり巨大な霊力を感じたのは、間違いではなかったらしい。

「ローザンたち、外の様子を見てきて！」

アルフォンスも外の様子を確認したいのだが、相手がそうはさせてくれない。

どうやら幻影族に操られているのは一人ではなさそうだ。こんな事態に無反応なんだなんて、普通じゃない。

「——っ。帰って来るまでに終わらせるのよ！」

「うん！」

ニーナは何か言い出そうにしていたものの、リユーンによって止められた。

（ありがとう、二人とも）

自分のつまらない意地だ。それでも、この戦いに助けを求めたら……、何かが、失われる気がするのだ。

相手を術で気絶させたローザンたちは、アルフォンスに助力することなく、外の様子を見るために走っていった。

セルグが外の様子を見ようと窓に一步近寄れば、再び円形の武器が飛んでくる。

「よつ、と」

しかしセルグはそれを、いとも簡単に避けた。

これは直線的な動きをするので、避けるのは簡単だ。最初に手元でひねりを加えるとブーメランのように相手に戻っていくので、その場合だけ背後に気をつければいい。

「……もらった」

「は？ お前の攻撃なんざ……」

もう見切ってる、そう言おうとしたとき。

「セルグ、後ろ！」

「……」

アルフォンスの叫びに反応して、直感的にセルグは右に飛んだ。

（糸！？）

指を差し込む輪の内側に、糸が通されていた。見たところ普通の糸ではない。その糸によって武器は動きを変え、もう少しで背に喰らうところだった。

（ちくしょうっ……！！）

間に合わない。

アルフォンスの声に反応して今の輪は避けられたが、体勢を崩してしまった。

だからアイツが新たに構えている武器は、かわせない。

（リネア……！！）

どうして俺は、お前を守れない。

「セルグ……！！」

アルフォンスの叫びにセルグが返したのは、苦痛の呻きと、血飛沫。

「セルグ……！！ 嫌だ、セルグ！ セルグ……！！」

涙で視界が滲んで、うまくセルグの様子を確かめられない。

（嫌だ……！！！）

何で倒れるの。

何で体に刃がいくつも突き刺さったままなの。
何で体が赤く染まっていくの。

「……どけよ」

アルフォンスは眼前の敵を睨みつける。

僕は行かなきゃいけないんだ！

「そこを、どけえええ！！」

アルフォンスの中で、何かがカチリと組み合った。勝つための動きは、剣が知っていた。

「はあっ！！」

剣を横に薙ぐようにして一閃させ、相手の武器を叩き落とす。そして――アルフォンスは、人を斬った。

くず折れる人を目に映す暇もなく、アルフォンスはセルグに駆け寄った。

「セルグ！」

セルグに駆け寄った瞬間、鼻についた錆びた鉄の臭い。

――血の臭いだ。

「嫌だ、死なないで。駄目だよ。セルグ、セルグ！」

抱きあげれば、生ぬるい血液がべったりと手に付着する。真っ赤に染まっていくセルグの服が、全てを物語る。呼吸は浅く、呼びかけても返事はない。

「セルグ……っ」

お願い、助けて。――、セルグを助けて！

涙ながらにアルフォンスは祈り、声にならない声でその名前を呼んだ。

その時、廃屋の屋根や壁が勢い良く吹き飛んだ。夜空が頭上に広がる。

土ぼこりを風がさらっていくと、隣室があつた場所にその人はいた。少し顔色が悪いが、かすり傷一つない。

アルフォンスは、今度は声に出してその名前を叫んだ。

「リネア!!」

砂漠に行く《陸》

「ちょ……っ。セルグ!?」

「セルグさん!」

「すぐに手当てを……!」

この大事に、外を調べていた三人も慌てて戻ってきた。
ラルフは武器を構え、三人に攻撃を加えようとするも、初めて顔に表情を――驚きを浮かべ、とっさにその場を動いた。

「!」

「……外したか」

どこか吹っ切れた様子のリネアが、こちらにやってきた。
リネアが放った巨大な火球は、ラルフがいた場所に大穴を開けていた。動かなければ一瞬で灰になっていただろう。

「リネア!」

「……。済まなかった」

アルがセルグの容態を告げる前に、リネアは詫びた。

――また自分は守れなかった。

（やっぱり……私は駄目だ、セルグ）

ラルフがリネアの術を阻もうと、武器を放ってきた。しかしリネアの術で簡単に封じ込まれる。

リネアは同時に詠唱なしで高位の回復魔法を発動させ、セルグの傷をほとんど治癒させた。体に突き刺さっていた刃も消えている。

アルフォンスに付着した血液もだ。

「……っ」

「！ あ、セルグ！」

先ほどまでピクリともしなかったセルグが、リネアの術で反応を示した。

まだ痛みのために意識は朦朧としてはいるらしいが、これで一安心だ。

「やったあ！ やっぱりリネアよ、素敵！」

「ええ、流石ですよー」

みんなが口々に喜びあう。しかしその中で一人、ニーナは喜び以上に驚きが勝っていた。

高位の回復魔法を詠唱無しに使うリネアが、純粹に畏れの対象として。

「さて――」

リネアがラルフに向き直る。

「この場は私が支配した。お前では太刀打ち出来ん。わかるな？」

向けられた杖に、ラルフが怯む。

当初の計画はこうだった。まず自分たちが魔法使い以外を相手にして、殺せたら殺す。魔法使いには精鋭部隊が向かい、捕らえる。どちらにせよ、自分たちは時間稼ぎが出来れば良かった。そう、あの術まで。

（何故あの術が破られた——？）

あれは主が使う、最強の術だ。この町も消し飛ぶはずだった。

「……」

「引かないのなら、消す」

リネアが杖に魔力を込める。ラルフを間違いなく殺す気にいる。

「リネア、駄目だよ！」

（殺したりしたらリネアだって傷つくのに！）

アルフォンスはリネアに駆け寄り、その手を握り締める。しかし、すぐにリネアによって払いのけられてしまった。

「……アル、私は選ばせた」

だから、殺す。

リネアの声に迷いはない。アルフォンスたちが想いを伝える隙間も。

（リネア……）

ラルフは実力の差を悟って諦めたのか、微動だにしない。

「でもっ、でもリネ——！」

「——それを消されると面倒だ。止めてもらえますか？」

「！？」

どこからともなく、聞いたことのない男の声が響いた。

「だ、誰でしょう？」

「それより、どこから……」

キヨロキヨロと辺りを見回すが、自分たち以外に人の姿は見当たらない。

みんなに聞こえているのだから、幻聴なんてことはないはずなのだが……。

「……。お手間をおかけします」

ラルフの言葉を待っていたかのように、それは現れた。

「「……！」「」

煙のように、という形容詞が正に当てはまる現れ方だった。次第にはつきりとしていく姿は、あの僧侶だ。

「幻影族……っ！」

リネアの声が、気配が。怨みや憎しみ、怒りで染まった。こんな声を人間が出せるのかと思うほどの、怨嗟の声だった。

「全く……。人族と言うのは弱すぎる。雑魚ばかりだ」

最早、幻影族は隠れる気はないようだ。僧侶の姿を保ちながら、
『自分は人族ではない』と言外に言っている。

「みなさんはそれなりに実力をお持ちのようだ。ああ、こんな雑魚

しか手に入らなかった私は、本当に運が悪い」
「……！」

幻影族は何の躊躇いもなく、倒れている配下を踏みつけた。顔に浮かぶのは嫌悪の色。

「何してるんだよ、お前の仲間だろ……！」

「ナカマ？ くっ、笑わせてくれますね。ナカマとは自分と同等の者でしょう？」

アルフォンスが叫ぶも、幻影族は笑って足元の配下を今度は蹴り飛ばした。

「ならばコレは手駒です。役立たずな、ね」

「……！！」

初めて感じる衝動が、アルフォンスを内から喰い破るかというぐらいの勢いで生まれた。

こんな感情は今までに無かった。だから、名前は知らない。だけど、あの幻影族の行為だけは赦せない……！！

「ラルフだけは使える手駒です。人族では珍しく妖力が高い。だから消されると面倒なんですよ」

「アーサー様……？」

「まあ、これでお前の役目も終わりだが」

「っ！ 避ける……！！」

リネアの叫びも虚しく、ラルフは突如その場に崩れ落ちた。

「妖力の補給はこうすれば簡単なんです。知ってました？」

躊躇いなく術を放ち、もう必要ないと切り捨てる。命と直結している力、特殊力を搾取して。

（何……これ）

幻影族は、確かに民族が違う。彼らは人族じゃない。

だからと言って、こつも躊躇いなく命を奪えるものなのだろうか。

「……んで……」

先ほどの慟哭は、衝撃の連続を前に形を潜めていく。吹き出た熔岩が地表で固まるが如く。

「何でこんなことするんだよ！ 界王様が狙いなんだろう！？ 何で僕たちを……！！」

「アル！！」

混乱気味のアルフォンスの問いを止めたのは、他でもない、リネアだ。

顔面蒼白になって、アルフォンスを見つめている。

「リネア……？」

「ははっ、これは傑作です！ まさか知らないままだったとは……」

「何よ、どういう意味！？」

「ふふ、その魔法使いに聞いてみたらいい。誰よりも正確な答えを知っています」

リネアなら知っているのと笑いながら告げる幻影族の言葉に、全員の視線がリネアに向いた。

「あの事があるから話せないのでしょうか？」

と、幻影族は最高級の笑みをこぼした。

「わ、私は……」

恐い。

（話せば、絶対に恐れられる。嫌われる、拒まれる！）

恐怖から、リネアの呼吸が浅く不確かなものになっていく。

「……ア」

「セルグ！」

まだ朦朧とする意識の中、ようやく目覚めたセルグは、必死に言葉を紡ごうと口を動かした。

言わなければいけないことがあると、朧気な意識で判断したからだ。自分に正直であるために、愛しい人へこれだけは。

「……ネア。……言わ、なくて……いい」

「——っ！」

「……お、前が、……嫌なら……言う、な……」

——涙が溢れそうだった。

リネアは目頭が熱くなるのを感じた。無条件で自分を求めてくれる人がいる。その事実だけで、十分だった。なのに。

「リネア、僕もそれでいい！ ええっと、ごめんね！」
「……アル」

セルグの言葉に触発されたように、口々にみんなが思いを告げる。

「あたしも！ ちょっと混乱しちゃったけど、今はソイツが先よ」
「ですねえ。無理に聞くのは気が引けますしー」
「はい。リネアさん、私たちは待ってますから」
「……みんな」

一人だけでも、夢のようだったのに。

（私はみんなを——信じる）

「おやおや、感動的だなあ。ですが、もう遊びは終わりにしまし
う」

幻影族は強力な妖術を、全員を吹き飛ばそうと一気に放った。

「……！ 流石ですね」

しかし術は轟音が響いただけで、リネアの魔法によって相殺され
た。

「……その姿のままで私に勝てるっても？」
「くっ、ははははっ！ まさかあなたに言われるとは……。ええ、
このままでは非常に困難ですね」

幻影族は笑った。とても、とても嫌な笑顔だ。

「ええ、仮初めの体は使いづらい。本来の姿に戻るとしましょう」

周囲に、一気に強大な妖力が漂い始めた。これが幻影の族本来の力。

本来の姿と力を取り戻していく幻影族は、まだ残る僧侶の顔のまま、ニヤリと血に飢えた獣のような笑みを浮かべた。

「全員殺してやる。あの時のように後悔するがいい」

「出来るものならやってみろ」

（私はもう、一人じゃない）

幻影族は現れた時のように、次第にその姿を現していく。時間にして十秒ほどで、真の姿が現れた。

ヒトのような形をしながら、まるで朧の如く、確たる姿を持たない民。それが幻影族だ。

「……あの僧侶はどこだ」

「ああ、それなら屋敷ですよ。酷使しましたから、死んでるんじゃないかもしれませんか？」

風に吹かれ、ゆらゆらとするその体は、今にも霧散してしまうのでは、とさえ思える。

それでも幻影族はそこに居る。

リネアの問いから間を置かずに、幻影族は先ほどとは比べものにならない強力な妖術を、いくつも発動させた。

「くっ！」

流石のリネアもこれは相殺出来ず、アルフォンスたちのもとで結

界を張ることで耐えた。

「リネアさん、私もお手伝いします!」

「では私も」

ニーナとリューンも協力し、結界をより強固なものに変える。

「三つも特殊力が重なったか。これは厄介な……」

やっぱり遊び過ぎた、などと頭をかく幻影族の後ろで、何かが動いた。

(……?)

気づいたのはアルフォンスだけらしい。よく目を凝らしてみると、それは――。

「アル!？」

ローザンが叫んだ。当然だろう、いきなりアルフォンスが結界を飛び出したのだ。

「くっ、優しいですね。全く――愚か過ぎて反吐が出る!」

幻影族が放った術を、アルフォンスは間一髪で交わした。その背後に庇うモノは――ラルフ。

「アル、さっさと担いで来なさい!」
「!」

アルフォンスに気を取られていた幻影族に向け、ローザンの一撃が決まった。

しかし術はほとんど相殺されてしまい、影響は微々たるものだ。

「もう、ムカつくわね！」

けれどその隙に、アルフォンスはラルフを結界内に引き入れることに成功した。

あの時、息絶えたと思ったが奇跡的に生きていたのだ。

「アルフォンスさん、その方をこちらに！」

ニーナが結界を切って、ラルフの回復にあたる。

「ありがとうローザン、ニーナ」

「びっくりさせんじやないわよ馬鹿！ 結界出たら死ぬじゃないの

！！」

「ご、ごめんなさい……」

ラルフが生きているとわかった途端、敵だとか危険だとかを考えるより先に、体が動いてしまった。

ローザンの言うことは正しい。自分は物凄い無茶をしてしまった。

「……あなたのお人好しっぷりには呆れたわ」

「口、ローザンさん」

「……けど、それがアルだものね」

「っ、ローザン！」

「ただし、次はただじゃおかないわよ！」

「うん！」

「リネアさん!!」

突き飛ばされたニーナは、悲鳴に近い金切り声でリネアの名を叫ぶ。

リネアは腹部から背中に貫通する重傷を負っていた。脇腹は真っ赤に染まり、血が流れ落ち、床に見る見るうちに血だまりを広げていく。

今も立っているなんて、奇跡だとは思えない。

「リネアさん、今……!!」

震える自分の手がニーナの目に映った。

こんな傷、自分では治しきれない。先ほどの男性は、未熟な自分でも何とか命を取り留めることが出来た。

でも、こんな傷は。

「……ニーナ」

「は、はい！ 今すぐ！」

だが、リネアはここでニーナに微笑む。

「私はお前を……今度は……」

リネアの瞳は、ニーナを通してニーナではないものを見ていた。

——記憶が交錯する。同じ金茶の髪と翡翠の瞳。幼い時、自分の過ちで失った友。

だが、ニーナはあの時守れなかった少女ではない。それははっきり理解していたはずなのに、それでもニーナを庇おうと体を押しのけた時、とっさのことで術が出なかった。

考えるより先に、体が反応したのだ。

（生きるためだけに、血反吐を吐くだけ、修行してきたのにな……）
それでも後悔は一寸たりともないから不思議なものだ。

「??」

リネアの発言にニーナが戸惑っていると、何故か幻影族はリネアの傷の深さに焦りだした。

「僧侶！ 何をしている、さっさと回復術を使え！！」

「え？ は、はい？」

しかしリネアはニーナを制し、一行に血塗れのまま問いを投げかけた。

「なあ、みんな。……私が何者でも……受け入れてくれるか」

そう言ったりネアの顔は見えなかった。声は、微かに震えている。

「そんなの当たり前です！ どうなさったんですか、リネアさん」

「そうだよ、早く怪我を治してよ！」

「今さら何言ってるのよ！」

「そうですよりネア。あなたらしくありませんよー！」

アルフォンスたちは全員が迷わず答え、リネアを受け入れた。

（……ありがとう。私は、もう迷わない）

その答えを聞いたリネアは、これ以上ないくらいの穏やかな笑顔

を見せた。

それに何を察知したのか、幻影族は先ほどと同様、強力な攻撃を連続で仕掛けてきた。

幻影族の目には焦りでも侮蔑でもない、何かが浮かぶ。

（もう駄目だ……！）

アルフォンスは幻影族の波状攻撃に観念して目を瞑ったが、何も起きる気配はない。

（違う、何か……何かがある。何だこれ）

首飾りが光ったときも感じた、暖かな感覚。旅で覚えた四つの特殊力でも、気術の感覚でもない。

だが、確かにある。

アルフォンスが恐る恐る目を開けると、何と一人ひとりに強固な魔法結界が張られていた。

「リネ、ア……？」

屋根が無く、一面に広がる夜空。廃屋の上に来た月がソレを照らし出す。

見たこともない美しさの、銀の髪と金の瞳。

女神が、地上へと光臨していた。

砂漠に行く《漆》

夜空に浮かぶ星々の如く輝く白銀の髪。
月もかくや、といった黄金の瞳。

「リネ、ア……？」

女神かと思ったその人をよく見れば、それはなんとリネアだった。
見慣れた服装、いつも持っている杖、頬の真紅の紋様。

（だけど、あの髪と瞳の色は……？）

リネアはどちらも、アスケイルで一般的な黒だ。ただ、ずば抜けて美しかったけれど。

「……」

驚いて何も言えないままのアルフォンスたちに、何を思ったのかはわからないが、リネアは無言のまままで法術を使った。

「……、あ？ リネア？」

「セルグ？！」

「……っ」

「あ、あなたも大丈夫ですか？！」

一度に二人も意識まで回復させる、最高位の法術。これをリネアは呪文詠唱無しでやってのけた。ただ、急に覚醒したこともあって二人は意識が朦朧としていらしく、ゆっくりと身体を起こした。
その二人の様子を慌てて確認しながら、ニーナは自分の手が震え

ていることに気づいた。

（やっぱり……凄すぎる）

ニーナの中には恐怖というより、畏怖の気持ちが生まれていた。あくまでリネアは魔法使い。いくら賢者が師匠とはいえ、こんなのは奇跡か、異常か――。

（あんな術、普通は僧侶以外、詠唱無しでは使えない！）

ほとばしるように溢れる、今まで以上に強い魔力。更に、それに匹敵する法力。その二つの力が、ニーナの混乱を深めていた。

一方、幻影族もリネアの姿に動揺を隠せないようだった。だが、それはアルフォンスたちの驚きとは、理由がかなり違うようだ。

「馬鹿な、自ら正体を晒してどうする！？」

「……構わない」

「そんなに力を誇示したいか？ はっ、どうせ殺してしまうからか
！」

「……っ！」

リネアの強大な力が歪む。

（リネア……！）

途端、セルグが跳ね起きて叫んだ。

「てめえ！ 下らねえこと言ってんじゃねえ！」

幻影族が何を言いたいかはわからないが、起き抜けにこんなこと

を言われて、セルグが黙っていられるわけがない。

「セルグ、いきなり動いたら……！」

「もう全回復してらあ！ リネア、そんなの気にすんなよ！」

セルグとリネアが見つめ合う。

ほんの数秒、静寂が訪れた。

「私は……」

「リネア？」

「私が……」

——覚悟を決めたはずなのに。

ここまできて、リネアは口にするのが恐ろしくなっていた。

（もし、もし拒まれたら——）

「さっきも言っただろ！ 言いたくないなら言わなくていい！」

「！」

しかしこの言葉で、リネアの心は決まった。

言おう。全てを曝け出し、みんなの審判に委ねよう。己の、罪業を。

「みんな！」

「「？」」

リネアの晴れ晴れとした表情に、アルフォンスたちの注目が集まった。

一体、何をしようというのだろうか。そう思ったのも束の間、次

の言葉に度肝を抜かれた。

「隠しいて済まなかった。私が——『禁忌の子』だ！」
「……！」

かつて全世界が震撼した、界王の罪の結晶。
誰もが恐怖し、忌むべき存在。それが禁忌の子——リネア。

「そ、んな……」

誰かが、ポツリと言葉を漏らした。
だけどそれは、リネアへの否定じゃない。

「わかった！ 言いたくないこと言わせて悪かった！」
「と、とりあえずこっちに帰ってきてよりネア！」

リネアの暴露には全員が仰天させられたが、やっと疑問が解けた瞬間でもあった。

『賢者の弟子』ではなく『リネア・ル・ノース』が幻影族に狙われる理由。

また、先ほどリネアに瀕死の重傷を自ら負わせて幻影族が慌てた理由。高位の魔法も法術も、いとも簡単に使いこなす理由。
それもこれも全て、リネアが『禁忌の子』だったからだ。
幻影族はリネアの巨大な力を利用してようとしている。だから捕らえるために弱らせるが、死なれては困る、というワケだ。

（ああ、スツキリ出来て良かった！）

なんやかんやと驚きの連続で、まともな言葉は出ないけど。
僕たちは。

「誰も拒まないから！」

——涙が流れた。リネアの頬を、十年振りの涙が。

生まれてから、全てに拒まれた。

無条件で受け入れてくれた存在、幼き頃のただ一人の友は——自分の過ちによって殺してしまった。

（ありがとう……）

「ありがとう、みんな」

師匠、見つけました。

私を受け入れてくれる、唯一無二の仲間を。

「禁忌の子を受け入れる！？ 世界を滅ぼす者だぞ！」

幻影族が嘲笑う。ただ、そこに余裕はない。幻影族は、自分の言葉が真実になることを恐れているのだ。

「だからそんなの関係ねえんだよ！ リネアはリネアだ、それ以外はどうでもいい！」

「……！？ 何を……」

「おや、とても簡単すぎて、逆にわかりませんかねえ」

「そ、つまり」

ローザンが扇を広げ、いまだ状況が掴みきれていない様子のラルフに目をやった。

「自分の仲間を捨て駒扱いするあんたには、一生わからないんじゃない」

ない？」

ジリ、ジリ、と幻影族が後退りする。

リネアから発せられる血族がもつ計り知れない魔力と法力に、幻影族は確実に怯えていた。

——己の、最期に。

「……貴様の敗因は、私がこの姿を明かせないと判断したことだ」

リネアが、杖を構える。

「……く、くはははははは！　いつか、いつかお前はそのナカマにも拒まれ、疎まれるぞ！　それがお前の宿命だ！！」
「構わない」

——今までくれたものだけで、今あるものだけで十分だから。
リネアは最高位魔法を瞬時に発動させ、幻影族の動きを封じる。

「みんな、目を閉じている。聴覚は操作する」

「リネアさん、それって……！！」

「許せ、ニーナ。私は……生きている限り、幻影族を赦せない」

怒り、怨み、憎しみ、そして悲しみ。負の感情を全て込めた声色に、アルフォンスたちは言葉を失った。

「……」

「目を……閉じてくれ」

その言葉とともに、アルフォンスたちは全ての音を奪われた。

(……。リネアさん……)

頑なにこちらを向こうとしない、リネアの後ろ姿をニーナは見つめる。自分は知る由のない闇の深淵にいるリネアに、涙が止まらなかった。

——あなたの悲しみは、わずかでも癒えるのですか？　こんなことをして、心の傷を深くするだけではないのですか？

その答えはわからない。だから――。

(ああ、主よ、偉大なるチーリスよ。今はこうするしかないのです)

やがてニーナを皮切りに、アルフォンスたちは次々に目を閉じていった。全員が目を閉じたことを確認し、リネアは幻影族に向き直る。

「まだだ――」

「？」

「この先、我々幻影族だけが敵だと思うな！　界王を狙う民でなくとも、お前の存在は――！」

「それでも」

幻影族は言葉半ばに、リネアが生み出した太陽のような巨大な炎に包み込まれた。そして狂ったような笑いを死に際の呪詛に残し、塵芥と帰していった。

「……それでも、構わない」

やがて風が吹き、全ては終わりを迎えた。

(あ、風の音……)

ようやく取り戻した音に安堵しながら、アルフォンスたちは恐る恐る目を開けた。

「リネア！」

立ち尽くすリネアに、セルグが駆け寄ろうとした時――。

「おい、リネア！？」

全てを終えたリネアは、振り向く力も無く、意識を失って倒れてしまった。

「おい、リネア！ リネア！」

間一髪で抱きかかえたセルグが揺すってみても、何の反応も返さない。

ニーナも慌てて駆け寄り、出来る限りの回復術を施す。

（……？）

だけど何か、何かがおかしい。

「ローザンさん、リユーンさん！」

「どうしたの？ あたしたち、回復術は……」

「でもリネアさん、法力の回復術に反応しないんです！」

「ええっ！？」

特殊力の回復術は、対象が備えている力を行使しなければならない。人族は四つ全てを兼ね備える唯一の民。だからどの特殊力の回復

術でも効果がある。

リネアは人族ではなかったが、法力を最も強く持つ天王の血族。なのに法力で反応がないなんて――。

「どうしたら……！」

「……一度」

聞き慣れない声に、全員が振り向く。声の主はラルフだった。

「一度、館に行かれてはいかがでしょう。主のアーサーは気術も含め、全ての回復術を扱えます。魔力や気術の回復術なら、効果を見込めるのでは？」

「でも……」

仮にもリネアを狙った犯人だ。ニーナが言葉を濁す。その様子を見て、ラルフは目を伏せながら言葉を続けた。

「……幻影族が消えた今、アーサー様があなた方に害することはないでしょう」

「行こうぜ！ 迷ってるヒマなんかねえだろ！」

「うん、行こう！」

「では、私にお掴まり下さい」

そう言うラルフは一つの妖玉を取り出した。

「この中に術を仕込んであります。――では、参ります」

ぐわん、と精霊陣とはまた一味違う感覚が一行を襲う。次の瞬間、一行は館の玄関にいた。

ラルフの案内に従い、アルフォンスたちは数時間前に訪れた部屋

を目指した。

「アーサー様！」

僧侶の安否が心配だったのか、扉を開けると、初めてラルフが声を荒げた。

「ラル、フ……」

「アーサー様、ご無事で!？」

部屋の中では、僧侶アーサーが机に臥していた。ラルフの声に反応し、よろめきつつ身体を起こす。

幻影族が去り、正気を取り戻したようだ。

「怪我は、ない……。ただ、疲れ……。！ラルフ、まさか、そちらは」

ラルフが言うまでもなく、アーサーはセルグに抱きかかえられたリネアに気づいた。

「頼む、こいつを助けてくれ！辛いのは承知だけど、あんたがいねえんだ！」

「アーサー様、私からもお頼み申し上げます」

「勿論です。出来る限りのことをしましょう」

アーサーはそう言うと、ふらつきながらも椅子から立ち上がり、リネアの額に手を触れた。

「これは……!？」

「なあ、どうなんだ!？」

「説明は後です。ラルフ、館中の特殊石を持って来なさい！ 早く！」
「御意！」

アーサーはセルグに言つて側の長椅子にリネアを寝かせると、一心不乱に何か呪文を唱え始めた。

「アーサー様、お持ち致しました！」

「では、魔法使い殿の右手近くに魔石を、左には法石を置いて下さい！ 他は私に！」

「わかつたわ！」

アルフォンスたちも手伝い、大量の特殊石の中から石を分類した。感知能力を磨いていなくても、四つ全てを持ち合わせる人族だから出来る技だ。純度の高い石なら、感覚が判断してくれる。

とは言え判断力は、やはり普段から特殊力を扱う面々が高かった。それでもリネアのため、アルフォンスとセルグも出来るだけの数をこなした。

「ではこれより、魔法使い殿の特殊力の流れを再構築します」

アーサーが術を発動させた瞬間、四種の特殊石は爆発するのではないかという勢いで光り始めた。

石に秘められた力が、アーサーの術によってリネアの体に流れ込む。

またアーサーのそばに置かれた石は、幻影族によって酷使された自身の特殊力を同時に補い、術の精度を急速に上げていく。

やがて術によって送り込まれた力がきっかけとなり、リネアの中で特殊力が緩やかに巡り始めた。

「これで一安心です。しかし、これはあくまで応急処置です。後は賢者様をお呼びするしかありません」

史上最強と謳われるリネアの師匠にて賢者、シャルラン・ガイラ。

リネアを何よりも愛する賢者なら、絶対にリネアを助けてくれる。

「……恐らく久々に解放した真の力に、体が耐えきれなかったのでしょう。力が暴走する前に、意識とともに自ら無理やり封じたようです」

「えっ！？ リネア、このままなんですか！？」

「早く賢者様を呼んでくれよ！」

「ええ、至急組合に掛け合います」

アーサーが部屋を離れた後、ラルフから客間にリネアを寝かせるよう勧められた。

その誘いを受けてリネアを休めると、アルフォンスたちも椅子に腰を下ろした。

すると一安心したからだろうか、どっと疲労感が押し寄せてきた。

「うわ、いつの間にか朝かよ……」

「私、何か急に眠くなってきたやいました……」

ニーナの言葉は最もだろう。自分たちはようやく砂漠を越えてこの町に入り、幾分も眠らないうちに事件が起きたのだから。

「リネアは心配ですが、今は賢者様を待つしかありませんねえ……」

リユーンの言葉で、全員の視線がリネアに集まる。

「リネア……。辛かっただろうね」

「ええ、そうね……。だけど、余計な気を回さないのが一番じゃない？」

「ですねえ。……ええ、それがいいですよー」

「？」

リユーンの何か含みがある言葉がアルフォンスは気になったものの、襲ってきた眠気が追求を許してはくれなかった。

こうして賢者が訪れるまでのしばしの間、一行は朝日の中で眠りに落ちたのだった。

ただ一人、セルグを除いて。

セルグは周囲が眠りに落ちるのを待ち、気配を断って誰にも気づかれないよう、眠るリネアへ歩み寄った。

傍らに座り込むと、昏々と眠り続けるリネアの顔を見つめる。

（俺……。お前のそばにいるから）

——お前が『禁忌の子』でも構わない。ただ、俺を愛してくれ。

（俺だけの、月の天女に……）

ジーパの神話では、月には天女がいるという。数多くいる神仙の中で、最も美しいといわれる存在だ。煌めく星の銀の髪に、輝く月の金の瞳。

（誰にも渡さねえ）

セルグはそっとリネアの頬に触れた。己の手に抱いた時を思い返す。

そうして額に、静かに口付けを落とした。

始まりの終わりへき

『ねえ、この子の名前はとうしましうか』

『——がいい。僕の国の英雄の名だ』

『まあ素敵。そうね、じゃあこの子の名前は——』

「アル！」

「ふべこっ!？」

ドガッ!

朝っぱらから豪快な音を立てて、アルフォンスは寝ていた椅子から転がり落ちた。

「……大丈夫かお前」

「……や、精神的にダメ……」

セルグに引っ張り上げられるようにして立ち上がったが、まだ顔がジンジンと痛む。情けなさすぎて涙が出そうだ。

(うつ、何か夢を見てた気がするんだけどなあ……)

衝撃的な目覚めのお陰で、余韻に浸ることも出来ずに内容は綺麗サッパリ頭から抜け落ちてしまった。

横になれる長椅子は女性陣に譲り、男は普通の椅子に座って寝ていた。それが敗因となり、起床で顔から床へ突っ込むハメになってしまったのだ。

「何やってんのよ、アルったら。もうすぐ賢者様いらっしゃるわよ」

「う、はい、スミマセン」

ようやくスッキリしてきた頭で辺りを見回せば、自分以外はきちんと起きていた。ラルフとアーサーがいなかったのが唯一の救いか。

「リネアの様子は？」

「相変わらずです。でも、命の危険はありません」

「そっか、……良かった」

もうすぐ賢者様も来ると言いつし、これでもう大丈夫だ。

「失礼します」

そこにアーサーとラルフがやってきた。アーサーは少し顔色が優れないが、体調はだいぶ回復したようだ。しっかりとした足取りで歩いている。

「――まずは、みなさまにご迷惑をお掛けしたこと、謝らせていただけますか」

「そんな、だってあれは幻影族が……！」

「確かに。ですが、そもそも強い精神を持てなかった私に原因があります」

アーサーの言い分はこうだ。

自分は僧侶だが、スードの領主も務めていた。その責務から心が弱り、幻影族につけ込む隙を与えてしまった、と。

「いかに幻影族とて、心身の健やかな民を操ることは出来ません。仮にも人の上に立つ身として、お恥ずかしい限りです」

「アーサーさん……」

「いえ、ただ己の弱さを懺悔し、赦しを得ただけかもしれませんが……。あまりにも情けない」

遠い目をしたアーサーにアルフォンスはかける言葉を探したが、ニーナが言葉を引き継いでくれた。

仲間である自分たちと同じ気持ちを、同じ職のアーサーと同じ思考で。

「アーサー様、ですがその懺悔、私たちは受けられません」

「キャズタ殿？」

「人は責める気持ちがあるからこそ赦すのです。ですが私たちはアーサー様を責めるつもりなどありません」

だから赦すも何もないんです、とニコリと笑うニーナに、アーサーは毒気が抜かれたように苦笑した。

「……そう、ですか。ええ、あなた方に弱音を吐いても、戸惑わせるだけでした」

己の弱さを救い給うは神の赦し。己の強さとなり給うは人の赦し。アーサーは呟くように唱えた。

「やはり私は、まだまだ修行がたりない。キャズタ殿、あなたは素晴らしい僧侶だ」

「いえ、そんな……！」

「裁判も一人で見事にやり遂げました。立派なことです」

「え？ アーサー様、裁判中に幻影族は……？」

「幻影族に体を奪われたのは、もう何年も前になりますが……幸か不幸か、行い全てを覚えています」

ゆえに、罪は己の身に重くのし掛かる。

「ですが私にやれること、成すべきことは決まっています。スードを守り、二度と幻影族に負けぬ強さを持つことです」

強い、強い意思。言葉にも瞳にも振る舞いにも、全てに満ちていた。

アーサーは二度と、幻影族に操られることはないだろう。

そんなアーサーに、もうアルフォンスたちが声をかける必要はなかった。

（この人は……強い）

そして迫る、覇者の波動。

賢者が、来る。

「——やあ、みんな。久しぶり」

賢者の声に揺るぎはない。世界の覇者は、愛弟子が命の瀬戸際にあっても動じなかった。

「シャルラン殿、お早く」

「失礼、クレア様」

「「！！？」」

賢者以外に見知らぬ女性がいたことも驚いたが、アルフォンスたちの度肝を抜いたのはそこではなかった。

（賢者様が誰かに『様』付け……！？）

青天の霹靂、とは正にこのことだ。

リネアに輪をかけて——いや、その数十倍は天上天下唯我独尊な賢者様が、誰かに『様』付け。

（もしかしてまだ夢の中？）

そのほうが頷ける。

しかし現実には残酷で、どれだけアルフォンスが頬や腕や太ももや手の甲などをつねってみても、確実に痛みをもたらした。

「お待ちしていました、賢者様。この度は……」

「余計な話はいいい。早くリネアのところへ案内してくれ」
「かしこまりました」

アーサーは一瞬だけ視線を女性に移したが、気にしている暇はないと判断したようだ。すぐに賢者をリネアが眠る部屋へ案内した。しかし、部屋に入るやリネアに駆け寄ったのは女性のほうだった。

「良かった、封を掛けているだけですわ」

「ではお任せ出来ますか」

「もちろんです」

女性はあの賢者に対等、いや、格上として扱われている。

柔らかに流れ落ちる髪の色は、真の姿となったリネアと同じ銀色。動くたびに、甘く不思議な香りが仄かに薫る。

（あれ、この薫り、どこかで……？）

「では失礼」

一言断って、女性は背負っていた楽器を構えると、アルフォンスたちが聴いたこともない美しい曲を奏で始めた。

弦を爪弾き、聴く者全ての心を震わせる旋律を生み出していく。

（この人は吟遊詩人なのか。でも——）

やがて紡がれた歌声に、アルフォンスは齒痒い思いをさせられた。喉まで出ている。薰りだけじゃなく、この声を間違はなく、どこかで聴いたことがある。

部屋を満たす暖かな力に、頭の奥の記憶が呼び覚まされる。

『——の——が』

（何か、重要なことを言われた）

この声に告げられたんだ。

『あなたの——が——』

（思い出せ！）

「……『あなたの判断で千の命が左右されるでしょう』——ですよ」
「え、——ってうわぁ!？」

いつの間にか演奏は終わっていて、女性はアルフォンスの目の前に立っていた。

「お久しぶりですね。旅はいかがですか？」
「へ、あ、まあ、その……」

待て、今この女性は何て言った？

(『あなたの判断で——』)

「——アスクガーデンの占い師さん！」

「うふふ。ええ、でも本職はこちらなんです」

そう言っただけで女性は楽器を抱え直した。

半球状の木製の胴に棹を付け、六本の弦を張ったものだ。

「え？ まさか本当にアスクガーデンの……？」

あの時一緒にいたセルグも半信半疑に女性へ問う。

女性は柔らかな笑みで答えた。

「ええ、本当ですよ。私の名はクレア・リ・ネール。以後お見知り置きを」

「は、はあ……」

女性、クレアが奏でた音楽によって、この場は何とも言い難い、清浄な空気に包まれていた。

しかし、それでリネアに変化があったわけではない。

「あの、リネアは……」

「ご安心なさって。今は前段階として『場』を作ったのです。シャルラン殿、お手伝いをお願いします」

「ええ」

賢者がクレアの言葉に頷き、リネアを中心に、傍らに座ったクレアをも覆う結界を張った。強力なものだと一目で分かる。

」

結界の中のクレアは、今度は楽器を爪弾かなかった。

歌を口ずさむこともなく、リネアの額に手をあて、何らかの力を行使しているようだ。

（セルグ、あれ気術？）

（え？ いや、何も感じねえよ。特殊力だろ？）

（じゃあローザンはわかる？）

（いいえ。何にもわからないわ）

（私もです）

（私もわかりませんねえ）

クレアが何らかの力を行使している間、アルフォンスたちはひそひそと話し合った。

ただ手を額に置いているだけ、なんてことはないだろう。それなのに、クレアが行使している力を誰も感じ取れなかった。

アルフォンス、ただ一人を除いて。

（……変なの。昨日の、リネアの力に似てる気がするんだけどな）

リネアの目覚めの余波の感覚は、今とほとんど同じだ。——それに。

（首飾りの力も……だよな）

首飾りの力は自分だけが気づけたとしても、リネアの目覚めの力は強大だった。

なのに、みんなは思い出す素振りすらない。

相談しようとセルグを向いたアルフォンスだったが、口を開いた途端、言葉が出てこなくなった。

(……何て言えばいいんだ?)

『みんなが気づかない力が分かるんだけど?』

『昨日のリネア、特別な力を発したよね?』

言葉を押し留めたモノの名は、恐怖。

民も世界も全てが『分類』され、『規定外』を認めない、この世が与えた恐怖。

これがリネアがいつも感じていた恐怖なのだ。その事に気づいたアルフォンスは、呆然とするしかなかった。

この世にあるモノは、全て『分類』される。例えば民が混血しても、必ずどちらかの特徴で生まれてくる。両方の力を備えることはない。だから『混ざった』リネアは『規定外』として、全てに拒まれた。

(勘違いだ。そう、勘違いに決まってる)

リネアを拒む気持ちなんて、これっぽっちもない。けれど、もし自分が同じ立場になったら?

(そんなの嫌だ!)

界王の剣を持っているからだ。それで何となく、特別な力もわかってしまったんだ。そうに決まっている。

アルフォンスはそう無理やり結論付けて、救いを求めるような気持ちでクレアに視線を戻した。

(——ああ、そろそろ終わる)

けれどそうやって拒もうとも、アルフォンスは自分の感覚がどんな鋭敏になっていくのが分かった。

今や、クレアが力を弱めていることが、目を閉じてでも判断できた。

「さて、もういいかな」

そういうと賢者は結界を解き、リネアのもとへ歩み寄った。アルフォンスたちもそれを見て、慌てて駆け寄る。

「リネア、リネア」

クレアが優しくリネアの名を呼ぶ。いつの間にか、リネアの姿はいつもの黒髪に戻っていた。
そして。

「――」

「リネア――!!」

ゆっくりと、目蓋が持ち上げられる。

まだ少し虚ろな目をしているが、もう安心だ。

「……………あねうえ？」

「へ？」

もしかして、まだ意識が混濁しているんだろうか。

一瞬そう思ったが、リネアの言葉に該当するかもしれない人物が、今なら隣りにいる。

「リネア、久しぶりね。……やっぱり、もっと早くに会いに来るべ

きだったわ」

彼女はリネアの真の姿と同じ色の、銀の髪。

「アネウ……ええっ！」

リネアは話しぶりから天涯孤独の身だと思っていた一行は、この事実にもたまた仰天させられた。

「ふふ、私はリネアの姉ではありませんわ。正確には母方の従姉妹です。リネアはそう呼んで慕ってくれていますけれど」

「あ、何だ。従姉妹だったんですか……」

（あれ？）

ちょっと待て。

リネアは両親が界王と血族だ。ってことは、この人……。

「あ、私はリネアと同じく天王の孫に当たります。母は天王の三姉妹の次女、リネアの母君は三女ですわ」

「ワー、ソウナンデスカー……」

界王の血族ってこんな簡単に会えていいのだろうか。界王様は時に神とも崇められる存在なのだが。

アルフォンスは驚きのあまり、返事がカタコトになってしまったくらいだ。

「さて。リネア、お前はまだ、少し眠りなさい。アルフォンス君たちも私もクレア様も、みんなお前のそばにいるから」

「……はい」

「よし、いい子だ」

賢者の言葉に、リネアは安心した笑みを浮かべた。
自分の周りに誰かがいてくれる、その嬉しさと心地よさを噛み締めながら、再びリネアは眠りへ落ちていった。

「これでよし、と。じゃあ始めようか」

賢者がアルフォンスたちのほうを振り返り、ニコリと笑った。
その笑顔には、ファームルで感じた威圧感などは、どこにも無かった。ごく普通に弟子を慈しむ、ただの師匠として賢者は微笑んだのだ。

「えっと、何をですか？」

「色々な話だよ。まだ理解できていないことも多いだろう？ 私がリネアの代わりに話すよ。この子のことや、世界のことをね」

賢者が今までに見せたことのない、慈愛と悲哀がその言葉に満ちていた。

「……はい！」

アルフォンスたちは自ずと身を引き締める。覚悟を決める時がきたのだ。

無知な自分では、もういられない。知らない、では済まされない。
そして賢者より語られる、この世の全て。世界の真実。

始まりの終わりへ弐

始まりは、この世が生まれた時。

世界が生まれ、界王が、民が、動植物が。全ての命が生まれた。けれどその命には等しく、けれど偏って『特殊力』が備わっていた。これは民に発展をもたらし、安寧を招くと同時に争いを生み出し、差別を作り出した。

「わかるかい？ 五人いらっしやる界王様のうち、妖力を持つ御方は人王様だけだ。だけど、それも人族のように、四つのうちの一つとして、だ」

あれからリネアをクレアに任せて部屋を移した一行は、賢者の話に聞き入っていた。

事件に深く関わったラルフも、アーサーの指示でこの部屋にいる。ひたすらにアーサーを信じて付き従ったラルフが、全てを知ることが出来るようにとの配慮だろう。

「獣王様は妖力以外を僅かに持ち、気術の達人。これが問題なんだ」

誰も見たことのない、見ることの出来ない世界の配置。しかしいつの頃からか、それは模式的に表されるようになった。

東西南北のように十字を描き、北は天界、南は魔界。東は獣界で、西は精霊界。そして中央に人界を配置する。

その配置図が表すことは、第一に、人界が全ての礎だということ。第二に、四世界を二組に分けて見るということ。縦と横、対になるものとして。

また界王が持つ力に沿って、特殊力の関係図も同様に描かれる。だけど妖力は、世界配置とは重ならない力。

「妖力を唯一の力として持つ界王様がおられない。……これは世界の歪と言うべきものだ。このために妖力を唯一の力として持つ者や、強く発現する者は蔑まれたからね。界王様が持つに値しない穢れた力だとか、あるべき力ではない、とかの理由で」

笑う。賢者は笑う。何とも馬鹿馬鹿しい、考えるに値しない意見だ、と言って。

その笑いに同調することはなかったが、アルフォンスは賢者の意見に同意した。

「……僕もそう思います」

「おや、久しぶりに意見があつた。……ふふ、その君は色々と言われてきたクチだろう？」

賢者が視線で示した先にいたのは、ラルフだ。

もともと病的なくらい色白だったその顔が、さらに蒼白になった。思い出したくもない、悲惨な過去に触れたのだろうか。

「……はい。ですから私たちは、アーサー様の元で暮らしていました」

「成る程、アーサー殿はそういった妖力を強く持つ子供を集めていたわけだ」

「……いくら賢者様とはいえ、アーサー様を悪く言うことは止めていただきたい」

誰もがひれ伏す賢者を前に、ラルフは拳を握り締めた。

最も悲惨な部分ではなく、最も大切な部分に触れた怒り。理性など、簡単に吹き飛んだ。

「おや？ 私は気に障ることを言ったかい」

「言い方に問題があります。——アーサー様がいなければ、どれだけの人間が不当な差別を受け、野垂れ死んだことか！」

「……」

自分に楯突くラルフの言葉を遮ることなく、何故か賢者は静かに佇んでいた。

「賢者ならば知っているだろう。人々がアイルを何千年も避けていた理由は、『妖力が強い者を生み出しやすい土地』だからだ！ アイルは今もそれを理由に、他から妖力が強い者を追い払う、言わば流刑地だ——！」

「——！！——」

ラルフはいつもの丁寧な口調を取り払い、怒りを、本心を賢者へぶつけた。肩を弾ませ、荒い息を繰り返す。

そんなラルフの言葉に、叫びに、アルフォンスたちは衝撃を受けた。

その中でも、アルフォンスは最も衝撃が大きかった。何となく、妖力が疎まれているのは肌で感じていた。強力に持ち合わせる確率は、霊力と妖力は同等だ。どちらも稀である。だが、あの優しい人々が暮らす村でさえ、その二つは扱いが確実に違った。

幼い頃から特殊力を用いる職に就いていたわけでもなく、様々な土地を巡ったわけでもない。田舎の村で妖力と滅多に関わることなく暮らしてきたアルフォンスには、理解の範疇を越えていた。

そんな中、渦中のラルフは、強い瞳で賢者を睨みつけた。

（アーサー様を侮辱するなら、賢者だろうと……！）

——生まれながらに白い髪と、血の色の瞳を持って生まれた自分。

何より妖力が一際強かった。

幼すぎて覚えていないが、自分は両親に捨てられたのだろう。ただ我が子を殺すことは忍びなかったのか、この大陸に連れてこられた。

とても長い間、船に乗っていた。それが最初の記憶。

生きるためには何でもした。思い出したくないことばかり繰り返した。そんな時、あの人が自分を救ってくれたのだ。

「アーサー様は誰もが嫌がるこの地に自ら赴任され、巡礼先で私のような者を数多く救って下さった！ あの方は……！！」

泥や血だけではない。この世の汚濁にまみれて穢れきった私の手を、アーサー様は優しい笑みで迷わず握ってくださった。

「お心が弱ったことで幻影族に憑かれ、あなた方に害をなしたことは事実だ！ それでもアーサー様は相手が賢者であろうと、蔑まれる覚えはない！！」

——例え賢者への不敬罪で罰を受けようとも、自分の心に正直でいられた。だから本望だ。

ラルフは真っ直ぐ、前を見た。

「……。ああ、そうだね。私の悪い癖だ。今回は私の失言だ、素直に謝るよ」

「……！」

ラルフは驚きに目を見開いた。アルフォンスたちも同様だ。まさか賢者が謝罪の言葉を口にするなんて！

「だから君は、何も気にしなくていい」

賢者は、そう言つてまた笑つた。

その笑みに、アルフォンスは賢者が意図したことが分かった。

（ああ、そうか……）

賢者は互いに理解させ合ひたかつたのだ。

ラルフとリネアは拒まれてきた者。アルフォンスたちは受け入れてきた者。

ラルフの率直な思いを、怒りという引き出しやすい感情を利用することで吐露させたのだ。そうすればアルフォンスたちは、ラルフの魂の叫びを受け入れると踏んで。

実際、その読みは的中した。

アルフォンスは今まで、差別という言葉に実感を得たことはなかった。例えば自分は村で唯一の金髪碧眼だったが、隣村には一家族暮らしていたし、西の周囲では一般的な色だ。

（だけどラルフは……）

見たことのない色をしている。あれは間違いなく突然変異で生じた色だ。あんな色を持っている民族や国があれば、必ず噂は広まる。

「では、話を戻すね。ラルフ君のように妖力を強く持つ者は、世界の誕生以来、ずっと蔑まれてきたんだ。そして界王様は誰もその事に感心を持たなかった」

「な……！ 界王様ですよ！？ なんてそんな酷いことを！？」
「世界を安定させるために、最も簡単な方法だからだろう。ヒトは己より格下の者がいることに安心する。常に上に立ちたがる。だから……利用し続けてきたのさ」

——それが神の所業か。

ラルフの話を聞いたから、とかではない。けれど、どうしてもアルフォンスは、涙を堪えきれなかった。

「そんな……、そんなの……」

そんなの、おかしい。

「君は優しいね。やっぱり、君は……」
「？」

そこで、珍しく賢者が言葉を濁した。

「いや、何でもないよ。……まあ、こんなことがあるんだ。幻影族たちが界王様を滅ぼそうとする理由、わかったかい？」

「ええ、理解はできましたけど……」

目を彷徨わせながら、そう漏らしたのはローザンだ。セルグたちもみんな、似たような渋い顔をしている。

理解できてしまうから困るのだ。幻影族は被害者なんだ、同情すべき余地があるんだ、と思えてしまうから。

だけど界王様を——リネアを傷つけていい理由にはならない。

「そして数年前、ついに反旗を翻す動きが見え始めた」

中心は天界の幻影族。最も強く妖力を発現し、攻撃術に長ける民。獣界に住まうのは甲殻族。妖力は弱いが、鎧のような体皮の防御力は他を寄せ付けない。

魔界にはその名も妖族が住む。幻惑の力で相手の力を削ぐ。精霊界はオーク族が住む。まるで他の民の死後のような姿で生を

営み、残虐的な嗜好で殺戮を好む。

「——と言っても界王様や血族には、そう簡単に手を出せない。彼らが住まう『界王の間』へ行くには、堅固な扉があるからね。特殊力や気術では一切傷つけられないものだ。……しかし、リネアなら破壊できる」

それこそ界王と血族のみに許された至高の力、界王力。

リネアがその身に宿る力を解放すれば、世界を簡単に滅ぼせる。

——と、拍子抜けするくらい、サラッと軽く賢者は言った。その事实に、アルフォンスたちは何も言うことが出来ない。

冗談でもなければ、比喻でも、誇張でもない。紛れもない真実だから。

「後は君たちもわかるだろう？ だからリネアは狙われたし、常に本来の力は封じていた。あまりにも強すぎるから法力は完全に眠らせ、身を守るため最低限の魔力だけを使用していた。……まあ、その封印も成長のために解けてしまい、今は抑える程度なわけだが……」

賢者はおもむろに立ち上がり、リネアの杖を手にとった。

「これは特製だね。先端の石は魔精石という、とても希少な石だ。これだけ純度が高く、大きなものを手に入れるのは私でも苦労したよ。普通の魔石と逆で、持ち主の魔力を吸い取るんだ」

そこで賢者は、何かここまでで質問は？ と言ってきた。その問いにローザンが乗った。

「あの、じゃあ気になるんですけど、お値段っていか程かしら……」

「？」

（あ、確かにそれは僕も思った。よくぞ聞いてくれました！）

不躰な問いではあったが賢者は気にする様子も見せず、サラリと、
こう、のたまった。

「ん？ どうだろう、貰い物だから。けど、売れば一生何不自由なく暮らせるかな」

「……！！」

なんだそれ。石一個で一生何不自由なく暮らせるってどんなんだ。
しかも貰い物！

アルフォンスたちは絶句した。

「はは、まあ脅しと……いや、くれたのはアスケイル王だから。ち
よっと国家予算削れば出せる代物だよ」

（今、絶対に『脅し取った』って言おうとした……）

——しかもアスケイル王ですか。僕らの国王様ですか。国家予算
削るって、それ国民の僕もリネアの杖に代金の一部を支払ったって
ことじゃ……。

（まあ、そんなことがあったなんて分からないくらい、楽しく暮ら
せてたからいいか）

若く聡明な王として、国民の誰からも尊敬されるアスケイル王。
その人がリネアを守るための石をくれたというのは、何だか無性
に嬉しかった。

「さ、他に質問はあるかい？」

「あ、あの！」

「何かな？ アルフォンス君」

アルフォンスは大きく息を吸い込んだ。

——こんな話、真実を聞いて、黙ってはられない。

「界王様にはどうやってたら会えるんですか！？」

「……何故だい？」

賢者の声色が変わった。あの法廷を彷彿とさせる、絶対零度の声色。

それでもアルフォンスは少しも怯まなかった。

「リネアが巻き込まれたのは、界王様たちにも責任があるからです
！！」

「おい、アル！」

アルフォンスの言葉に、セルグが真っ青になって止めようとする。
しかしアルフォンスはその手を振り払った。

界王への侮辱はこの世で最大の禁忌。この先を言えば、アルフォ
ンスは罪人となることは免れない。

それでも。

「こんな状態なら世界を救っても——、いや、救えるもんか！——
——だって、界王様は間違ってる！！」

アルフォンスを止めようとしていたセルグも、他の面々も、誰も
この言葉を『否定』しなかった。

口に出す恐怖には打ち勝てなくとも、全員が同じ気持ちだったからだ。

「……やはり君だから、剣は選んだ」

「？」

「気持ちいいくらいに言い切ってくれたね。——いや、『私は何も聞いてない』よ」

君たちもだろう？

そう賢者は一行に問いかけた。その問いにセルグたちは迷わず頷く。

これが意味するところは。

「誰も聞いてないから、証拠はない。界王様への侮辱罪なんか、証人がいなきや成り立たないからね」

「賢者様、みんな……」

じんわりと、温かいものがアルフォンスの胸を満たしていく。

ああ、自分は一人じゃない。仲間が、いる。

「さて、行き方だけど。これはさっきも言ったけど、特別な扉を通る必要がある」

その時、アルフォンスはポンと肩を叩かれた。

セルグが何とも言い難い顔でこちらを見ている。

(……気にしなくていいのに)

セルグは自分と同じ気持ちでありながら、恐怖に打ち勝てなかったことを気にしている。

だけど、分かち合ってくれただけで十分だ。
アルフォンスはセルグの手に自分の手を重ねると、その甲をつね
ってやった。

「！」

（ばーか）

（てめえ、アル！）

ついでにチョロつと舌も出してやる。

これくらいでちょうどいい。セルグは苦笑すると、いつもの様子
に戻った。

「扉は、どの世界にも五つあるんだ。他の四世界に通じる扉と、そ
の世界の『界王の間』に通じるものね」

「それならば、まずは人王様にお会いするべきでしょうかー？」

「んー、リユーン君、それはお勧め出来ない」

「えっ、何故ですか？」

ニーナが驚きの声を上げた。

「特殊な扉、と言ったろう？ 扉はまたの名を『試しの扉』という
んだ」

「『試しの扉』……。僕たち、何かしなきゃいけないんですか？」

「いいや、扉が判断する。通すに値する者かどうかをね。その条件
が明確じゃないから、これまた面倒なんだ」

そう言って、賢者は盛大にため息をついた。

「えー、では我々はこの先どうしたら……？」

予想外の展開にリユーンの言葉も歯切れが悪くなる。

「全ての界王様にお会いしたいんだろう？　ならば初めは獣王様が
いい。一番物分かりがいいし、気さくな方だ」

「獣界への扉は開くんですか？」

「君たちなら大丈夫。獣界への扉は絶対にね。それに獣王様の扉も、
他に比べれば開きやすい。反対に、人王様の扉は最も困難だ」

へー、なんて一行から感嘆の声が漏れる。

だけど、だからこそ、アルフォンスは悔しかった。

（父さん……！）

村で聞いた父の偉業。純粹に尊敬していた。今も凄いと改めて思
い知った。だけど。

（何で界王様に差別なんか止めるよう、話してくれなかったんだよ
！？）

こんなの八つ当たりだ。だけど人王様にお会いすることを許され
た人物なのに。

もし何か働きかけていれば、何か変わったかもしれない。

「……アルフォンス君」

「は、はい！」

「ちよつと剣のことで話したいことがあるんだ。二人きり。いいか
な？」

「あ、はい。わかりました」

「じゃあ君たちはリネアについていてくれるかい？　クレア様から

もお話を伺ってみるといい。扉の詳細は後で説明するよ」
「わかりました」

そうして賢者に言われるままセルグたちは部屋を移り、アルフォンスだけが賢者と相対した。

みんなを見送るアルフォンスの背後で、賢者の口には、笑みが零れていた。

始まりの終わりへ参

パタン、と部屋の扉が閉じられる。

「さて――」

賢者は数歩歩いて、窓辺に寄りかかった。

「今日は驚きの連続だったろうけど、まだ君には驚いてもらわなきゃならないんだ」

「僕が？ この剣が……」

「ああ、それは嘘。というか口実だね。君と二人で話すための」
「はあ……」

確かに剣を持ち出せば、アルフォンスと一対一で話し合ってもおかしくはない。

だけど、何を話すというのだろう。

「さっき質問はないか、と聞いたとき、てっきり君はコレのことを聞くと聞いた」

そう言っつて賢者はアルフォンスに近づき、首飾りを取り出した。

「あー！」

「ふふ、ラルフ君たちの扱いを聞いて、頭から吹っ飛んだみたいだね。コレ、今も気になるかい？」

「……はい」

そうだ。この首飾りから感じた力と――それを感じとった自分が、

気になって仕方がない。

「……全ては一つに繋がるんだ」

「え？」

「目覚の時をお待ち申し上げていました。——我らが人王様の血を引く、ただ一人の御子よ」

跪き、深く頭を垂れる賢者。

（……え？）

何が起きている。賢者様は何をしている？

（誰が、人王様の）

「あなた様の父君はアスケイルの民。母君は人王様にあらせられま
す」

膝がガクガク震えるのを止められない。心臓だつてうるさいくらいバクバク音をたてて跳ねている。賢者が告げる言葉は、アルフオンスの理解能力を軽く越えていた。

「『試しの扉』は真実ですが、母君にお会い出来ない理由は他にも御座います」

ああ、重要なことを言っているのに。
頼む、まともに動いてよ僕の頭！

「——母君、人王様は——」

賢者が真っ直ぐアルフォンスを見据える。その瞳に宿る、強い力に引き込まれる。目が逸らせない。

「現在、消息不明となっております」

「！！！！」

ガタン！ と音を立てて、アルフォンスはその場に崩れ落ちた。立ち上がることも出来ず、同じ視線の高さとなった賢者を茫然と見つめた。

「人王様の血族である、あなた様には界王力が宿っております。リネアが目覚めた時やクレア様が力行使したとき、お分かりになったはずです」

「僕、に……？」

「はい。何より、この首飾りが証なのです。これは人王様の血族のみがもつことを許された品」

だんだんと、アルフォンスの頭も正常に動くようになってきた。

（首飾りの力は界王力で、リネアたちも使える。僕は血族だから、セルグたちは分からなかった界王力が感じとれた）

そうか。あの結界は余分なモノを遮断するために張ったのか。結界内で界王力だけを行使出来るように。

「母君の……人王様の安否は、あなた様が人界に下られてから不明のままです」

「え……？」

「しかも父君は何者かに瀕死の重傷を負わされ、あの村に逃げ込んだ次第なのです」

「！？　じゃあ人王様は！」

「真実は不明です。その時から私でも――扉を開けません」

アルフォンスは、ボロリと大粒の涙がこぼした。

（じゃあ、やっぱりあれは――）

武闘大会の前夜に見た、不思議な夢。

巨大な扉の前に立ち、傷ついた体で赤ん坊を抱える男性。そして涙を流し、逃げてと叫んだあの女性！

（父さん、母さん！！）

会いたいのに。

笑顔で迎えてくれるかな。それとも、再婚とかしちやってるのかな。

そんなことを考えながら旅を続けてきた。望みを捨てきれないで、母の愛を、温もりを、求めていた。

なのに、母に会えない。会えると思って頑張ってきたのに！それが分かった途端、アルフォンスは急に体中の力が抜けた。何とか倒れることだけは防ぎ、近くの椅子にしがみつくように座りこむ。

「……人王様は」

「間違いなく御存命です」

「えっ……？」

界王に『消息不明』などというものだから、アルフォンスはびっくり母は亡くなったものだと思っていた。

しかし、賢者の瞳には、同情も憐れみの色もない。

「界王様がいなければ、その世界は姿を保てません。ですから……」
「生きてるんですね!？」

「はっ?」

「母さ……人王様、生きてるんですね!？」

アルフォンスは椅子から飛び上がるようにして、賢者に詰め寄った。ボロボロと流していた涙を拭い、返事を待つ。

「ええ、私の全てに誓って」

優しい笑顔でそう告げて、恐怖を取り払ってくれた賢者に、アルフォンスは心から感謝した。

「僕、頑張ります! 母さ、ええと……うん、母さんには何かあった。けど、今の僕じゃ何も出来ない」

「……では、どう致しますか?」

「まずは剣を使いこなしたいんです。僕だってみんなを守りたい」

その言葉を聞き、賢者は笑顔で言った。

「では獣界に渡る前に修行ですね」

「はい! —— えっ?」

元気よく返事したのは良かったが、アルフォンスは一瞬で後悔した。

(何か賢者様、笑顔が怖い……)

笑ってるのに笑ってない。

いや、本人は至って楽しそうだ。その嬉しさを他者が共有出来ないだけで。

「その言葉を待ってましたよ。全員、渡る前に鍛え直した方がいいと思っていました」

「は、はあ……」

『ウキウキ』という言葉が似合いそうな雰囲気だ。何か凄いことを言ってるのに突っ込めない。

——ああ、みんなゴメン。

アルフォンスは別の部屋にいる仲間に、心の中で懺悔した。

(……あ、そうだ)

「賢者様」

「はい、何か？」

「驚いて言いそびれてたんですけど……。僕に敬語、使わないで下さい」

「ですが」

「だって賢者様、僕は敬語を使うに値しないですよ。なんの力もないんです」

「いいえ、あなた様の崇高な想いは……。……ですが、望まれるならそのように。アルフォンス君」

「はい！」

例え自分が界王の血族だとしても。

(僕は僕。今まで通り『アルフォンス・ロットェカルド』でしかない) いつか血族ゆえの別離がきても――。

「血族のことはもう少し秘密にしておきなさい。まだ尚早だ。心配事はリネアやクレア様に言いなさい。二人は血族だからね、君の真実にも気づいている」

「はい」

「では話の続きをしようか。みんなを呼んできてくれ」
「わかりました」

アルフォンスは賢者の指示通り、みんなを呼びに行こうと扉に手をかけた。

「あ、そうそう」
「？」

まだ何かあったのかな、と思ってアルフォンスが振り向いたら――

「セルグ君とも二人きりで話がしたいな。――うん、『色々』と、ね」

賢者の目は、今度こそ本当に笑ってなかった。

（ぎゃーっ！ バレてるうーっ！！）

この部屋の気温がおかしい。一気に氷点下だ。
だって賢者様の背後から吹雪吹いてるんだよ間違いない！

「え、あつ、えーと」

（えーと賢者様はリネアの育ての親で、だからリネアは賢者様には

娘同然で……)

ここまで考えて、アルフォンスは卒倒しそうになった。

何だこの世界最強の嫁取りは。男親その一・賢者様に加え、その二・本当の父親は魔王様だろ！

(やっぱりリネアって『高嶺の花』だよセルグ……)

目眩がしてきた。

これからはセルグにもう少し優しくしよう。アルフォンスは現実逃避気味にそう思った。

「で？ セルグ君を呼んできてくれるのかい？」

「——はっ！ え、えーと、その必要はないです！」

「……ふうん？」

わあ、視線で人が殺せそう。ってか自分が死にそう。

「ほ、ほら、修行するんですよね！？ セルグもまた一段と成長しますから、まだ待って下さい！」

——思い出すのは七年前。村の友人の兄が嫁取りをした時のことだ。

隣村の女性だったのだが、彼女は近隣の村々でも評判の器量だった。

反してその父親は、頑固一徹で有名だった。早くに妻を亡くし、男手一つで育てた大事な一人娘だ。半端な求婚者は片っ端から追い返し、牛をけしかけたとか池に放り込んだとか、最強の伝説を打ち立てていた。

そんな『強敵』が待ち構える女性に求婚する友人の兄は、周囲が

ら『勇者』と讃えられた。

そして見事、求婚には成功したのだが……。

（ここで逃げたらセルグはあれ以上のことに……！）

幼かったアルフォンスの中ではアレを見て以来、嫁取りという行為は恐怖の対象になっていた。

成功を仲間に告げていた友人の兄。その端正だった顔が恐ろしいくらい腫れ上がったのを見てから……！

ともかくにも、いま賢者様がセルグに判断を下すのは止めさせたい。

（だってセルグは）

砂漠での決死の告白は保留となり、スードでの戦いは絶対に満足いくものではなかっただろう。

そんな状態のセルグを賢者様の前に差し出せるもんか。

（男の友情が試される時だ。ここで逃げたら男が廃るっ！）

「賢者様、お願いですから……！」

まだセルグを排除しないで。絶対にセルグはもっと上を目指するか
ら！

「……じゃあ、君に免じて待つよ」

「本当ですか！？　ありがとうございます！」

「ああ、『一度だけ』だ」

「じゃあ僕、みんなを呼んできます」

「頼むよ」

アルフォンスは廊下に出て、みんなが待つ部屋に向かった。

（もしかしたら余計だった……かな）

セルグは賢者様に見定めてもらえる機会を、自分の独断で一度だけに限定されてしまった。

でも、直感的に分かってしまったのだ。賢者様は今のセルグを認めるつもりはない、と。

「みんな、賢者様がまたお話があるって！」

だけど今は、とりあえずは事を進めよう。アルフォンスはそう考えて元氣良く部屋の扉を開けた。

「アル」

「リネア！ もう起きて大丈夫なの？」

部屋に入ると、リネアがベッドの上で体を起こしていた。顔色もだいぶ良い。

「ああ。心配をかけた」

「いいよそんなの。あ、賢者様のところ行ける？ 向こうの部屋なんだけど」

「大丈夫だ。行こう」

「うん！」

アルフォンスがリネアたちが何を話していたか聞くと、界王様のことだという。

リネアたちの銀髪は天王の血族の証、金色の瞳は魔王の血族の証。

それと、頬の紋様も界王の証の一つらしい。瞳・髪の色と紋様、三つの証のうち、生まれた時は一つか二つを持ち、即位したら三つが揃うという。

アルフォンスたちが部屋に着くと、中にはアーサーがいた。何やら賢者と話し込んでいる。

「ああ、来たね」

「では私はこれで」

「ええ、頼みますよ」

ちょうど話が一区切り着いたらしく、アーサーが席を立った。

「ラルフ、賢者様のお話が終わり次第、一の間に来てくれ」

「承知致しました」

ラルフに声をかけたアーサーを見送り、アルフォンスたちは賢者との話を再開させた。

「さつきも言った通り、まずは獣界に渡ることをお勧めするよ。何か意見はあるかい？」

「いえ、他世界のことは何も知らないですし……」

「じゃあ決定だ。獣界への扉だけど、それはジーパの山中にあるから」

「え」

ジーパ。その国名を聞き、視線が一つに集まる。

「何いっつ!？」

もちろん、この叫び声の主はジーパ出身の――。

「セルグ、知らなかったの？」

「知るわけないだろ！ 賢者様、山中ってどの辺りですか！？」

「あ、それは秘密」

「へっ？」

素っ頓狂な声を出したセルグに、賢者はクスクスと笑う。

「扉は何故か、全て島国にある。ジープもその一つだけど、扉のことは最重要機密だ」

そこまで言って、賢者が椅子から立ち上がった。

何かの術を発動させ、アスケイル周辺が描かれた大きな地図をどこからともなく取り出す。

「だから今回は私が連れて行くよ。その方が早いしね。それと……」

「師匠」

「ん？ 何だいリネア」

何かを説明しようとしていた賢者を遮り、リネアが苦言を呈した。あまりにも説明が足りなさ過ぎる、と。

「まず私たちが扉へ向かう場合、管理者であるアスケイル王の許可が必要です」

「しまった。私は許可がいらなからな、つい忘れていたよ」

「あの、何でアスケイル王が関係してくるんですか？ 扉があるのはジープじゃ……？」

「ああ、古代から四大国の元首が扉の管理者となっているんだよ。『界王の間』への扉は共同管理」

そう言つて今度は世界地図を出現させ、大きなそれを宙に浮かべた。

するとジープを含め、四大国の近くにある島国が仄かに赤く色付く。

「これが四世界への扉を持つ国々だ。何か気付くことはあるかい？」
「……。——あ、分かりました！」

ニーナが頬を上気させながら元気良く手を上げた。

「全て四大国の植民地、または朝貢関係にあつた国々ではないでしょうか？」

「その通り。古代、四大国は扉を権力の象徴として、島国を自国の管理下に置いたんだ」

「けど、どこも王家や治国方法は代わつてますよね？ 今は植民地もないですし」

「それはね、島国のほうが力を借り続けたいからさ。無用な侵入を防ぐには強い術が必要だが、四大国なら術士を集めるのは簡単だ」

賢者は各所が赤く色付いていた地図に手をかざし、新たに五色に区分けした。

四大国とその管理下の国々の組み合わせと、中の海を中心に一つ。

「獣界はアスケイル王国、精霊界はシエルマス共和国。魔界はドーニヤ帝国で、天界はラズ連邦が管理する」

中の海に浮かぶ島国を示す黄色が一層強くなった。南の海の、小さな小さな島。

「そしてここが『界王の扉』がある島国——だったところ。今は無

人島だ」

「あ、だから共同管理なんですね」

「表面上はね。本当は一国が管理下に置くと他の国との均衡が保てないからさ」

パチン、と賢者が指を鳴らす。すると世界地図は姿を消し、賢者も椅子に座り直した。

「さて、アスケイルの説明に移ろう。と言っても、許可申請はリネアがやればすぐに済む。場所も王都だ」

じゃあ何でわざわざ『説明』なんて前置きしたのかな。アルフォンスがそう思った時だった。

「だけど、君たちは先に修行しておいで。今のままでは力不足だ」

(!!)

そうだ、自分には力がない。改めて言われると堪えるものはあるが、真実なのだから何も言えない。

(さっき自分から言ったことだしね)

「修行……ですか」

口を開いたのはニーナだ。声に宿るのは、戸惑いではなく――。

「そう。全員だ。心機一転で……うん、三月ほど」

賢者は笑みを深めた。

始まりの終わりへ肆

「三月……」

「それまでに己を鍛え直すといい。旅をして、思うところもあったろう？　長い旅になる、家族に会うのもいい」

その言葉に、ローザンやリユーンが身動きした。故郷の家族を想ったのだろう。

「三月をどう過ごすかは君達次第だ。どうだい？」

賢者の問いにアルフォンスが迷わず答える。

「僕は賛成です。まだ剣を使いこなせてないのはすごく悔しいんです」

「私も賛成です！」

「ニーナ」

「三月足らずで出来るかは分かりませんが……。いいえ、絶対に一人前の位を得て見せます！」

職、特に五大職では、一人前かどうかということは大きな壁になる。受ける扱いは雲泥の差なのだ。

人族の土地を離れる今、全世界で共通化されている職で一定の地位を得れば、大いに不安要素を取り除ける。

「じゃあ俺も。……そろそろ、お師匠様の顔が見たいしな」

一人前の位に相応しくなったと思ったら帰ってきなさい。かつてセルグのお師匠様、ゴルディアスはそう言った。

(だけどセルグは……どうするのか)

セルグのことだ、もしかしたら今回の敗北を気にして昇級を拒むかもしれない。

「あたしは一族が心配だし、一旦戻るわ。色々と整理しなきゃいけないこともあるし」

「私も姉が心配ですし、クルツアータに戻りますかねえ」

ならば、決まりだ。

「僕たち、修行をします！」

強くなってみせる。

世界を救うと言うよりは、自分の夢を叶えるためだ！

「——心得た。では三月後の集合場所はアスクガーデンだ」

「はい！！」

ではね、と別れの言葉を告げ、賢者は一旦スードを去った。翌朝再び訪れ、アルフォンスたちを望みの場所に送ってくれるという。ラルフはアーサーに言われた通り、手伝いをするため部屋を出ていった。

「三月の間、みんな離ればなれだね」

「あの、クレア様は……？」

おずおずとニーナが、あれから無言のままだったクレアに声をかけた。

クレアは優しい笑みを浮かべた。どうやらリユーンたちのように穏やかな性格らしい。

「『様』は結構よ。私は界王ではないのだし」

「姉上、ですが」

「あら、だってリネアも血族だけど、みなさんには名前で呼んでもらっているわ」

それなら私も名前で呼ぶか、リネアにも『様』をつけなきゃ、と楽しそうに笑う。

その破天荒な提案に一行は呆気にとられ、苦笑するしかなかった。

「えーっと、じゃあクレア……さん？」

「呼びやすいもので構いませんわ。話し方も畏まらないで」

「……そうですね。みんな、姉上には私と同じ対応をしてくれ」

「う、うん、わかった。じゃあ、これからよろしく。——クレア」
「ええ」

右手を差し出し、アルフォンスはクレアと握手を交わす。

（これが、界王力……）

目覚めてしまった感受性。これも界王力の特徴——死を寄せ付けないための、自己防衛の力なのだろう。

思い返せば仲間内で感受性が強いローザンやセルグより先に、自分は『何か』を察知したことがあった。

（リネアとクレアだけからこの力を感じる）

自分は『拒まれるモノ』ではなかった。

「ただ、この恐怖はまだ、ここにある。同じモノではなかった、という恐怖が。」

「そっぴや、アルはどうすんだ？」

「え？」

「修行だよ。お前、正式に職についてないから、師匠いねえじゃんか」

「――ああああつー！」

痛恨の一撃。

そつだ、自分の今までの『師匠』はリネアじゃないか！

強くなりたい思ひだけ先走り、その方法など考えもしなかつた。

（リネアも修行に戻るんだろつし……。……。あつ！）

――いいこと考えた！

「ねえリネア、僕も賢者様のところに連れてつて！」

「それは構わないが、何故だ？」

「賢者様なら剣士の知り合ひとか居ないかな。僕に稽古をつけてくれそつな人」

「剣士……か。私の知るところでは居ないが、まあ聞いてみるか」

「やつた、ありがとう！」

――この時アルフォンスは、修行であの地に戻ろうとは微塵も予想していなかつた。

やがて修行の話が一段落したところで、リユーンがクレアに聞いた。

「クレアは三月後に合流されますかー？」

「よろしければ、お供させて下さいな」
「もちろん！ 仲間は歓迎だよ」

クレアで七人目の仲間だ。
旅立ちの時から比べると、だいぶ大所帯になったな、とアルフォンスは思った。

（あれ……？ 七人……？）

人数のことを改めて考え、クレアを見る。
何かもう一つ占いで言われていた気がするのだが。

「では改めまして自己紹介を。名はクレア・リ・ネール。職は占い師と吟遊詩人を兼業しています」

「あの、吟遊詩人が本職なのですか？」

「ええ。どちらも好きだけれど」

「えっ、兼業する人はみんな決めるの？ ローザン」

「そうよ。副業には色々制限がつくんだから。あたしは風使いが副業」

「へー、じゃあ……」

アルフォンスが何か言いたげにリネアを見ると、心得たり、とばかりに頷いた。

「師匠の本職は魔法使いだ。だからアスケイルの組合長も本来は師匠なのだが、面倒だと言って……」

つまり、やってないと。

「何っーか、まあ、賢者様らしい……よな」

「うん、そうだね……」

組合長まで上り詰めることは、その組合を掌握したと同じ。職はいくつかの組合や流派から構成されているため、組合長の権力は絶大なものだ。

「まあ、僕は賢者様に頼まないと。それと今日はどうしようか？」

「そういや、宿に荷物置いたままじゃねえか？」

「じゃあ、まずは宿に戻るべきね」

これ以上、館でお世話になる理由もないしな。

そう考えた一行は、館を出ることにした。

別れの挨拶を述べようとアーサーのところを訪ねたアルフォンスたちは、そこで思いがけないものを目にした。

「えっ、こ、この人たちは……！」

「ええ、昨夜あなた方に刃を向けた……ラルフと同様、私の部下です」

部屋はまるで施療院のように、傷ついた人々が多く横になっていた。

体を休めやすいように術をかけているのか、全員すやすやと眠っている。

「じゃあアーサーさん、さっきラルフを呼んだのは……」

「ええ。操られていたとは言え、私に責任があるのです。放置など出来ません」

アルフォンスはここにはいないラルフのことを思い出して、心から納得した。

——ああ、この人だから、みんな命を懸けたんだ。捨てられた自分を何度でも救い上げてくれる人だから！

「あの、何か手伝えませんか？」

思わず重なった声に、みんなは顔を見合わせ、一拍置いて苦笑を漏らした。

アーサーはそんな申し出に、やっと笑顔を見せたのだった。

「ありがとうございます。では、お手伝いいただけますか」

「はい！」

アルフォンスたちは三組に分かれ、アーサーの手伝いをすることにした。

隣室にも怪我人がいるらしく、ラルフが世話をしているらしい。アルフォンスとリネアがそこへ行き、セルグとリューンは宿へ荷物を取りに向かい、残りの三人はアーサーを手伝うことになった。

（こんなに人数が多いのって、ほとんどリネアが……）

決して口には出さなかったが、アルフォンスが思ったことは正しかった。

何せアルフォンスたちに対したのは、ラルフを除いて五人だけなのだから。

「ラルフ、手伝いに来たよ」

「これは……。よろしいのですか？」

ラルフはアルフォンスを見、次に視線をリネアに移した。昨夜の事件は、原因は何であれ、リネアを狙ったことだ。その

リネアに犯人の世話をしてもらっていいのだろうか……。

（——とかつて考えてるんだろうなあ）

「何も気にしないでいいよ。僕たち、どうせ明日まで暇なんだから」
「……！」

見事にアルフォンスの読みが当たったのだろう、ラルフが驚きの表情を浮かべた。

そしてわずかに残った戸惑いは、リネア本人が打ち消す。

「そうだ。お前が気にすることではない」
「……。……ありがとうございます。では、お願いします」

俯き気味に、ラルフが笑みを溢した。

（……この方たちには敵わない）

——まるでアーサー様のように、何度でも、誰にでも手を差し伸べて下さる。

昨夜、自分の命を狙った相手だと言うのに、何故こんなに優しく出来るのだろうか。

「じゃあ、僕たちは何をしたらいい？」

「お二方は、回復術は？」

「あ、僕は何も……」

「私は法魔の二つなら」

「では魔法使い殿は治療をお願いします。剣士殿は治療用具を運びますので、お手伝いいただけますか」

「わかった！」

「了解した」

そう言って、アルフォンスはラルフと治療用具がある部屋に向かった。

「……」

二人を見送ると、リネアは大きな溜め息をこぼした。

（アルは……目覚めた）

不確かで臆気な、確証など持てなかったアルの界王力。それが一晩で覚醒した。

もしかしたら、自分が切っ掛けになったのかもしれない。

「……赦せ」

（お前を二度と『普通』に戻れなくさせた）

リネアの頬を、一筋の涙が伝った。

ラルフに連れられて、アルフォンスは薬草の香りが染み込んでいる小部屋にやって来た。メリコで見た薬草以外にも、数多くの種類が取り揃えられている。

「わあ、凄いなあ……」

何となく、アルフォンスは手近な薬草に手を伸ばした。

「っ、いけません！」

「わっ!？」

薬草棚に伸ばしたアルフォンスの右手首を、ラルフがいきなり掴んだ。しかもかなり強く。

「この辺りは毒性が強いものばかりです、素手で触ってはなりません」

「わ、わかった。ごめん」

「いえ、予めご忠告申し上げるべきでした。私の落ち度です」

「や、まあ、二人とも悪かったってことで。お相子だよ。それならいいでしょ？」

「……はい」

ラルフは完璧に納得出来たようではなかったが、とりあえず頷くことにしたらしい。

ただこの間、アルフォンスは必死にラルフへ視線で訴えていた。未だ右手を締め付けるソレを。

（頼むから手を離してえっつ）

何より普通に痛い。そんでもって恥ずかしさから心も痛い。

しかしアルフォンスの無言の訴えも空しく、ラルフが気付く様子はない。

すでに『離してほしい』と言う機会を逸したアルフォンスは、ほとほと困り果てた。

「……不躰ですが、聞きたいことがあります。よろしいでしょうか」

「へ？ あ、何かな？」

唐突な質問だったが、この状態で無言よりは百倍マシだ。アルフ

オンスはそう考えたのだが、ラルフは違った。

「昨夜……」

ラルフが真っ直ぐに、アルフォンスを見つめる。室内には緊迫感が増す。

思いがけず向けられた強い視線に、アルフォンスは動揺を隠せなかった。

「昨夜、あなたは私を結界内に入れて下さった」

その上、ただでさえ強く握られていた右手に、より一層の力が込められた。

（痛い痛いホントに痛いー！）

「何故ですか」

「へっ？」

「何故、私を助けたのです。むしろ貴方も命を落とす危険性が高かった！」

（——っ！）

骨が折れるんじゃないかと思うほど、右手が軋んだ。

一瞬怯みはしたが、アルフォンスは痛みを顔に出さなかった。その方がいいと直感的に感じたのだ。

そうして淡々と述べた。あの時、何を思っていたのかを。

「ごめん、説明は出来ないんだよ」

「え……？」

何とも言えない困り顔のアルフォンスに、ラルフは何を思ったのか、アルフォンスの右手を掴む手が弛んだ。

「あつ、説明しにくいって意味だよ。したくないってわけじゃないから」

「……構いません、話して下さい」

「そう？ うーん、まあ一番簡単なのは……。『体が動いちゃったから』、かな？」

「……」

「だって君が動いたの、見たんだ。だから結界から出たんだよ」

それでローザンに怒られたんだよねー、とアルフォンスが続ける間、ラルフは驚きで目を見開いていた。

（何を言ってるんだ……？）

——この剣士は、何を言ってるんだろう。

そんなこと、誰も出来るわけがない。あの絶体絶命の中、損得勘定抜きで、命懸けで誰かを——敵を助けるなんて！

「——今ラルフが考えてること、当ててみようか？」

「つな、何を……」

「嘘臭い。あの状況で敵だった自分を助けるのは、何かあるに決まってる。——でしょ？」

「！」

「当たり前、だね」

伊達に孤児院でチビたちの兄貴をやってきたわけではない。

孤児院は様々な理由で親を失った子供が集まる。その事実から心を閉ざし、口を閉ざす子供は少なくなかった。

——ルディックだって初めは自分を拒んだものだ。今となっては一番懐いてくれているけど。

「でも本当なんだ。誰かに相談するべきだったかもしれない。……だけ」

今度はアルフォンスが、ラルフの瞳を真っ直ぐに見据える。先ほどとは逆に、ラルフが身動ぎした。

「間に合わなかったら、それこそ悔やむ。だってさ、目の前で人が死ぬんだよ？」

「……」

「——ま、今回は成功したから良し、ということ」

言葉を失っているラルフに、アルフォンスはどう言葉をかけるべきか悩んだ。

「え、えーと。……答えに、なった？」

頼む、何か反応下さい。

アルフォンスの必死の祈りが天に通じたのかは不明だが、ラルフは言葉を返してくれた。

一つ一つ、自分でも確かめるように。

「貴方は……。多少、直情的なようだ。ですが、故に貴方の回りに人が集まるのでしょうか」

「？」

「先ほど——いえ、『気のせい』でしょうが、貴方は妖力を持った

者への扱いに、異を唱えて下さった」

（そうだ。アーサー様でさえ仰らなかつた、界王様への批判を！）

「とても嬉しかった。当然だったものが打ち破られた、あの瞬間を……私は生涯忘れません」

昨夜は感情がないんじゃないかとさえ思えたラルフの顔に、これ以上ないくらいの、嬉しそうな笑顔が浮かんだ。

きつと操られていなかったとはいえ、ラルフや町の住人も少なからず幻影族の影響下にあつたのだらう。

「僕が誰かの役に立てたなら、嬉しいよ。——でさ、そ、その」「はい、何でしょう」

……右手首、痣になつてゐるんじゃないだろうか。

「あの、そろそろ、リネアのところに戻ろう？」

「ああ、これは失礼致しました。お手間を取らせまして……」

「あ、いいからいいから。どれを運べばいいの？」

「……。では、こちらを」
「うん」

謝罪を遮ったアルフォンスに、ラルフは苦笑とも何とも言い難い笑みを漏らしたのだが、アルフォンスがそれに気付くことはなかった。

始まりの終わりへ伍

部屋を出た後、ラルフは包帯などを木箱に入れ、アルフォンスの少し後ろを着いてきていた。

「剣士殿」

ラルフの呼びかけに振り向く。が、アルフォンスはむず痒さを感じずにはいられない。だがラルフはアルフォンスの態度に何も気づかないようで、アルフォンスの手籠に追加の薬草を一つ入れた。

「あの、ラルフ」

「はい、何でしょう？」

「呼び方なんだけどさ、僕もみんなも名前で呼んでくれないかな」

「……。では、アルフォンス殿と？」

「出来れば殿もナシで！ 敬語もいらないよ。歳、そんなに変わらないでしょ？」

そんなアルフォンスの何気ない質問に、ラルフの顔がわずかだが強張った。

（あ……）

この反応には、心当たりがあった。

「ごめん、歳なんか知らなくても生きていけるよね」

「……。はい」

——この反応を示したのは、三年前に孤児院へきた、新しい『妹』

だった。

とても可愛らしい子だったが、難敵だった。年齢その他に関わらず、男とは一切口をきいてくれなかったのだ。

（ああ、今考えても吐き気がする！）

当時十三歳だった自分より、確実に幼かったユリア。この名前すら、院長がつけた。ユリアは何も知らなかったのだ。自分の名前も故郷も親も歳も、何もかも。言葉すら、まともに話せなかった。

その原因が『男』による恐怖なのだと、暫くして偶然に知った。あの時の衝撃は、忘れようにも忘れられない。

（だけど、ユリアも今は元気になれた。だから、ラルフも気にしないほうがいいんだ）

自分が言った通り、生きるのに年齢を知る必要はないのだから。

「そう言えば、昨日って何人くらいでリネアの相手をしたの？
…その、沢山いたよね」

無理やりな気もしたが、アルフォンスは話題を変えることにした。今度はラルフも意図を理解したらしく、すぐに答えを返してくれた。

「あちらは二十人おりましたが……。魔ほ、いえ、リネア……。殿が、真の力を解放しなくとも、相手にならなかったようです」

少しラルフが言葉を迷った。

ラルフは自分たちを名前で呼ぶことは了承したようだが、いきなり敬称と敬語を取り払うのは難しいらしかった。

（ニーナも『さん』つきだしな）

リユーンやニーナも堅苦しさはないが、砕けた話し方、というわけではない。

ラルフも含め、人それぞれ楽な口調というものがある。これ以上は要求しまいとアルフォンスは決めた。

「はは、やっぱりリネアは凄いね」

「はい。ですが外傷は爆風による軽傷のみです」

「え？」

「リネア殿は……。命を狙った我々を見逃して下さったのです。氣力を削ぎ、氣を失わせるだけに」

後ろを歩いていたラルフの力才を見ることは出来なかったが、その声色は、あの時のアーサーのようだった。

懺悔をしたい、というような。

「……リネアだって、人殺しをしたいわけない。傷付けないで済むなら、そっちを選ぶのは当然だよ。ね？」

「……そう、ですね」

その言葉に、前をいくアルフォンスには聞こえないよう、ラルフは小さく嘆息した。

——駄目だ。どうも自分は『昔』の感覚から抜けきれない。

忘れたいのに忘れられない、あの忌まわしい時から抜け出せない――。

「あれ、部屋の前に誰がいるよ？」

アルフォンスの声にラルフが意識を覚醒させると、確かに目指す部屋の前に、一人の青年が立っていた。

何か大きな荷物を持っていて、扉を開けるのに四苦八苦している。

（あれは――）

「私の仲間です。怪我が浅かった者が数名おりまして、その者たちはもう動いております」

「そっか。――あ、開けるの手伝いますよー」

パタパタとアルフォンスが駆けていくのを見て、自分も急ごうと足に力をこめた瞬間、前方でドサツという音がした。

見ると、扉の前にいた仲間の顔を呆然と見上げ、籠を落として直立不動になっているアルフォンスの姿があった。

（？）

どうしたのだろう、と思う合間に、アルフォンスは真っ青な顔になって部屋へ駆け込んで行ってしまった。ラルフは慌てて駆け寄り、仲間に声をかける。

「ポール、何があった？」

「さあ、俺の顔を見たら突然……」

驚かれた仲間にも心当たりはないらしく、しきりに首を捻るばかりだ。わけが分からず、とにかくラルフはアルフォンスが駆け込んだ部屋に入ることにした。

部屋に入ると、アルフォンスは半泣き状態でリネアにすがり付いていた。何かを必死に説明しているようだが、全く要領を得ていない。リネアも困り果てている。

「だから、アル。――ああ、ちょうど良かった。何があった？」

「いえ、私も……」

「だからっ、斬ったのに、絶対に、だけど歩いて、お化けで、荷物を、扉が開かなくて、それでええ〜！」

「……いや、わからん」

さしものリネアも、頭を抱え込んでしまった。

そんなリネアと半泣きのアルフォンスを見つめ、ラルフは閃いた。

「もしや、昨夜の相手がポールだったのでは？」

「なに？」

「今、アルフォンス殿が扉の前で会った者の名です。昨夜は私の組にいましたから、対峙した可能性は……」

「そうなのか、アル？」

これでもかと言うくらい、アルフォンスは首を縦に振った。強い肯定の意だ。

「となれば……。今の言葉は『昨夜自分が確かに斬った相手なのに、平気で歩いて荷物を持ち、扉を開けようとしていた。お化けじゃないのか』……か？」

「そうなんだよぉ〜!!」

もうアルフォンスは半泣きどころか、本泣きになっていた。

そんなアルフォンスを宥めながら、事の真相が掴めたことで、リネアは安堵した。何を求めているのか分かれば、必ず答えは導き出せる。

「落ち着け。それならば簡単なことだろう」

「??」

「お前の剣は界王の剣だぞ。宿すのは民を統べ、守る力。その力で民を傷つけてどうする。昨夜は幻影族の術だけを断ち切ったのだから」

「……じゃあ」

「間違いなくお化けではない。お前はポールとやらに、傷を負わせなかった」

「………そ、つか。そつか、……良かった」

先ほどとは、違う涙をアルフォンスは流した。

あの時——。自分は相手を殺してでも、セルグのもとに行きたかった。そして、それを迷わず実行した。斬った感触——肉を裂いた感触だつて、この手に残っている。

彼は剣の力で救われた。無用な怪我を負わずに済んだ。そのことが嬉しい。だから涙を流す。
だけ——。

（剣に特別な力がなければ、あの人は死んでいた）

人殺しではない、なんて綺麗事は言わない。

そうだ。自分は確かに意思をもって、人を『殺した』のだ——。暫くしてアルフォンスが落ち着きを取り戻すと、リネアは遠慮なく大量の指示を与えてきた。確かに、今は感傷に浸っている時ではない。やるべき仕事如山積みだ。

「体力の回復は、特殊力の回復術ではどうにもならないからな。薬湯を飲ませ、体を休ませるしかない」

そう言ったりネアの表情は、とても穏やかだった。相手の症状が軽いことを、内心で喜んでいるのだろう。

「あのポールって人、僕のこと覚えてないんだね。アーサーさんは全部覚えてたのに」

薬草を煎じながら、アルフォンスがぼつりと呟いた。

調査はリネアが行い、煎じるのがアルフォンスの担当だ。隣ではラルフが塗布用の薬草をすり潰している。

「幻影族の力にも限界がある。アーサー殿以外は、意識までは操れなかったのだろう」

「成る程。……そっか」

（今回ばかりは有り難いや）

喜んでいいことなど一つもないが、斬られた本人にその記憶がないというのは、アルフォンスには有り難かった。

『人殺し』だと自戒しようとも、どうしても心が軽くなることを求めてしまう。

アルフォンスは作り終えた薬湯を無言のままラルフに渡した。

「……あー、何かこの匂い嗅いだらお腹空いてきた……」

「そう言えば、みなさま朝食は……」

もちろん食べていない。今日に限って何でお腹が鳴らなかったのか、不思議なくらいだ。

窓から覗く太陽は、もう少しで中天に到達する。空腹を訴えるのは当然だった。

「一休みに致しましょう。アーサー様に申し上げて参ります」
「うん、よろしく」

——と、ラルフが部屋を出た途端、食事のことを考えたからか、アルフォンスのお腹は盛大な音をたてた。

ラルフはもう室外だが、すぐ側にリネアがいる。いくら長い付き合いでも、妙齢の女性に空きつ腹の音を聞かれるのは恥ずかしい。

しかも悲しいかな、リネアは何も反応を示してくれないのだ。

コトコトとお湯が沸く音と、アルフォンスの空きつ腹の音だけが部屋に響く。それがまた一段と恥ずかしくて、やるせなかった。

「——ああ、セルグたちが来たな」

その時、館の玄関の扉が開く音にリネアが反応した。

「あ、本当？　ちょうどいい時に来たね」

階下で賑やかな声が響く。すぐに階段を上がる音がし始めた。二人が戻ってきたのだ。

「よっ、荷物持って来たぜ」

当然というべきか、セルグはまず、リネアがいるこちらの部屋に顔を出した。

「あのね、もう少しでご飯にしてくれってさ」

「マジでか？　そりゃ良かった。どっか食べに行くか、ってリユーンと話してたんだよ」

「アル、リネア。こちらの皆様のご様子は如何ですかー？」

セルグの後ろから、ひょいとリユーンが姿を表した。

「大事な。後はゆっくり休めば全快する」
「そうですかー。昨夜は手加減が出来ませんでしたし……。ああ良かった」

心底ほっとした、と言わんばかりのリューンに、アルフォンスたちは何と言ったべきか迷った。
だって、何だそのやけに晴れ晴れとした力オ。

（前にもリューンはコワイことやってるからなあ……）

出会いの瞬間然り、船上での事件も然り。

『手加減』とは何なのか、昨夜はどんな術を使ったのか。それを聞ける勇者はいなかった。

「失礼します」

そこにラルフが戻ってきた。食事の用意が出来たらしい。

「隣室の皆様は先にアーサー様と向かわれました。皆様もどうぞ」
「うん！」

ラルフに連れられて、アルフォンスたちは食堂へと向かった。中に入ると、アーサーたちは既に着席していた。

そこは屋敷の規模に遜色のない、とても立派な場所で、食器も銀の一揃えだ。

「わあ、美味しそう！」

「へえ、すげえな」

しかしながら、食べ盛りの、しかも空腹の十代男子の前では、そ

んなものは何の意味も成さない。素晴らしい料理を前にして、目が向くはずもなかった。

「皆様、気がつかずに申し訳ありませんでした。さ、どうぞ召し上がって下さい」

「はい！ いただきまーす！」

食堂は一気に、和やかで賑やかな雰囲気包まれた。

どうやらポールなどが気を利かせて、アルフォンスたちの分も食事を用意してくれていたらしい。

しかし……。

「あの、他の人たちは？」

テーブルにはすでに料理が並べられており、給仕はアルフォンスの隣の席についたラルフがやってくれている。しかし、ラルフとアーサー以外の姿はない。

（席は空いてるのに……）

とても大きな机だ。一度に二十人は座れるだろう。

——もしかしたら、自分たちと食卓を囲むのが嫌なのだろうか。

そんな心配をしたアルフォンスを知ってか知らずか、アーサーは簡潔に事実を述べた。

「昼間から酒が飲みたいそうですよ。他は町の酒場に行きました」

体が酒を求めているなど意味のわからんことを……と、アーサーが初めてのボヤキを漏らした。

「……。え、えーと？」

「特にポールは酒豪ですから。今日なら昼間から酔っても見逃してもらえると考えたのでしょうか」

言葉を継いだラルフも困り顔だ。しかし、声はどこか楽しそうに弾んでいる。

「ははっ。幻影族は酒なんか呑まなそうだなあ」

「ふふ。みなさん、やっと解放されたのですもの。好きなことをなさりたいんですね」

——ああ、無用な心配だったのだ。
それが実感出来て、アルフォンスはようやく笑いが込み上げてきた。

そうしてアルフォンスたちは、朝食を兼ねた昼食を楽しんだ。久しぶりにゆっくり、しっかりした食事だった。

「ごちそうさま」

「私も、ごちそうさまです」

やがてローザン、ニーナと、順に食事を終える挨拶を告げた。アルフォンスも考えを一時中断して、残りの食事を片付けることにした。

「皆様もお疲れでしょう。お手伝い有り難うございました。一段落しましたので、この後はどうぞお寛ぎ下さい」

「ええ。——あの、アーサーさんにお聞きしたいことがあるんですよー」

最後の一皿を食べ終えた時、リユーンはアーサーに問いを投げか

けた。

「昨夜、事件の最中に、強い妖力と霊力の衝突があったんですよ」
「ああ、あれね！　そうよ、驚いて外に出たけど、何もなかったのよね」

「はい。えー、妖力は幻影族だと思いますが、何かご存知でしょうか？」

（ああ、あれは不思議だったなあ）

首飾りが光ったのかと思ったら実は外で、しかも……。

（ん？　……首飾り？）

「あれは――」

「アーサーさん！」

突然話に横槍を入れたアルフォンスに驚き、みんなの視線が集中した。

「……えーと」

首飾りの話、ひいては自分の『正体』に繋がるんじゃないだろうか。

そう心配して話を区切ったのだが、上手い繋ぎの言葉が出て来なかった。

（やーばーいいー！）

出来てしまった間に、疑問の声が投げ掛けられようとした、その

時。

「昨夜は、アーサー殿が術を使われたのではありません？」

アルフォンス君もお気づきになったんでしょう？

そう救いの手を差し伸べてくれたのは、クレアだった。

「ええ、そうです。あのままではスードを消してしまうところでした」

「えっ！ そんなに強い術だったんですか？！」

しかも、アーサーの答えは予想以上に衝撃的だった。

「この老体が使える、最高の術です。……成功していれば、今頃はあの世でしょうが」

「そんな……。何で術は失敗したんですか？」

「さあ、それは私にも……」

チラッとアルフォンスを見たアーサーの瞳に、偽りはない。理由は本当に分からないようだ。

（そうか、幻影族も民だから、界王力は感知が出来ないんだ）

だから、首飾りの真実には辿り着けない。

そう分かれると、アルフォンスはひとまずの安堵を得た。そうして皿に残る最後の一切れを口に運んだ――が。

「靈力なんだろう？ リューンかローザンじゃなきゃ誰だよ」

「……アルだろう」

「ぐほっ」

この予想外の一撃に、アルフォンスは危うく咀嚼中のものを吐き出しかけた。

むせ込んだアルフォンスに気付कि、ラルフが慌てて水を渡してくれた。

「大丈夫ですか？」

「——っ。うん、もう大丈夫」

（リネアあゝ！）

いきなり何を言い出すんだ。

渡された水を咽下しつつ、アルフォンスは戦々恐々として、成り行きを見守った。

「アルが？ 何でだよ」

「忘れたのか？ アルは強い妖力を防ぐ術を得ただろう」

「……？ あっ、霊龍の鱗ね！」

「そっか、そうだ僕が……！」

思いがけずに得た、あの美しい銀の鱗。確かにあの時、リネアは妖力を防ぐと言っていた。

「あつたあつ……、あれ？」

身につけておけ、と言われたので、鱗は小袋にしまって常に持っていた。

しかしアルフォンスの手の中の鱗は、銀色に輝いてはいるが、あの目を見張る精彩は失っていた。霊力を放出し、輝きを失ったのだ。

「そうでしたか……。アルフォンス殿、ありがとうございました。その鱗がなければ、スードは消えていました」

「や、これは……」

「アル、お前が『自分で持つ』と決めたんだ。それはお前の判断だ」
「まあ、そうだけど……」

そこまで言ってハッとした。クレアを見れば、ニコリと微笑んできた。

（そうか、これが……）

『あなたの判断で千の命が左右されるでしょう』。この言葉が、示した未来。

「『お前』が持った。だからだ、アル」

リネアがこの言葉に秘めた真意を理解出来たのは、アルフォンスとクレアだけ。

（……界王力が影響した。そういうことか）

術はあの廃屋の外、恐らくこの屋敷から放たれたのだろう。

そのため鱗に秘められた霊力を、知らないうちに界王力によって解放し、妖力を相殺したというわけだ。

「しかし何故、周囲に影響が出なかったのでしょうかー？」

ふいに、リネアが身動ぎした。

ならばこの質問、『界王力も同時に使ったから』以外に答えはない、ということか。

「何でだろうね。運が良かったのかな？」

「あんだねえ、そんなわけないでしょう！」

自分のためにリネアに嘘をつかせるのは気が引けて、わざとアルフォンスはすつとぼけたことを言った。

もし真実を知らなければ、自分は間違いなくこう言っただろう。

「考えても無駄だつて。リネアも分かんねえんだろ？」

「……ああ、霊力は専門外だからな」

このリネアの答えには、相応の説得力があつた。何せリネアは一切、霊力と妖力を持たないのだ。

また界王力の存在を知ったとはいえ、リユーンたちはリネアが霊妖の力にそうであるように、感知することは不可能だ。

そのためリネアの答えに一応の納得をせざるを得ないリユーンたちは、この話を蒸し返そうとはしなかった。

始まりの終わりへ陸

翌朝。

約束の時間ぴったりに、賢者が再び屋敷に訪れた。今から三月の間、自分たちは修行を積むため、一時の別れを迎えるのだ。

「お待たせ。じゃあ遠いところ、ドーニヤ大陸から行くのか」
「はい！」

まず元気良く返事をしたのはニーナだ。一行の輪の中から歩み出た。

「北ドーニヤのメリコにお願いします」

「わかった。町は？」

「メラヒムです」

「ああ、メラヒムなら大丈夫。さあ、行くよ」

賢者はそれだけ言うと、ニーナの額に手を当てた。

「じゃあみなさん、また三月後に！」

すると、アルフォンスたちが返事をする暇もなく、二人は瞬時に姿を消した。もうメラヒムという町へ行ったのだろう。

「何回見ても凄いなあ、あの転移術」

「師匠が自ら編み出した術だ。一度行った場所が、知り合った人物のもとなら一瞬で行ける」

「賢者様が生み出された術なんですかー。それは是非ともお話を伺いたいですねえ」

「ならば今度、頼めばいい。論議は好きな人だ」
「では是非……」

と、リューンが言い切らないうちに、その本人が帰ってきた。大陸を渡るほどの術だというのに、疲労は微塵も感じられない。

「さ、次はシェーマスに行こうか」

「あ、あたしです！」
「私も」

まだ話の途中ではあったが、今は賢者と論議を交わしているような時ではない。

リューンは楽しみを次回にとっておこうと、何も言わないまま歩み出た。

「町は？ リューン君はクルツァータかな」

「はい」

「あたしはサティで。今の時期なら、みんなそこにいますから」

「サティか……。すまないけど、行ったことがないな。隣町のルルバスでもいいかい？」

「ええ、もちろん」

「ではまず、クルツァータへ行こうか」

賢者が二人の額に手を当てる。

「じゃあね！ しっかり修行しなさいよ」

「また三月後に」

そうしてニーナと同じく、二人は一瞬でシェーマス大陸へと移動していった。

そうして二人を見送り、アルフォンスは隣りの人物に気になって

いたことを聞いた。

「そう言えば、クレアはどこに行くの？ 天界？」

「いいえ、シャルラン殿のところにご厄介になるわ」

「そうか。賢者様、吟遊詩人も修めてんだよな」

「……」

その事実を改めて確認した一行に、つかの間、無言の時間が流れた。

（似合わない……）

確かに歌は巧そうだ。楽器だって何でもこなせるだろう。

それでも、あの賢者様が『吟遊詩人』というのは、何か違う気がするのだった。

「……先に言っておく。師匠の第一の副業は……吟遊詩人だ」

リネアも吟遊詩人が似合わないと思っているらしい。告げた言葉が濁っていた。

「あれ？ ってことは、魔法使いの次に吟遊詩人が得意なの！？」

「得意……というより、組合が性に合うらしい」

「成る程な。じゃあ賢者様の職順ってどうなってるんだ？」

「副業の二番は剣士、次は僧侶。最後が武闘家だ」

「わ、意外。僧侶が一番下かと思った」

「師匠は気術が唯一の苦手なんだ。あくまでも師匠の中で、だが」

そこでアルフォンスが口を開こうとした途端、あの波動を感じた。賢者が、戻ってくる。

「さ、お待たせ。みんなはアスケイルだね？」

「はい。俺はキノフで」

「わかった。アルフォンス君は？」

「あ、あの！」

「？」

「その、僕は師匠とかいないから……。賢者様、誰か紹介してもらえませんか？」

この突然のお願いに、賢者は少し考えを巡らせたが、すぐに快く引き受けてくれた。

「ああ、お安いご用だ。一度、塔においで」

「やった、ありがとうございます！」

知らない人の下で三月も修行することに、不安がないわけではないが、賢者の紹介なのだ。何も恐れる必要はないだろう。

「じゃあアーサーさん、ラルフ、お世話になりました！」

「お氣をつけて。何かありましたら、いつでもご連絡下さい」

見送りに来てくれた二人に、別れの挨拶を述べると、アルフォンスは賢者の側に走り寄った。そしてあの術によって、久方ぶりのアスケイルへ――。

「――っお待ち下さい！」

しかし術が発動する間際、ラルフがアルフォンスの腕を掴んだ。

「ラルフ？」

「――アルフォンス殿。私も……、私も三月後に、アスクガーデン

に行っても、よろしいでしょうか」

迷っているのか断られるのを恐れているのか、ラルフは俯いたまままだ。

アルフォンスは、そんなラルフの手を握りしめた。

「大歓迎だよ。いきなり三月後まで会えないけど……。よろしくね、ラルフ！」

「——はい！」

ラルフは見たかったのだ。世界を、この世の姿を、余すことなく見たかった。

（妖力を持つ者への差別……。他世界では、人界の比ではないだろう）

だからこそ、行く。

己の立場を向上させるための闘いに、立ち向かわないでどうするのだ。

（アルフォンス殿と行けば、界王様にお会い出来る）

何を考え、何を見ておられるのか。

禁忌の子の真実や、それを取り巻く状況を知った今、一心に界王を敬い信じることは、最早ラルフには出来なくなっていた。

そんな二人を、セルグとリネアは苦笑しながら見つめていた。仮にも命のやり取りをした相手と、いつの間にか仲良しだなんて。

だが、それがアルフォンスなのだ。

そのアルフォンスはギリギリで得た、八人目の仲間を心から喜んだ。

(あ)

そうだ。ああ、何で自分は一度に思い出せないんだろう。

(集める仲間は、八人。人族以外も含めて、八つの魂)

クレアの占いが全て正しい、ということもあるまい。だが、指し示した事柄はこのことだろう。

八人の仲間。その中には人族以外に、天王の血族と魔王の血族、そして人王の血族がいる。

「では行こうか」

「はい。ラルフ、じゃあね！」

「はい。三月後に」

今度こそ本当に、アルフォンスは賢者の術によって、アスケイルへ帰っていった。

(……三月後に、また)

ラルフは胸の中で、再開を堅く約束した。

そしてアルフォンスたちが室内から一瞬で移った先には、懐かしい光景が広がっていた。

「アスケイルだー！」

土壁と瓦屋根の家々、黒髪で象牙色の肌の人々が行き交う町。地方によって多少の違いはあるとはいえ、アスケイル所縁の三人には、一様に懐かしい光景だった。

「お、キノフか。賢者様、ありがとうございます」

「どう致しまして。ゴルド殿によりしく伝えてくれ」

「えっ？ お師匠をご存知で？」

「もちろん。私も東派だからね」

「そうだったんですか。はい、必ずお師匠にお伝えします」

そう言ってセルグが数歩、町側に向かって歩いて術の範囲外へ出た。そうして、アルフォンスに振り向いて言った。

「アル、どんなに修業が厳しくても投げ出すなよ！」

「大丈夫、絶対にやり遂げるから！——セルグ、またね！」

「おう！ リネアたちも元気だな」

「ああ、また」

「三月後にお会いしましょう」

そうして賢者は歴代の賢者も暮らした、アスケイルの深い山並みに抱かれた、賢者の塔へと向かった。

アルフォンスが目にした賢者の塔は、石を積み上げて造られた、堅牢な建物だった。建築に疎い素人でも、一目でかなりの年月が経過していることが分かる。

「うわ、凄い！」

そうアルフォンスが感嘆の声をあげるのも無理はない。

塔はただ古いのではなく、所々に細かな彫刻が施され、まるで宮殿の一部といっても遜色ない建物だったからだ。

しかも建材をよく見てみると、塔の防御力を高めるためだろう、特殊石が惜し気もなく使われているし、質もいい。

物によっては、小指の先ほどの大きさで、一家を三月は養える。

それほど高価な石がただの建材に使われていることに、アルフォンスは啞然とするしかなかった。

「……。すこ」

先ほどとは違う、色んな意味を込めた『凄い』を、アルフォンスは改めて呟いた。

「はは、まあこれも譲り受けたものだよ」

「……。国王様からですか」

「もちろん。先代の賢者は百年前に亡くなったんだ。その間、歴代のアスケイル王が管理していたからね」

遺跡とも見紛うこの建物。当然、修復の跡がいくつも見受けられる。それだって年代を感じさせる要因の一つだ。

しかし、どう見ても最近行われたであろう修復の跡が、綺麗に治っているとは言え、とても目につくのだ。

（……これも国家予算からか……）

何か国王様、賢者様のいいように使われてないですか。

「アル、中に入るか？」

リネアが意気消沈しているアルフォンスを気遣って、そう申し出てくれたが、アルフォンスはそれを断った。一秒でも早く修行を始めたいと思ったからだ。

そのことを告げると、賢者はリネアたちに、先に中へ入るよう言った。アルフォンスと二人で話がしたい、というわけだ。すぐにそれを理解したリネアたちは、何も言わずに塔へ入っていった。

それを見届けると、賢者はニコリと微笑んだ。

「ではアルフォンス君、君には隠者を紹介しよう」

「隠……者？」

そんな言葉は聞いたことがない。剣士の階級でもなさそうだ。

「賢者様。隠者、って何ですか？」

「隠れた者。位を去った者。世俗を捨てた者。意味は様々だが、この場合はね……」

より一層、賢者の笑顔が深まる。

「賢者の位を得なかった者、という意味さ」

「！」

「相応の力を持ちながら、賢者の位を得ない。それが真の隠者だ」

「そ、そんな人、いるんですか!？」

五大職を修める力を持ちながら、賢者の位に就かない。そんな話は聞いたことがない。

が、アルフォンスは気がついた。

（そうか、修めなければ噂にもならないんだ）

賢者を目指し、五大職を兼業する人物の話ならよく聞く。しかし、大抵はそれぞれ一人前の位を得るのがやっとで、笑い種になって終わるのだ。

だが逆に、実力がありながら、何らかの理由で職を正式に修めない人物がいても、おかしくはない。

「と言っても、真の隠者もそう簡単には出現しない。なにせ賢者と同等の能力を持つものだからね。現在は一人だけだ」

「そっかぁ……。凄いな、何ていうお名前なんですか？」

「エルネスト・リガールさ」

「エルネスト・リガール……？」

(……あれ？)

「あ、あの。知り合いに同姓同名の神官様が……」

それは自分を旅に送り出した、あの老神官の名前だ。

そう言えば村の大人たちは、口を揃えて彼を褒め称えていた。田舎の神官には似合わない、その深い知識から『隠れた賢者』と――。

「君の村、ルゴルスだろう？ エルネスト殿はその教会に赴任されているよ。――界王の剣と使い手、その行く末を見守るために」

「……！」

「エルネスト殿はお若い頃から、剣の存在を探していたんだ――」

賢者の話によれば、エルネストは他世界に渡ったとき、剣の存在を知ったという。この世を救うという、聖なる剣。

しかし、剣のある場所が分からない。様々な資料から、人界にあることは確かだった。

そこでエルネストはダブリル派の修行僧となり、世界各地を渡り歩いたのだ。神話、民話、噂。そんな不確かなものだけを頼りに。

「そうしてルゴルスで剣を見つけ、その地に根を下ろしたのさ」

「じゃあエルネスト様は、知ってたんですか？ 最初から、何もかも！」

——全てを知った上で、何も知らない自分を放り出したというのか！

「ああ。私が知っている範囲は、エルネスト殿もご存知だろう」
「なっ……！」

アルフォンスの中で、何かが壊れかけた。
——しかし。

「けれど、最初から『界王の血族である』と言われて、受け入れられたかい？ 母君のことも」

「……それは」
「エルネスト殿を信じなさい。幼い時から君を見守ってきた方だろう？」

「……。はい」

また、賢者が支えてくれた。母の真実と同じように、嘘偽りを含めないことで。

「よし、いい返事だ。では行こうか、ルゴルスへ」
「はい！」

（そうだ。エルネスト様だって、最初に何もかも言えないよね）

「リネア、クレア、じゃあね！」

塔の中にいる二人に届くよう、アルフォンスは声を張り上げる。
一瞬のことだったが、確かに二人は窓から見送ってくれた。
そうして村の入り口に、アルフォンスは立った。

「賢者様、ありがとうございます。僕、頑張ります」
「ああ、じゃあね」

短い別れの言葉を残し、賢者はアルフォンスの前から姿を消した。
アルフォンスが村に入ろうとして振り向いた、その時。

「――アル兄貴？」

そこには、一人の少年が立っていた。

「ルディック！？」

「やっぱり！ アル兄貴だ！」

少年はアルフォンスに勢い良く抱きついてきた。間違いなく、旅立ちの時に行かないでと泣いてくれた、ルディックだ。

……が。

「アル兄貴、お帰り！」

「う、うん、ただいま……。ってお前、声変わったよな。それと背が……」

伸びてる。もうちょいで抜かされる、ってくらいに伸びてる。

（何でこんなに伸びてんだよ、兄貴分の威厳をどうやって保てと！
？）

この再会を素直に喜べない。アルフォンスは心の中で落涙した。

「……アル兄貴？」

「っあ、何でもない」

そうだ、今は身長なんか気にしている場合じゃない。

（強く……。強く、ならなきゃいけないんだ）

「さあ、行こうルディック」
「うん！」

——やがて、二月と半ばも過ぎた頃。約束の日を間近に控え、再びアルフォンスはルゴルスを旅立った。
新たに、力を携えて。

第一部・完。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8818e/>

Beginning of Legend ~ 伝説の始まり ~

2011年11月12日14時36分発行